ルイズの双子の兄に転生とのことです・・・

小水　都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルイズの双子の兄に転生とのことです・・・

【Ｎコード】
Ｎ５７０８Ｔ

【作者名】
小水　都

【あらすじ】
テンプレな神様も、テンプレなチートもなく、気がついたらルイズの双子の兄。
そんな感じで原作に関わらないのは不可能な立ち位置にいるわけで・・・
主人公、頑張って生きていきます。処女作です。

杖契約とのことです（前書き）

初投稿です。よろしくお願いします。

杖契約とのことです

さて諸君、説明しよう。

俺の名前は、エリック・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエール

・・・・そう、この長い名前！！　そして諸君もお気づきであろう、ラ・ヴァリエール！！

しかもよりによって、ルイズの双子の兄さ！！♪
見た目はｆａｔｅの慢心王♪　父親譲りの金髪さ♪

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ｏｒｚ

ということで、俺がこの「ゼロの使い魔」の世界に何の前触れも、チートをくれる神様にも出会うことなく転生してきて５年がたった。深くは考えるな。
この５年間何をやっていたかっていう回想をしてもいいけど、大したことなんてやっていない。

というより、５歳までの間に何ができるよ！！

偉大なる転生者(センパイ)達は色々やってるけど、正直そんなことできませんでした。
話したり、文字を書いたりできるようになったのも最近なのだ。日本語が抜けきらなかったんだよ。

あと、赤ん坊プレイについて・・・
本音ちょっと期待したのに・・・母上の絶壁め・・・・orz
そんなところで親バカになるなよ！　素晴らしいメイドたちがヴァリエール家にはそろってるんだし！！
はぁ・・過ぎたことは忘れよう・・・

まぁ、そんこんなで5歳になったわけだ。そして今日こそがテンプレ、杖契約の日である！！
本当は、もっと8～12歳のときにやるらしいが、俺たち双子がとても物分りいいのを見て早めさせた。
決定打は「早く魔法覚えて、カトレア姉さまを治すんだ。」

あと、思うんだがルイズって本当に5歳か？　すげぇ物分りいい子なんだけど・・・、原作でも頭は良かったしな・・・
ちなみにしゃべるのはルイズのほうが早かった。さすが姫様の遊び相手。

おかげで俺は怪しまれないですんだけど、ちょっと悲しい。

さて、気を切り替えて・・

フフフッフッフッフ、さぁ未だ見ぬ、そしてこれからも見ない神様チートなんかに期待なんかするものか！！

チートはもらうものじゃない！　作るものだ！！

代表的な杖チートを思い出してみる。

1．複数本杖所持　　俺の転生先のここのゼロ魔世界では不可能

2．剣杖　　ベタだな

3．骨杖　痛い　Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｗａｎｄ　言ってみただけだ

色々あるわけだが、この世界では杖は一本しか無理なようです。これが地味にかなりキツイ。
これのせいで剣杖は却下になった。

「母上、剣を杖にするのはいけませんか？」

「エリック、あなたは常に剣を持ち歩くつもりですか？　そもそもあなたはこのラ・ヴァリエール公爵家の跡継ぎであｒ（ｒｙ」

というわけで却下された。他の家とかにも行くのに剣を持ち歩くのはマナー違反とのこと。
軍人以外で剣杖は基本いないらしい。

同じく、スタッフ（タバサみたいな長いやつ）も好まれないらしい。
こっちはあくまで好まれないであり、なくはないらしい。
よって、ワンド（手のひらサイズ）が一般的だとのこと。

「母上、骨を杖として契約できませんか？　い、いえ、も　もし突然何かが起きた時のためにも自分の身は自分で守らなくてはいけないって母上はいつも言っているので・・」

「・・・はぁ、あなたの髪の色は父親譲りなのに、そういう考え方は私譲りなのですね・・・。
かつての私、烈風カリンもそのことを考えましたがうまくいきませんでした。それに、骨は簡単に折れます。固定化もかけれませんし・・」

折れねぇよ。ちなみに母上が烈風カリンなのは

「父上、母上、トリステインの伝説にまでになっている高貴で華麗で強くて（ｒｙ な烈風カリンという騎士がいると聞きました。何とかして会えないでしょうか？　ウルウルキラン」

とかやって母上から暴露させた。ふっ、ちょろいぜ　烈風。
おかげでこうやって直接色々聞ける。

「しかし母上、実戦とはいつ起こらないかわからないと聞いています。何か手はないでしょうか？」

こちとら妹がメインヒロインなのだ、常に危険と隣り合わせなのだ。
最悪な可能性では世界の修正力に殺されるかもしれないし。

「あなたはやはり私の子なんですね。とてもうれしく思います。・・

・いいでしょう、ではいつ実戦が来てもいいようにこの烈風カリンが直々に特訓してあげましょう。」

・・・・・・・・・墓穴掘ったぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああ

ちなみに杖は指輪で対外的にはワンドを持って魔法を使うことになった。

杖契約とのことです（後書き）

よろしくお願いします。

系統魔法識別とのことです　Ｐａｒｔ１（前書き）

よくよく考えたら、１話目にルイズ分皆無っていう・・・

系統魔法識別とのことです　Ｐａｒｔ１

さて諸君、杖契約は完了した。
常に身に着けてればいいと言われ・・・・指輪って楽だね　テヘッ
まぁ、２か月、ルイズよりも２週間も遅くて大変だったが

「兄様が契約終わるまで待つわ。一緒にがんばりましょう。」

とか言われ・・・

クソ、かわいすぎる・・・ｏｒｚ

そういえば、母上の訓練は思っていたのより全然苦しくない。それについて聞いたら

「あなたは私のことをどんなふうにおもっているんですか？　さすがに５歳児の息子に無茶なことはさせません。」

ちょっと涙が出てきた。あの鋼鉄の規律を作った烈風カリンも母親なんだなぁと思った。

「無茶なことをするのは8歳になってからです。今までは娘しかいなかったので無茶はできませんでしたが、あなたは男ですかｒ（ｒｙ」

神様、この場合はブリミル様でしょうか、どちらでもいいのですがあなたは俺のことが大嫌いなのですね。チートもくれないのに、カリーヌをくれる。俺もそんなあなたが大嫌いです。

「兄様、私から始めるわ。」

む、ちょっと回想しすぎたな。

今現在の状況は、俺たち兄妹と母上で、自分たちがどの系統魔法が得意なのかをしらべようとしているところである。

母上に杖のことについて色々質問したのに味を占めたのか、母上が「私、直々に教えます。」などとのたまいやがった。

父上はそれを悔しそうに見ていた。父上であるラ・ヴァリエール公爵は親バカである。しかし、ラ・ヴァリエール公爵領はとてつもなく広いので、父上はかなり忙しい。

それに比べて、母上は書類仕事？　なにそれ？　ってな感じの見事な脳筋である。母上の仕事は子育て（体力や魔法の育て、間違えるべからず）や私兵の鍛錬である。

そんな性格のため、ラ・ヴァリエール公爵家は、俺にとってはありがたいことに他の貴族と比べるとパーティーが少ない。
5歳の俺の許嫁になろうと群がる少女淑女達は怖すぎる。ヴァリエールの名前恐るべし。

・・というわけであり・・・エリックきいているのですか！？」

「・・・は！　すみません、聞いてませんでした。」

思わず敬礼をとってしまいたくなるような声だ。我が母上ながら恐ろしい。

「はぁ、あなたの考え事をするときに周りが見えなくなる癖はすぐに直すべきですね。　そんなんでは戦場では生き残れませんよ。」

いや、戦場行きませｎ・・・行く可能性高いなぁ（泣）

「はい、すみません。」

「では、そうですね復習もかねて、ルイズ、今言ったことをエリックに説明してあげなさい。」

「は　はい！　え、えっとね兄様。今から『発火（イグニッション）』、『凝縮（コンデンセイション）』、『風（ウィンド）』、『地隆（バンプ）』の４つの魔法を使って、自分がどの系統魔法が得意なのか調べるの。得意な系統魔法を知っているほうがコモン・マジックを使うとき使いやすいの。　え、えっと、これでいい？」

最後は母上に聞き返したな。

それより母上・・・、５歳児に威圧感出しすぎだろう。精神年齢２０歳超えてる俺じゃないんだから抑えようよ。

「母様に直々に教えてもらえるの！」って喜んでたルイズが少し震えてるぞ。

・・・いや、これが素だな。というよりこれは優しくしてるモードだ。ルイズにはまだ早かったか。

「ええ、問題ないです。ではルイズから始めなさい。『発火（イグニッション）』」

「『発火（イグニッション）』！」　　反応がない、まるでしかｂ

「次、『凝縮（コンデンセイション）』」

「『凝縮（コンデンセイション）』！」　　反応がない、まｒ

「私は風系統、お父様は土系統ですから火と水ではないということは私たちのどちらかを受け継いでいるということです。憎きツェルプストーと同じ火だったとしたら・・・」

母上・・・、ルイズが震えています。これが烈風カリン流の励まし

方なのだが、俺みたいに生まれた時から記憶があるような奴じゃないとわからねぇよ。

「では次、『地隆(バンブ)』」

「バ『地隆(バンブ)』！」　　反応がｎ

「これも違うということはあなたは私と同じ風特化のメイジの可能性がありますね。」

「え、母様と同じ！？　本当？」

うわぁ、嬉しそう・・。ちなみにルイズにも烈風だとばれてる。いわく片方にしか教えないのはよくないとのことらしい。

「・・・コホン、で、では、最後にしっかりと風を感じるのですよ『風(ウィンド)』」

母上も心なしか嬉しそうだ。それにしてもルイズが風ｋ・・・おい・・待てよ！！！

「『風(ウィンド)』！！」

ヒック・・う・・ヒック・・・・

風は全く吹かなかった。

ルイズは泣いている。それに少し安心している俺がいる。

そして、『それに少し安心している俺』に怒り狂っている俺がいる。

ルイズは多分、虚無だろう。しかし、あいつはこれから12年間
平賀才人（ヒーロー）に会うまで苦しまなきゃいけないのか？

アンリエッタ姫と友達なんだから、始祖の祈祷書と水のルビーさえ
借りれれば、虚無も使えるか？

だけど、そうしたらアルビオン艦隊を退けたあの何年分にも積もり
積もってできた『爆発（エクスプロージョン）』は使えない。

いや、でも虚無と認識さえすればコモン・マジックは使えるはずだ。

だけど、コモンしか使えないでルイズは我慢できるか？

俺はどうすればいい？　俺はどうすればいい？

俺はどうすればいい？

系統魔法識別とのことです　Ｐａｒｔ１（後書き）

この小説では『魔法漢字―（魔法カタカナ）』という感じで書いていくつもりです。

エリック、２話目から苦悩します。これからも様々な苦労をしていく予定です。

ちなみに『地隆（バンプ）』はオリジナルです。

まぁ、字の通りの効果ですけどこの魔法が地の基礎としてないはずがないとの思いで作りました。

系統魔法識別とのことです　Ｐａｒｔ２（前書き）

今度はエリックの系統魔法識別です。

系統魔法識別とのことです　Ｐａｒｔ２

ルイズが泣いてどこかに走って行ってしまった。
俺はそれを追いかけようとして何かに止められた。
ここで、俺を止めれる人物なんて一人しかいない。

「母上、止めないでください！！」

すぐにルイズのところに行かなきゃいけないんだ！
妹を守れないで何が兄だ！

「母上！！」

母上は俺の顔を見ながら静かに言った。

「行ってどうするつもりですか？」

「どうするってもちろん励まｓ・・」

「励ましてどうするつもりですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少したってから、母上は口を開いた。

「エリック、あなたは5歳児とは思えないほど賢いですが、少し勘違いをしています。あの子、ルイズは確かに泣き虫ですが、あなたと同じくらい賢く、決して弱くはありません。泣き止んだら戻ってきます。」

そんなことは知っている。生まれた時から一緒に過ごしてきたんだ。ルイズは俺とは違うのに5歳児とは思えないほど、聡明で強い子だ。

「それに、私の風魔法で常に探知しているので迷子になることもありません。今、湖に向かっていることから考えるとボートに乗るのでしょう。すでに使用人に気づかれないように指示を送っています。」

・・・毒気を抜かれた。その親バカっぷりをルイズの前でやればいいのに・・・。

やっても無駄か。オーラが私は全く心配してませんってオーラだ。いい年したツンデレめ。

「それに全く反応がなかったなんて例もないわけではないので大丈夫でしょう。有名な人では、魔法学院の校長をしているオールドオスマン、彼は最初全く反応がありませんでしたが、今では全系統スクエアという偉業を達成しています。反応がないというのは全て平等に使える可能性があるということです。」

オスマン・・・地味にチートだな。羨ましい。

じゃなくって、

「ですが違うんです！！」

「何が違うんですか？」

・・・・・言えないよな。

ルイズが本当は虚無の使い手で４系統魔法が使えないなんて。

証拠がないし、信じてくれたところで打つ手がない。

「いえ、なんでもありません・・・。」

「・・・では、あなたも始めましょう。」

これからのルイズのことを考えると、俺もできないふりをしたほうがいいk

「エリック！」

「は、はい！！」

「・・・手を抜かないように。そんなことであの子は喜びませんよ。」

「・・・はい、すみませんでした。」

見透かされてたか。さすが母上ってやつか。

「・・・あなたは優しくて聡明です。しかし、それが全て正しいというわけではありません。」

「それはそうかもしれませんけど・・」

「それにあの子は自慢の兄が魔法を使えれば喜んでくれる子です。心配は無用です。」

はぁ、そうだよなぁ。結局はなるようになるか。

「では、あえて『風(ウィンド)』からやりましょう。弔い戦です。」

「いえ、母上、死んでませんって。」

「わかってます。」

ジョークか・・・。わっかりにく!!

なんてわかりにくい元気の出させかただ。ちょっと父上を尊敬するよ。

まぁ、おかげで切り替えた。よし、やるか弔い戦ｗｗ!!

「魔法は精神力を使います。明日、またルイズと一緒にやるので、今日出せるだけの精神力を出して結構です。」

「はい！！」

ふふふふ、風め。よくも我が愛しの妹、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールを泣かせやがったな。

覚悟しろ！！！　これが俺の全力だ！！！

「やりなさい、『風（ウィンド）』！」

「『風（ウィィィィィィィィィンンンドォオォオオ）』！！！！！」

そして、風は嵐のように強烈に吹く・・・・・・・

なんてことはなく・・・・・・

強烈に『爆発（エクスプロージョン）』した

ドガアアァァァァアアアアアアアンン！！

！！！

そして俺は、使いすぎた精神力によって気絶する前に理解した。

俺が・・・・・

俺が・・・・・

『虚無』だ・・・・・

そして俺は気絶した。

系統魔法識別とのことです　Ｐａｒｔ２（後書き）

エリックの系統判明！！

意外だった。とか言ってくれると作者的には嬉しいですけれど、多分読者さんたちは予測しているんだと思います。

カリーヌさんが自分の中ではあんなイメージです。
皆さんのと違ったらゴメンナサイ。

では、ここから本格的に始まっていきます。
まだ始めたばかりですけれど、これからもよろしくお願いします。

これからの事を考えるとのことです（前書き）

抑揚がそんなにない回です。

これからの事を考えるとのことです

起きた。うん、俺の寝室だ。普通に知ってる天井だ。

人間って突然起きるのか、それともだんだんとゆっくり起きるのか、よく考えてみるとよくわからない。

・・・さて、現実逃避はこれくらいにしよう。

今が夜で助かった。多分昼に目覚めたらものすごく騒がれただろうな。おかげで考えをまとめる時間がある。

まず第一に、俺の系統魔法は『虚無』だ。

たぶん、これは間違いない。　虚無以外であんな爆発を起こせるとは思えない。

『発火（イグニッション）』ならまだしも『風（ウィンド）』であれだもんな・・・。

神様、この場合は完全にブリミル様、は相当俺のことが嫌いらしい。

チートほしいとは言ったが、虚無（チート）はいらない。

俺はさらに神様が嫌いになった。

まぁ、一つだけ感謝するとしたら、『ゼロ』の二つ名は俺のものだろうってことだけ。

ルイズのあの魔法の反応から虚無じゃないだろう。

どの系統でもいいが、ルイズには幸せになってもらいたい。

でも、そうするとサイト君フラグは・・・

は！！　あれか・・・突然の英雄王キスｗｉｔｈサイトフラグか！！？

ヤバイ、それはヤバスギル！！
絵的にもよくない。一応俺の見た目は慢心王。

「ふっ、我の最初の口づけがこの様な（ｒｙ」

と言いながら、身長１８２センチあるはずだから見下しながら口づｋ・・・・うおぇえ

気色悪すぎる・・・

はい、切り替え切り替え
次にこれからどうするか。

1．みんなに隠し通す

2．特定人物にのみ話す

3．いっそカミングアウトして、トリステインの伝説になる。

メリットデメリットを考えると・・・

まず、1．は消えるな

どこか遥か彼方にハーレムを作っていらっしゃるチート持ち転生者（センパイ）達は目立ちたくないとかのたまりやがっていやがりますが（目立ちたくないならハーレム作るな）
チート持ってる時点でそれは不可能だ。それに俺はルイズの兄だ。

原作という波乱万丈な運命からは逃れられないだろう。それならバックアップが欲しい。
俺は見た目英雄王の一般小市民なのだ。

次に　第2案。　多分これが一番本命だろうな。

父上のヴァリエール家という後ろ盾や母上の烈風カリンの戦力。
あとは次点で、両親に相談してだが、オールド・オスマンやマザリーニかな？

最後に第3案。　なんてアホな！　と一瞬考えたがそこまで悪い手ではない。
何よりハルケギニア全土が味方になる。伝説の再来として。
ま、もちろんロマリアの傀儡と化すので今は思いっきり却下だ。

そんなに考える必要はなかったな。
明日、両親に話そう。気絶している間にブルミル様が現れて～なんちゃらうんちゃら～とでも言えばいいだろう。

話すのは
虚無について。始祖の秘宝がないと使えないこともだな。あと、虚無ゆかりの品に惹かれる体質になったことにしておこう。
デルフリンガーや火のルビーなんかが集めやすくなる。
風石鉱脈による大隆起も話そう。　原作でもいまだにどうすることもできなかったが、正直虚無持ちといえど人間一人には不可能なこ

とな気がする。

原作とかはやっぱりルイズやサイトの英雄譚なんだよな。

だがしかし、この世界の英雄の役目を負った英雄王の中身は一般市民で英雄になるつもりはさらさらなく、妹に英雄なんていう苦悩葛藤七転八倒な道を歩ませるつもりもさらさらない。

なので、借りれる手は全て借りつくす。

かつて世界の全てを有した英雄王の風貌を持って

この世の全ての手を借りつくす！！

あんまカッコよくねぇなｏｒｚ

言わないほうがきっと後悔するよ！！　って言う王道セリフも真っ青な、言って後悔しそうなセリフだな・・・

ｆａｔｅの中二セリフってクサイのになんであんなかっこいいんだろう。

さじ加減がわからない。

原作知識や自分が転生者だってことは話さない。

これはさしたる理由はないが、決定事項だ。

あの両親どもは親バカだ。生まれた時から記憶がある俺には誰よりもよくわかる。

ほぅら、パパでちゅよ〜

ま、ママでちゅよ〜

カリーヌ、周りには誰もいないな？

はい、私の風探知には誰も反応しないので間違いありません。

明日2歳になってからは貴族として接せねばならぬ、わかるな？

はい、わかっております。今日が最後の日だということも。

うむ・・・・・では・・・・

ルイズちゃぁん、パパのかわいいルイズちゃぁぁん。明日からパパ変わっちゃうけど大ちゅきだよぉ～（泣）

エリック！あぁ、私のかわいいかわいいエリックちゃん。ママも明日からは鬼になりますが・・・いえ、何も言わずに今日はずっと抱きしめます！！　あぁ、あああぁ、エリックちゃん。

・・・・思い出さなければよかったかもｏｒｚ
ってか、あれ覚えてるって言ったら両親悶え死ぬんじゃね？

トリステイン伝説の騎士　『烈風』カリン　　死因：悶死

まぁ、そんなわけで、俺が転生者なのは秘密だ。
墓場まで持っていく。これは決定事項。
よって、原作知識もお蔵入り決定。

こんなところかな。
明日は両親と話さなきゃいけないか・・。嫌いじゃないし、いいか。
厳しいけど愛があるからなぁ。　　クサッ

ってかまだ夜だな。
寝るか・・・

では、諸君。これから始まる、この何とも言えない英雄譚とも言えない英雄譚をどうぞご賞味あれ。

お休みなさい。明日がまたいい日であると願いながら

これからの事を考えるとのことです（後書き）

ふぅ～、これで一応、自分の中でプロローグとなってるところは終わりです。

これから、この何とも言えない冴えない主人公エリックが頑張っていきます。

応援よろしくお願いします。

あと、まだ3～4話しかないのに感想が書き込まれていてとてもうれしいです。

ありがとうございます！！

家族会議とのことです（前書き）

今回も抑揚があまりない回です。

家族会議とのことです

朝早くに目が覚めた。

昨日昼から夜にかけてずっと寝ていたので当たり前といえば当たり前である。

起きて着替え終わった当たりで、誰かが扉をノックした。

「エリック、カリーヌです。入りますよ。」

返事も聞かずに母上が入ってきた。

いつもそんなふうに入ってくるが一度もラッキースケベ的なことは起こったことがない。

起こっても誰が得するんだよって話だが・・・

前、それについて聞いてみたら、一時期、常に気を張って誰も部屋に入ってこないようにする必要性から、いつのまにか常に建物の中で誰が何をしているかを把握できるようになったらしい。風系統の特権だとのこと。

烈風の無駄遣いである。今回もきっと朝俺が起きたのに真っ先に気づいて来たに違いない。

一時期ってのは、多分『烈風の騎士姫』時代だろうなぁ。

よく男装してまでやるよな・・・。

父上が愛人作らないのはこれも関係してるかもしれない。

父上で思い出した！

「母上、おはようございます。突然ですが、大事なことを父上と母上に話したいのですが大丈夫ですか？」

「・・・それより、まず身体のほうは大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません。」

「本当に大丈夫なんですね？」

「はい。」

「・・・わかりました。このタイミングで言うということは、昨日の魔法のことに関してなのでしょう。ですが、まずは朝食をとってからです。ルイズやカトレアがとても心配していましたよ。」

「わかりました。」

そして、俺ら2人は食堂に向かっていった。

食堂の扉の前ではルイズとカトレア姉さん、父上が待っていた。多分またチート烈風が吹いたのだろう。朝早くからご苦労なこった。ちなみにエレオノール姉さんはすでに魔法学院に行っている。

ここだけの話、エレオノール姉さんは俺が生まれてからモテなくなったらしい・・・。

俺が生まれて、エレオノール姉さんと結婚してもヴァリエールを継

げなくなったもんな。
なんかゴメン・・・
でもね・・・姉さん、生まれたての赤ん坊に愚痴を言うのはやめようよｏｒｚ

「兄様！！」
ルイズが俺に向かって飛び込んできた。腹に直撃！！
俺に４３８６のダメージ！！！

しかし俺のマックスＨＰは２５０００だ！！
さすがに何度もやられれば馴れる。とりあえず俺は愛しの妹を抱きしめる。　役得役得。
「兄様！！　身体のほうは大丈夫？　怪我はない？」
ルイズの涙目＋上目使い＋至近距離
俺に１８９５６のダメージ！！！
俺の残りＨＰは１６５８だ。　リアルな瀕死状態だ。
「ルイズ、はしたないですよ。」
・・・母上、この微笑ましい空気を一瞬でぶち壊すなよ。　さすが歴代最強風使い、空気の扱いにおいて右に出るもの無しってやつか。

・・・うまくねぇよ。自分で言って悲しくなってきた。

「母様、ルイズはエリックのことがずっと心配だったんですから。これくらいは大目に見てあげましょう。」

「ちぃ姉さま！」

そしてここで登場カトレア姉さん、ちなみに俺はなぜ姉さんがちぃ姉さまと呼ばれてるか知らない。
まだ、ラ・ヴァリエールである。そのうちラ・フォンティーヌに移ることになるはずであるが、まだその予定はない。

知っての通り、身体が謎の病に侵されている。　魔法を使うと苦しむところを見ると魔法関係の病気だと思う。
近代日本の知識も形無しである。　歯がゆいなぁ・・・。

ちなみに１２歳ながら既に胸も・・・、うん、理解したまえ諸君！！そういうことだ！
まぁ、今あれくらいないと原作時期にあんなにないもんな。

ってか、姉さんのそういうところ説明させないでくれ！！
なんだ？　禁断の姉弟愛ルートがお望みかコノヤロー！！
生まれた時はちょっといいかもとか思ってましたがなにか！？　いや、ナニか・・・。　なんかごめんなさい。

まじめな話、さすがに家族として過ごしてればそんな感情はなくなります。

「ふむ、問題なさそうだなエリック。話はカリーヌから聞いている。後で執務室で聞こう。」

「はい、わかりました。」

そして、我らがヴァリエール家の大黒柱の父上である。
正直、様々な方面でかなり尊敬できる人だ。　貴族とは何か？　ってのを不言実行している人である。

まぁ、ベビー時代のあのデレデレの父上も見ているので、俺の中では結構親しみやすい人だ。
同じくベビー時代、家族の中で俺が唯一の男なのもあって、

「エリック、早く大人になって一緒に語り合おう！！　乾杯！！」

なんてやってるのも見たことあるので、最近はめったに会わないがいい父親だと思う。

厳かな朝食も終わり、今俺は執務室に両親と一緒にいる。

「カリーヌ。」

「はい、『消音（サイレント）』」

「うむ、ではエリック、話を聞こう。」

父上が話を促した。

そして、俺は昨日計画していた通りの話をした。

自分が虚無であること　　（本当）

呪文を覚えるには始祖の秘宝と始祖のルビーが必要なこと
（本当）

そして虚無ゆかりの物に惹かれる体質になったこと　　（嘘）

風石鉱脈によるハルケギニア大隆起のこと　　（本当）

これら全て、気絶しているときに始祖ブリミルに会って聞いたこと
（嘘）

途中で色々言われたが、本来なら爆発するわけがない等、様々な理由で納得させた。

ちなみに、今まで爆発させた人も一応いたらしい。かなり数が少なくアカデミーの何千年単位の資料でも2人だけいたらしい。

2人とも王家の血がかなり濃い人たちだったので、そのためその人たちも虚無だったに違いないとか言って、なんとか説得できた。

正直危なかった。意外と何でもないところに落とし穴は存在するんだな。

ってか両親とも行動速すぎだろ・・・、アカデミーに資料請求するのに1日も経ってないよ。

数千年単位の資料を一日とか・・・
権力とは使うためにあるってのを実感した。
あと、二次創作などではしょっちゅう叩かれてるアカデミーも意外とまともな仕事しているんだなぁ。
なるほど、だから原作のルイズは失敗なんて言われてたのか。
前例あるのとないのとじゃ大違いだ。

「・・・いろいろ納得しづらいこともあるが、とりあえずは理解した。」

「えぇ、あなたの真剣な態度を見る限り与太話などではないのでしょう。」

ちなみに2人ともブリミル教をそんなに信じていなかった。
いわく、坊主どものための都合のいい免罪符だとのこと。　まぁ、それには大いに納得だ。
だから、夢にブリミルが出たってはちょっと選択ミスだったっぽい。

そのあと、これからの自分が考えてる方針を話した。
この秘密を知っている人は少数のほうがいいということは直ぐに可決したが、

「ですがエリック、　始祖の秘宝は多分無理だと思います。」

「そうだな、いくら我がヴァリエール家でも王家の秘宝を一人の人間に貸し与えるとは思えん。」

え？　そうなの？　でも、原作では普通に水のルビーどうぞ売っちゃってくださいって軽い感じだったぞ？
それに虚無って一応伝説なんだから、何とかならないもんなん？

「確かにお前の言うことにも一理あるが、エリック、突然5歳の男子が「僕の系統は虚無です。なので始祖の秘宝を貸してください。」などと言ってきたらどう思うか考えてみろ。」

あぁ納得した。確かにそれは公爵家といえども無理だわな。

「あなたとルイズが普通の5歳児らしくないのは私たちもわかってますが、世間はそうは見てくれません。せめて証拠でもあればいいのですが・・・。」

『爆発（エクスプロージョン）』がこの場合、証拠にならないのが痛い。
アカデミー少しぐらい仕事サボれよ。

「それでだエリック、お前のことだ。きっと証拠になるものも考えてあるのだろう。もしくは秘宝を貸し出せるまっとうな理由でも思いついたのだろう。」

いやいや父上、あなたは5歳児に何求めてるんだよ。

・・・まぁ、確かにあるっちゃあるんだよなぁ。　でもこの手段は取りたくなかった。
背に腹は代えられぬってやつかな。

あいにく俺はアンリエッタ姫とは疎遠だ。　王様が同じ年頃の男子

と一緒におけるかぁとか言って、ルイズと姫様が遊ぶとき俺は隔離される。
隔離というよりは、俺がいない時を狙って遊びに来る。
そして、トリステイン城にはルイズしか呼ばれない。　あれ？王様、子供に容赦なさすぎじゃね？
この世界は親バカしかいないのか？

そういうことで、偉大なる転生（センパイ）達がやってる

「ねぇアン、僕始祖の秘宝って見てみたいな。」

「え、で、でもダメだよ。」

「始祖の秘宝って祈祷書とルビーの指輪でしょ？　それで、結婚式ごっこやろうよ。」

「け、け、結婚式・・・・うん・・・〇〇君なら・・いいよ／／／／」

「でも誰にも見つからないように気を付けてやろう。２人だけの秘密だね！」

「ふ、２人だけの秘密／／／／！！　うん、今持ってくるから！！」
タタタッタッタッタ・・

「・・・・・・・・・・計画通り（ニヤリ」

なんていう通称：お友達作戦なんてものは俺には使えない。（どこがお友達だよ）

よくよく考えると俺って本当にご都合主義とかいうのに見放されてる気がする。

この世界結構シビアだ。

・・・・リック、何か考えがあるのでしょう？　エリック、聞いてますか！？」

「は、はい！！」

やべ、また考え事に集中しすぎてた。

「それで、どんな案だ？」

「・・・・・・・『使い魔召喚（サモン・サーヴァント）』と『使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）』です。」

そうだよ！！　みんな大好きサイト君だよ！！

俺の虚無はルイズの代わりだろうから十中八九、平賀才人が召喚される。

・・・・ん、でも年齢はどうなるんだろう？
シエスタの曽祖父である佐々木武雄の時間軸とか考えると、下手すると召喚されるのはショタ才人の可能性がある。

子ギル　×　ショタ才人

ｏｒｚ

はぁ、やりたくねぇなぁ。

「それで、『使い魔召喚（サモン・サーヴァント）』と『使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）』がなぜ証拠になるので

すか？」

そのあと、始祖の使い魔について説明した。
人間であり、始祖の使い魔のルーンが刻まれていれば、間違いない証拠になるだろう。
などと言った。

「ふむ、確かにその通りだ。始祖の使い魔についての文献を探しておく。それが手に入り次第、使い魔を召喚してもらう。いいな？」

「・・・・・・はぃ。」

両親はなぜ俺が落ち込んでるかわからないようだ。
わかるわけないか・・・。
そんな感じで俺たち3人の家族会議は終わった。

後日談

始祖の使い魔の文献を魔法学院から借りれることになったらしい。
一応大事な文献なので、使用人などに持ってこさせるわけにもいかなくて、半年とちょっと後の夏休み、ニューイの月（6月）に帰ってくるエレオノール姉さんが持ってこるとのことらしい。

運命のファーストキスまであと半年

家族会議とのことです（後書き）

この物語の主要キャラとなる人たちがどんどん出てきます。

そして、物語は加速していく・・・

ちょっとカッコよく言ってみたかっただけです。

すみません。

基本的にエリックはうっかり属性はないけど、不幸属性はあります。

リアルなゼロ魔ってのを書いていければいいなと思ってます。

貴族とは何かを学ぶとのことです（前書き）

のんびりぐだぐだ～

運命のファーストキッスまでの半年の幕間。

貴族とは何かを学ぶとのことです

さて諸君、突然だがもし自分がゼロ魔に転生したらどうするか考えたことがあるだろうか？

関係ない話だが、当初は全ての話を「さて諸君～」で始めるつもりだったのだが・・・・、この世は儘ならないものだ。

そう、この世は儘ならないものなのだ！！

かつての自分も様々な二次創作を読み漁り、

「俺だったらこうするよ～」　とか　「いや、これはないだろ？」

や　「ご都合主義万歳！」

などなど、さまざな妄想をしていたわけだ。

夢想で無双していたわけだ！！

なんか、ごめんなさい。

しかし、現実は非常である！！

杖契約は人より遅いし、杖は一本しか作れないときた。

系統魔法は虚無というチートが来たと思ったら、たかが呪文を手に入れるのにかなりの苦労している現実。

そして極めつけはサイト（予定）との『使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）』！！

もう、僕は疲れてしまったよ、ヴェルダンテ・・・

ヴェルダンテって可愛いくね？

現実逃避をやめて、現実と向き合うと様々な問題が見えてくる。

たとえば、

虚無って意外と使えないｏｒｚ

考えてみると、このゼロの使い魔にはある一定の方程式があると思う。

例を挙げると

土スクエア　＋　錬金　＋　ゲルマニア　＝　スーパー成り上がりハーレムライフ

風スクエア　＋　偏在　＋　烈刃旋風（カッタートルネード）　＝　フハハハ、アルビオン軍がゴミのようだ

水スクエア　＋　ちょっとした努力　＝　カトレアエンド

そう考えると、虚無で使えるのは、『加速（アクセラ）』、『瞬間移動（テレポート）』、『世界扉（ワールドドア）』ぐらいである。

だが、この俺の運の悪さを考えれば果たしてこれを覚えられるかも

怪しい。
原作ルイズはこの３つのうちでは、『瞬間移動（テレポート）』しか覚えてない。
ルイズの代わりである俺、下手するとルイズの劣化版である俺はかなりヤバイ。

ちなみにこの前、俺の失敗魔法：劣化『爆発（エクスプロージョン）』は、母上の『空槌（エアハンマー）』に瞬殺された。

虚無つかえねぇえｏｒｚ

ならば、現代日本の知識を生かしたチートを生かそうと思ったが、俺の言うことは、当たり前だったり、俺自身がよくわかっていなかったり、発展的過ぎて伝わらなかったりでうまくいかない。

たとえば、

エリック「世の中の物は全て見えない小さな粒でできているのだ！！！」（原子論）

学のない平民「何言ってるんだい坊主？」

学のないメイジ「精霊の事だな。」

学のあるメイジ「当たり前だろう。始祖様はその小さな粒に干渉して魔法を起こしたのだ。」

この様に、一人一人の学力の差も激しいので全然うまくいかない。

ならばみんな頭がよくなればいいんだ！！
とテンプレ学校設立を父上に聞いてみると、
「誰もそんなことを望んでおらん。」
と一蹴されてしまった。
そんなわけないだろうと初めて父上と口論になった。
最終的には
「父上の頑固頭！！」
と子供らしく叫びながら執務室から飛び出した。
そのあと、このまま負けるのは癪なのでカトレア姉さんの教育係に話を聞いてみた。
ふっふっふっふ、あんの髭モノクル論破してやるわ！！
と意気込んで、髭モノクルと顔を会わせず1週間ほど勉強しまくった。

その結果、俺が間違っているということが判明したｏｒｚ
平民だって本気で勉強したいって思ってる人達は商人になって字を覚えたりするし、
貴族制に関しても、上に立つ貴族がいい人であれば、すぐにいろんな事を即決できるため、下手な民衆政治よりずっとうまく回るみた

いだ。
それに関してはうちの父親は完璧だ。
貴族制を廃止する必要性は全くなく、腐った貴族だけを廃止すればいいらしいとのこと。
それにこのハルケギニアにはゲルマニアという成り上がり万歳の国もあるわけで
本気で上昇志向を持つ平民はそこに行くらしい。
はぁ、伊達にハルケギニアも６０００年やってないらしい・・。
んで、悪いことしたからには謝らなくてはいけないと思い、執務室に向かった。

そしたら、髭とモノクルをつけた骨と皮がいた。

はいぃ？

「・・む、エリックか。よくぞ来たな。だがしかし、たとえお前になんと言われようと私は自分の言葉を曲げるつもりはない！！　私は誰だ？　ラ・ヴァリエール公爵だ！！　私はヴァリエール領に住んでいる人たち全ての期待を背負っているのだ！！　たとえお前に嫌われようとも・・・嫌われようとも・・・」

自分の言葉を曲げるつもりはない！！

ただ、謝りに来ただけなのに・・・

なんで、こんなややこしいことになってるんだろう。

ってか、何この気持ち悪いくらいの温度差。

片や目から涙流し、骨と皮だけになりながらも、力強い目で力説してくるいい年した中年髭モノクル。

片や子供ながら英雄王と呼ばれるであろう美貌とカリスマをもつ外見で冷めた目を向ける5歳児。

なんかもうやだ、帰りたい。

とりあえず何とかするために、俺は直ぐに今までの非礼を詫び、この1週間で学んだことで父上がどれだけ素晴らしいかを確認したことを伝え、最後にもう一度謝った。

「ふむ、そうか。この1週間でそんなことをしていたとは。・・・有意義な1週間だったな。」

それは確かに思った。それとここは小説の世界なんかじゃなくて、リアルな世界なんだなぁって改めて認識できたのは良かったかもしれない。

「それに、お前の子供らしい行動を初めて見れたのは私的にもよかったぞ。」

いや、嘘つくなよ！　めっちゃ落ち込んでたじゃん！！
骨と皮だけになりながらよくそんなこと言えるな！！？

「よしエリック、明日からお前の次期公爵としての教育を始めよう！　正直まだ早いと思っていたが、それだけの行動力があるのだ。大丈夫だろう。それに自分の意見を曲げないことも大事だが、間違っていたと判断したのならすぐに謝れる・・・・、十分次期公爵としての器があると思うぞ。」

はぁ、なんだか自分の首を絞めてしまったような気がする。

ま、いっか。
俺は次期ラ・ヴァリエール公爵、エリック・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエール　だしな。

いっちょやってやるか！！

「さすが私の息子だな。」

ごめんなさい父上、正直今のあなた、骨皮涙目の髭モノクルの息子だとは名乗りたくありません。

まぁ、そんなこんなで俺は現実の非情さに嘆いていたわけだが、一歩前踏み出すことにしてみたのさ。

チャンチャン♪

貴族とは何かを学ぶとのことです（後書き）

貴族制については作者の捏造設定です。

でも、いくら魔法があるからって６０００年も続くのはそれなりに完成されたシステムだと思ったからです。

まぁ、詳しくは知らないので批判とかはしないでくれると助かります。

なんかすみません。

ルイズとほのぼのとのことです（前書き）

今回ものんびりほのぼの～

『使い魔召喚（サモン・サーヴァント）』までの幕間～

ルイズとほのぼのとのことです

さて諸君、俺は現在ルイズとともに魔法の訓練をしている。
ちなみに自主練なので母上はいない。きっとチート烈風で監視はしているのだろうけど・・・

「兄様、見てて！　『風（ウィンド）』！！」　　反応がない、まｒ

俺らの初めての魔法訓練からすでに半年が経とうとしているが、ルイズは未だにどの系統も反応がない。

母上いわく
「これは本当に得意系統がないのかもしれませんね。器用貧乏となるか、万能選手となるかはルイズの努力次第でしょう。」
とのことだ。

それとルイズは『風（ウィンド）』と『地隆（バンブ）』に的を絞って練習してる。
両親の血の事を考えたらそれが一番確率が高いんだってさ。　この子、本当に5歳児か??

それに、俺たち2人は焦りすぎてるらしい。
世間一般では、杖契約でさえ8～12歳のころにやるんだとか、10歳のころにレビテーションが使えれば周りから優秀と呼ばれる（母上体験談）らしいとか。

まぁ、努力次第で万能選手になれるなんて言われてルイズが何もしないわけないわけで、今日も暇を見つければ俺と一緒に魔法の訓練をしている。

さて、気を切り替えて俺もやるか。

「いくぞルイズ、　『発光（ライト）』！」　　反応がない、まｒ

俺の場合、自分の属性が虚無だと知っているので、コモンマジックは使えるはずなのだが、単純に才能がないのか全然できる兆しが見えない。
精神年齢２０越えなのに、全然できません。
杖契約で２か月かかってる時点で才能ないのはわかっていたのでそんなに凹んでないよ。

ええ、凹んでませんとも！！

まぁ、あきらめずにやるだけだけどね。
俺の爆発は系統魔法ができない病気みたいなものだ。なんてルイズに説明することに両親と話して可決した。
そしてそれを話したら、

「・・・兄様、私は得意な系統も苦手な系統もないみたいなの。だから、私は４系統魔法を極めるから、コモンマジックは兄様に任せるわ。」

なんて言われた。　改めて言うがこいつ本当に５歳児か？
慰め方にツンデレの兆しが見えるのがなんか少しあれだ・・・
そんなこんなで、俺はルイズのためにもコモンマジックを極めなければいけなくなってしまったってことだ。

そして４系統魔法を極めることを決意したルイズなのだが・・・

最近兄として少し・・・いや、かなり心配だ。

「それでね、兄様。　母様に頼んだ本がとうとう届いたの！　ほら、見て！！」

あれから魔法訓練も成果は出ずに終わり、今はルイズと一緒にティータイム中だ。

クックベリーパイうめぇ。

そこまではいいさ。　ルイズが新しい本を取り出して自慢するのも問題ない。

だけどさ、そのタイトルはないわぁｏｒｚ

『　オールド・オスマン　～オールドと呼ばれるまで～　』

オスマァァァァアアン！！

もちろん母上の所為である。

あの母上、よりにもよってオスマンの事をルイズに話しやがった。

「ルイズ、たとえ最初どの系統魔法も反応がなかったとしても問題ありません。その様な例は今までもありました。高名な方では、今、

トリステイン魔法学院の校長を務めていらっしゃるオールド・オスマンもそうです。彼は最初の頃はずっと落ちこぼれ等と呼ばれていましたが、今はハルケギニアの歴史の中でも数少ない全系統スクエアです。あなたも・・・」

そのあとも、あなたも努力すればなんちゃら～、例え人になんと呼ばれようともうんちゃら～って感じで話したみたいだ。

それを聞いたルイズはもう目をキランキランさせやがって、たまに俺にオールド・オスマンはどれだけ素晴らしいかを語りかけてくるようになった。

いや、あいつエロジジイだろ？

なんてことを言いたいが、さすがに子供の夢を壊すほど俺は落ちぶれていない。

それに、ルイズの話を聞く限りでは確かにオスマン凄いやつなのだ。

学生の頃は落ちこぼれで、全てが中途半端。使い魔召喚でも何も力のないネズミしか召喚できなかった。

だが、軍に入ってからはめきめきと魔法が上達し、最終的には全系統スクエアになる。

そして、その頃大量に発生した亜人や害獣退治に精を出し、国に貢献した。

その後、軍を引退してトリステイン魔法学院の教師になる。
教師時代、とあるドラゴン大量発生事件で国の騎士団達が動けないのを見て憤慨し、単身でドラゴンの群れを殲滅する。
その時、『破壊の杖』を始祖様から授かったとのこと。
そして今、トリステイン魔法学院の校長を務めている。

何このチートオリ主並みの活躍？
母上も同じ時代に生まれたかったなんてほざきやがっていやがるし・・・

「やっぱり、オールド・オスマン素晴らしいわ！！」

ルイズはなんか、もうＬＯＶＥオスマンみたいな感じになってる。
これってルイズ、オスマン弟子入りフラグか？
それだけは勘弁してほしい・・・ｏｒｚ

ってか、本来この年の子供って
男の子「僕はイーヴァルディーの勇者みたいになる～」
女の子「私は姫様みたいになるの～」
ってのが普通の反応だぞ！？

ルイズの反応は

「母様みたいなメイジにはなれなくて残念だけど、オールド・オスマンみたいな立派なメイジになるわ！」

兄様は絶対許しません！！

母上も何感動しながら　「立派なメイジになるのですよ。」　とか言ってるんですか！？

はぁ、なんか疲れた。

補足だが、俺らの世代でオールド・オスマンを詳しく知っている人はあまりいないらしい。

どうしても世代的に『烈風』カリンの方が有名らしい。

なるほど、さすが負けず劣らずチート母上だな。

「母様も凄いけど、でもやっぱりオールド・オスマンも・・・・、いやでもやっぱり母様のほうが・・・

なんか、もうごちそうさま

こういうところは5歳児なんだよなぁ。

「そういえば兄様、最近顔色が優れないみたいだけど、大丈夫？」

気づかれたか。さすが見た目は似てないけど双子なだけあるな。

さて諸君、最初の方で初めての魔法訓練から半年と書いたな？

そう、半年たってしまったのだ！！

エレオノール姉さんが帰ってくるまで、後1週間しかないのだ・・・

腹はくくっているつもりだったが、やはり悲しいものは悲しい。

「なぁルイズ、男同士のファーストキスってどう思う？」

「ふぇ！！？」

珍しい声が聞けたな。

ふっ、やはりルイズも5歳児か・・・。

たかがお、オ、ぉ男同士nのき、キ、Ｋｉｓｓで動揺するとはな。

・・・・空しい。

「兄様は・・・その・・そういうご趣味なのでしょうか？」

「違う！！　断じて違う！！！」

ルイズよ、兄様は悲しいぞ・・・

それに突然の引腰　＋　ナチュラルな敬語は相手を傷つけるぞ！！

「いや、そのだな・・・、世の中には数限りない数奇な運命というのが存在しててだな・・・なんちゃら～うんちゃら～うにゃむにゃ～うやむや～・・・」

とりあえず某戯言使い君を真似てごまかしてみた。

正直全然うまくいかなかったが・・・　　世の中は非情である。

突然だが、西尾維新さんは素晴らしい！

あんなに言葉巧みに物語を書ける人はすごいと思う。
実際、読んだ後の充実感の中であらすじだけを思い出してみると、
意外と内容が薄いっていう矛盾

キャラ一人一人の問答が神過ぎる！！
それに、ネーミングセンスがめっさかっけぇ。

ｆａｔｅや禁書、西尾維新作品とかは、よくよく考えてみると中二
なネーミングなはずなのになんであんなにかっこいいんだろう？

やっぱり匙加減だろうか？
自分もあんな風に書きたいものだ・・・

・・・・それで・・・・って、兄様聞いてるの！！？」

ん、また考え事に没頭していたみたいだ。

顔あげて、ルイズを見るとすぐ近くにいた。

んっ・・・

キスされた・・・

「そ、そのね！　兄様が何言いたいかは、わ、わからなかったけど、これで兄様のファ、ファ、ファーストキスはあたしだから！！　え、え、えっと私少し母様に聞きたいことがあったからすぐ行くわ！またね兄様！！」

そうして、ルイズは走り去っていった。

あぁ、その・・・なんだ？

とりあえず、ファーストキスがレモン味っていうのは嘘だな。

クックベリーパイの味がした。

うん、甘いな・・・

さてと、　ちょっと勇気をもらったし、　一週間後頑張りますか。

追記

母上、俺を見て顔を赤らめないでください。この人いい年した大人なはずなのに初心なんだよな。

カトレア姉さん、俺を見て「あらあら」とか言わないでください。なんか凄い恥ずかしくなってきます。

そして父上、俺を見て泣きながら杖を構えないでください。あなたの場合は全然冗談に見えません。

そうして、俺は使い魔を召喚する

ルイズとほのぼのとのことです（後書き）

はい、次話は使い魔召喚です。

補足

感想で貴重な質問を頂いたので、補足をつけさせていただきます。

オールドとは古いや老いているなどの意味です。

決してオール（全ての）という意味ではありません。

ですが、原作の中でほとんどの登場人物がオスマンの事をオールドをつけて呼んでいます。

ということは、オールドというのは勲章まではいかなくとも、いつの間にか周りから呼ばれるようになった二つ名に近いものなんじゃないかと考えました。

そうなるとオールドとは、年配の方で敬意を持たれるような人が呼ばれる言葉なのではないか？

そんな感じで考えたら、こんな風になりました。

もしかしたら、年配の方を呼ぶときにはミスタの代わりにオールドと呼ぶのかもしれませんが、自分的には年配の方に会うたびにオールドをつけて話している姿が想像できなかったのでこのような形になりました。

間違っているかもしれませんが、この作品ではこれで通します！！

というより書き直したくありません！！苦笑ｗ

そんな感じでお願いします。

使い魔召喚とのことです（前書き）

はい、とうとうやってきました。

使い魔です。

使い魔召喚とのことです

さて諸君、とうとうこの日がやってきてしまった！
そう、『使い魔召喚（サモン・サーヴァント）』である。

しかし諸君、この俺が何も足掻かないで素直にキス　ｗｉｔｈ　サイトを実行すると思うか？
するわけないだろう！！

ということで、懲りずに様々な手をこの半年で模索してみた。

まず最初に、『使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）』のみではできないか？
そうすればそこらへん歩いてる動物とか、ヴァリエール家が飼ってる風竜とかも可能ではないか？
いや、俺の場合は人間じゃなくてはいけないが、うちのヴァリエール家には一生ヴァリエール家に仕えることを誓っている俺のお目付け役、美麗優秀完璧執事セバスチャン・ミカエリス・偽（本名はトニー、平民は苗字を持てません）がいる。
そうだよ！　いきなり召喚されて、使い魔になって一生縛られるなんて人権侵害だ！
そう、これは全て未だ見ぬサイト君のためなのだ！

ってことでいつも通り、聞いてみた。
結果は、アカデミーでもその実験をやったことがあったらしく、ダメだったのだそうだ。
『召喚（サモン）』と『契約（コントラクト）』は２つで１セットだとのこと。
まぁ、そりゃそうだ。そうでもないと原作ルイズが進級がかかっているとはいえ、あそこまで必死になるわけがない。

そして、さりげなく再登場、アカデミー。
なんだかんだで有能なところを見せつけてくれる・・・。くそぅ。
そんなこんなで第一案は却下。

次に第二案は、サーヴァント召喚！
頭の中でサーヴァント、サーヴァントと繰り返してるうちに考え付いた。
そう、あのｆａｔｅで登場してくるチート七人衆である。
俺の見た目が英雄王なんだ。確かに金髪は父上の金髪譲りと言えるかもしれないが、この真紅の眼は遺伝的に不可能だ！
なので、もしかしたらこの世界はゼロ魔９割　＋　ｆａｔｅ１割的な感じな世界で英霊を召喚できるかもしれない！！

うまくいけばチートの代名詞であるサーヴァントを手に入れられる。
もちろん英霊はこの世界の英霊じゃなきゃいけないと思うが、この世界にも英雄なんてたくさんいる。
実際、俺の母上がそれの体現者だ。

キャスターのサーヴァント、烈風カリン、ただいま参上しました。
問いましょう、あなたが私のマスターですか？

エミヤシロウと同じように未来から来ないよな母上・・・、ちょっと心配になってきた。
俺の血とか俺自身がピンポイントに英霊カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールの媒体になってそうで怖い。

まぁ、やるとしたら呼ぶのはセイバー：イーヴァルディ　だろうな。
呼ぶ媒体はそこらじゅうにあるし、例え架空の人物であろうとも佐々木小次郎がいるんだ。大丈夫だろう。

ふっふっふ・・とうとう俺にもチート時代がやってきたか！！

しかし、現実は非情である！！！
アカデミーが『使い魔召喚（サモン・サーヴァント）』を応用して霊体を召喚できないか試してみたらしい。
何故だ！！？　なぜご都合主義がここで立ちふさがるんだ！！　本来ご都合主義はオリ主の味方だろうが！！

くそぅ、アカデミーは神様やブリミル様と同じくらい俺のことが嫌いらしい。
などと思っていたが、理由を聞くと割かしまともだった。
なんでも、ブリミル様と少しでもいいからコンタクトをとれる方法を探してそれに行き着いたとか。
アカデミーの優先順位の最も高い研究としてブリミル様についての解明があるらしい。
今でも様々なブリミルについての研究がおこなわれてるらしい。
あれ？　今更ながら夢でブリミル様のお告げがあったって嘘ついた

のやばくない？
また気づかぬうちに落とし穴かよ！　凄い勢いで墓穴掘りまくってる気がする・・・
現実は非情である。

そんなこんなで一つだけダメモトな作戦を残しながらも、俺が考えるような安易な考えはご都合主義なんて言う祝福からは見放され、今俺は使い魔を召喚しようとしている。
場所はヴァリエール私兵団の訓練場。いるのは俺と両親だけ。まぁ、一応極秘だもんな。
それにどんな幻獣が来ても、公式チート烈風には勝てん。問題なしオールグリーンだ。

そして、既に両親にはどんな人が来ても失礼のないようにと言っている。
明らかに平民って感じの人が来て、仲悪くなったりしたらもう未来は真っ暗だからな。
だが、あまり納得してなかったようなので、
下手すると他国の王族が召喚されるかもしれません。
と脅しをかけておいた。　　ふっ、決まった。

「そんなもの返り討ちにしてくれましょう。そうですねお父様？」
いやいやいや、何言ってんですか母上！！　これだから脳筋は！！
そして何で杖磨いて素振りしてるんですか！！　『剣（ブレイド）』ですか？

それ明らかに『剣（ブレイド）』の素振りですよね。
あなたの『剣（ブレイド）』、伝説によると戦艦叩き割るんですからマジ自重しろよ！　オーバーキルだよ！！

「・・・ぅ、うむ、そ、そうだな。」

父上ぇぇぇ！！　お前この前、自分の言葉は曲げんとかめっちゃかっこよく啖呵切ったよな！
目を逸らすなぁ！　どこに行った貴族の誇り！　ノーブレスオブリージュはどうした！！

ちなみにあれは母上流のジョークだったらしい・・・
心臓に悪すぎる。

そんこんなで、肩の力も抜けた（？）ので使い魔召喚を始める。

ここで、最後のダメモトの作戦を実行する。
原作を見る限り、特定人物を心から欲するとその人が現れる可能性がある。というより高いと思う。
だから、その逆をつく！！

（サイト来るなサイト来る

なサイト来るな)

まぁ、これも問題だらけだ。俺はそんなにサイトが嫌いじゃないしな・・・。

それにこれやっても他の男が来たらどっちにしろ最悪だ。いや、その場合はサイトのほうがマシかも。

なので、今度は心から欲するものを心の中で叫ぶ!!

(女女女

女黒髪美少女黒髪美少女黒髪美少

そして煙が晴れていき・・・、黄緑色のワンピースを着た、黒髪が腰までである幼女がいた。
年齢が俺くらいなのも予定内だ。
さて、残りは『使い魔契約(コントラクト・サーヴァント)』だ。

「えええええ!!　お、お父さん!!　どこ行ったのよ?　って、ここどこよ!?」

なんだか勝気な声の女の子だな。

「あ、あの・・そこの君、ちょっといいか?」

「え?　え!?　貴族!??　あ・・あの・・あたし何も悪いことなんか・・・何も・・・・・うぅう・・・うぅ・・うあぁあん・・おとぉさぁんおかぁさぁんどこぉ・・おとぉさぁん・・・う・・ひっく・・・・ひっく・・」

・・・予想外だ。いや、同じ年齢の子供が来ることは予想できたから、予想するべきだったな。突然見知らぬ場所にくるんだ、泣かない方がおかしいか。俺の周りの5歳児なんてルイズしかいないから失念してた。

「あの・・大丈夫だからね。」

なるべく優しい声で持っていたハンカチで彼女の顔を拭きながら言う。

「ひっく・・ひっく・・・うぅ・・う・は、はぃ、貴族様、ぁあり

ふぁとうございます・・」

ん、貴族様？

「それで、君の名前を教えてくれない？」

「は、はひ。あ、あの・・・ぁ、あ、あたしの名前はジェシカで、です。魅惑の妖精亭、スカロンの娘のジェシカです。」

あぁ・・確かに日本人の血を引いてる黒髪美少女だ・・・

だけど・・これは、ちょっと・・・予想外・かな・・？

使い魔召喚とのことです（後書き）

泣き声を表現するのがこんなに難しいとは・・ｏｒｚ

というわけで、あれだけ今までサイト臭をかぐわしたなのに折りました。

この作品を書き始めた時から、これは決定事項でした。

基本、この小説では他のｓｓにはない要素を詰め込もうという意気込みで書き始めました。

数多くのｓｓで双子があるのにゼロ魔はなぜないんだろう？

ジェシカヒロインってないのかな？

なかなかうまくいかないオリ主ってありじゃね？

いっそ、本来の主人公にとって代わってしまうオリ主もいいかも

などなど。

そういう天邪鬼なものをこれからも詰め込んでいこうと思ってます。

ｓｓの先輩たちが開拓したものを書いても自分程度の文才じゃ読んでもらえないだろう、なんて打算的な理由も正直あります。

そんな自分ですが、これからもよろしくお願いします。

補足

平民って苗字がないと思うのでどこどこのだれだれ～って自己紹介なんだと思います。

なので、あんな風になりました。

使い魔についての考察とのことです。（前書き）

ゼロ魔の小説検索でジェシカと打つと1件も出ない。

ふっふっふ、私が初の開拓者だ！！

そんな少しテンションが上がった今日この頃。
ちなみにこの小説も引っかからない。キーワードなんかでばれてたまるか！！

使い魔についての考察とのことです。

さて諸君、あの後起こったことを説明しよう。

とりあえずジェシカの名前を聞き出した後、ここがヴァリエール公爵家だと教えたらまた泣き出してしまった。
さすがの数少ないトリステイのン大貴族と言えども、泣き出す子供には勝てないらしかったので、俺は彼女の担当をするから魅惑の妖精亭へ使者を頼むと両親にお願いした。

「魅惑の妖精亭、というと首都のトリスタニアだな。わかった、すぐに使者を送ろう。彼女の家族は明日にでもここに着くだろう。」

「いえ父上、私たちが明日向かいましょう。」

「エリック！　あなたは平民一人のためにあなただけならともかく、お父様まで連れて行くつもりですか！？」

確かに母上の言うことは正論なのだろう。特にこの貴族制のハルケギニアでは当たり前と言っていい。それに父上は、そこらにいる十把一絡げの貴族とは違う。トリステインに、いやハルケギニア中に名を轟かすヴァリエール公爵だ。
それでもこれだけはダメだ。俺は確かに父上に貴族なんたるかを学んでいるが、それと同時に父上がどれだけ家族思いなのかも知っている。幼少時代なんかの記憶もある俺なんかは、多分兄弟の中で一番それを理解している。

父上も色々考えていたようだが、ジェシカが泣きながら「おとぅさぁぁん・・」と泣き叫んでいるのを聞いて決意を固めたようだ。

「カリーヌ、今回はエリックが正しい。エリック、さすがに今すぐは無理だ。使者は今すぐにでも向かわせるが、私たちの出発は明日の朝だ。準備をしておけ。」

さすが俺の父上だ。いざとなったら、間違っていたら謝れるのが公爵の器じゃないんですか！？　の一言でもいうつもりだったが・・・そんな心配は無用か。

「しかし、お父様・・・」

「今日中に明日の仕事も終わらせる。よってカリーヌ、明日の家の留守を頼んだぞ。」

「・・はい、わかりました。」

「エリック、その子の事はお前に一任する。私はカリーヌと共に執務室におるから、何かあったら連絡をよこせ、いいな？」

そう言って、2人は執務室に向かって行った。

途中で、「・・・・そういえばお父様、どうして魅惑の妖精亭等という品のない名前だけでトリスタニアと判断したのですか？」なんて聞こえな～い。

はい、みんなで一緒に　キコエナ～イ。

そんなこんなで、ジェシカの方を見てみると泣き疲れたのか芝生の上で寝ていた。
さすがにこんなところに放置というわけにはいかないので、彼女を俺のちょっとした願望であったお姫様だっこをしようとし、この年齢の腕の長さと腕力じゃ不可能という現実に打ちのめされつつ、結局彼女を背負いながらヴァリエール家に向かった。

ヴァリエール家が見えるくらいのところについたので、俺の最終兵器（リーサルウェポン）を呼んだ。

「トニー」

「はっ、ここにおります。」

彼こそが俺のお目付け役、美麗優秀完璧執事セバスチャン・ミカエリス・偽（本名トニー）である。
さすがに『使い魔召喚（サモン・サーヴァント）』を見せるわけには行けなかったので、訓練場にはついてこさせなかったが基本的には俺の左後ろ（定位置）に常にいる。
トニーなんて弱そうな名前だが、某「あくまで執事ですから」とためはれるんじゃないかってくらい優秀だ。

「誰にも見つからないようにゲストルームに向かいたい。人払いを頼む。その後、誰もゲストルームに近づかないように手配を頼む。」

「はっ、かしこまりました。」

その後、ジェシカを背負いましょうか？　と言われたが、男のプライドだと言い返したりしながら誰にも会わずにゲストルームに到着

し、彼女を備え付けのベッドに寝かせた。
トニーに部屋を何があっても絶対に覗くなと厳命し、「変なことしないでくださいね。」なんて言ってきやがったので、「保証はできない。」と返したら、彼は小さく笑いながら部屋を出て行った。

悪いトニー、今回は『使い魔契約（キス）』するかもしれないから、マジで保証できない。
多分、あいつ冗談だと思ったんだろうなぁ。

そして今現在、誰も来ないことが保証されている密室に男女一組がいる。
女はベッドに横たわり、一人の男がそれを覗き込んでいる。
そして、男は彼女の唇を奪おうか大いに苦悩しているまっただなかだ。

こんなふうに書くとものすごくエロいな・・・
実際の絵は、安らかに眠っている5歳児の女の子の顔を覗き込んでいる5歳児の男の子という、どちらかというと心安らぐはずの風景なのになぁ。

んで、『使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）』だが、正直やるかどうか迷ってる。
どんな年齢や性別かは予測できなかったが、日本人ではあるだろうと思っていたのだ。
なにが言いたいかというと、『使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）』をしなくても言葉が通じるのだ。

日本人が召喚されたら、意思疎通を図るためという免罪符のもと契約をし、そのあと説明するつもりでいたのだ。

ちょっと俺も貴族思考に毒されてるのかな？

しかし、彼女にはその免罪符は通用しないのだ。確かに今がチャンスなのだが、さすがにそれは思いとどまられる。
それに、ルーンを刻むのは１７歳の男であるサイトが気絶するくらい痛いのだ。５歳の女の子にできるわけねぇよ。

どうしたものか・・・

それにしても何が原因だったんだろう？

「黒髪美少女」か？　確かにあれが一番唱えた回数が多いが・・
それに心なしか、一番心がこもっていたと思う。だが諸君言い訳させてくれ、５年、もうすぐ６年間、見慣れてきた黒髪美少女や黒髪美女を見てないのだ。それのたまりにたまった情熱やパトス（同じ意味だな）がついここで発揮されてしまった。
多分そういうことなんだろうなぁ。

とりあえず、『使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）』はいったん保留だな。

長い黒髪が彼女の顔を隠していたので、そっと払いのける。

「はぁ、こっちは色々悩んでいるのに、なぁにかわいい寝顔で眠っ

てんだか・・、いや、これが普通の5歳児か。」

そりゃそうだ。突然拉致られたんだ、泣き疲れてぐっすり眠ってるのが普通だ。
泣き疲れて・・・・か。

「泣いてたな・・。悪いことしたな。」

涙の跡がまだうっすらと見える。

「ちょっと焦りすぎた。自分の系統知ってから余裕なかったもんなぁ。本来酒場のヒロインであるはずの彼女をこんなところに、戦場のヒロインのポジションに呼んじゃうくらいだ。もっと何年か経った後、最悪11年後の進級試験の時でもよかったもんなぁ。はぁ、やべぇ、すげー自己嫌悪。」

だけど、一つだけ問題がある。感覚的なことだが、俺の使い魔はたとえ何年たとうともジェシカだ。召喚して確信した。
自分がこの世界に転生してしまったから・・・彼女は戦場に立たなければいけない運命になったともいえる。
俺はこの世界にとって害悪なのだろうか？　俺さえいなければ彼女はそんな運命になかったはずだ。
いや、でもその代わりルイズとサイトが救えたのかな？　なるほど、結局は考えても詮無きことってやつか。

「聞こえないかもしれないし、わからないと思うけど、謝っておくよ。　ごめん。　いざとなったら俺一人でやるから。」

そう、多分これは俺の誓いだ。誰にも聞こえない。いや、多分誰にも聞こえないから口に出してこんな誓いができるんだ。
俺は英雄王なんかじゃない、ちいさなちいさな小市民なんだから。

そのあと、色々考え事をし、彼女の寝ているベッドの横のベッドで俺も眠りにつくことにした。

「おやすみ。」

誰に言いたかったかはわからないが言っておくべきだと思った。

そして、俺は眠りについた。

使い魔についての考察とのことです。（後書き）

実際リアルな転生者はこうなるんじゃないかなぁと思いながら書きました。

基本的にエリックは様々なことに苦悩します。
見た目、英雄王なのに小市民な性格のギャップや
ヴァリエール公爵のようになりたいけど、いまいちまだ貴族がよくわからなかったり、
虚無なんて言う、本来主人公が持つべきものを持ってしまったり

ｅｔｃｅｔｃ

そんな一風変わったものをこれからも書き続けていきますので、よろしくお願いします。

スカロンさんと出会うとのことです（前書き）

展開を早くしたいが文才がない・・・

スカロンさんと出会うとのことです

さて諸君、俺と父上は今、あの動く筋肉ことスカロンさんとその娘ジェシカちゃんと机を挟んで向かいあっている。

ここまで来るのには、たいした問題は起こらなかった。
お忍び用馬車2台で片方に父上を乗せ、もう片方に俺とジェシカを乗せて原作でも有名なあの魅惑の妖精亭へと向かった。
もちろんジェシカと二人きりなのは俺が父上に頼んだからである。
いつか使い魔になる可能性もあるから仲良くなる必要性うんぬんで誤魔化したが、もちろんただ純粋に仲良くなりたいのだ。だって、黒髪美ｓｙ（ｒｙ

それに女の子との会話に飢えているのだ。いや、同年代の会話といってもいい。パーティーとかでは次期ヴァリエール公爵の肩書は重い。
私は何何がうんぬん～、このネックレスはかんぬん～、貴方様の紅の瞳はなんちゃら～、輝くような黄金の髪はほんちゃら～
・・・・うるせぇ！！お前ら5歳児にそんなこと言って恥ずかしくないのか！！
となったのが、2か月前のパティーである。

まとめると、気兼ねに話せる同年代が家族以外いなかったのだ。なので、俺は喋りまくった。後から考えると、ちょっと引く様な剣幕だったかも・・
まぁ、そんなこともあって、なんだかんだで5歳児　＋　あの気さくな町娘代表ジェシカなだけあり、かなり楽しく道中を過ごせた。

「エリックさまっておもしろい人ね。ヴァリエール家嫡男なんてもっとお堅い人だと思ってたわ。」

なんて笑いながら言われた。くそぅ、めっちゃかわいい。

俺は褒められるのはパーティーのせいで無茶苦茶慣れてるが、その分人を褒めることが下手糞だ。こういうときに気に利いた一言でも言えればこうなんていうか・・・こう「ポッ」て感じにフラグ建てれるんだろうなぁ。いや、ムリか。あれは神様やご都合主義何てもの達に愛されてる偉大なる転生者(センパイ)達の特権だ。俺にはどうあがいても無理だろう。

そんなこんなで今俺たちは魅惑の妖精亭で机を挟んで向かい合っている。他に漏れたらヤバイ話なので既に『消音(サイレント)』済みだ。店の前に置いてあるお忍び用の馬車2台、派手な装飾はないが見る人が見れば彫りの細かさが分かる的な馬車、がある時点でなんかミスってるんじゃね？　って思ったのは内緒だが。

スカロンさんがオカマじゃない・・・っと最初ちょっと打ちひしがれていたが、今のスカロンさんかなりかっこいい。

顔がドンマイなのは仕方がないが、まず口紅してないし、コック服を着ていても分かるほどの筋肉、何よりも目がヤバい。たとえ相手が貴族でも引かねぇって目だ。やはり子供を守る親はどこの世界どの時代でも強いんだろうなぁ。

まず、自己紹介をしてから、相手がスカロンさんなのを確認。

ジェシカの母さんは床に伏せているらしく、申し訳ないと謝ってきた。なるほど、その時期か。

その後、ジェシカが『使い魔召喚(サモン・サーヴァント)』で召喚されたことと、使い魔についての説明。

俺の系統が伝説の始祖ブリミルの虚無である可能性が高く、同じくジェシカが伝説の虚無の使い魔の可能性が高いことも言った。この件に関しては父上ともめたが、やはり言わないわけにはいかないだろうと思った。心構え的にもそうだし、説得するためにも切るべきカードだと判断した。
そして、全ての説明が終わったあと、「娘さんを俺に下さい。」と頭を下げた。
恥ずかしいセリフだが、真剣に言った。使い魔は誇張表現なく一生のパートナーなのだ。冗談なんか言える雰囲気ではない。

一悶着あるだろうと構えていたスカロンさんもさすがにこれには焦ったらしい。次期ヴァリエール公爵に頭を下げさせているのだ、普通に大問題だ。
実際、俺の隣にいる父上はあまりいい顔をしていない。まぁ、そこで何も言わないのがなんだかんだで親バカ父上である。貴族としての矜持と自分の嫌いな腐った貴族のように平民の家族をもらい受けようとしていることで色々ぐるぐる考えているのだろう。難儀な性格だ。

そして、突然スカロンさんは土下座して俺らに語りだした。

「貴族様、確かに貴方がたの言い分は分かりました。平民であるこの私にも真摯な態度で接してくれることから、貴方がたがどれだけ高潔な貴族様なのかも分かりました。・・・ですが・・ジェシカだけは・・ジェシカだけはご勘弁の程をお願いします。」

その後も、スカロンさんは土下座したままの状態で俺らに話した。
ジェシカは彼の妻とのただ一人の娘であること。彼の妻はかなり前から床に伏していて、もう子供は望めないこと。
その他にもこじつけのようなことも含め様々ことを話してくれた。

当たり前だが、スカロンさんがどれだけジェシカを大切に思ってるかが伝わってくるような内容だった。
そりゃあ、使い魔なんかになったら結婚なんて望めないだろうし、普通なら、なんにもいいことが無いなんて目に見えてるよな。
ジュリオは孤児だったから飯や宿、仕事をもらえたから良かったのかもしれない。シェフィールドは自分が愛すべき男と出会えたから良かったのかもしれない。
やはり、そう考えるとジェシカはサイトと同様でなんにもいいことが無い。やっぱ悪いことしたなぁ。

そんなことを考えている間に親同士、父上とスカロンさんは言葉の応酬を続けていた。
始祖様の伝説の使い魔～、しかし私のただ一人の愛娘～、私がその使い魔になりますので見逃して～

真面目な雰囲気なんだが・・・ごめんスカロンさん、どうしても原作のイメージが抜け切れてないので貴方はお断りです。
ちなみにハルケギニアにはなぜか土下座がある。原作でも徴税官チュレンヌが見事なＤＯＧＥＺＡを披露している。閑話休題。

「父上、もういいですよ。それに父上だって始祖様から言われようと娘は手放さないでしょう？　使い魔などいなくても他の方法で呪文を調べる方法はありますから。」

実際父上も心苦しそうだったからな・・、呪文を調べるあては正直ないのだがそれはこれから考えるとしよう。
そう説得し、スカロンさんと父上両人ともほっとしてる所、さぁ帰るかとなると思いきや、俺に声をかけてきた人がいた。

「待って！！」

４人中３人が話はついたというムードだったのだ。よって俺に声をかけてくるのは残った一人であるジェシカだ。

「あ・・あの・あたしが使い魔になる代わりにお母さんの病気を治してくれませんか！？」

あぁ、この子は純粋すぎるなぁ。

そんな感想を持っているところ、スカロンさんは何を言っているんだ！とジェシカを叱りつけている。

その間に俺は父上に治せるか聞いてみた。

答えは多分可能だとのこと。この人『烈風』のせいで影が薄く見えるが、さり気かなりのチートである。

ただしできることが、圧倒的な書類仕事、宮廷貴族と対等でいれるだけの交渉術、攻めてくる大国ゲルマニアの火のツェルプストーを抑えるだけの土スクエアと指揮能力を応用した鉄壁要塞、並みの水メイジじゃカトレアを治せないと知るや否や自ら水スクエアにランクアップ（結局治せなくて嘆いていたが・・現実は非情である）、そして土と水のスクエアになり井戸を掘るのが大層うまくなったとか。

まぁ、要は知られにくいものや個人技があまりないせいで霞む・・。不憫だなぁ。

「しかし、私は治すわけにはいかん。ここは首都トリスタニア、王族直下領なのだ。」

最初は良く分からなかったが、どうも大の公爵家しかも当主自らが、

王家の御膝元で平民のご機嫌取りをしているように思われるのは痛くもない腹を探られる可能性があり、よくないとのことだ。
まさかここでヴァリエール家がネックになるとは・・、何度も言うが落とし穴ってのはどこにあるかわかったもんじゃねぇ。現実は非情である。

それを聞いたジェシカはなんかもう、すごい落ち込みようだった。

「・・・ふむ、しかし男が女に何か物を送ることには何も問題あるまい。例えば、私の息子が自分の気になる女の子に何か贈り物をしようともな・・。」

ちちうえぇえぇ!!　お前絶対タイミング狙っただろ!!　それに例えばなんて言わなくても俺気づいたから!　わざわざ言うなよ!!ほら、ジェシカこっち見ながらすんげぇ目キランキランさせてやがる!・・あのねジェシカ・・これ一応餌付けみたいなもんだよ・・・だからそんな無垢な瞳で俺を見つめないでぇぇえ!!

「ふっふっふ・・それにお前達双子が生まれた日から5年、我がヴァリエール領はかつてない好景気だ。お前たちのおかげだ。この機会にお前自らもいくらか金についての使い方を学ぶべきだろう・・・お前の場合は女子(おなご)の扱い方もか・・ふっふっふ・・。」

なぁにが・・ふっふっふ・・だよ!　それにその好景気の理由は父上が家族が増えたなさらに精進せねば・・なんてやってるからだろうが!!　一応間接的には俺らのおかげか?　ってか女子(おなご)言うな!

なんかジェシカ少し顔赤くなってるだろ！　え、俺？真赤だよ、悪い？　ジェシカが「自分の周りに自分より恥ずかしがってる人がいると案外自分は落ち着けるなぁ」なんて瞳でこっちを見つめてくるんだぞ？　・・・鬱だ、なんか男のプライドとか木端微塵だｏｒｚ
それに父上、余計な御世話だ。愛人一人も囲えない奴に女の扱いうんぬん～なんて言われたくない。
何？　昔はもてた？　あぁ、サンドリオン時代か・・。

「今はカリーヌがいるのだ・・」

・・・・・父上・・俺が悪かったです。スカロンもこの機会にちゃっかり魅惑の妖精亭をプッシュしてる。さすがたくましい町民代表。

んで、その後、俺とジェシカが文通しながら俺が贈り物（という名の水の秘薬）をすることになった。余談だが、うちはカトレア姉さんの影響で水の秘薬を大量買いしてるため、少し安く手に入る。
文通については、スカロンが言いだした。それに俺はもちろん諸手を挙げ賛成し、ジェシカもはにかみながらも、よろしくね、なんて言ってきた。くそぅ、めっちゃかわいいｏｒｚ

そんな俺らを、なんか友情が芽生えたような父上とスカロン（もうさんづけしねぇ）が見守ってきやがった。
スカロンの方は少しだけ公爵家という打算が含まれてるかもしれない。さすが戦時のアルビオンに行くだけのたくましさがある町民代表だな。
前々から思っていたがこの世界って親バカしかいねぇ。まぁ、嫌い

じゃないけどね。

こうして、俺らの話し合いは終結し、俺ら親子はスカロン親娘に見送られながら帰路についた。
馬車の中で俺は口を開いた。

「正直、父上はもっと強引に出るかと思ってました。」

「確かに普段の私ならばそうだろう。しかし、息子の嫌うようなことはせん。それにヴァリエール領に関することであるならば私は容赦しないが、この問題に関しては一人の父であることが大事だったのだ。」

あ〜〜はいはい、参りました。出来すぎた父親を持つのも辛いものだ・・・ぜいたくな悩みだな。

「だが、お前は今回のことについて責任を取らねばならん。お前が言っていた虚無、今まで半信半疑だったが、人が召喚された事を考えるとお前は確かに虚無らしいな。しかし、お前のわがままともいえる『使い魔契約(コントラクト・サーヴァント)』をしないという選択は、確実にお前の虚無への道を長く険しくしただろう。手助けはしてやるが、方法はお前自身で考えろ。それが今回のお前の責任だ。」

確かにその通りだ。この二次創作にはあるまじき、「現実は非情である」を体現している世界で俺は回り道を選択した。
ま、ウジウジ考えても仕方ないか、それも人生ってやつだ。それにこの選択については間違っているなんて毛ほども思っちゃいない。
気持ちはサッパリしてる。

こうして俺は虚無への切符もチート使い魔も手に入れず、愛しの我が家、ヴァリエール家に凱旋した。

余談だが、父上はあれからトリスタニアに行く時は必ず魅惑の妖精亭に訪れるようになったらしい。

ジェシカは見た！！！

スカロンさんと出会うとのことです（後書き）

というわけで、まだまだ道は遠いのです。
そんなお話でした。
下文はボツネタです。

・・・・うるせぇ！！お前ら5歳児にそんなこと言って恥ずかしくないのか！！

となったのが、2か月前のパティーである。
だが、実に不本意ながら少し感謝していることもあるのだ・・・。
パティーの事なんて書いてもとてつもなくつまらないことになるのは目に見えていたから、書かなかったが、今ここで報告しようと思う。

・・・・おかげで、チートが見つかった・・・。

いや、あのね今までのチート皆無ｗｗな方針どうなったんだよ！！
とか言わないで！
その・・本当にたまたまなんだよ。ちょび～っとなんかがプツンっていっちゃって・・

「黙れ・・雑種、目障りだ。」

なんて言っちゃたんですよ・・はい。そしたらなんかもう誰も話しかけてこなくなって・・。
いや、実際本当にチートか俺にも良く分かんないんだよ。
もしかしたら、ヴァリエール家の嫡男を怒らせてしまった・・なんて事かもしれないし、実際そっちの可能性の方が高いのが現実的なんだが・・、なんか明らかに場馴れしている貴族のおっちゃん方もガクブル状態だったからやっぱりチートなんかな？
とか考えていたら、パーティーは終わり、見事母上に怒られた。当たり前である。

しかし、そんなことを真剣に聞いている場合ではない！　俺は猛烈に反省しているふりをしながら頭の中では様々な憶測を立てる。何しろ初めて可能性の「か」の字が見えているチートなのだ。苦節５年、自分の見た目が英雄王なのに気付き、様々なことを試しても実らず・・・

とこんな感じで口調を真似れば英雄王のカリスマＡ＋を手に入れられる地味チートをつけようかと思ったのですが・・・
やはり、現実は非情である。ってのがコンセプトにあるので却下しました。

けれどこれはこれで、強烈な殺気や覇気だけは放てる虚弱体質な頭を使って成り上がれ勘違いされ主人公なんて作れるかもしれないなぁと思ったり・・・

また変なのを思いついたなと自嘲・・

誰か書いてくれないかなぁ・・

いつも読んでくださってありがとうございます。

次回、『烈風』吹くとのことです（前書き）

次回はカリン様の烈風が吹き荒れます。

次回、『烈風』吹くとのことです

さて諸君、おれはとうとう8歳になった。いや、もうタイトル見てこの話しの予想はつくだろう？　そういうことだよ。
とりあえず、みんなが予想してる「ぎゃぁあぁあぁ」とかは次回やるから、この3年間何やってたか説明することにする。

まず、ジェシカの件から少し自分は焦りすぎたなと反省。その後、これからどうするかを考えた。使い魔のルーンという明確な証拠がない今、すべての問題が振り出しに戻ってしまった。これが俺の『責任』かぁ。
さしあたっての問題としては、

1. 俺の使い魔どうしよう
2. 虚無の呪文どうしよう
3. 風石による大地隆どうしよう
4. 原作で起きる過去の悲劇（エルフ妾やガリアの蒼兄弟）どうしよう
5. いろいろな予防策について

まず最初に1．だがジェシカ以外は無理なことが判明。感覚的にそうだろうとは思っていたが、一応確認しておいたのだ。そして、なんとこの時、初めてアカデミーのやってることが俺の役に立った！

！　ちょっと感動したぞ！！

『使い魔召喚（サモン・サーヴァント）』をするまでの半年間、俺は遊んでいたわけではない。アカデミーにある召喚契約儀式についてのレポートを片っ端から読んでいたのだ。

ここまで読んできた人たちならわかると思うが、この世界はとてもシビアだ。ちょっと試してみよう！　なんて軽い気持ちで何かしでかすと泥沼のような落とし穴に嵌りかねないのだ。よって、俺は石橋を叩きまくってから渡ることにしている。もしくは、一度石橋叩き割ってから、新しく石橋を作ってから渡る。それがこの世界の生き方だ。

そしてアカデミー調べでわかっているのは、

1. 自分に使い魔がいる状態では『扉（ゲート）』は開けない。
2. 呼んだ使い魔と契約せずにもう一度召喚を行っても呼ばれる使い魔は同じ。
3. 『扉（ゲート）』は呼ばれた側から呼んだ側への一方通行である（無機物も同様）。召喚者側からはいかなるものも『扉（ゲート）』を通れない。
4. 『扉（ゲート）』は音も光も通さない。
5. 呼ばれた側の『扉（ゲート）』から他の生物が入ろうとしても入れない。
6. ルーンが刻まれると使い魔とライン（便宜上俺はこう呼んでる）がつながり感覚共有などができるようになる。
7、主人が死ぬと使い魔のルーンは消える。

アカデミーも始祖ブリミル様の神聖な儀式ｗ　であるこれについてはとことん調べていたみたいだ。初めてアカデミーに感謝した。
ふん、よくやったな雑種。我が褒めてやる、光栄におもえ。

まぁ、俺の儀式は他の人と違う可能性もあったので、お忍びで魅惑の妖精亭にお邪魔した時にいろいろ試してみたが、全く変わりなかった。
契約の方はしていないので、この『扉（ゲート）』を利用した疑似テレポーテーション、もしくはテレビ電話という微チートを期待したが・・・なんかもう諦めの境地に俺はいる。
そりゃあ、６０００年間誰も思いつかないわけないよなぁ。ハルケギニアも中華４０００年より長いのだ。魔法に関しては結構ネタが出尽くしてる・・・。神様やブリミル様は俺に微チートすらも与える気はないらしい・・・。

結論、使い魔はジェシカがなってくれるというまで気長に待つか、使い魔無しでなんとかするしかない。

2．の呪文についてはパッと考えるだけで無理だと判断。

トリステイン：親バカ王様が俺をアンリエッタに会わせてくれないのとヴァリエール家はその王様の下で働いてるので無理。秘宝はそんな軽いものじゃない。アホリエッタだけは例外なんだけどなぁ。会わせてくれよ。

ガリア、アルビオン：他国の貴族に貸せるわけないし、ヴァリエール家が秘密裏に他国の王族貴族と面会なんてもちろん無理。謀反の疑いととられかねない。

ロマリア：火のルビーは手に入るかもしれないが、それ一つでは意味ないので意味なし。

次、3．についてだが、これだけはうまくいった。
うまくいきそうだと聞いたとき俺が「え、嘘！」とか言ったのは悪くない。今までうまくいったことの方が少ないのだ。

ヴァリエール家と仲のいい家にワルド家がある。そう、あのロリマザコンと散々叩かれてしまうジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドのいるあのワルド家だ。
伝説の虚無の証拠がない今、5歳児のお告げなんて信用に値するわけなく、大隆起が起こりますなんて与太話を王家に言うわけにはいかなくなった。王家に戯言を吹き込むとは・・と他の貴族に言われかねない。トリステインは腐った貴族が多いのだ。なんか最近、虚無のない俺の唯一の武器であるヴァリエール家の肩書がデメリットしかない。

そこに現れたのが狂人とか言われてしまってるワルド子爵夫人。アカデミーで仕事をしているときに大隆起の可能性を発見。だが、誰にも理解されないで狂人と呼ばれるようになってしまった人。そんな状況を俺の父上が発見した。さすが父上。
そんな感じで、ワルド子爵夫人に研究費を出したり、そんな父上に感謝し、さらに仲良くなるワルド子爵だったり、いつの間にかルイズとワルドが許嫁になったりした。

・・・ん？　あぁあぁぁぁぁあ！！　俺の愛しの妹がぁぁ、ジャャァァアン！！（ワルド子爵がいるのでこう呼べと言われた）
でもね、実際ジャンすんげーいい奴なのよ。もうマジで。エレオノール姉さんの1個下で学院でハチャメチャやってる姉さんの尻拭い

してるらしい。愚痴もたくさん聞いてるらしい。姉さん友達少ないみたい（泣）。
多分子爵家じゃなかったら、エレオノール姉さんの許嫁になってたねなんて話してたら苦笑いしてた。

「ルイズも6歳児とは思えないが、君と話してるとまるで年上と話しているようだ。僕はルイズの許嫁だし、兄さんと呼んだ方がいいかい？」

これには俺が苦笑いだ。精神年齢は確かに俺の方が高い。ちなみに彼は今、髭なんて生やしてないイケメン１６歳だ。
そんな感じで、大隆起は様子見だ。何もないところから大隆起の可能性を見つけるくらい有能な子爵夫人が研究するんだ。時間の問題だろう。

そして、４．の悲劇回避。
簡潔に言うが、これは諦めた。ワルドみたいな自分の国のヴァリエール家より格下の家の問題なら解決できる。
けど、原作に登場する悲劇たちは総じて身分が高い、何より他国の王族貴族の問題なのだ。先ほども言ったが、そこにヴァリエール家が動くのは不味過ぎる。よって却下。
ダングルテールにしても、国と言う立場から見ると新教徒ってのはよろしくないのだ。
現実は非情である。

そんなわけで俺はワルドくらいしか救えなかった。チートなんてない俺はこれぐらいしかできないのだ。ヴァリエール家なんてものがあってもこんなもんだ。・・・俺一応オリ主なのになぁ。

いや、こんなに救えたと考えよう。
懸命に杖を振ってるルイズにつきっきりで魔法を教えてるジャンを見ながら、そう思った。
この世界にサイトはいないのだ。そう考えるとジャンは本当にいい奴だ。俺結婚式では多分泣くなぁ。

そして、最後の５．の予防策。

まず一つ目が、ジェシカが使い魔了承してくれた時のための予防策。ありとあらゆる『場違いな工芸品』を集め、マジックアイテムを集め、使えそうな動物を集めておく。
契約したとしても何が出るかわからないのだ。予防に予防を、対策に対策を立ててておかないとマジヤバイ。最近、神経質になった気がするｏｒｚ。
個人的にはやっぱりガンダールヴがいい。ヴィンダールヴが一番いらない。うちには保有スキル『ヴィンダールヴ（偽）』を持つカトレア姉さんがいるんだ。絶対来るなよ。

二つ目が、ブリミルと虚無について。
謎が多すぎるのだ。原作のおかげでかなり知ってるが、それでも足りない。
特に第４の使い魔、「記すことさえはばかれる」リーヴスラシルについて。
でも、少年が調べることができることなんて大したことないので、エレオノール姉さんに頼むことになった。これは両親とも相談して決めた。
エレオノール姉さんはあの憎きも有能なアカデミーに就職が決まっているのだ。なので、そのことについて、俺の虚無をばらしながら頼んだ。姉さんは直ぐに了承してくれた。なんでも、アカデミーで

はブリミルについて研究した方が喜ばれるんだとさ、渡りに船とのことだ。

三つ目が、世界の修正力について。
俺の見た目は英雄王ギルガメッシュだ。どこかにいるかもわからない作者的な神様がネタでこの容姿にしたかもしれないが、この世界にも修正力があるかもしれないと思いついた。まぁ、今のところは何もないわけで、もしかしたら俺がいるという世界が完成形でこれ以上イレギュラーが来たときのみ、発動するのかもしれない。
だけど、これは来たら諦めよう。ホントにチートがないのだ。その時はその時だ。

そんなこんながこの3年間俺がやってきたことだ。
そして、とうとう次回から俺は『烈風』に立ち向かう!! 乞うご期待。

ってか長かったな。こんなに長い説明とか長い独白で一話まるまる使う必要なんてあったか？　読者に見捨てられるぜ？

それでもやるとしたら・・・複数の伏線一気張りくらいか・・・

次回、『烈風』吹くとのことです（後書き）

はい、実験作です。
タイトルから全て、ほかの物にはない奇を衒ってみました。

まぁ、この作品自体がそういう特色があります。
それでも見捨てないでください（泣）

いつも読んでくれてありがとうございます。

烈風吹きて、矢の雨降るとのことです（前書き）

はい、テンプレ回ですね。
しかし、作者はテンプレなんて言葉が大嫌いだ！　なので、そげぶ～！！
なんか最近はっちゃけてきた気がします・・ｏｒｚ

烈風吹きて、矢の雨降るとのことです

さて諸君、下手な言葉は無用だ！　俺はやるぜ！！

「エリック、とうとうあなたは８歳になったわけなので、前から言っていた本格的な訓練を始めたいと思います。あなたに合ったものを長い時間をかけて考えました。」

はい母上、覚悟はできています。正直、今までの訓練も普通のよりは苦しかった。

でもこれからは、あの『烈風』カリンが本格的と言うものを始めるのだ。しかも、わざわざ俺に合ったのを長い時間かけて考えたんだって～・・・ｏｒｚ。

「あなたのために～考えました。」のくだりが母上の愛情表現の可能性が高いことが余計涙を誘う・・。俺、今母上の愛に押し潰されそうだぜ（泣）

「まず説明しなければいけませんね。基本的に本格的な戦闘メイジは必ずと言っていいほど、自分の武器と奥の手を持ちます。」

なんでもこの『武器』とは、剣や銃の事を指すわけではないらしい。もちろんそれらを持っている奴もいるが、この場合の『武器』とは戦闘スタイル、もしくは得意魔法の事を指すらしい。なんでも戦闘中に数限りなくある魔法の中で最適なのを選ぶなんて余裕はないとのこと。そのような理由から、いつしか自分に適性の合る魔法を得意魔法とし、その魔法の熟練度を高めるようになったらしい。熟練度はイメージとも直結する。何度も何度もその魔法を使い、その魔法のイメージをより強固に、より柔軟に、そしてその魔法を自分特

有の物にしていく。

「私でさえ、実際の戦闘で使う魔法の種類は１５もありません。たくさんの魔法を覚えるのは戦闘の上では無意味です。」

なるほど、大いに納得できる理由だ。原作でも基本的にそのキャラが使う魔法ってのが決まっていたが、その様な理由だったのか。キュルケの『火球（ファイアーボール）』や『炎球（フレイムボール）』はごく一般的だが、元ガチ戦闘者のコルベールなんかの得意魔法は『炎蛇（フレイムサーペント）』、明らかに彼が熟練度を高めた戦闘用魔法だ。

それに、熟練度なるものがあるのは治療（ヒーラー）魔術師がいる時点で気づくべきだった。失敗失敗。

そう考えるとメイジの二つ名ってのはかなり面白いかもしれない。

得意魔法『稲妻（ライトニング）』と突き特化のレイピアを使う速度重視のジャン。

二つ名『閃光』

圧倒的な風のみで、相手が個人、複数、軍隊、何をしてこようが叩き潰す『烈風』カリン。

本来、中二要素丸出しだが、実力があるやつらは二つ名がかっこよく見える。

名乗るのは本来損にしかならないけど、多分誇りとかなんだろうなぁ。

「しかし、それでも戦闘をするメイジ達が共通して覚えている魔法があります。なんだかわかりますか？」

「・・・・避けるための『飛翔（フライ）』と避けきれない時のための防御魔法ですね。」

「えぇ、その通りです。それに接近戦用の『剣(ブレイド)』もです。攻撃呪文のほとんどは接近戦に向いてません。詠唱もそうですが、なにより巻き添えをくらう可能性があります。しかし、あなたは系統魔法が使えません。なので風系統である『飛翔(フライ)』も系統別に必ずある防御魔法『楯(シールド)』や『壁(ウォール)』も使えません。これはかなりのハンディキャップです。」

ただでさえチート虚無が今封印中なのにハンディキャップがあるとか・・・鬼畜すぎるｏｒｚ。

こうやって母上に説明を受けているのは、俺は戦闘に関しては頭を使うのをやめたからである。骨杖なんて他の作品たちで猛威を振るっているチートを発想できるほど、戦闘のみに関しては頭もチートな母上に任せた方がいいと思ったのだ。

それにこの3年間、前回説明したように考えることとやることが山積みだったのだ。公爵家の跡継ぎでもあるので、その勉強もあり、両親には説明して魔法の練習時間も削ってもらったのである。だって系統魔法とか使えないのわかってるし・・。

「そこでコモンマジックで使える魔法がないか調べてみました。戦闘に向かないコモン・マジックのうち、あなたが習うのは『念力(フォース)』と『剣(ブレイド)』、それに今は誰も使っていない『魔法の矢(マジックアロー)』です。『念力(フォース)』は『飛翔(フライ)』の代わりに、『剣(ブレイド)』の説明はいりませんね。最後の『魔法の矢(マジックアロー)』ですが、これは牽制用、もしくは必要ないのかもしれません。」

「母上、基本的な質問なんですが、なぜコモン・マジックは戦闘に向かないのですか？　『剣(ブレイド)』や『魔法の矢(マジックアロー)』なんて明らかな戦闘用魔法があるのに・・。」

「世間は勘違いしているのかもしれませんが、系統魔法とコモン・マジックでは、実はコモン・マジックの方が魔力消費量が多いのです。とある古い文献では、『系統魔法は個人の力で『理』を変化させ、先住魔法は『理』に沿う』と書かれていました。つまり、系統魔法は自らの魔力で精霊に命令して精霊の力を借りているのです。それに比べコモン・マジックは、自らの魔力のみで魔法を行使します。よって、コモン・マジックは魔力消費量は多いですが、系統魔法より簡単に習得できるのです。」

なんだかファンタジーのはずなのに凄い理屈的だなぁ。どうせ、これもアカデミー調べに違いない。

「習うより慣れろと言います。まず本来、小物を動かす『念力（フォース）』です。それを自分にかけて浮きなさい。」

『念力（フォース）』は紙やペン、タンスの中にある服などの小物を動かす魔法だ。重いものになると『浮遊（レビテーション）』で浮かせて動かした方が効率いいし、自分を浮かせるのも風系統魔法の『飛翔（フライ）』を使った方が圧倒的に効率がいい。

「『念力（フォース）』！」

反応がないまるでしk

「まず最初は無理でしょう。最初からいきなり人体などという重いものを浮かせるとは思いません。それにあなたの杖は指輪ですから、他の人より難しいでしょう。」

おい！なぜやらせた！！　できないと思ってたならなんでやらせたんだこの野郎！！　それに指輪の話は今初めて聞いたぞ！！

と心の中では散々に突っ込んだが、これはまた母上の悪趣味なジョークの可能性もあるので、顔には出さずに指輪杖の説明を聞いた。簡単に言うと魔法は理論的にはどこからでも発生できるんだそうだ。ただ杖が好まれるのは、杖の先から魔法が発生するというイメージが非常にしやすいから。俺みたいな指輪は、しかも俺は宝石がついてるようなのは嫌いで、彫り物がされてある質素な銀指輪にしたためどこから発生するかのイメージがわきにくいらしい。説明してる間に母上は俺に杖を向け、呪文（ルーン）を唱えた。

「『風槌（エアハンマー）』」

ドゴン！という音とともに、母上の後ろ2メイルのところに深さ1メイルほどの大穴ができてた。

「普通のメイジにはできませんが、こういうことです。私でも、杖の向けてる先とは違う方向に魔法を発生させると威力が落ちます。」

いやいやいや母上、たかが風、いわゆる空気の塊で地面を圧し潰して深さ1メイルも圧縮してるんですよ！　これで威力落ちてるとか・・・母なる大地は、母上の風に負けるんですね。常識的に風系統って土系統みたいな物理系に対して相性悪いんじゃなかったっけ？

「私の『烈風』に常識など関係ありません。」

うわぁ・・、俺みたいな人が聞いたら普通にネタに走るなよｗｗってなるのに、この人、素で言ってるよ。しかも、様になってる・・なんか悔しい。

それにしても、杖だったら簡単だったのか・・・。

ふふふ・・・・俺の3年間の魔法特訓は何何じゃーー！！！　おかしいと思ったんだよ、自分の系統が虚無ってわかってるのになかなか思うようにコモン・マジックができない。3年の集大成で、『発光（ライト）』、『施錠（ロック）』、『開錠（アンロック）』はできるようになったけど、その3つしかできないんだよ。『探知（ディテクトマジック）』はまだ五分五分だ。くっそ～～。

俺のオーラにさすがに気づいたのか、母上は説明してくれた。なんでも、俺が「実戦とはいつ起こるか～」なんて言ったのに母上は痛く感動したらしく、最初は苦労するであろうが、できるようになれば３６０度全方向にいつでも魔法を放てる指輪という媒体にしてくれたらしい。これができれば、どんな奇襲がこようが返り討ちにできます！　って豪語されたｏｒｚ。

なら、大変だよ～っていう心構えをさせてくださいよ！！　って言ったら、ルイズも伸び悩んでいるのに俺だけ伸びない理由が明確になってるのはルイズがかわいそうだとのこと。男なのだから～とか兄なんですから～とか言われた。

いつの間にか、俺は自分の知らぬ間に魔改造計画されてたらしい・・・。

「さて、説明が長くなってしまいましたが、次は『剣（ブレイド）』です。杖だと簡単なのですが、あなたは指輪です。しっかりイメージしてやりなさい。」

さて・・どうやろう？　簡潔に言うと、『剣（ブレイド）』は魔力というエネルギーを剣のような形にするだけなのだ。

俺の場合は、右手に指輪をはめてるから・・・肘から先の右腕を軸にして剣を纏わせるか？　　厨二くさっ！！

だがしかし！！　ここまで来たからには、貫いてやるよ中二魂！！

Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ（体は剣で出来ている）

「『剣（ブレイド）』！！」

「・・・これは・・、なるほど、右腕に纏わせたのですか・・。相手と格闘戦をするときには相手の意表をつけますし、片手は打撃、片手は斬撃とは・・かなり厄介ですね。それにあなたを守る盾としても使えるというのが素晴らしい。」

できたぁぁぁぁぁぁぁ！！　初めて・・初めて一発成功した！！やっぱりあれか、指輪の事を知ったのもそうだけど、呪文が大事だったんですよね赤兄貴！！
体は、剣でできていましたよ！！

ひとしきり俺は感動の波にもまれたあと、最後のコモン・マジックを習得することにする。
これも、なんとか一発で成功させたい。

「最後に『魔法の矢（マジックアロー）』です。これは、今は使われなくなってしまったコモン・マジックです。見つけるのに相当苦労しました。」

「本当にありがとうございます。さすが母上です。（ニコ）」

まだ『烈風』カリンの扱い方に慣れてない方に説明してあげよう！
うちの母上はあの「烈風の騎士姫」に載ってるとおり、そしてルイズというツンデレの母であるのだ。
何が言いたいかというと、　　初心で恥ずかしがり屋なのだ！！
この「見つけるのに～苦労しました。」等のセリフを意訳すると、
「私は頑張りました。褒めてください。お礼を言ってください。」
になるのだ。

スマイル一つもつけてあげよう。何しろ俺の見た目は、ギルガメッシュなのだ。
そこで、金ぴかの鎧やライダースーツのギル様を想像した君は、マイナス5点だ。
俺の今の見た目は子ギルだぁぁああ！！

こころなしか、少し優しい顔になった母上が説明を続ける。

「なぜ、この魔法が使われなくなったのか・・・。消費力が多すぎるからです。何しろ『剣（ブレイド）』とちがい、発生させ、それを飛ばす。命中してもしなくてもその使った魔力は消えます。一発一発に『剣（ブレイド）』と同じだけの魔力を使いながらも、です。唯一のメリットは、詠唱がどの攻撃魔法より短いこと、一度に数本同時に発生させることができることですが、どこまでいっても魔力消費量の問題が付きまとう欠陥魔法です。」

・・・

「それに、あなたには自分の魔力を込めるだけで発動する、失敗魔法の爆発というどんな魔法よりも早い、そこそこの威力のピンポイント攻撃があります。私はこの『魔法の矢（マジックアロー）』を牽制用にし、自分の狙う位置に相手を誘導し、爆発する。これがあなたの戦い方になると思っています。」

・・・

・・・・・魔力そのものを矢にして飛ばす、魔法消費量がバカ高い欠陥魔法。

俺はまだ呪文がないけど『虚無』だ。そこらへんのスクエアとは文字通り桁違いの魔力を持っている

・・・・・魔法は理論上、どこからでも発生させることができる。特に俺の指輪杖はそれに特化してる。イメージを明確にしなければいけないが３６０度どこからでも発生させることができる。

・・・・・この魔法のメリットは、コモン特有の詠唱の短さと複数本同時発生。

・・・・・戦闘に使う魔法は熟練度を上げる必要がある。熟練度とはイメージと直結する。

そして俺は・・とある理由から・・・・生まれた時からそんなイメージを毎日抱いていた！！！

俺の頭が回転してる。今までの俺のたどった、たった８年だが、なかなかに辛い８年。

オリ主として生まれてから、様々な実験を行い、失敗してきた。よく考えたらこの世界も現実なのだからそんなにうまくいかないのは当たり前なのだ。

しかし、今回の仮説は、失敗する理由が見当たらない。希望的観測もオリ主的なご都合主義もないこの世界の上でまっとうにできそうな新たな可能性だ。

今まで呪文がなかったため使えなかった膨大な魔力、３６０度魔法行使ができるための指輪杖、そして生まれた日から憧れていた明確なイメージ。

高速回転する頭がパズルのピースをあてはめ、一枚の絵にしていく。

母上が何か言っているが、俺はそれを聞き流し、訓練場の誰もいない方へ向く

そして、飽くなき理想、最果ての妄想、常に見続けてきた夢の確固たるイメージを思い描きながら呪文（ルーン）を唱えた

「『魔法の矢（マジックアロー）』」

百にとどこうとする数の魔力で作られた矢が俺の後方にたたずんでいる

一本一本が今か今かと俺の発射の合図を待っている

俺の前方にいるであろう仮想の敵を蹂躙しようとしている

俺は合図を送ろうとし、この魔法に『魔法の矢（マジックアロー）』なんてちゃっちな名前は似合わないと思いなおす

そして、夢にまで見た台詞を合図として言うことに決める

『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』

百近い、魔力で作られた矢が訓練場に突き刺さる

母上が見せてくれた『烈刃旋風（カッタートルネード）』よりは弱いが、

これは紛れもなく俺の力なのだ！

やっと・・・やっと辿り着いた！

数多の可能性に手を出し、様々な挫折をした。

だが・・・とうとう・・とうとう俺だけの・・俺だけの可能性を手に入れた！！！

手に入れた！！！

手に入れたんだ！！！！

・・・手に入れたはずなのに・・・

・・・手に入れたはずなのに・・・

・・・なぜ俺の頭は回転をやめない？・・・

・・・・・それに、あなたには自分の魔力を込めるだけで発動する失敗魔法という爆発があります

そうか・・そうだ・・・この手に入れた可能性にはまだ先がある！！

俺は急いで地面に刺さってる幾多の魔力の矢に目を向ける

そろそろ、魔力が霧散して消えようとしている

・・・これも『爆発（エクスプロージョン）』なんて無粋な名前はやめにしよう

そして、魔法の名前を唱える

『壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）』

これが、俺の8歳になりたての忘れられない日の物語

俺は、これから起こる戦いを共にする『武器』を手に入れた

烈風吹きて、矢の雨降るとのことです（後書き）

『系統魔法は個人の力で『理』を変化させ、先住魔法は『理』に沿う』、デルフの言葉です。

コモン・マジックや系統魔法は全てｗｉｋｉに載ってる魔法です。
捏造設定は１個もないはずです。

チートっぽく見えますが、実際にはそんなにチートじゃないです。
本物たちと戦うと速攻で負けます。
この武器と頭を利用して、策で勝つ！　それがエリックです。

自分はエリック不幸小説を書きたいわけではありません。
今までが今までだっただけです。

何の理由もないチート、大した理由もなく惚れてくるヒロイン、ご都合主義
そういうのを排除したら、今までが不幸っぽくなっただけです。
実際は、すべてものに理由があるので不幸でもなんでもありません。
その世界では当たり前なのです。

長々と書いてしまいましたが、エリックはこれからも頭を振り絞って頑張って生き抜いていきます。

読んでいただきありがとうございました。

死にたいとのことです（前書き）

カリーヌさんとの魔法特訓のあとの話です。

死にたいとのことです

恥ずかしながら、あの後大泣きした。

いつのまにか色々たまってたらしい。

何をやってもうまくいかない。系統魔法だったらいろいろできたかもしれないけど、あいにく俺はエセチート虚無。しかも、呪文なし。

大泣きしていた時に母上に抱きしめられた。暖かかった。

しかし、今思い出すと、あの女の人特有の柔らかみ？　ってやつがなかった。どっちかていうと・・、いやフォローはしない、完璧に絶壁だったさ！！

こう、なんていうの。俺の頬とかが母上のあばら骨グリグリ？

ふぅ、ちょっと無理してテンション上げたわ。

「よかったですね、エリック。えぇ、本当によかった。」

母上は、俺を抱きしめながら6年ぶりぐらいになるデレデレ状態で俺に言った。

俺、この人が母上でよかったわぁ。

「それにしても、あなたにこんな才能があるとは。実は、何度も指輪の杖にしたのは間違いだったのではないかと思っていたのです。

えぇ、本当によかった。」

母上はデレデレ状態のせいか、絶対に言わないような本音を暴露してる。やっぱり指輪杖と言っても3年間でコモン・マジック3つしかできないってのは才能ないのかな？　今の状態の母上なら応えてくれるだろうと思い、聞いてみた。

「・・気づいてましたか。やはり、あなたたち双子はとても頭がいいですね。ですが、残念なことに二人とも魔法の才能はないと思っていました。そう、思っていました・・過去形です。魔力に関しては虚無で説明できるとしても、あの数の矢を制作し発射、最後の爆発までの制御。まさか、こんなことをするイメージを持っていると思えないので、あなたは『矢』、もしくはそれに近い何かに特化している才能を持っているのでしょう。」

ごめんなさい母上。思いっきりイメージ持ってます。
それにしても、今面白いこと聞いたな。

「母上、『矢』に特化してる才能とはどういうことですか？」

「系統魔法にも様々なものがあります。私の『風』のように一系統特化のメイジなどもいれば、あなたの知っている人ではワルド子爵の嫡男などは風と水の混合、『雷』に特化してるようです。」

なんかジャンがどんどんかっこよくなっていく・・。そう考えるとタバサは『氷』特化だったりするのかな？
コルベールが『蛇』とかありえるかも。だって、あの人がたくさんある火系統魔法からわざわざあんな魔法選ぶか？　効率的って意味ではありえるか・・。

「二人とも私の子供ですから、何かに特化してる可能性を失念していました。エレオノールとカトレアが普通のメイジと同じように成長してくれたので、いつのまにかその可能性を排除していたようです。」

「ルイズは、今どんな感じですか？」

ルイズとは一緒に魔法の練習はしていない。あいつは系統魔法で、俺はコモン・マジックを練習するのだ、一緒にやらなくてもいいだろうということになった。それに加えて、俺はこの3年間忙しかったし、ルイズも淑女の嗜みなどなど色々学ぶことがあったのだ。彼女があんまりうまくいってないという噂は聞いていたが、俺も1年でコモン・マジック1つしかできないと言ったら、私も頑張るわ、って言われた。さすが勝気ツンデレヒロイン、全くへこたれない。

ジャンもそこがいいって言ってた。・・なんかムカついてきたな。今度あいつに会ったら、「僕、新しいコモン・マジックできるようになったんだよ！　見て！」とか言って『魔法の矢（マジックアロー）』ぶっ放そう。ふふふ、魔法が使えると夢が広がるなぁ！！

「・・・彼女は未だに何も魔法が使えません。他の同年代の貴族の子供たちは、この時期から杖の契約を始めますので、比べる相手がいないのですが3年もやって反応がないところを見るとあなたと同じように何かめったにない物に特化してるかもしれません。」

俺のは本当は違うんだけどなぁ・・、アハハハ。

「折角ですので、あなたの意見も聞きましょう。実は、ルイズの魔力は系統魔法に全く反応しないのです。試しにコモン・マジックを

やらせてみると失敗はしますが、確かに魔力の動きの様なものを感じ取れるのですが、系統魔法にはそれがないのです。」

母上は何となく魔力を感じれるらしい。あれだね、ｆａｔｅ風に言うと直感Ａってやつだ。さすが戦闘と魔法に関してのチートだけある。顕著な例は、俺の一工程（ワンアクション）でできる失敗魔法を「何となく魔力が・・」とか言いながら避ける。これ、勝てる奴いんの？

実は、母上の話を聞いて一つ思い浮かんだことがある。

錬鉄の英雄『エミヤ』

俺のが『矢』特化かもしれないと聞いたときから、少し思いついた。俺の頭は、前回からの熱が収まらないらしく、今もグィングィン高速回転中だ。

彼は、投影魔術しか使えない魔術使いだった。属性は『剣』。

もしかしたらルイズもそんな感じで、コモン・マジックの中にある、ある魔法にだけ特化した存在じゃないのか？

そんな事を母上に聞いてみた。

そしたら一蹴されたｏｒｚ。俺みたいな例外は除き、人間必ず４系統の上に特化があるんだと。

『剣』特化もいるらしい。原作でも登場したちょい役で出たゲルマニアのシュペー卿。彼は『剣』特化の土・火系統のメイジ、二つ名は『錬鉄』。

俺のぉ、俺の赤兄貴がぁぁああ！！

そんなどことも知れないやつに錬鉄の二つ名がいるなんてぇｏｒｚ。

だけど、そうするとルイズの魔法は確かに変だ。ここの魔法はファ

ンタジーだがそれなりに理論だっているのだ。
まだ熱を持ってる俺の頭をさらに回転させる・・

・・・彼女の本来の属性を俺がもらってしまった世界のバグか？
いや、それはない。この世界はご都合主義がない代わりに、すべての物にしっかりとした理由がある。

・・・ならば、ルイズはプリミルのように新しい魔法形態の始祖か？
可能性は否定できないが、一番低い確率の物だろう。こんなところで新たなる第６系統目出現ってのは・・・後回しだな。

・・・彼女はメイジではなく、魔術師である。

実は、意外と否定しづらい・・。この世界、俺の容姿や〇〇特化など変なところでちょい役でｆａｔｅが混ざってる。９割５分ゼロ魔だが５分くらいｆａｔｅがある気がする。
だけど、コモン・マジックは反応することを考えると彼女はゼロ魔だ。それに魔術を与えるとしたら俺が先だろう！！という俺の心の叫びもある。

・・・ならばやっぱりコモン特化か？

それもないと思う。俺の失敗魔法でさえ、２件もアカデミーにヒットしたのだ。６０００年は伊達じゃないってのはすでに何度も実感してる。

・・・なら彼女の魔法は何だ？

結果、わけわかんねぇ。もう一度母上に詳しく聞こう。一度頭をクリアにする。

「母上、コモンは反応するんですよね？」

「えぇ、先ほども言いましたがコモン・マジックは反応します。ですが、どちらにしろ何も結果は出ません。」

こういう時はシンプルに考えよう。ｆａｔｅとか第６系統とか考えたらきりがない。
そうなるとピースとなるのは・・・２つ、いや３つかな・・・

どちらも結果は出ないのに、反応するコモンと反応しない系統魔法。
それにルイズの系統を奪い、彼女の系統をわからなくしてしまった俺・・・この３つだ。

・・・

だが・これが一番しっくりかつすべての事に理由がつく・・・

マジかよ・・こんなの・・信じたくない・・死んでも信じたくない・・

・・いや・・死にたい・・だな・・

・・・・死にたい・・・・死にたい・・・・死にたい・・・

「・・はははうえ・ちちうえのしつむしつにいきます・・・ついてきてください・・・」

気づいたら、執務室だった。母上が連れてきてくれたのだろう。

「落ち着いたか？」

父上が俺に問いかける。いつも通り、秘密の会談をする時の両親２人と俺の３人のメンツが今ここにいる。

「はい・・おかげで落ち着きました。」

多分、執務室に着いてから俺が落ち着くまで待ってくれたのだろう・・助かる。

「では、お前が何に気づいたか教えてもらおう。」

父上と母上が俺の言葉を待っている。

心の中で俺は２人・・いや３人に謝った。口に出して言ったら、冗談抜きで叩きのめされる言葉で謝った。

生まれてきてごめんなさい

「・・・はい、　単刀直入に言います。

ルイズの系統ですが、彼女の系統は私と同じ『虚無』。

それも、私が死んだときに新たなる担い手として覚醒し、

私の虚無を引き継ぐ予備（スペア）です。

」

ルイズ・・・　ごめんね・・・

死にたいとのことです（後書き）

書く当初から決まっていた内容です。
この展開を読んでたひとがいたら、少し泣きます。（苦笑）

読んでくれてありがとうございます。

双月見酒をするとのことです

「それは・・どういうことですか・・？」

母上の問いに、俺はそう考えた理由、虚無の引き継ぎの特性を教えた。

・・・ということで、ルイズの系統は虚無だと思われます。私が死んだときに、私の代わｒ・・ガハッ！！」

突然、何かに吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた。これは・・・『風』か！

「エリック・・・面白くない冗談ですよ。えぇ、私の冗談より性質が悪いです。」

自覚あったんかい・・、って今はそれどころじゃない。

「母上、私がこんな冗談を言「冗談だといいなさい！！！」・ガッ！！」

また壁に叩きつけられた。

「・・・母上・・、信じたくないのは分かりますが・・これが一番しっくりくるんだよ！！　お前だってわかってんだろ！！」

チッ、また杖を振りかぶりやがｔｔ

『地鎖（アースチェーン）』

「そこまでだ！　二人とも頭を冷やせ。そしてエリック、言葉が汚くなってるぞ。」

「ですがお父様！　私の娘が・・わたしの・・・う・う・・いや・・どうして・・どうして私の娘だけ・・」

そう言いながら母上は崩れ落ちた。

「・・・エリック。」

「わかってます・・あとは任せました父上。」

俺は執務室を退室した。

俺は今どんな顔をしているのだろう。こんな時も冷静に考えられるようになった頭が誇らしくも憎らしい。

「トニー、誰にも会わずに私の部屋に行ける道を教えてくれ。そのあと、少し一人にしてくれ。」

とりあえず、今は誰にも会いたくない。教えてもらった道をたどりながら自分の部屋へと向かう。

「兄様！！その顔どうしたの！！？」

「大丈夫エリック？　何か悪い夢でも見たの？」

・・・おい、トニー。お前がミスるとは思えんから・・・テメェ狙

っただろ？
つらつらとトニーへの悪態を頭の中でつきながらも、目の前にいる姉妹2人にどう言い訳しようか考える。

「それとも、私みたいに身体のどこかでも悪いのかしら？」
「えぇ！？　そうなの兄様？　ちょ、ちょっと待ってて・・・上手くいくか分からないけど・・『治療（ヒール）』！　もう一回・・『治療（ヒール）』！！」

懸命に杖を振ってるルイズを見て、思いっきり彼女を抱きしめた。

「・・兄様？　あ、あの少し苦しい・・・。」

彼女を幸せにできると思ってた。『ゼロ』は俺が背負って、少し無茶をする事になるであろう俺を心配してくれたりする・・そんな彼女を想像していた。
この世界に生まれてよかったのかと考え、彼女の笑顔に救われてた。この笑顔だけは俺が成したものなのだと。

「泣いているのね・・、何があったかは分からないけれど、そして月並みな言葉だけれど、あなたは一人じゃないわエリック。」
ルイズを抱きしめてた俺は、いつの間にか姉さんに抱きしめられて

いた。

「私ね・・毎日あなた達に救われてるのよ。うまくいかない魔法を頑張ってるあなた達を見て、私も今日一日頑張ろうって、病気なんかに負けないわって。」

「うん・・・」

「いつも難しい顔しながらうんうん考えて、なんとかしようとしてるあなたが好きよ。でもね、たまには私たち家族を頼ってみるのもいいんじゃないかしら？」

「そうよ兄様。私達は双子なんだもん、いつでも頼りなさい！」

「・・・頼りなさい・・か。」

あの後部屋に戻った俺は、少し寝た後、憎きトニーに最高級のワインを持って来いと頼み、テラスで月見酒をしている。

少し泣き癖がついてるかもしれない。

2人に出会って、泣いて、少しはすっきりしたが、それでもなんとなく飲みたくなった。

精神年齢はいい年した大人なのだ。それに、この世界でワインは子供でも飲む。

「邪魔するぞ。」

「父上ですか。母上の方はもう大丈夫何ですか？」

「あぁ、もう落ち着いたようだ。今は眠っている。」

母上を抑えるとは・・力技では不可能だから、不意打ちでキスとか か？

・・・いや考えるのは無粋だ、やめよう。愛の力wってことにしておこう。

「・・ふむ、思ったより大丈夫そうだな。なにかあったか？」

「えぇ、部屋に戻る途中にルイズとカトレア姉さんに会いまして。」

「なるほど、カトレアは人を慰めるのが上手いからな。」

貰うぞ、と一言言われ、机の上にあったワインを自分のグラスに注ぐ父上。

この人は本当に強い。俺や母上と同じくらい堪えてるはずなのに全く表には出さない。流石だ。

「カトレアとルイズ、エレオノールとエリック、この2つのグループの違いが判るか？」

「・・・頭で考えるか感情で捉えるか。・・・いえ、違いますね、この場合は髪の色の違いですか？」

「そうだ。そのせいでカリーヌの奴は、自分の血のせいだと言っておる。」

「・・・・・」

「だが、そんなわけあるまい。お前の話だと虚無とは王族の血を受け継ぐ人間に現れる。つまり私の血だ。ヴァリエール公爵というトリステインではできないことがないと言われてる地位にいるが・・・娘の1人や2人も救えないのだ。」

酔いが回ってきたか。空になった父上のグラスにワインを注ぐ。

「・・・少し話を変えよう。貴族の子供が生まれるとき、双子とはあまり好まれない。何故だかわかるか？」

「相続争いですね。ですが、私とルイズは性別が違うので関係ないと思うのですが。」

「確かにそうだ。だがな双子とはほとんど同性なのだ、そして生まれるまで性別がわからんときてる。そのため、忌み嫌われるのだ。お前たちが生まれた時は、それはもう大変だった。待望の男が、次期ヴァリエール公爵が生まれたかと思えば、もう一人まだ腹の中にいるのだ。乳母たちは真っ青だったぞ？」

考えたことなかったが、想像してみると凄い状況だな。

父上は酔いがさらに回ってきたのか、普段では見れないほど饒舌に

喋っている。

「乳母達はおそるおそる取り出したもう一人の赤ん坊が女だと知ると安心して喜んでな、一人腰を抜かしてしまったやつもいた。だが、私は腹の中にもう一人いると聞いた時からとても嬉しかったのだ。一度に二人も子供を授かるとは！愛する家族が二人も増えるとは！カリーヌよくやったぞ！！・・とな。それに髪の色も二人とも違うときた。生まれる前日に、次に生まれる子供の髪の色について家族で喧嘩したのは・・今はいい思い出だ。」

俺が腹の中にいる時、そんなことしてたんかい。
それにしても今日は父上の親バカ発動も見れるとは・・・。

「相続争いなど生まれるときに考えることではない。生まれるときは、ただの自分の子なのだ。それを他の貴族どもは、次期公爵が生まれて喜ばしいことですなどと・・・。エリック、本来双子とは喜ばれるべきものなのだ。想像してみよ、私達がこのように2つの月を見ながら酒を飲んでいるが、もしその月がたった一つだったのなら、なんと風情のないことか！」

・・・父上・・、すんごくいい話なんだが、俺はその月が一つしかない世界出身者です。
それに、これを読んでる人たちにもすごい勢いでケンカ売ってます（泣）

「だからな、エリック・・・・・・・・・自ら死のうなどと二度と思うな。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「お前がそのようなことを考えてるとは、何となくだが察しがついた。しかし、お前がいないヴァリエール家など月が一つどころか、月がない夜空よりも風情がない。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「言いたかったことは、それだけだ。後は自分で考えなさい。・・・・ふっ、お前の事だ、心配はいらんだろうがな。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「ではな、エリック。よい夢を。」

そう言い残して、父上は去って行った。

参った、完璧にばれてたわ。

ってか、ちくしょー。めっちゃかっけぇ。
なんなんだよあの父上クオリティー。はぁ、あんな風になりたいものだ。

とりあえず、何とかするしかないか。
『武器』の件があるように、なんとかすべてうまくいく作戦を考えるしかないか。
俺には頭を使うしか方法がないのだ。

ルイズが笑い、カトレア姉さんが治り、エレオノール姉さんが結婚し、両親がそれを見守る。

そんな暖かな未来。・・でも、エレオノール姉さんは無理かも（苦笑）

俺は次期ヴァリエール公爵だ。英雄王みたくこの世の全てを背負うことはできないが、家族くらいは、少し欲を出してヴァリエール領くらいは背負いたい。

『武器』も手に入れた。　　『信念』も持った。

この日から、俺の戦いは始まった。

そんな忘れられない物語

双月見酒をするとのことです（後書き）

実は2話前から、同じ一日なんですよね。

エリックにとっては、『武器』を手に入れ、自分の存在に絶望し、『信念』を持った忘れられない日です。

英雄王と父上は全然タイプが違いますが、2人ともエリックにとって憧れです。

読んでくれてありがとうございました。

これからの事を考えるとのことです　Ｐａｒｔ２

ルイズの使い魔はどうなるんだろう？

波乱に満ちた日の夜が明け、俺は父上に呼び出しを受けたので、執務室に向かいながら考えていた。

それにしても、ここでサイト君フラグが再発とは・・・現実は非情である。原作の彼を思い出してみたが、あれをルイズとくっつけるわけにはいかん。ふらふらしすぎだろ！と言いたい。今のルイズにはジャンがいる。あいつは本当にいい奴なのだ。

あれ？・・・ひょっとして裏切りフラグも再発か？　いや、それはない。ジャンの裏切りはワルド子爵夫人が影響してる。この世界では無いと思う。いや、だけどなあいつ英雄願望あるからなぁ。原作でも腕試しとか言ってはいるけど、伝説の使い魔『神の楯（ガンダールヴ）』と戦ってるし、「ルイズのためにぃ！！」とか言いながら切りかかってくる可能性はあるかも知れない。ままならないものだ。

まず、それより召喚されるか？

・・・５分５分だな。ルイズの魔力はコモン・マジックには反応してるらしいから、本当によめない。原作でも４の４とか言いながら、ルーンの重複がいたし、ガンダールヴが２人いてもおかしくない。それ以前に、ジェシカがガンダールヴかもまだわかってないし、仮にガンダールヴだとしたら、ルイズの２年の召喚儀式の時に残るルーンはリーヴスラシルだけだ。

考えられる可能性がありすぎる・・・。しかたがない、考えられる可能性全てに予防策を張る、これが基本方針だ。行き当たりばった

りでうまくいくなんてことは経験上あり得ない。

「入ります。」

扉をノックして、執務室に入る。

「うむ、昨日の今日で済まないが、早急に相談したいことがある。実は、前々から決まっていたことについて意見が聞きたい。」

「前々から決まっていたことについて早急に聞きたいということは、昨日のことが関係しているのですね。」

「そうだ。知っていると思うが、カトレアはトリステイン魔法学院には行かないことになった。あの身体では魔法を使うことには無理があるだろうという判断だ。」

「賢明な判断だと思います。」

「ああ、そこでだ。ヴァリエール領の一部をカトレア一代限りに与えようと昔から考えていたのだ。与える地域は・・地図で指し示すと、このあたりだ。新たな領の名前はラ・フォンティーヌ領と言う。」

「ヴァリエール領の中でも一番自然が綺麗なところですね。療養するにはいい所だと思います。」

「そこにお前も行ってもらおうと思っている。姓をヴァリエールからフォンティーヌに改め、フォンティーヌ子爵家当主になれ。」

・・・はい？　さっぱり意味が分からない。途中までは解読できた。フォンティーヌと聞いた時も、あぁ、カトレア姉さんの話かぁと思ったが・・俺？なんで？

「説明するからその呆けた顔を直せ。まず、お前は知らないだろうがお前の許嫁になろうとする者たちの手紙の数が最近急激に増えたのだ。おそらくお前が８歳になったからだろう。だがお前を公爵家から離す一番の理由はお前が虚無だからだ。公爵家の嫡男の魔法系統を他の家は知りたがるだろう、主に取り入るためにな。そこで、とりあえずお前を勘当に近い処分としてヴァリエール公爵家の後は継げない事にする。もちろん一時的にだ。」

「父上、流石に何の理由もなしにそれは無理があると思うのですが・・。」

「表向きの理由としては、４年に一度行われるラグドリアン湖での園遊会で、お前が魔法を使えないことを他の貴族王族たちに広まってしまったからということにする。元々お前はそれを餌に現ガリア王の長子であり、虚無系統の可能性が高いジョゼフに近づくと言っていたな。それを利用して、ヴァリエール家当主が魔法を使えないなどと言語道断である！　などと言うことにし、お前をフォンティーヌに隔離する。」

ぬ。いつの間にか俺の計画まで利用されてる。虚無は４人集まる必要性があるのだぁ！　と言ってジョゼフに近づく許可を貰ったからな。裏で他国の王族に会うのは無理だから、半年後のラグドリアン湖の園遊会がラストチャンスだ。次の時は既に狂い済みジョゼフになってる可能性がある。
それに、ヴァリエール家に損のある行動はできない。だからジョゼ

フについては許可を取った。だけどウェールズと仲良くなるのは却下だ。すでにモード大公家の嫌な噂が流れてる。ウェールズに内戦が起きた時頼られても困る。トリステインに援軍を頼まなかったことから無いとは思う。だけど万が一もあるし、単純に俺が会いたくないのだ。仲良くなった人が死ぬのはちょっとな・・。
もともとアルビオンは寒い、海がない、土が限界まで痩せてきてる、いつか落ちるなど、いつかは滅びる運命だと俺は勝手に思ってる。
閑話休題。

「それでも無理だと思います。現ガリア王の長子であられるジョゼフ様も魔法が使えないと言うことになってます。トリステインがガリアにケンカ売ってると取られかねません。」

「それは問題ない。他国はトリステイン貴族は無駄にプライドが高いと思っている。それにガリアもそれくらいで取っても得にならないトリステインなど取らないだろう。」

うわぁ、凄い自虐だな。たしかに間違ってないのが何とも言えない。

「他の案もあるが、聞くか？」

「えぇ、避けられるなら避けるべきだと思いますし。」

「お前が園遊会で他の王族貴族の子達と魔法比べをし、失敗魔法を爆発させればよいのだ。」
「ぶっ！！」
「汚いぞ、エリック。」
おい父上、顔がにやついてやがるぞ。

まぁ、父上が上手くやると言ってるんだ、上手くやるのだろう。
「そして私に相談とはルイズの事ですね。彼女も虚無だとわかったから・・・」
「その通りだ。それについてお前の意見が聞きたい。ルイズはお前ほど重要な立場にいるわけでもない、婚約者もいる、どうするべきだと考える？」

そのあと、色々考えて俺はルイズはヴァリエール家に残るべきだと言った。
正直これからのルイズは原作より厳しいかもしれない。俺が魔法ができないのを理由にフォンティーヌ家に行くのに、彼女まで行ったら、親から魔法ができないと言われてると勘違いしてしまう。それに原作初期のルイズはヴァリエール家ってのが心の拠り所と言って

もいい。
最後の理由としてジャンのことだろう。彼が父上たちに会わずに俺たちだけに会いに来るのは体裁が悪い。ならば、ルイズは父上達とともいいるべきだ。

「やはりお前もそう思うか。」

「はい、彼女は残るべきです。」

「ならば、そうしよう。・・・エリック、ラグドリアンが勝負だ。うまくやれ。・・・話は以上だ。」

父上はジョゼフがどれだけ凄い奴かは知らないはずだから、俺の気迫からでも読み取ったか。
ジョゼフを味方につけるかつけないかは大きい。あいつは恐ろしいほどの頭脳チートだ。なんとか味方。最悪、敵にさえならなければいい。
だけど、この身は8歳児。作戦考えなくちゃなぁ。

「ええ、必ず勝ってみせます。」

そう言い残して、俺は執務室を出た。

これからの事を考えるとのことです　Ｐａｒｔ２（後書き）

ちょっと無理やりかなと書いてて思いました。
でも、ヴァリエールの長子が魔法使えなかったら色々ありそうなので、避難することになりました。原作では、病気だからと言う理由で新しい家をわざわざ興す父上です。これくらいは何とかするでしょう。

はい、わかってます。自分の力不足のいいわけです。

読んでくれてありがとうございます。

ラグドリアン湖で園遊会とのことです　Ｐａｒｔ１

半年が経ちました、ラグドリアン湖です。

あれから母上は2日で復帰し、予定通り訓練をすることになった。父上の尽力もあったのだろうが、やはりこの人も強い人だ。・・・ええ強い人です・・・だからその強さを他者にまで求める癖は少し自重してください。

「エリック、あなたはルイズの分まで強くならなければいけません。」とか言いながら、あなたが本格的な訓練と思ってるものを2倍やらせないでください。

「楯のないあなたに一番厄介な攻撃は見えない風です。私のように風を感じなさい。」とか、避けたと思ったら「杖の先から魔法が飛んでくるなど誰が言いましたか！？」とか言わないでください。ってか杖の先以外からできるのって母上でも難しいって自分で言ってましたよね！！

そのあとは、テンプレ通りに「ぎゃあぁあ」とか「ブルァアア」とか「ぐぅえっへっへ」とかやってたので省略する。

・・・ごめん、「ぐぅえっへっへ」は無かったわ。

そんな風にヴァリエール家で平和に母上からの愛の鞭を半年受け（

この場合、本当に愛がこもってるから性質が悪すぎる）、ラグドリアン湖の園遊会です。前々から何か仕込むなどはもちろんできない。トリステインの公爵家が園遊会に秘密裏に何か企んでるとかジョークにも聞きたくない。
結局、父上がジョゼフに挨拶するときに一緒についていくか、魔法が苦手なイザベラと俺も魔法全然できねぇテへ、っていう使い古された『お友達作戦』しか策がない。行き当たりばったりだなぁ。

そんでもって、俺が魔法全然できないことを広める必要もあるので『お友達作戦』の方が効率がいい。『父上と一緒作戦』は、他の貴族の注目が集まる可能性もあるので虚無なんて言葉は使いたくない。最終案だ。
それに個人的に『父上と一緒』って響きは計画が失敗する気がする。閑話休題。

「あぁ、そのラグドリアン湖のように美しい青色の髪をもつ淑女（レィディ）はどこのどなたなのでしょうか？」
「あぁら、嫌ですわ、私の（ｒｙ」
ペチャクチャペチャクチャ
「ミス・イザベラ、あなたは魔法をどれくらいできますか？」
「え、え、ああの・・・あたし・・」
「実は私、３年、そろそろ４年ほど前から魔法を始めてるのですが・・いまだにコモン（ｒｙ」
「えぇ！　あ、あの実はあたしも（ｒｙ」
ペチャクチャペチャクチャ
「ミス・イザベラ、楽しい時間をありがとう。最後にあなたの父上にご挨拶したいのですが・・」
「ご、ご挨拶だなんて／／／」

・・・・こっちもうまくいかないんじゃね？　ちなみに参考文献『女性の扱い方』著者：ナルシス・ド・グラモン、家の書庫にあったのだが貰い物だと思いたい。

だけど、勝算もある。敵になる可能性があるやつを褒めるのもあれだが、ジョゼフは謙遜も誇張もなく紛れもない天才なのだ。トリスティンにはジョゼフの噂は悪い噂しかない。だが、その分オルレアン公シャルルはべた褒めだ。魔法以外の部分でもべた褒め、そして原作ではそのオルレアン公シャルルが「魔法以外では兄さんに勝てるものはない。」と言い切っている。
原作でも、他の二次創作でも、ジョゼフはガリアひいてはハルケギニア史上最強の頭脳だとまで言ってる。同じくらい最悪でもあるかもしれないのが厄介だけど。

だから

『天才とは、１％のひらめきと９９％の努力である。』

なるほど、ジョゼフが努力はしたはずだ。虚無という発想が無かっただけなんだ！
と思った人・・・ゴメン、半分だけ正解だ。少しトリビアになるけど、あの名言は訳者の誤訳なんだ。正解は、

『１％のひらめきがなければ、９９％の努力は無駄である。』

・・現実は非情だ。どっちにしろ、ジョゼフの前で虚無の可能性について呟くだけで、彼は自分の系統が虚無であると確信する可能性が高い。いや、多分する。王族だし、俺と違って秘宝を簡単に借りられる。一度試すだけでいいのだ。絶対にやるだろう。

ここまでが勝算。

だけど、問題もある。自分の系統が虚無だと分かったジョゼフは自分の３０年近い努力が実ったと考えてくれればいい。だけど、そうならない可能性がある。こういう時、頭がいい奴はめんどくさい。理論的に考えれば、自分の努力が無駄だったとわかるのだ。あの天才が、自分の系統が虚無だというひらめきが出ないほどなのだ。何年も何年も徹底的な魔法教育を受けてきたに違いない。王族だから当たり前か。

これが、もう半分の正解。はぁ、なんでこんなややこしいんだろう。撫でるだけで惚れてくれる女みたいな薄っぺらいキャラでいてくれよ。・・・撫でると惚れてくれるジョゼフ・・・・現実は非情だ。

そういう訳で、狂う可能性があるんだ。呟くだけで、はいおしまい、なんて簡単に問題解決しない可能性がある。ジョゼフには悪いが、あいつは俺の中では狂い前科一犯、しかも元特一級犯罪者。絶対に成功させるしかない。

考えられる可能性は考えつくしたと思う。人事尽くして天命待つということわざがあるが、俺は天命なんて期待できないので人より人事を尽くす。俺ができることはそれだけだ。

園遊会が始まった。

ラグドリアン湖の園遊会は、４年に一度開かれる。主に各国とも俺の国は未だ健全だぜぇって見せつけるためだ。それぞれの国のお偉いさんたちが集まる。ヴァリエール家の肩書のせいで他国の貴族王族と秘密裏に会うなどは出来ないが、この園遊会に参加できてるのは公爵の肩書のおかげだ。あっちが立てば、こっちが立たず・・・二律背反な問題だ。

今年はアルビオンで大公家の事で、少し良くない噂が流れてるせいかアルビオン貴族が少し頑張ってる気がする。レコンキスタは、ジョゼフ介入が無かったとしても大公家が処刑されれば起こるだろう。対策たてないとな・・、そのことについては今後考えよう。

次の４年後の園遊会はアンリエッタとウェールズの永遠の誓いなんてものもある。俺的には、次の園遊会までに現ガリア王と現トリステイン王がいきてるかの方が重要だ。自分の知ってる（メモってる）原作知識では、シャルル暗殺と園遊会の年が同じ年で前後関係がわからない。普通に考えたら園遊会の前に暗殺なんてするわけないの

だが、狂い済みジョゼフ＋今回のアルビオンみたく無茶でも園遊会に参加なんてこともあるので見当がつかない。まぁでも、俺はその頃はフォンティーヌにいるので次の園遊会に来ることはないだろう。

よく思うんだが、偉大に成功されてる転生者達は何故原作知識メモらないんだろう？　もしくは、メモっても、「はっ！　今日は○○が起こる日じゃないか！？」　とか言うんだろう。なんか凄いムカついてきた・・。この世界にぜひとも招待してあげたい、多分一瞬で墓穴る。閑話休題。

ターゲットは青髪少女、エネミーは姫様。

特に姫様は絶対回避だ。王族からの「私の大事なお友達」攻撃はやばすぎる。ルイズだったからいいものの、俺はヴァリエール家を動かすお願いをされかねない。今、考えると俺がアンリエッタ姫の遊び相手にならなかったのは、現トリステイン王の親バカだけじゃなく、ヴァリエール家の親バカもあったのかもしれない。両親ともにマリアンヌ様に散々お願い攻撃されてたはずだし、アンリエッタもそうなるかもと危惧したのかも・・・どっちにしろ親バカばかりだな、この世界。

そんな訳で、姫様に見つからないように青髪少女を探す。

・・・見つけた、流石青髪よく目立つな。ただし、問題は青髪少女が2人いる。だが、これくらいは想定内だ。この頃のイザベラとシャルロットは仲がいいはずなのだ・・・原作知識で救える人は俺が

思っていたよりはるかに少なかったが、今救えそうな人がいる・・うん、ちょっとやる気が沸いてきた。

「あぁ、そこのラグド（ｒｙ・・・私の名前は、エリック・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエール、エリックとでも呼んでくれたまえ。御二人の淑女（レィディ）の名前を聞かせてもらえないだろうか？」

「あら、ご丁寧にどうも。あたしの名前はイザベラ。そしてこっちが・・エレーヌ、自己紹介しなさい。」

「はい、姉さま。シャルロット・エレーヌ・オルレアンです。よろしくお願いします、ミスタ・エリック。」

仲いいなぁ、特にイザベラがタバサに優しい、凄い気遣ってるのがわかる。タバサがメガネ無しで髪伸ばしてるのって可愛いなぁ。・・・・少し、作戦を変えるか。

「オルレアンと言うと、ミス・シャルロットはかの有名なオルレアン公の御子女でしたか。いやはや、お父様の血を受け継いでいられるとなると、将来はスクエアのクラスも夢ではありませんな。」

「そ、そんな・・私は、まだ杖の契約もしてませんし・・・」

「ミスタ・エリックこそ、トリステインにヴァリエールありとまで言われてるヴァリエール家のご子息でしょう？　さぞ魔法の才能がおありで？」

「いえいえ、実は杖の契約が済んでから3年、もうすぐ4年も経つのに未だに私はコモン・マジックが4つ、5つしかできないのです。」

「え！？　そうなんですか？」
「ねぇミスタ・エリック、その話はとても興味深いわ。あたしも杖契約が済んで、幾分か経つけどなかなか魔法ができないのよ。少し2人きりで話したいわ。」

そう言いいながらイザベラは、俺の腕に自らの腕を組んできた。

「ごめんね、エレーヌ。少しミスタと2人きりで喋ってみたいの。お母様の所に戻ってくれる？」
「は、はい、姉さま。　姉さま・・その・・頑張って。」
「ふふ、頑張るわ。」

タバサは彼女の母上の方に行ったみたいだ。

「ミスタ・エリック。少しお父様に一言伝えたいので、一緒に着いてきてくれません？」
「えぇ、もちろん。喜んで。」

「お父様。」
「おぉ、イザベラか。どうしたのだ。・・・ほう、余の娘にもとうとう春が来たか。」
「お、お父様！　そ、そんなこと・・。」

「エリック・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエールと申します。」
「ほう、ヴァリエールとは・・・イザベラよ。余の天幕にガリアから持ってきてるいいワインがある。開けて2人で飲むがよい。」
「ええ、ありがとうございます、お父様。おいしく頂きます。さ、行きましょうミスタ・エリック。」

ガリア貴族たちが天幕を張っている方面へと、イザベラと腕を組みながら歩いていく。
イザベラが顔を俺の肩に乗せて、しだれかかってきた。　やっぱ、女の子って柔らかいなぁ・・

「今、あなたの腰に杖を当ててるわ。天幕に着くまで口を開かないで。あと、余計な動きもしないで。少しでも変な動きをしたら・・・」

あれですね。当てるんだったらもっと別の物を当ててほしい、なんて言ったら即お陀仏だよね、これ。
そのまま一言も喋らずに、ジョゼフの天幕だと思われる場所に着いた。腕を離されたが、腰にあった杖の感触は今、背中の方へと移動した。

「両手を上げなさい、杖はまだ向けてるわ。んで、ヴァリエール家の偽物さん。何が目的かしら？」

とりあえず、両手を上にあげ彼女の問いに逆に聞く。

「なんのことでしょうか？　私は正真正銘、ヴァリエール家の者ですよ。」

「嘘言いなさい。あなたは最初の褒め言葉から演技丸見えだったわよ。あと、褒め言葉をかける前からあたし達2人のどちらかの事を探し回っていたみたいね、見つけてから少し観察もしてみたいだし。ま、あんな褒め方本気でやるやつがいるのならば見てみたいわ。」

ごめん、うちのトリステインのグラモン家のやつらはみんなあんな感じだよ。

「それに本来褒めるなら、王の二男の娘のエレーヌより、仮にも長男の娘のあたしが先よ。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「まだあるわ。相手がエレーヌだと知るや否や言葉遣いを変えてる。他国の貴族が何故そんなことをするのかしら？　それを弱小貴族な

らまだしも、公爵であるヴァリエール家を名乗るなんて・・・正直言ってあげるけど、嘘つくのならもう少しまともな嘘をつきなさい。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「結局の決め手はあなたの目よ。これでも王族、目を見れば何が狙いかはなんとなくわかるわ。少なくともあなたの狙いは色気のあるものじゃなかったわ。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「んで、何が目的かしら？　次期国王になるであろう、オルレアン公にエレーヌを使って何をするつもりだったの？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「応えなさい！！」

流石だよイザベラ。原作では、ジョゼフの陰に隠れて全然目立たなかったけど、あの頭脳チートの娘だけある。
有能じゃなければ、国のそれもガリアなんて大国の秘密機関の長なんてやれるわけがない。しかも、タバサ以外からの団員からは信頼されてるときてる。頭脳に劣る分、集団の長としての素質はジョゼフ以上かもしれないな。

従妹（エレーヌ）の事を大事にしてるのは、話しかける前に観察してわかった。
だから少し作戦を修正して、矛先をエレーヌの方に向けてみた。
それも敏感に感じ取り、見事俺と2人きりになってくれた。そこからなんとかジョゼフに食いつこうと思ったが、先にそれをしてくれた。多分、今ジョゼフに集められたガリア兵たちがこのテントを囲んでいるのだろう。
１０になるかならないかの年齢でこれとは・・・末恐ろしいな。

さすがにこの状況が俺の計画通りとは思ってないみたいだけどな・・・

そして、ここからが本番だ。この状態からジョゼフと二人きり、もしくはイザベラを加えた3人のみの状態にする必要がある。
下手なことを言ったら、すぐにズドンだ。

まずは、この周りにいる兵の大まかな数を把握する。

「風を感じれば、部屋の外にいる人間の数など簡単に把握できます。」

やってやるよ母上、このために自分から愛の鞭を受け続けたん・・・だ・・・って・・なんだこりゃ！？

・・・ちょっと・・待て・・これは・・さすがに予想外だぞ！？

・・・・一人しかいないなんて・・

ってことは、俺が言う言葉は一つしかないか・・

「・・・計画通り。」

「！！　ウル・k「イザベラ、やめろ！！」・・・お父様！？」

全く・・ここまでチートなのかよ、頭脳チート。

俺のやってた策は全て御見通しってわけか・・・・『無能王』ジョゼフ！！

「そして・・・シャルルではなく、『無能』と呼ばれてる俺に用とはな。

何が目的だ、ヴァリエール？」

ラグドリアン湖で園遊会とのことです　Ｐａｒｔ１（後書き）

見たか！！エリック流『お友達作戦』
そんなあるかないかのご都合主義なんて信じるわけがないのだ。

そして・・・ジョゼフ参戦！！
イザベラも頑張ったんですけどねぇ。

そんな感じで次回はジョゼフとの対決（？）になります。

読んでくれてありがとうございます

ラグドリアン湖で園遊会とのことです　Ｐａｒｔ２（前書き）

なんだか切るところがなかったので、長くなりました.

ラグドリアン湖で園遊会とのことです　Ｐａｒｔ２

「どういうことですか？　お父様。」

「つまり、お前が騙していたと思っていたヴァリエールの小僧は、実はお前の事を騙していたということだ。この状況はすべてその小僧の思惑通りだ。」

ジョゼフの言葉を聞いて、俺の事をキッと睨みつけてくるイザベラ。

「一応お聞きしたいのですが、何故俺がヴァリエールだと？　そこのミス・イザベラは私が偽物だとおっしゃっていましたが？」

「ふん、わかってるくせに聞くか。まず最初に、イザベラがどこの貴族とも知れない奴と腕を組んで俺の所に歩いて来た時だ。この園遊会に来てるガリアの貴族の子は全て覚えているから、お前は他国の貴族の子だと判断した。イザベラは自分が王族で自分がどんな立ち位置にいることくらいは理解している。そして、あの腕の組み方はいくらなんでもやりすぎだった。これで、お前がイザベラに秘密裏に連行されてるガリアに仇なす他国貴族、もしくはその面だ、可能性が低いがイザベラがこの短時間でお前に心底陶酔してるかだ。」

「そんなこと、あるわけないわよ！！」

さすがだよな、イザベラ。うちのアンリエッタと交換してくれ。今から４年後に一人で水遊びとかしちゃうんだぜ。

俺の代になったら、ヴァリエール家全員で、ガリアに移りたい。無理だろうけど。

「そのあと、お前は俺の前でヴァリエールを名乗った。あのどこの貴族が見てるかも分からない場所でだ。俺の娘はそれを嘘ととったようだが、この場合では逆だ。あんな所で嘘をつくわけにはいかない。ましてや、どこの誰とも知らん貴族ならまだしも名家のヴァリエールを名乗るならな。そこで、ヴァリエールがトリステイン王家に秘密裏にガリア王家に接触したいことが見て取れた。これならば、シャルルではなく俺に話をしたい理由も明白だ。有名なシャルルと違って『無能』な俺だが、父であるガリア王に言伝くらいはできるからな。」

「え！　じゃあ、やっぱりあたしの前で怪しいふるまいをしていたのも・・・」

「全てお前がそこの小僧を自然にここに連れて来ることを想定した罠だろうな。公衆の面前でそんな惨事を起こすわけにはいかないからな。」

イザベラさんの視線がさらにきつくなりました。

「では聞こうか、ヴァリエールの使者よ。お前の父、ヴァリエール公爵はガリア王家に何の用だ？」

よし、予想どうりだ。わざわざ、聞いた甲斐があった。

ジョゼフが頭脳チートなのは、前々からわかっていたがそれがどのタイプなのかまでは、確信が持てなった。
予想を立ててから情報を見るか、情報を見てから予想を立てるか。
後者だとは思っていたが、やはり後者だった。
そして、ジョゼフの性格も狂ってはいないが、原作に近いことも確認した。

作戦は決まった。

「まず最初に、私は確かにヴァリエールの者ですが、ここには一人のエリックとして来ました。そしてガリア王家ではなく、一人のミスタ・ジョゼフに会いに来ました。」

・・・少しだけ驚いたみたいだな。顔には出なかったが。ここで、そっとイザベラに視線を向け、暗に2人で話したいという意思を示したが、それについては無視を決め込んだな。もうひと押し必要か。

「ほう、それは失礼した。それでは、改めて問おうミスタ・エリック。この一人の男、『無能』と呼ばれてるこのジョゼフにいったい何の用だ？」

そして、ジョゼフの性格は原作通りに劇的でロマンチストだ。だから、ここで言うことも決まってる。

「生涯の朋友を迎えに、ミスタ・ジョゼフ。」

驚いてるな、さすがに顔に出てる。ここまで人から求められることがなかったということだろうか？
それはそれで、悲しいな・・

「・・・・くくく、くははっはっはっは。そうか、俺の事を朋友と呼ぶか。この『無能』と呼ばれている俺を。」

「ええ、あなたより素晴らしい朋友はいません。」

「いいだろう。・・・イザベラ席を外せ。」

「ででも、お父様。こんな怪しい奴と2人きりなんて・・」

「よい、俺は席を外せと言っているのだイザベラ。」

そのあと、イザベラはしぶしぶと天幕の外に出て行った。最後に俺へのひと睨みを忘れないところも流石だ。
ジョゼフは俺に席を促し、どこからかワインとオルゴールのような小さな箱を取り出し、机の上に置いた。

「これが、イザベラに言っていたワインだ。そしてこれは『消音(サイレント)』が使えるマジックアイテムだ。なにしろ俺は『無能』だからな、『消音(サイレント)』ひとつ満足にできん。いや・・・この場合は俺たち『無能』と言うべきか、朋友よ。」

本当に凄い。朋友とは、同門の友同志の友と言う意味だ。イザベラには分からず、ジョゼフにだけ伝われば とダメモトで言ってみたが、よく理解してくれた。流石、頭脳チート。
もちろん俺だってわからない。単純にこれを言えたのは、この園遊会に参加する前に辞書片手に様々な暗喩に使える言葉をメモってきてあるからだ。それもこれも何とかジョゼフと1対1に持って来たかったからだ。ジョゼフが想像以上に頭が良くて簡単にこれたが、

実はかなり綱渡りだ。

「ワインもある。『消音（サイレント）』もかけてある。言葉遣いなど気にしなくてもよいぞ？　ミスタもつけなくて良い。」

「・・・感謝するよ、ジョゼフ。ここまでくるのが大変だったが、お前のおかげですんなりと着くことができた。あとは、話すだけだから楽だ。」

もちろん嘘だ。ここからが第2ラウンド。ジョゼフが狂わないように真実を教えなきゃいけない。

全身全霊を持って、騙してやるよ頭脳チート。

「では、用件を話せ。」

「・・・3年半前、『声』を聞かなかったか？」

「？　『声』だと。」

「あぁ、お前は聞かなかったのか。」

もちろん俺だって『声』なんて聞いてない。

「順番が逆になったが、握手してくれないか？」

「よいが、ならば指輪を外せ。強力なマジックアイテムは指輪の形をしてることが多い。」

「了解した。」

博識なことで。アンドバリ、テファの指輪、各国のルビー、確かに

指輪が多いな。この指輪が母上特製指輪杖だとは気付いてないことを願いたい。ジョゼフなら気づきそうだから怖い。

「・・・やはり、そうだ。お前は俺と同じだ。」
「？　何も感じぬが？」
「感じないのか？　ってことは、『声』が聞こえなかったのも感受性が低かったから、もしくは俺の方が高かったからか？」

もちろん、俺も全然感じない。『声』や感受性なんて微塵のかけらもない、ただのブラフだ。
ジョゼフのような頭脳チートを騙すにはどうすればいいか色々考えた結果、わけわかんないもんをブラフにすることにした。こいつは情報から予測を立てるのが半端なくうまい、だからこそ苦手なものは未知の情報、それも確認が取ることができない情報だと考えた。

ありがたいことに、俺らの系統は『虚無』。失われた伝説の系統だ。わけわからんものを詰め込むことも、わけわからんものをそのまま納得させることもできる。この場合の『声』もブリミルのお告げとることもできる。
これが、俺がジョゼフに持ってる唯一の勝機。他の物では圧倒的に及ばないが、『虚無』の情報だけに関しては俺が上だ。だから、今のうちに俺にとって都合がいい『虚無』をジョゼフの中に作りこむ。

「単刀直入に言うが、俺たちの魔法の系統は『虚無』。失われた伝説の系統だ。それが、３年半前にトリステイン、ガリア、アルビオン、ロマリアにいる王家の血を引きながらも系統魔法が使えない俺たちに覚醒した。これから来る大厄災を回避するために。全部『声』

の受け売りだけど。」
「・・・なるほど、それが本当だというのならまず俺に会いに来たのも納得できるな。」
「あぁ、アルビオンとロマリアで魔法が使えないことで有名な奴はいない。だが、ガリアではよく聞くやつがいた。」
「それが『無能』と呼ばれる俺か。」

そう言いながら、ワインを煽る様に飲んでいくジョゼフ。あいつの中では今、様々な葛藤があるのだろう。
もちろん、3年半前に覚醒もブラフ。理由があるんだよって暗に伝えれば狂う可能性が少しでも減るかなと思った。

「・・・ジョゼフ、今ここで、杖を振りながら系統魔法を唱えてくれないか？」
「？　まぁいいだろう。　ウル・カーノ　『発火（イグニッション）』　・・やはりなのも反応がないな。」
「なるほど、お前にはそう見えるのか。安心しろジョゼフ、お前はすでに覚醒している。俺にはお前が凄い速さで杖を振ってるように見えたぞ。」

これが、ジョゼフ最大の不幸だと俺は思う。
なぜかはさっぱりわからないが、虚無の担い手は自分が最初に覚えるであろう『虚無』が零れ落ちるかのように魔法を使うと劣化版として再現される。
俺の『爆発（エクスプロージョン）』、ティファニアの『忘却（オブリビオン）』、そしてヴィットーリオの異世界を覗く魔法は恐らく『世界扉（ワールドドア）』の劣化版だろう。
もし、ジョゼフの最初に覚えるのが『加速（アクセラ）』じゃなかったら、気づ

いていたような気がする。
まぁ、おかげで一小市民である俺が頭脳チートのジョゼフを騙せるんだけど・・・。現実は非情だ。

「俺が系統魔法を使うと爆発する。お前が系統魔法を使うと速くなる。普通の状態じゃないのはわかるな？」
「あぁ、だがそれだけではお前が言うように俺たちが虚無だという理由にはならんぞ。」
「虚無の担い手は、王家の血を引く。そして王家には厳重に保管されてある、始祖の秘宝とルビーがあるはずだ。ガリアだったら、始祖の香炉と土のルビーだったな。そのルビーをはめて香炉を作動させれば、お前の虚無の呪文がわかるはずだ。」
「・・・はずと言うことは、お前はまだやってないということだ。どういった経緯で自分が虚無だと確信した？」
「自分が虚無だと信じれば、コモン・マジックは使えるようになる。だが、これは信じればという後付。確信したのは、『声』を聞いたあと、使い魔を召喚した時だ。」
「・・・なるほど。始祖の伝説の使い魔達か！！」

博識すぎるだろ！！　と心の中でツッコミを入れる。
ジョゼフってちょっと伝説好きかもしれないな。いや、ただ単に酔い始めてきただけか。

「その通りだよ。俺たちが使い魔を召喚すると人間が出てくる。そして、契約すると伝説の使い魔のルーンが出てくるはずだ。」
「ん？　お前は召喚したはずだろう？」

「召喚はしたけど、契約はしてない。」
「なるほど、女か。」
「ぶっ！！」

吹いた。何故、わかたし。

「鎌をかけただけなんだが・・理由を挙げると、イザベラと腕を組んでいるとき顔がにやけてた。しかし同時に、少し顔を曇らせてもいた。そして、あのような策を立ててもいた。これらから、お前は女は好きだが、利用してることを少し後悔でもしていた。違うか？
だから恐らく、女を召喚でもしてしまい、一生仕えさせるのはなどと後悔した。　こんなところか。まわる頭を小僧の時から持つのもなかなか不便だな、はっはっはっは。」

ほとんど正解だ。ってか酔ってやがるな。

「でも、あの策は俺の父が立てた策かもしれないだろ？」
「それはない。あの策は、策をやる張本人が臨機応変に対応しなければいけない類のものだ。それを子供にやらせるとは思えん。たとえ、できたとしても頼らないだろう。となると、自ら考え自ら行動した。その結論が一番納得のいく結果だ。」

もう嫌だ、この人。未知情報以外では、すぐに結論にたどり着きやがる。

「あぁ、その通りだよ。じゃあ、お前は女召喚したらどうするんだ。」
「ふん、仕えさせて、後悔などさせなければよいのだ！」
「ルーンの影響で、愛してくるかもしれないのにか？」
「ならばこちらからも、愛でればよいでないか。」

もういいや、こいつ少し酔ってるし。だけど、あれだね、よかったねシェフィさん。愛でてくれるってさ。
ちなみに俺は飲んでない。こいつの前で酔うなんて、いつ墓穴（ぼけつ）るかわかったもんじゃない。
あぁ、ガリア産高級ワイン飲みたいなぁ。

そのあと、風石による大隆起を説明して、これが大厄災だと説明。
うちの者（ワルド子爵夫人、名前は出さない）が調べてることも伝え、長い時間ここにいるのはあれなので、帰ることにする。

「最後に頼みがあるんだ。」
「いいだろう、俺のできることなら何でもやるぞ？」
「何でもなんて言ったら秘宝貰うぞこの野郎。・・・俺が魔法使えないことをこの園遊会で広めてほしい。」
「・・・なるほどな、雲隠れする気か。」
「流石だな。お前もそうしておけ。虚無を狙うやつらはたくさんいる。自国の貴族、ロマリアの神官ならまだいい。エルフはこの力を悪魔の力と言って消しに来る。任せたよ『無能王』。」
「『無能王』か・・なかなか酔狂な名ではないか。」
「酔ってるお前には酔狂な名前で十分だ。」

それに俺の中では、元狂い人。酔ってる元狂い人・・うん、酔狂だな。　面白くねぇ、飲んでないのに俺も酔ってきたかも。

「じゃあな、『無能王』。頼んだよ。」
「あぁ、楽しかったぞ朋友よ。この３０年で一番うまい酒だったかもしれん。お前の名も考えておくとしよう。」

最後の言葉には、返事を返せなかった。
ジョゼフと仲良くなれたのは大きいが、あれはあいつが友を求めていたからなのかも知れない。
魔法が使えないから他の貴族とも仲良くなれず、王族だから平民とも仲良くなれず、頭が良すぎるから凡人とも仲良くできない。俺もジョゼフほどは頭良くないが、それでも訓練や考え続ける癖もあってかそこら辺の奴よりは頭がいいと思う。
そんなんだから、あいつはシャルルが唯一の友であり、憎き弟だったんだろうなぁ。

孤高すぎる王様に初めて現れた朋友か・・・

ギルガメッシュとエンキドゥみたいだな。俺がエンキドゥ役ってのが笑い話だけど。

だけど、そんな奴に嘘ついてるんだよなぁ。
はぁ、少し後悔。時期をみて話そうかな。今は、あいつのために嘘ついた、そういうことにしとかないと自分も潰れるな。

それにしても・・・・

「疲れたぁあ〜〜。」

何なんだよ、あのオーラ！　今のガリア貴族たちは見る目が無さすぎるだろ！　ガリア王も大変だよな。明らかに王様になれって感じの奴がいるのに、周りが認めてない。シャルルもあんな兄がいたら大変だなぁ。

今回の『お友達作戦』はイザベラの頭がいいかにかかっていた。もし、うちの姫様みたいにポヤポヤなやつだったらグラモン流を貫いて、最後にジョゼフにポソっと言うしかなかったが、頭が良くて助かった。
原作を参考に、頭がいいのは分かってたけど、この年ですでにあそこまで良かったのは嬉しい誤算。
そして、もう一つの誤算がジョゼフのチートさ。一言一言話す言葉

に注意したから、精神力がやばい。
結果、ジョゼフイザベラ父娘が俺の予想以上だったから、結果も予想以上にうまくいきました。

「ホントにイザベラが頭良くって助かった・・・」
「あら、いいこと言うじゃない？」
「うぉ！！？」

気づいたら、イザベラが後ろにいた。

「ミス・イザベラ、どうしてここに？」
「ここはガリアの天幕がある場所よ。あなたが一人でうろつくと色々問題があるのよ。それにミスなんてつけなくてもいいわ。」

そう言いながら、俺の腕に腕を絡ませてくるイザベラ。
最初の時とは違って、軽くしか組んでくれないのがなんだか少し悲しい。
ジョゼフとの接触は秘密にしときたいので、このイザベラの提案はとても助かる。これなら、パッと見、少し2人きりになりたかった貴族の子として振る舞える。本当にうちの姫様と交換してくれないかな。

「それにしても、あなたもあんな声を出すのね。」
「イザベラは俺の事をどう思ってるんだ？」
「お父様と対等に渡り合える人。」

いやいや、無理ですって。暗喩のために辞書引いたり、可能性全てを紙に書きだしたりして、半年の準備期間があって初めてジョゼフと一夜語れるんだよ。俺の頭は、下手すると今のイザベラにも負けるかもしれないんだよ。
もちろんそんなことは言わないけど。

「お父様と話していた間、あなたが本当にヴァリエール家の嫡男だってことも調べたわ。金髪の眼鏡をかけたあなたのお姉さんが教えてくれた。ヴァリエールも凄いのを生んだわね。」

個人的にはあなたの方が凄いですよって言いたい、イザベラは9か10歳だったはずだ。だけど一応肉体年齢的には、俺の方が年下なんだよな。

「一つだけ聞いていい？」
「ん、何？」
「あなたコモン・マジック4つくらいしかできないって本当？」
「本当だ、正確には5つだけど。」
「ふ～ん、そう。」

少し、距離が近くなった気がする。こういうところは年相応なわけだ。
だけど彼女は『虚無』じゃない。原作では水のドットだったと思う。
はぁ、なんだか考え過ぎか。俺に救えるものは少ないんだ。少し自己嫌悪。

「じゃあ、またね。次は負けないから。」

そう微笑みながら言われて、イザベラと別れた。
原作ではその頭の良さと人の気持ちが理解できすぎるリーダー素質のせいで、自分がどれだけシャルル派に嫌われてるか感じ取ってしまい潰れてしまった子だ。
これからどうなるかは分からない。後はジョゼフの仕事だ、上手くやってくれること祈ろう。俺では手が出せない。
あぁ、本当に何でもできるようなチートが欲しい。

それにしても疲れた。そう考えながら、ヴァリエール家の天幕に戻った。

「お帰りなさいエリック。・・・少しお話があるの？」

「ああのエレオノール姉さん、どうしたの？　そんな顔して・・・」

「ふふふふふふふふふ。いいわ、皆まで言わなくても分かってるわ。どうせ男は胸がすきなんでしょう？　えぇ、そうでしょうとも、私なんかのようなものより、カトレアのようなのがいいんでしょう？」

「い、いや今回カトレア姉さんは来てないはずだけど・・」

「・・・・あの青髪の王族の子。まだ１０歳くらいなのに少しあっ

たわね・・」

イザベラァァ！！　お前か！！　あの微笑みはこれの伏線か！！
最初、腕組んだ時「お！」とか考えちゃった俺の感動を返せ！

「全く・・・あの小娘、王族だからってちょっとお高くとまっちゃって・・ふん。それに・・あの子まだ１０歳でしょう、それなのに・・・エリック！！聞いてますか！！？」

「いや、あの俺さっきまで外にいて少し疲れてて・・」

「あの青髪の小娘と一緒にいたのでしょう。見てましたよ。仲良く腕なんて組んで・・。ヴァリエール家として恥ずかしくないのですか！！」

王族と腕組めるなんて全然恥ずかしくねぇよ！
と言いたいが、今のエレオノール姉さんには何言っても無駄だ。自分より位の高いものがあまりいない公爵令嬢の弊害かねぇ。
って腕組んで帰ってきたのもこれのためかよ、イザベラ。優しさや配慮のよさに感動した俺はいったい・・・

にやりと笑う姿が似合いすぎてる青髪少女が脳裏に浮かんだ。

前言撤回だ。潰れてしまえ、イザベラ。

そんなわけで、俺のラグドリアン湖の園遊会は最後にイザベラに仕返しされたものの、順調に終わった。

ラグドリアン湖で園遊会とのことです　Ｐａｒｔ２（後書き）

一度、書き終わったら全部消えて、再度書き直す羽目にｏｒｚ
今日が土曜日でよかった。

エリックがこの時点で使えるのはライト、ロック、アンロック、ブレード、マジックアローです。

現実的な話をすると、転生者の一番のアドバンテージは準備時間だと思うんですよね。
だから、エリックは突発的なことには弱いです。そんなお話でした。

読んでくれてありがとうございます。

贈り物とのことです（前書き）

ヴァリエール家の人たちを書いていきます。
自分のイメージの中の人たちなので、少し違うかもしれませんが、
ご了承ください。

贈り物とのことです

ラグドリアン湖での園遊会も終わり、俺とカトレア姉さんがフォンティーヌ領に移るまで半年ほどある。
俺の噂が広まるのを待たなくてはならないのだ。そして、それは同時にルイズとの別れの期限でもある。

「何か贈り物でもするべきか？」

俺とルイズは双子だ。

俺の今までにあったことを考えると、珍しいくらい希少なテンプレ設定の一つだ。ちなみにもう一つのテンプレ設定見た目ギル様は、バビロンもエアも使えないのでほとんど形無し状態。どこかの誰かが、容姿を説明するのがめんどいのと客寄せパンダ的な意図があったと思ってしまう俺はきっと悪くない。

そんで経験してみると分かるが、双子ってのは本当になんかつながってる気がする。ネギま双子アンチネギというのがあるけど、読む分にはいいが実際経験したら無理なんじゃねとはここだけの弁。

いろいろ言ったが、なんか贈り物がしたい。そういうことだ。
だけど、女性に贈り物なんかしたことがない。下手に貴族の女性に贈り物すると、またヴァリエールの名が轟くのだ。いや、正確には贈られた方がわざと轟かせる。ジェシカには水の秘薬なんて色気のない物しかあげてないし・・・彼女にも今度なんか贈ろう。

そこで、まず最初に前回と前々回お世話になったナルシス・ド・グラモンの本を頼ってみた。

『薔薇』

うん、なんか予想通りだ。こんなやつなのに、軍ではかなり優秀ってのがなんだか悲しい。ここは逆か、変だけど優秀だからいいところにいるんだ。トリスティンは人材不足過ぎる。
ジュール・ド・モット伯爵も二次創作では色々叩かれるやられ役だが、とても優秀な人だ。
優秀じゃないと王宮から学院への勅使なんて任されない。それに元日本人としてはあんまりいい気分ではないが、夜の相手を一応とはいえ雇うという形でやっている、金も多めに持たせるみたいだし。
マルトーさんは怒りカンカンだろうが、まだマシな部類なのだ。
最悪なパターンは、ロマリアの神官で神の洗礼とか、悪魔祓いとか。内容はご想像の通り。まぁ、そんな奴らは長生きしないけど。

話が逸れた。ってことで、何を贈ればいいのか見当がつかないので家族に相談してみる。

「父上、別れる前にルイズに贈り物がしたいのですが、何がいいで

しょうか？」
「ふん、そんなものいらん。」

お前にあげるわけじゃねぇよ。お前がいつもさりげなく理由をつけて（ヴァリエール家の者として～とか）、アクセサリーなんか贈ってるから俺のアクセ案が消えたんだよ。

それにしても、呪文の使えない虚無ってなんて使えないんだろう。本来ここは、「いくぜ！　俺の現代知識を利用したチート錬金！！」とか言いながら何か贈るところなんだけどなぁ。

「いえ、父上に贈るわけじゃないですよ？」
「・・そんなことはわかっておる。」

期待した目で見るな、おっさん。

「・・・エリック、贈り物も自分で考えられん奴とは情けない奴だ！　次期ヴァリエー（ｒｙ」

結局、なんの収穫もなく次へ移動になった。それにしても、若干八つ当たり入ってたな父上。

「母上、別れる前にルイズに贈り物がしたいのですが、何がいいで

しょうか？」
「私はそんなものいりませんよ。」
　　ブルータス、お前もか。
よく考えたら、母上も理由をつけて（ヴァリエール家の淑女として～とか）自分好みの服をたくさんルイズに着せてるから、俺の服案も消えたんだよ。似た者同士な親バカだな。
ならば、質問を変えよう。
「母上は、父上からどんな贈り物を貰ってたんですか？」
「わ、私ですか／／。」
めずらし、初心だな母上。ルイズやエレオノール姉さんは、今までこういう質問をしてこなかったんだろう。多分質問したら「はしたないですよ、ヴァリエール家の淑女たるｍ（ｒｙ」とか言われるとでも思ったんだろう。カトレア姉さんだけは質問してそうだわ。
「コホン。そうですね・・・・・ん、贈り物などもらったことないかもしれませんね・・・ふふふ。」
「・・・・・

「元々、彼は、最初の頃など、私の事を女とも思ってなかったのでしょうね・・・ふふ、もちろん、私、にも責任があるのでしょう・・・ですが、酔った勢いで、何度も、何度も、何度も、接吻したあげく、私、のことをオカマとも言ってましたね・・・・ふふふふふふ。」

「・・・・

「胸」

うん、ありがとう。この前だもんなラグドリアン、少しタイミング悪かったわ。まぁ狙って質問したけど。

「んで、まじめな話、ルイズに何か贈っていきたいんだけど、なんかない？」

「・・・ふふふ、いいわねぇちびルイズだけ・・贈り物も貰えるし、婚約者もいるし、胸は・・・まだわからないけど・・・未来はなんて明るいのかしら・・・ふふふふふふふ。」

ちなみにルイズの胸は多分あなたと一緒だから安心していいよ。それにしても、さすが母上の血を濃く受け継いでる娘、エレオノール姉さん、笑い方がそっくりだ。だけど、エレオノール姉さんは母上と違って、脳筋じゃない。だから・・

「エレオノール姉さん、演技はやめてください。」

「・・・はぁ、あなたは相変わらずかわいくない弟ね。で、何故わかったのかしら？　これでも、殿方から誘いを受けるために演技はかなり練習したのよ。」

「エレオノール姉さんは過去の怒りを人に向けるような、そこらへんのバカな女じゃないからね。」

「そ、そうね。もちろんそうだわ。」

これがエレオノール姉さんの本質、頭が良くて、感情を出すのが苦手で直接褒めるより間接的に褒められる方が弱い。だから、グラモ

ン流の褒め方がはびこるトリステイン貴族界ではいい人が見つからないんだと。でも、好きな人には直接褒めてほしいという正直ちょっとめんどくさい女だ。

それにしても、ヴァリエール家は自分の感情を素直に出さない人が多すぎるな、遺伝かね。

「あなたみたいな人が他の家にもいればいいのにね。今のトリステイン貴族にいい人なんて全くいないわ、ジャンももう少し名家だったら・・・」

「エレオノール姉さんの頭の良さについていける貴族がたくさんいたら、今のトリステインはもっと繁栄してるよ。」

ジャン、やっぱりお前危なかったみたいだぞ・・・。エレオノール姉さんも選ぶ基準が高すぎるんだよ、社交界なんて一瞬の出会いなんだから本質なんてわかるわけないだろうに。

「そうだわ、エリック。あなた半年後にラ・フォンティーヌに移るわね。」

「うん、姉さんには説明したけど、隠れなきゃいろいろと不味いからね。」

今、この時点でこれについて知ってるのはルイズを除くヴァリエール家と一緒に着いてきてくれる忠臣トニー、メイド長ダルシニ。このダルシニもトニーと同じく何でもできる、そして戦えるメイドさん。ヴァリエール家には副メイド長を残しておけば大丈夫なんだと。

「それでラ・フォンティーヌ子爵家の当主になるのだから、ヴァリエール家に戻る時に、私と結婚すればいいわ。」

「ぶっ！！」

「そうすれば、あなたはおおやけのもとヴァリエール家に戻ることができる。どうかしら？」

「・・・どうかしらも何もないよ。姉さんの冗談は、頭がいい分母上よりひどい。いや、えぐい。」

「あなたもこの類の冗談は分からないのね。それに私は、母様ほどひどくないわよ。」

その冗談を笑い飛ばせるのも基準に入るのか？　結婚無理じゃね？

「そんなに焦んなくても大丈夫でしょ？　これから『約束された春』が来るんだし。」

「『約束された春』？　なにかしら、それは？」

「姉さん、それには気づかなかったわけか。いいかい、俺はヴァリエール家唯一の男。それが、どのような理由であれヴァリエール家ではなく別の家の当主になった。では、誰が次期ヴァリエール家当主になる？」

「そ、それは、ヴァリエール家長女の婿である・・・まさか！？」

「そう！　エレオノール姉さんの婿になる人こそが、次期ヴァリエール公爵になると対外的には思われるわけだ。それこそが『約束された春』！！　姉さんを『全て遠き理想郷（アヴァロン）』へと導く聖なる剣（つるぎ）！！」

「それが・・『約束された春』・・。エリック、私は直ぐにトリスタニアに向かうわ。アカデミーに行く前に服を新調しようと思うの、母様たちにはあなたから伝えて頂戴。」

そう言って、エレオノール姉さんは去って行った。

よく考えれば、そんなことあるわけないってわかるはずなのにねぇ。この前のジョゼフとの接触で俺の口車スキルでも上がったのかな？それにしても『約束された春』、読み方をつけるとしたら「エクスプリング」か？　　ダメだ、相変わらずネーミングセンスは上がってないようだ。

「あ！　結局贈り物の事、忘れた。」

こういうことは墓穴につながる。といっても家族同士でしか起こらないから、いいか。

「それで、わたしのところに来たのね。」

「そういうこと。他の人は当てにならなかった。」

カトレア姉さんのところに来る前に、事情を知ってるトニーとダルシニにも聞いたが「若様が贈るものなら、なんでも喜ばれましょう。」と従者的に１００点満点の答えを返してきやがった。

「そうね、手作りのものなんてどうかしら？」

「それは考えたんだけど、俺は『錬金（ストラクト）』ができない。」

「魔法なんて使わなくてもいいんじゃないかしら？　わたしは魔法を使わないけれど、色々なことができるわ。」

カトレア姉さんは病気のせいで、トライアングルだけど魔法をあまり使えない。でもね、人を呼ぶときに鳩を使ったり、犬に物を持ってこさせたりすることができるのはあなただけだよ姉さん。

「この半年間、色々書いてたみたいだけど・・なにか物語でも書いてるのかしら？」

そんな楽しいことやってないって、ジョゼフと話すために色々調べてたんだよ。

でもねぇ、なるほど、物語か。今までかなりテンプレものに見捨てられてたから失念した。

「ありがとう、姉さん。」

「あらあら、わたしは困ってた大事な弟とお話してただけよ。」

「まぁ、そういうことにしておくよ。」

「完成したら見せてちょうだい。エリックは他の人とすこし違った考え方をするみたいだから、どんなお話ができるか楽しみだわ。」

最近、姉さんの直感スキルが少しづつ上がってきてる気がする。

半年がたち、エリック童話集なるものはすでに完成して、ルイズに贈った。
内容は、「醜いアヒルの子」や「アリとキリギリス」など頑張れば報われるということを主題にした物語が多い。少し複雑な心境だが、結局そういうのを詰め込んだ。
ルイズにも、４か月程前に俺とカトレア姉さんがフォンティーヌに行くことが伝わってたらしい。

そして今、この別れの場には俺のほかに、ルイズ、カトレア姉さん、トニーとダルシニとその部下たちしかいない。エレオノール姉さんはアカデミーにすでに行ってしまってるし、両親は世間体とはいえ俺は勘当に近い扱いなので、いない。多分、いや絶対『遠見（ビーク）』の魔法で覗き見してるだろうけど・・・烈風カリン直伝『風を感じる特訓』も1年やればそれくらいわかる。

「・・ちぃ姉さま、兄さま・・本当に行っちゃうのね・・」
「大丈夫よ、ルイズ。すぐにまた会えるわ。それにわたしは病気を治しに行くのよ。」
「・・・・・うん。」

カトレア姉さんに抱きしめられてるルイズ。

「じゃあ・・行くわね。　エリックにちゃんと言うのよ。」
「・・・・うん。」

残ったのは、俺とルイズだけ。他のみんなはすでに馬車の中だ。気を利かせすぎじゃね？

「・・あのね、兄様。プレゼントありがとう、大事にするわ。」
「うん、大事にしてくれよ。」
さすがに４か月前に教えられたからか、泣いてはいないか。

「それでね、私からも贈り物があるの。」
「そうか・・それは嬉しいな。」
推測するのは無粋なんだろうけど、多分俺と同じ手作りの物だろうな。俺もそうだけど、作ってたら時間を忘れてしまうことが度々あった。最近ずっと会ってなかったのは、そういう理由だろう。
考える癖が抜けないのは、こういう時ちょっと損だな。苦笑。

「・・・兄様、よく見ててね。」

そう言って、ルイズは杖を取り出した。

「『発光(ライト)』！！」

微かにだが、ルイズの杖の先が光ってる。

「・・・ルイズ、お前・・・魔法が・・・」

「うん、母様から一番簡単なライトだけやりなさいって言ってきたの。」

粋なことをするね、母上。でも、もっといい言い方があったと思うよ。

「・・・ねぇ、兄様？」

「うん？」

「兄様は・・・兄様は、魔法がうまくできないから・・フォンティーヌに行くのよね？」

「・・・・・・・・・うん。」

「・・なら・・・n・・なら・・・魔法がうまくできるようになったら・・・戻ってくるよね？」

「・・うん、戻ってくるよ。」

「・私が・・・ひっく・・私でも・・・できたわ・・」

「うん・・・じっかり・・見てだよ。」

「だから・・だから・・・兄様・・すぐに戻ってきてね・・・」

「・・う・・うん・・・ぜっだい・・・ぜっだい・がえっでぐるよ・・」

「・・づぎの・・ひっく・・・次のヴァリエール公爵が・・・泣いちゃダメなんだからぁ・・」

「・・うん・・」

「私の・・わたしのにいさまは・・・にいさまだけなんだからぁ・・・」

「うん・・俺の妹も、ルイズだけだから・・」

「・ひっく・・・だからね、兄様・・」

いってらっしゃい

ああ　いってきます

贈り物とのことです（後書き）

錬金のルビはオリジナルです。
ｓｔｒｕｃｔｕｒｅ（名）構造　を勝手に動詞形にしただけです。
そんな単語は無いので、造語です。錬金術がアーケミーでしたが、
響きのイメージに合わなかったので、勝手に作りました。
遠見はいいのがあったのでそれをそのまま使いました。ｐｅｅｋ。

ルイズのライトについては、
失敗魔法がないので爆発のイメージがあるわけではない、よってラ
イトのイメージが阻害されない。
カリーヌという、魔力を何となく感じることができるチート教官が
いる。
使い魔召喚だって何度も失敗したができたからこれも・・・
ルイズの４か月のライトのみの努力。
などの要素が絡み合ってできたことにしました。

色々着飾って言ってますが、この部分に関してはご都合主義です。
でもエリックに降りかかったわけでもないし、これくらいならいい
かなと作者は妥協しました。
言い訳はしません。反省もしません。後悔もしません。

なぜなら、自分はヴァリエール家が好きだからだ！！
これを読んでる人もすこしでもヴァリエール家が好きになってくれ
れば思います。

読んでくれてありがとうございました。

道中での会話とのことです（前書き）

少しの間、スロ～ライフになるかもです。
フォンティーヌ領は平和ですから。

道中での会話とのことです

フォンティーヌ領に向かう道中の馬車の中で、カトレア姉さんが質問してきた。

「それでエリック。どんな事情があるのかしら？」

「ん？・・何のことかさっぱりだけど？」

計画を練りに練って行動する俺にとってカトレア姉さんは鬼門だ。前の蒼父娘との接触で気づいたが、頭のいい奴の考えは読みやすい。計画通りに進んでくれるか、もしくはこっちの計画を読んで進んでくれるか、この2パターンを想定しておけばある程度は対処できる。イザベラレベルならなんとかこっちも対処できた。ジョゼフレベルは無理だけど。

よって俺の苦手なタイプは、頭が良すぎる奴（ジョゼフ）、頭が悪すぎる奴（アンリエッタ）、神に祝福されてるような奴（ルイズ）、そして直感で核心をついてくる奴（カトレア姉さん）。
この4タイプだと思う。ルイズのタイプは主人公補正とかそういうのがあるタイプだ。

・・あの『発光（ライト）』は本気で驚いた・・・・

できる理由はそろってはいるが、それでも可能性は限りなく低い。

俺だったらうまくいってないと思う。
それにしても・・・泣いてたな。

あのまま感動の別れで終わればよかったんだが、俺の頭は回り続ける・・

俺とルイズの涙に込められた想いは決定的に違う。

ルイズは純粋に俺のことを想って、帰ってきて欲しいと願って・・・

そして俺は、計画のためにあんなに純粋な想いを踏み躙ってると理解させられたから・・・

「それより、姉さんは何でフォンティーヌに行くことにしたんだ？」

俺が虚無だと分かる前から、このフォンティーヌ計画はあった。
カトレア姉さんを当主としたラ・フォンティーヌ伯爵家を新しく興して、誰かと結婚させる計画。
姉さんは、病弱だから子供が産めない可能性が高い。それに公爵家の娘でもあるから、妾なんてことにもできない。
だから、フォンティーヌ領と伯爵の地位を付加価値としてカトレア姉さんに付ける、嫌な言い方をするとおまけ付けるから誰かお嫁に貰ってくれないか作戦だ。
まぁ、原作を見る限り誰も結婚してなかったんだけどね。多分、たくさんの領地を継げない貴族が群がってはいたと思うんだが、カト

レア姉さんが全部拒否ったのだろう。
この人は、人の心の奥の奥まで読める。だから優しいが半端なく厳しくもある。そんな人が領地に群がるような浅い考えの人と結婚するわけないよなぁ。両親もダメモトな作戦だったんだろう。

だがそこで、そのフォンティーヌを俺の隠れ蓑にするにあたって伯爵を子爵の地位に落としたり、当主を俺にしたりで本当はカトレア姉さんがフォンティーヌに来る必要はない。父上も流石に新しい領を2つ興すのは無理だったらしい。
元々の計画でも、姉さんは伯爵の地位は持っていたがフォンティーヌに行く気は無かったはずだ。姉さんは綺麗な景色より、家族を選ぶ人だ。

「それはね、エリックが心配だからよ。」

「？　正直、俺としてはルイズの方についていて貰いたいんだけど。」

「ルイズには母さまと父さまがいるわ。でも、エリックには誰もいないでしょ？」

「それくらいは大丈夫なつもりだけど？」

「・・・今さっきルイズの事を考えてたんでしょ？　あなたは誰かいないとすぐに潰れてしまうわ。」

・・・やっぱり苦手だ、超直感タイプ。

「それで、何を隠しているのかしら？　さっきみたいに話を逸らすのは無しよ。」

「・・ま、やっぱりカトレア姉さんを騙すのは無理か。」

「姉を騙そうとするなんて悪い子ね・・。どこで育て方を間違えたのかしら？」

「これでもかなりの大物を騙したあとだから絶好調のつもりだったんだけどね。そして、悪いのは俺でも、育て方でもないよ・・ブリミルだ。」

そのあと虚無について話した。両親は知ってること、エレオノール姉さんにはアカデミーで調べてもらってること、大隆起とワルド子爵夫人が調べてること、そしてルイズが俺のスペアだということも話した。

ルイズの事については、喋らされたの方が近いけど。エレオノール姉さんはスペアの件については知らない。

「それは・・・ひどいわね。」

「あぁ、ハルケギニアを救うという意味では正しいシステムなのかもしれないけど、俺たちヴァリエール家にとって、ルイズにとってこれほど酷いシステムはないと思う。担い手である自分だって、いまだに呪文一つ手に入れてないしね。」

「・・・ルイズには伝えないの？」

「姉さんはどうするべきだと思う？」

「わたしは伝えるべきだと思うわ、あの子はそんなに弱い子じゃないもの。前にも言ったけれど、わたしはあの子とあなたのおかげで今まで頑張れたのよ。」

やはり、伝えるべきなのだろうか？　両親は俺から話せと言った。つまり俺の判断に任せるということだろう。

「けどね、エリックが話すべきだと思うときに話しなさい。それが一番いいと思うわ。」

「父上達と同じことを言うんだね。」

「だって親子なのよ、似るのは当たり前よ。」

・・・似てないと思うぞ？　性格もそうだけど、ある一部分というか・・・柔らかい双丘というか・・・

「ふふ、エリックも男の子なのね。」

やっぱり苦手だ・・・超直感。
この何年にもわたって磨かれたポーカーフェイスを見破るとか、マジやめてくれ。

「わたしもお嫁さんに貰ってくれないかしら、ジェントルマン？」

「「も」ってなにさ。「も」って。」

「あら？　姉さまをお嫁に貰うんじゃなかったのかしら？」

いや、エレオノール姉さんはマジで勘弁してくれ。ってか、いつ聞かれたんだあの冗談。「鳥さんから聞いたわ」とか言われそうだから聞かないけど・・・

それにしても、なんかもの凄い近親相姦ドロドロコースの匂いを漂わせてるこの冗談流行ってるのか？

「・・・わたしね、お嫁さんになるのが夢だったの。」

「「だった」なんて言っちゃいけないよ、姉さん。フォンティーヌで療養すればきっとよくなるさ。」

「自分の体の事は自分が一番わかるものよ。それともあなたが治してくれるのかしら？」

「・・・・・・・・・いいよ、治してあげる。」

ちょっと驚いてる、めずらし。

「冗談でも嬉しいわって言うつもりだったんだけれど・・冗談じゃないみたいね。」

「そんな悪趣味な冗談を言う趣味はないよ。というより、悪趣味な冗談はこりごりだ。」

「何か考えでもあるのかしら？」

「その質問の仕方は反則だと思う。確信を持って聞いてるでしょ？・・・本当は言うつもりじゃなかったんだけど、一つだけ可能性があるものがあるんだ。でも成功確率が１割あるかないかで、できたとしても７～１０年後。姉さんが珍しく弱気なこと言うから、うっかり口を滑らせてしまいましたぁ。」

「ふふ、なら父さまたちにはまだ言わない方がいいわね。」

「うん、よろしく。」

しまったかなぁ、口滑らした。ルイズの後だから、なるべく悲しむ家族を見たくなかった・・ってとこか。

「ねぇ、エリック。」

「ん？」

「あなたと一緒にフォンティーヌに行けてよかったわ。」

「・・・・・」

・・・・なんだかカトレア姉さん以外の家族がみんなツンデレなせいか、直球で言われるのに慣れてないな。痒い。

「あと、一日一つお話をしてもらいたいわ。あなたのルイズにあげた本、本当に面白かったわ。」

「・・姉さん、俺は父上の代わりにフォンティーヌ領を治めなきゃいけないから結構忙しいんだけど。」

「わたしが10年後まで生きてなきゃいけないのはエリックのせいなのよ。男の子なんだから頑張りなさい。」

「・・・言わなきゃよかったかも。」

「わたしは聞けて嬉しかったわ。」

・・だから、直球は痒いからやめて。

そして、未来に『千夜一夜物語』著：カトレア・ラ・フォンティーヌ　なんて物ができるのもまた別の話。

そんなこんなで、これからフォンティーヌ領でのんびりスロ～ライフな状況になるだろうと思っていたが、そうは問屋が卸さない。

「うおっ！」　「きゃっ」

突如、馬車が止まった。

「トニー！　なにがあっ「やっほー、エリック。」・・・ん？　ジェシカ？」

「そうそう、あたし。魅惑の妖精亭のジェシカよ。」

「・・・こんなところで何してるんだ？」

「ふふん、本日をもってこの不肖ジェシカは、エリック様の使い魔になりに参りました！」

「・・・・・」

「・・なんてね。」

どうやら、俺にスロ～ライフなんて似合わないらしい。

「ちょっと～、少しは反応ぐらいしなさいよ！」

・・・フォンティーヌも騒がしくなりそうだ・・

道中での会話とのことです（後書き）

カトレアもフォンティーヌを名乗ってるのは、エリックがいつかヴァリエールに戻るときに彼女がその地位を引き継ぐためです。

エリックがどんどん謀略系に進化していってる気がする・・・

そして、登場ジェシカ。

当初から、このタイミングで復帰予定だったのだが・・・危なかった。感想でも空気化し始めてたので本当に助かった。

いつも読んでくれてありがとうございます。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ１（前書き）

前話を綺麗に終わらすために、突然現れた理由などをこっちに全部まわしてました。
そのせいで色々思うところがあったと思われます。申し訳ありません。

本当は、明日掲載するつもりでしたが、急いで書きました。
明日も、頑張ってもう一話あげます。

いつも読んでくれたり、感想などを書いてくれてありがとうございます。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ１

突然、ジェシカが現れた。
まぁ一緒にいる従者、俺がいつもジェシカに手紙と水の秘薬を渡す連絡係、を見て、なぜここにいるかは予想がつくけど・・・

「んで、なんでここにいるんだ？」
「いつも通りに贈り物と手紙を貰った時に言伝も貰ったのよ。あんたが落ち込んでるだろうから、元気づけてやってほしいって。」
うん、予想通りだ。ルイズの件は母上の入れ知恵だったから、この言伝は父上だろう。あの人、さりげ魅惑の妖精亭とコネクションあるし。

「でも、あんまり落ち込んでないみたいね。」
「俺には、偉大なる姉パワーがあるからね。」
「ふふ、そういわれるとなんだか恥ずかしいわ。それでエリック、そちらのかわいい子はどなたかしら？」
「うん、こっちがジェシカって言って、さっき説明した使い魔候補の子。ジェシカ、こっちが俺の偉大なる姉、カトレア姉さんだ。」
「あ、えっと・・、あたしはジェシカって言います。エリック様とは・・え～っと・・運命的な出会いをして、ともに一夜過ごして、それから文通させてもらってる仲です。よろしくお願いします、カトレア様。」

そう言いながら頭を下げるジェシカ。絶対あの下げてる頭はニヤリと笑ってる。賭けてもいい。
こいつの場合はあんな客商売のまっただ中にいるせいか、人の距離、どこまでのジョークなら相手が許せるかなど対人関係スキルがやば

い。さすが未来の魔性の女、チップレースの女王。

「あらあら、エリックも男の子ねぇ。ジェシカちゃんもわたしと話すときは、普段通りでいいのよ？」

「あ、はい・・ありがとう、カトレアさん。」

彼女は、もちろん公私の区別はつけられる人だ。というより、平民、特に客商売を生業とする人達の必須スキルなんだと。俺とジェシカの付き合いはかれこれ４年か５年たつ。彼女しか友達がいない俺っていったい・・・、お忍びでも結構遊びに行ったし、もちろん父上同伴。ということで、敬語なんて論外だぁという口論のもと今の付き合いがある。

あれだね、　　幼馴染サイコー

「そんで、ジェシカ。本音を言うと、俺はお前が俺のためだけにわざわざ来るなんて甘い幻想を持っていない。手紙に『落ち込んでんじゃないわよ、バカ！』とか書かれてる手紙を送ってくるような奴だと認識してる。そういう冗談は置いておいたとしても、今お前の母上が大変だったんじゃなかったのか？」

「・・・それについて、頼みがあるの。」

「頼み？　正直あれ以上の水の秘薬はないよ。」

「そうじゃないの。あたしのお母さんがもう長くないのは分かってるわ。それで、最後にどうしてもあなたにお礼を直に言いたいって頼まれちゃって・・」

なるほど、了解。たしかにそれは手紙ではダメだ。平民が貴族を呼び出すとか、仲が良くても越えちゃいけない線は超えないところは

さすがだね。

「姉さん。」

「ふふ、わかったわ。エリックも男の子だものね、好きな女の子の前くらいではかっこつけないと。」

それ言ったら台無しじゃね？

「ダルシニ、カトレア姉さんを先にフォンティーヌに送ってくれ。トニー、すぐに荷物を載せてる馬車の一つを空にしてくれ。」

「それなら、問題ないわ。わたしのお友達たちは歩いてこさせるから、すぐに一つ馬車が空くわ。」

そう言うなり、一つの馬車から大量の動物たちが現れ、瞬く間に一つの馬車が空になった。

「ねぇ、エリック？」

「ん？」

「貴族様ってみんなあんなことできるの？」

「いや、あんなことできるのは姉さんだけだ。準備ができた、すぐに行くよ。」

そう言いながら、馬車に乗り込む。すこし動物くさいのはご愛嬌。

「トニー出発してくれ。カトレア姉さん、ありがとう助かった。」

「いいのよ、わたしは先にフォンティーヌで待ってるわ。うまくやるのよ、エリック。」

こうして、俺達はトリスタニアに向かった。

「突然ごめんね。」
「大丈夫、問題ないよ。それに、ジェシカの母上にも世話になったからね。」
「今のエリックって・・なかなかかっこいいわね。」
「御世辞を言っても何も出ません。」
「今は、まじめよ。」
「常に不真面目だから説得力がなくなるんだよ。」

やはり、軽口をたたきあえる仲ってのはいい。ヴァリエール家も好きだけど、やっぱりこういうのも性に合う。
家では、こんな会話をしてくれる、もしくはできる人がいないからなぁ。

「それで、時間はどれくらい残ってる。」
「・・・あと1週間あるかないかだって。」
「そうか・・・」

水の秘薬だって万能じゃない。あれは本来、水メイジと併用で使うことで最高の効果を発揮する。
さすがに水メイジは贈り物として贈れなかった。もう少し何とかできたかもなぁ。

「・・一つ、言っておくけど、あたしはあんたに感謝してるわ。」

「知ってるよ。」
「知ってるだけよ、受けとってないわ。」
「ごめん、意味が分からないよ。」
「・・・貴族たちは、水メイジと秘薬のおかげで長生きできるけど、私たちは違う。これはわかる？」
「うん。」
「基本的に５０歳にならないうちに私たち平民は死ぬわ。孫の顔が見れるか見れないかぐらいの時ね。」
それは、知らなかったな。
「そんな中、あたしのお母さんは本来よりも４年以上も長生きできたわ。」
「それで？」
「だから・・・あんたはそんな顔しないで！　エリックにはそんな顔して欲しくないの。」
・・・ふぅ、まだ万能癖がついてるのかね。俺なら何でもできる、オリ主にできないことはないっていう英雄願望。
価値観の違いも大きいかもしれないな。まだ前の常識が少し抜けてないところがあるかも。
「そんな顔であたしのお母さんに会うなんて許さないからね、これだけは言っとくわ。」
「・・・了解した。」
そんな気まずい沈黙のまま、俺たちの乗る馬車は魅惑の妖精亭にた

どり着いた。

俺はシリアスをやりにきたはずなんだけどなぁ・・・・

「エリックちゅぅぁぁん、来てくれたのね、待ってたわぁあ。」
「お父さん！！　今はまじめなムードなの！　後からにして！！」
いつも俺がお世話になってるスカロンさんがみんなの知ってるスカ

ロンになってた。
予想外ではない、と囁いてくる自分の回るようになった頭が空しい・・。これは外れてほしかったなぁ・・
そんな風に俺が呆然としてるうちに、いつの間にか引っ張られて、ある部屋の前に辿り着いていた。

「ごめん、アレについてはあとで説明するから。」
「ごめんなさい、正直聞きたくないです。」
俺の純粋な気持ちを受け取ってくれ。
「ちゃんとした理由があるのよ！　・・・はぁ、今はいいわ。」
「あぁ、病人の部屋の前で騒ぐのは常識違反だよジェシカ。」
「だから、あんたのせいでしょう！」
「いや、１００％スカロンさんだろ。」
「・・・否定できないわ。」

閑話休題

「じゃあ、行ってくる。」
「待ってエリック、少し歯を食いしばって。」
「断る。それは俺を一度張り飛ばして「気合入ったでしょ？」とかいう流れだ。」
「よくわかったわね。」
「人生の半分の付き合いだ。わかるさ。」

「ねえ、エリック。・・あんた、今、いい顔してるわよ。」

そう言いながら、彼女は去って行った。扉の前に残ってるのは俺一人。

それにしても、敵わねえなぁ。ここの世界の子供ってみんなマセてる気がする。

まぁ、２０前に結婚は当たり前。平民は5歳になる前から働いてる世界だから当たり前と言っちゃ当たり前なんだが・・

よく思う。この世界の人たちは一人一人が強い。ガキであっても老人であっても前の世界じゃ持てないような力強さを感じる。

俺も少しは強くなったかな・・・。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ１（後書き）

急いで書き上げたので、これについては改訂するかもしれません。
少しできがイマイチ。
個人的にはもう少し描写を付け足したい。

前作は軽い雰囲気だったので、ジェシカママ死亡フラグを入れたくなかったので、皆様に色々思うところがあるような作りになりました。ごめんなさい。

前話では、カトレアのほほんからのジェシカ復帰でいっぱいかなと思ったんですよ。
言い訳ですけれどｏｒｚ

中世パリの平均寿命は４５歳らしいです。それを参考にしています。
間違ってたらごめんなさい。

魅惑の妖精亭の人と敬語じゃないのは、昔からの馴染みなのと、エリックがやめてくれと求めたのと、あの人たちなら原作見てる限りこうなるだろうと思ったからです。

次の話は、色々考察して作ったので、それはないだろうとおもわれるかもしれませんがご容赦を・・・

読んでくれてありがとうございました。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ２（前書き）

ジェシカママです。オリキャラです。一発役だけど、色々印象に残るように頑張る人です。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ２

「失礼するよ。」

「こんな格好ですみませんね、エリック様。お待ちしておりました。」

「いつも通りでいいよ、サンドラさん。」

そう答えながら、サンドラさんが寝ているベッドの横に置いてある椅子に座る。

この部屋は『魅惑の妖精亭』の中で、一番上等な部屋というわけではない。そんな見えないところにこの人らしさを感じる。

サンドラさんは肩口で切りそろえてる茶色のウェーブがかった髪を持つ女性だ。年齢は４２。今は彼女の美貌は見る影もなくやせ細っているが、かつてはこの魅惑の妖精亭で一番人気だった娘らしい。

「お礼を言うまでは、この口調でお願いします。エリック様、本当に今までありがとうございました。あなた様のおかげで、ジェシカの成長を見ることができました。母として、これほどの幸せはございません。本当にありがとうございます。」

「どういたしまして。」

ハルケギニアでは謙遜が嫌われる。「いえいえ、それほどでも～」とかそういう類のものは一切ない。最初は馴れなかったが、今は礼をしっかり受け取るのは気持ちのいいものだと感じてる。

「じゃあ、こっからはいつも通りね。死ぬ前に会えてよかったわエリック。あの坊やがこんなに大きくなっちゃって。」

「おばさんには世話になったからね。」

「全くよ。次期公爵様がこんなところに遊びに来るなんてねぇ。それに公爵様も一緒に来るのよ、驚いちゃったわ。あなたのお父様も昔はここの常連でね、その頃はサンドリオンとか名乗って3バカとか言われながらよく私にチップをくれたものよ。」

「その話はもう聞いたさ。いつか父上を脅すためのネタとしてしっかり保存中だ。」

「相変わらず、子供らしくない子供ね。」

「自分の娘にもそれを言ってあげたら？」

「平民の子はみんなあんな感じよ。貴族の坊ちゃんがあなたみたいになることは滅多にないはずなんだけれど。」

「俺もいつの間にかジェシカに毒されたってことでしょ？」

「そうなのかもね。」

心地のいい時間だ。本当にこの人が死ぬなんて思えない。

「エリック、本当にありがとうね。」

「秘薬の礼ならさっき受け取ったよ。」

「いえ、ジェシカの事よ。」

「？」

「彼女ね、あなたに召喚された頃、友達なんていなかったのよ。」

「・・・流石に、それは無いと思うんだけど？」

「あの子の性格が悪かったわけじゃないわ。『魅惑の妖精亭』の娘だってのが悪かったの。」

「どういうこと？」

「少し長い話になるんだけど、この『魅惑の妖精亭』は、昔からあ

る老舗の店なのよ。この店の名前の由来になった『魅惑の妖精のビスチェ』なんかは、４００年前の物よ。そしてこのトリスタニアにそんなに長い期間店を構えて、ライバル店もいない。それは、何故だと思う？」

最近、頭使うことが多いな。まぁ、世の中の全てには理由がある。こういうことを考える時、俺はこの世界で生きてるんだなぁって感じる至福の時間だ。

「・・・・・トリスタニア中の店から求められてるから・・この場合は求められてる役割があるから・・・かな？」

「やっぱりあなたは聡明ね。その通りよ、この『魅惑の妖精亭』は役割がある。今は効力を発揮しないけど、かつてのトリステイン王とも契約を交わしたこともあったわ。」

「なるほどね・・・・・・うん、今ので全て繋がった。」

「流石次期ヴァリエール公爵様ね。・・・それで、答えを教えてもらえるかしら？」

「『魅惑の妖精のビスチェ』、４００年ほど前のトリステイン王がこの店の給仕との身分違いの恋に落ちて、贈ったとされる『魅了（チャーム）』がかかってるマジック・アイテム。これが鍵だ。多分、本当は逆なんだ。トリステイン王が恋に落ちた平民を匿うために彼の御膝元であるトリスタニアに『魅惑の妖精亭』を作った。」

「なら、何故彼はそんな回りくどいことをしたのかしら？」

「情報が少なすぎるから推測になるけど、多分当たってると思う予想を言うよ。そのトリステイン王の周りの貴族たちは反対するだろうと彼は思ったんだ。たとえ、妾であったとしても平民の女を一国の王の妾にするなど有り得ぬってね。もし、国王が強引にそれを押し通したとしても、彼は彼女を守り切れるか分からなかった。王宮で平民の妾を暗殺謀殺なんて誰でもできるし、周りはみんな貴族だから口裏を合わせられるしね。ここまでは、どう？」

「いいわ、続けて。」

「そこで彼は思いついた、『木を隠すなら森の中だ』と。マジックアイテムなんて高価なもの、それも彼女が着るために作ったものをあげるくらいだ。本気で愛していたんだと思う。なら、店を一つくらい作るなんて簡単だ。だけど、それだけでは安心できなかった。だから契約をしたんだ。契約内容は王宮が守るから訳あり女性を雇って働かせろ、そんな感じかな？」

「正解よ。国王はどこまでも不安だったのよ、例え王宮が守ると言ってもそれを無視する貴族がいるかもしれない。自分の愛する女性が気づいたら他の貴族の慰み者になってるかもしれない、ってね。」

「そこで訳あり女性、爆弾がついてる女性を雇うことにした。交わりさえしなければ問題ない性病持ちやどこかの高貴な貴族の隠したい妾、他国から逃げてきた女性など。そうすれば貴族たちは手が出せない。」

「その通りよ。たとえどんなに見目麗しくても、手を出してしまったらどんな事が起こるか分からないものには誰も手を出さないの。」

「そして、王は何食わぬ顔でここに遊びに来る。この店にはたくさんの女の子がいるから、パッと見では誰が王のお目当ての人物かわからない。でも、間違いなく王と平民の女は愛し合っていた。」

「そう、ここまでが、この『魅惑の妖精亭』の誕生秘話よ。」

・・なんて・・なんて綺麗な物語なんだろう・・

上辺だけ見れば、すぐに終わる話だが、いったいどれくらいの苦労があったことか。

国を纏める王でありながらも、女を愛する男でもあった王。

絶対孤高の英雄王とも、自由奔放な征服王とも、そして国のために私を捨てた騎士王とも違う、

・・・・なんて弱く・・なんて人間らしい王なんだろう。

「そして時代は移り、王と女は亡くなった。だけど、『魅惑の妖精亭』だけは残ったのよ。そして、その役割も。」

「『魅惑の妖精亭』の役割はトリスタニアにいる他の店では、下手すると娼館ですら雇えない訳ありな女たちを集めるってとこかな。たしかに、それならトリスタニア中の店から求められるわけだ。」

「もちろん、みんながみんなそうってわけではないわ。でも、誰がそうなのかはわからない。それがこの『魅惑の妖精亭』の若い女たちが、トリスタニアにいる若い女たちが、貴族たちから身を守る要塞になってる理由よ。特にこの４年間は、お忍びしなければならないほどの高貴な位を持つと思われる貴族様の馬車が来てたせいかとても安全だったわ。」

いつの間にか、俺も利用されてたか。

それにしても、自ら爆弾を抱え込み、自らの身を守る

英雄王の言葉を借りるなら、　なんと儚くも眩しき者たちか・・

「そんな『魅惑の妖精亭』で子供が生まれた、そんなことはこの店が開いてから一度もなかったのよ。」

「そこがよくわからないんだよ。こんな女の園で子供が一度も生まれなかったとか、どういうこと？」

「ここに来る若い男たちはね、お目当ての子がいるのももちろんいるけど、どっちかっていうと自分に興味を示してくれる女を待ってるのよ。」

「了解、理解した。男は自分から手を出すと下手すると爆弾の可能性がある。だから、相手から自分に手を出してくれるのを待つ、爆弾持ちはそんなことをしないだろうからそれなら安全パイ。店側もその過程でチップを大量に巻き上げる。なんといえばいいのか、聞けば聞くほどよくできたシステムだな。」

「４００年もの間、潰れてないのよ。それくらいうまくできてないと。そして結婚するものはこの店を去り、訳ありもそのうち問題が解決して去るか、長年働いた信用からトリスタニアのどこかの店で雇ってもらえるようになるわ。本当にやばいのはうちの厨房とかで働いてるしね。」

「それほどうまくできてるのに、なら逆に何故ジェシカは生まれたんだ？」

「・・・『魅惑の妖精亭』のオーナーになる条件を説明してあげるわ。この店は代々血のつながりで受け持ってるわけじゃない。トリスタニア中の店に望まれて存在してる店だわ、だからオーナーもみんなで選んで決めるのよ。この店で働いたことがあり、結婚する年齢３０歳を超えた未婚の女、そして訳ありではない女、それがわたしだったのよ。」

この店を知り、この店のために生き、訳ありの人たちを同情心というフィルターをかけずに選別できる女をオーナーに選ぶ。確かに、問題は無かったはずだ。だけど・・

「だけどそう・・恋しちゃったのよ、３０過ぎたおばさんが１０も下の男にね。そして、その男はこんなおばさんが好きだと言ってくれたのよ。嬉しかった・・、周りにも無茶だと言われながら、子供も産んだわ。」

「・・・・・・・・・・」

「オーナーを辞めようとも思ったんだけど、店の娘たちが説得しに来てくれてね。・・嬉しかったわぁ。」

そう言いながら、サンドラさんは微笑みながらゆっくり涙してた。

「でもね、周りの店はそうは思わなかった。あの『魅惑の妖精亭』に血縁関係ができてしまった。この店はトリスタニアでもかなり重要なポジションにあるの、そう思うのは当然ね。そして・・親がそんなふうに思ってると子供にも伝染しちゃうのよ。ましてや、曰くだらけの店の娘、あの子の遊び相手はこの店の娘たちだけだったわ。」

「・・・そんな時に、俺が彼女を召喚した。」

「そう、初めて同い年の、それも異性のお友達ができたって彼女は

もう大はしゃぎ。いそいで文字を覚えて手紙を書いてたわ。相手が大貴族の息子なんて全然関係なかったみたい。お忍びで来る時なんてもう何度も鏡の前に立っちゃったりして・・ふふふ。」

そんな事情があったとはねぇ。原作での町娘代表だから最初から気さくだと思っていたけど、意外と深い事情があったとは。それによく考えたら、そうだ。こんな中世ヨーロッパみたいな国で、娼館とも酒場ともいえないグレーなこんな店が普通に発生するわけないよな。

「それでね、エリック。あなたに最後の頼みがあるのよ。」

「そんな言い方したら、断れるわけないじゃないか。」

「商売の知恵よ。」

絶対違う。

「あなたに、かつてのトリステイン王みたいになってもらいたいのよ。」

「・・・そういうことか。」

「えぇ、あなたとかつての王はとてもよく似ている。2人の身分が大きく違うことも、共に惹かれあってることも・・違う？」

「いや、自惚れじゃなければあってるよ。少なくとも、俺はジェシカに惹かれてる。」

「そう・・本当はね、こんな身分違いなお願いするもんじゃないんだけど・・・私はあの子の母なのよ。」

「身分違いを気にするとか、いろいろ今更な気がするよ。」

「それもそうね。・・・じゃあ、エリック。私の娘を頼んだわよ。」

「任されたよ、・・・・義母(かあ)さん」

「・・・・いい響きね。私も本当は、息子と娘一人づつ欲しかったのよ。オーナーになる時全部諦めてたつもりだったけど・・・最後に全部叶っちゃったわ・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・ありがとう・・言いたいことは、全部言えたわ。・・ジェシカを呼んでくれないかしら。」

「最後まで俺をこき使うわけか。」

「息子は母の言うことに従うものよ。」

「全く持って、その通りだ。」

そう言って、俺は席を立った。
最後に見た彼女の微笑みは多分一生忘れないだろう。
静かにうれし涙を流しながら微笑む・・俺のもう一人の母だ。

「この４年間・・本当に楽しかったわ、ありがとう・・・わたしの大事なむすこ・・」

俺は、何も答えずにジェシカを呼びに行った。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ２（後書き）

魅惑の妖精亭についての勝手な考察設定です。
矛盾は無いと思いたい。あんな店が自然発生するはずがない！　と頑張って考えた結果こうなりました。
でも、こんな風に考えると４００年前のトリステイン王はなんてロマンチックでかっこいい奴なんだろうと思いませんか？
勝手な自分の意見ですが（下手すると暴論ともいう）、二次創作はすでにある設定の中に妄想を膨らませる事が最大の楽しみだと自分は勝手に思い込んでいます。
色々思うところがあるかもしれませんが、今回も読んでくれて、ありがとうございます。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ３

「エリックちゃぁん、ちょっとこっちで一緒にお酒しな～い？」

・・ジェシカに伝言を伝え、少しこれからシリアス考察モードにでも入るつもりだったんだけどなぁ・・・

「わかった！　わかったから抱きつかないで！！」

「あら～ん、いいじゃない？　家族みたいなものでしょ、ワ・タ・シ・タ・チ♪」

いや、一つ言っておくけど、俺は原作知識っていうちょっとした覚悟があったからいいけど、なかったらいきなりのこの豹変はマジで引くぞ？　ジェシカのことほっぽってここ来なくなるかもよ？

「とりあえず・・、スカロンさんが次のオーナーになるってことなんだね？」

「ふふふ、やっぱり気づいてるのね。そんなエリックちゃんにはワタシからのあつぅいヴェーゼを・・」

「いや、マジでいらないから！　あと気づいてるからその言葉遣いもやめて！」

説明すると・・・無理して自分のオカマキャラを前面に押し出そう

としてる筋肉ムキムキのおっさん・・
字面だけ見ると半端なく気持ち悪いな・・・。いや、現実を見てもかなり気持ち悪いんだけどさ・・

「気づいてるのに止めて欲しいなんて、ワルイ子ね。」

「・・最後ぐらいいいんじゃないか？」

「最後だから、そしてこれがワタシの誇りだからやってるの。それにサンドラの頼みなのよ。」

「・・・『魅惑の妖精亭』のオーナーは、『男』であってはならない。やっぱりそういうことなんだね？」

「ええ、そうよ。」

「正直言うとさ、スカロンさんじゃなくても良かったんじゃないか？　他にも条件を満たす女の人はいたと思うんだけど。」

「エリックちゃん、これからはミ・マドモワゼルと呼びなさい。それにアナタはワタシがどれだけこの場所を想ってるか理解できてないみたいね。そうね・・いい機会だから教えてアゲルわ。」

「いや、遠慮したいんだけど・・」

「イヤよ、これからワタシのだぁいじなムスコになるエリックちゃんにはママ聞いてもらいたいわぁ♪」

あのサンドラさんとの会話は打ち合わせ済みってわけですかい。でも、俺はもう後悔し始めてるんですけど・・

「・・ワタシにもね、若いころがあったのよ・・」

（ツッコミを入れるべきだろうか？）

「ワタシはタルブって村で生まれたのよ。葡萄が良く実るいい村よ、でもその頃のワタシは葡萄なんて嫌いで、一人単身で首都トリスタニアに来たわ。」

「ワインが有名だね、それにヨシェナベや『竜の羽衣』なんかもある所だね。」

「あぁん、エリックちゃん知ってたの？　これもウ・ン・メ・イなのかしら～♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・」（もう口を挟むのやめようかな・・・）

「・・夢とか希望を持ってトリスタニアに来たのは良かったけど、誰もワタシを雇ってくれなかったわ。」

「？」

「この黒髪よ。タルブの村では気づかなかったけれど、ワタシの黒髪は珍しすぎたのよ。異教徒かもしれない、東方の出身かもしれな

い、要するに誰かの保証もあるわけではない得体のしれないおのぼりさんだったってわけね。」

「言われてみればそうだね。俺はジェシカで（前世でも）見慣れてるから黒髪って好きだけど、初めてみたら少し警戒するよ。」

「あら？　エリックちゃん黒髪が好きなのねぇ、それはワタシに対してのコ・ク・ハ・ク？　なのかしらぁ？　でも、そんなワタシったら・・」

「いい加減シリアスやろうよ・・」

「それもそうね。・・そして、ワタシは女じゃなかった。それどころか畑仕事で鍛えたこのタクマシイ肉体がその時は逆に印象が悪かったのよ。『魅惑の妖精亭』では、訳ありでも女なら雇ってもらえるって噂を聞いて、ダメモトでここの門を叩いてみたわ。」

「・・・・・・・・」

「後は想像通り、周りの妖精さん達もトリスタニアの店も反対したんだけど、サンドラはワタシを受け入れてくれたわ。彼女のために頑張ろうって思って働いていたら、それが恋になって、愛になって・・・そしてジェシカが産まれたわ。」

スカロンさんは既にこの『魅惑の妖精亭』では一番の古株だ、１０年以上働いてる。本来若い娘のみ雇うからこの店の入れ替わりが激しい、５年もいればかなりの古株だ。それだけ働いたら、どこか別の店で雇ってもらうか、結婚してるかだが、スカロンさんは残ってる。かなり思い入れがあるのだろう。・・当たり前と言ったら当た

り前か。そこらへんもスカロンさんがオーナーをやるのに不満が少ない理由なのだろう。１０年以上積み重ねた信頼か・・・カッコイイな、今の見た目アレだけど。　信頼壊れるんじゃね？

「ジェシカが産まれた時、ワタシはサンドラの茶色いウェーブの髪を継いでほしかったんだけど、彼女は黒髪だった。あの子の水色の瞳はサンドラの瞳だけどね。」

「・・・俺は黒髪の方が好きだから、問題ない。それじゃあ不満か？」

「それはやっぱりワタシのことを・・・なんてね。それはジェシカに直接言ってちょうだい。あんたもいつまでも子供らしく言葉遊びしてないで、たまには男らしく言ってやりなさい。」

「それは、今のスカロンさんに言われたくないよ。」

「ミ・マドモワゼルよ、エリック。」

「はいはい、ミ・マドモワゼル。」

誤魔化したな。

それにしても・・

本来、嫌われる黒髪を望み召喚されたジェシカ

彼女は、かつて身分違いの恋をして愛し合った王と平民の女が作った店の唯一の娘で

その時期、彼女は孤独だった

召喚される幻獣は本来望んで召喚される。

それは、もしかしたら始祖の使い魔である人間たちもそうなのかもしれない。

シェフィールドは東方の神官で愛する人を望み、ジュリオは孤児だ、その可能性は高い。サイトもパソコンに来たメールは母親からしかなかった、もしかしたら彼も孤独だったのかもしれないな。だから非日常で理不尽ではあったけど、この、人々に力があふれてるこの世界がそこまで嫌いじゃなかったのかもしれない。

「エリック、最後に『父』として頼みがある。」

何を言うかは予想着くので、姿勢を正す。

「・・ジェシカを頼む。」
「断る。」

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

「理由を聞いても？」

「言っておくけど、９歳になったばかりのガキに何を求めてるんだよ。サンドラさんならまだしも、まだあと１０年はピンピンしてそうなスカロンさんに頼まれる筋合いはないよ。それに、ジェシカにはまだ親が必要だ。」

「・・・・それもそうね。ワタシとしたことが弱気になってたみたい・・・、ありがとう、エリックちゃん。」

「どういたしまして。」

「あぁ、エリックちゃんやっぱかっこいいわぁ。ワタシもお嫁さんになってあげるぅ！！」

「だからなにその冗談！！　流行ってんのかよ！！？」

そのあとは、『魅惑の妖精亭』らしいどんちゃん騒ぎで夜は更けていった。

もうあのダンディーなスカロンさんは見れないようだ・・・

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ３（後書き）

難産。スカロンって難しい。
個人的に少し出来がイマイチ・・

訳ありの女性は、スカロンがムキムキダンディー状態だったら店の扉を叩きにくいと思うんです。私の弱みを握ってこの『男』は私に何をやらせるつもりなんだろう・・・って。
知り合いに対しては、絶大な信頼を持っててても、やはりオカマになる方がいいと判断したんだと思います。ダンディーな男よりオカマの方が知らない女にとっては信頼できるということです。
オカマバーというのは、愚痴や悩みを話すには一番いいところらしいですよ。

前見せた友人に、『双子の兄～』のタイトルや最初の１話とかと最近の内容の落差がひどいと言われました。
えぇ、一応、自惚れでなければ、褒められてるんだと思います（？）
その・・・なんといえばいいのやら、やっぱりタイトル変えた方がいいと思いますか？
応えてくださると本当にありがたいです。

いつも読んでくれてありがとうございます。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ４

あれから二日経ち、サンドラさんは亡くなった。
彼女の葬儀もその日のうちから始まり、トリスタニア中から人が集まった、いや、トリスタニア以外の町や村から来た人までいた。女性の割合が多いのは、やはり彼女がどれだけこの店に残したかを物語ってるようだ。

そして夜、『魅惑の妖精亭』から光の道が延びる
トリスタニア中の店が持ち寄った一つ一つのランタンや松明が
トリスタニア郊外にある墓地までの道を照らす
街灯などないこの時代、この町に、
トリスタニアの影を背負う『魅惑の妖精亭』
そこのオーナーが亡くなった時のみ現れる道
別名……『妖精の帰り道』

彼女、サンドラさんはそう思っていなかったに違いないが、『魅惑の妖精亭』のオーナーは、自分を殺し、トリスタニアのために捧げられる人身御供の意味合いがある。
問題のありそうなものを一か所に固め、問題があれば、そのオーナーを差し出す。

この『道』は、そんなオーナーへの最後の手向けであり、感謝でもある。

かつてのトリステイン王のようになれ、と貴女は言ったけど…

オーナーになりながらも家族を持った貴女こそが、

かつてのトリステイン王に一番似てたんじゃないのかね……

・・・・・サンドラさん？

魅惑の妖精亭の2階の窓から、光の道を運ばれていく彼女を見ながら、俺はそんなことを思っていた。

次の日、フォンティーヌに向かう馬車の中に俺とジェシカの二人がいた。御者はもちろんトニーだ。

「今更なんだが、本当に良かったのか？　あっちもあのスカロンさんじゃ当分大変だと思うんだけど…」

「本当に今更ね。でもいいの、これがあたしの運命なのよ・・きっと。」

「『魅惑の妖精亭』のオーナーになる、多分それがジェシカの夢だったんじゃないの？」

「あたしが、どこかの高貴な貴族に目をつけられてるって噂が流れてるからどっちにしろ無理よ。貴族から守るべきオーナーが貴族の妾なんて…よっぽど、他の人たちが理解してくれないとできるわけないわね。そういえば、そのせいで男友達もできなかったのよね～。」

「…なんかごめん。」

「はぁ、そういうところは相変わらずね。そこは『俺が幸せにしてやる～』とかの男らしいセリフの一つや二つ言えればいいのに。」

「そういうのがお望みなのか？」

「あたしもこれでも女だからね、囚われの姫的に白馬の王子様に助けられたり、身分違いの恋に悩まされたりしたいわけよ。」

「後者は、すでになってると思うのは俺の間違いか？」

「あたしは、あんたの事が好きだなんて一度も言ってないけど？」

「俺はジェシカの事が好きだけど？　いや、愛してる。」

「！！・・・いきなりの告白は無いんじゃないの？」

「男らしいセリフを言ってほしいと言ったのはどこのどなただったかな？」

「顔が若干赤いわよ、それは男らしいとは言えないわね。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・参りました。」

「よろしい。」

こいつに口で勝てる日は来るのだろうか…。ムリだろうなぁ…

「エリック。」

「ん？」
「あたしもあんたを愛してるわ。」
ぐ・・、なんと絶妙のタイミングで切り込んでくるのやら、この小娘は。

「そういえばさ、あたしはあんたの使い魔になるんだっけ？」
「そうだよ。俺が『扉』を開いたら、多分ジェシカの前に『扉』が開く。ジェシカがそこを通ってきて、キスして契約。ルーンが頭、右手、左手もしくは胸に刻まれる。痛いらしいから頑張れ。」
「それくらいは頑張るわ。でも『多分』ってのは？」
「限りなく低い可能性だが、俺がジェシカ以外の人を呼び出す可能性が無くも無い。」
「ちょっと…それやばくない？」
「あぁ、やばい、主にジェシカが。他の人が来たら、ジェシカは用済みだからね。バイバイ今まで楽しかったよ、スカロンさんによろしく。」
「カッチーン」

（カッチーンって口で言うんだ…）
「トニーさん、馬車止めてくれませんか？　エリック馬車降りて、ここで契約するから。」
「はいはい。だけど、とりあえず人気のない場所でだよ。（大丈夫だと思うんだけどねぇ）」

そうして、馬車は森の中の人気のない場所へと向かった。
「トニー、誰か見てる気配は？」
「全く問題ありません、エリック様。」
「うん、じゃあトニーは馬車をよろしく。」
流石にトニーでも見られるのはなんだかなぁ、俺にそんな趣味はない。

「んじゃあ、やるよ。」
「ちょ、ちょっと待って、あたしにも心の準備みたいなものが必要なのよ。」
「お前に一番必要ないものにしか聞こえないのは何故だ？」
「・・・もし、あたしじゃなくてもあたしを捨てないよね？」
「・・・はい？」
「あんたにはわかんないかもしれないけど、あたしにとってあの『扉』は希望の光だったのよ…」

あぁ、そういうことか。冗談めいてたから気づかなかったけど、こいつ本気で心配してる。
サンドラさんの話だとあの召喚から彼女は変わったみたいだし。

「本当は言うつもりなんてなかった追加情報だけど、この『扉』は愛する者、心から強く想う者がいるとその人の前に開くんだとさ。」
「・・・それって、もし開かなかったらあんたはあたしのこと本当は好きじゃないってこと？」
「ジェシカ・・さすがにそれは怒るぞ？　それくらいは俺を信用しろ。」
「・・ふぅ、それもそうね。ごめん、不安になってたみたい、始めて。」
まだ不安そうな顔をしてるが・・、いやさっさと安心させよう。

「我が名はエリック・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命（さだめ）に従いし、“使い魔”を召喚せよ」

そして、俺とジェシカの前にはそれぞれ一つづつ『扉』が出現した。
「ほら、問題無かった。さっさとそれくぐってこっち来い。」
「う、うん。」
ジェシカが『扉』くぐり、こちらに現れた。なんだか本当にあっさりだ。
個人的には、実はひと波乱あるかも・・と身構えていたがなくてよ

かった。

「えっと・・ただいま？」

「はい、おかえり。」

「問題なかったな。やはり俺の愛は強固だということだ。」

「あたしは、あんたがどこでそんな歯が浮いた様な褒め方を覚えたのか知りたいわ。」

「トリステインの貴族はこんなふうに褒めなきゃいけないんだよ。」

「なんか、ごめんなさい。」

口で、勝ったはずなのに悔しい。

「どうする？　ファーストキスがルーンを刻むからかなり痛いって思い出になると思うんだけど？」

「いいじゃない、ファーストキスがあたし達を一生繋ぎ続けるんでしょ？　死が二人を分かつまで・・・なんてね。」

「はいはい・・・では、」

「我が名はエリック・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司どるペンタゴン。『死が二人を分かつまで』、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

「「・んっ・・」」

重ねた唇が離れたと思ったとき、ジェシカの両手が俺の首を抱きしめた。　はい！？

「・つぅ、・・ちょっと・こ・のまま・・・んっ・・あ・くぅ・・・・あ・・・ぁ・く・・」

彼女は、俺の首に両手を回してるわけで、口が俺の耳の横にあるわけでして・・・・うん、エロい・・
いや、ルーンの痛みに耐えてるのは分かるんだけどさ・・

「はぁ・・はぁ・・はぁ・ごめん、思ったより辛かったわ。」
「まぁ、無事終わってなによりだ。それで、どこが痛んだか確認したいんだけど、どこが痛んだ？」

「え・・えっと・・その・・胸なのよ・・」

「本当か!!？　まずいぞ、それは拙すぎる。ジェシカ確認するから、見せてくれ。」
「い、いや、あのさ・・」
「どうした？　もしかして二つ以上のルーンが出たか？　それにしても『胸』、まさかリーヴスラシルがここで出るとは・・最悪だ。」
「あ・あの・・エリック？」
「ん？　大丈夫だよジェシカ。正直一番拙いのが出たのは否めないけど、それでもなんとかするからさ。心配しなくてもいいよ。」

リーヴスラシルがここで出てくるとは・・。エレオノール姉さんに調べさせてはいるが、未だに手がかりが出てこない記されることも憚れる第４の使い魔。原作知識から予想つく役割が一つだけあるけど・・もし、その予想が当たるのならば本当に拙い。どうしたものか・・・

「あのさ、エリック？」
「ん？」

「その・・ごめん、全部ウソでした！！」

「・・・・・・・・・」

「いや、あのね。確認するとか言ったから、胸とか言えば少し慌てるかな～とか悪戯心を刺激されたっていうか・・」

「・・・・・・・・・」

「その、抱きしめちゃったから少し照れ隠しのつもりもあったわけで・・」

「・・・・・・・・・」

「ごめんなさい」

とりあえず殴った。グーで、頭を。

ジェシカは頭を抑えながら、地べたに座り込んでる。

「・・ツゥ、殴るのはやりすぎなんじゃない？」

「言っていい冗談と言っちゃ悪い冗談がある。今回のは、お前の命とか世界の命運とかそういうのが色々かかってたから、なおさらだ。」

「・・あたしの胸見たくないの？」

「自分の年齢を考えろ、たわけ。」

「最近膨らみ始めてきたのよ？　この年で膨らみ始めるなんて将来巨乳間違いなしの逸材よ。」

「コメントしづらい！　思ったんだけど、お前男がどういうものか知るべきだ。」

「店でいつも見てたから問題ないわ。結局男は胸が好きなのよ。違う？」

間違ってはない、間違ってはないけど、恥じらいとかそういうもの

が皆無だコイツ。
それにジェシカが将来巨乳になるのは既に知っている！！

「・・ねぇ、『胸』のルーンってそんなにやばい奴なの？」
「正確には『神の心臓』って呼ばれてる。伝説でも記すことさえ憚れるって書かれてるほどのものだ。」
「本当にごめんなさい。」
「わかればよろしい。それで、結局どこだった？　予想では、『左手』なんだけど。」
「うん、正解、『左手』よ。これどんな意味があるの？」
「あとで、馬車の中で説明してやるから、とりあえず戻るよ。あと、はいこれ手袋。それを他人に絶対に見られないようにしなきゃいけないから用意しといた。」

そう言って、用意しておいた白い指ぬき手袋を渡す。これも二次創作では代表的なガンダールヴグッズの一つだと思う。ハルケギニアの人からは『武器』と認識されず、自分は『武器』と認識できる物だ。
しかし、現実は非情だ。ジェシカから何も反応がないところを見ると、彼女は手袋を武器と認識してないようだ。ハルケギニア人め・・。
そんなことを考えてたら、地べたに座り込んでるジェシカに袖を引かれた。

「あのさ・・」
「ん？」
「腰ぬけちゃったみたいなの、助けて。」

なんてよわっちい『神の楯』なんだろう。

そう思いながら、４年前に挫折したお姫様抱っこに再度トライしてみたら、案外あっさりできた。母上特性メニューが生きたのだろう。ありがとう、母上。

「これで、身分違いの恋もお姫様的ななにかもできたよ。よかったね。」

「４年前、これができなくて落ち込んでたのは、どこの非力な貴族坊ちゃんだったのかしら？」

皮肉を言ったつもりが見事に切り返された。ってか、なんで知ってるし！？

「・・何故それを知ってる？」

「あの時、あたしが狸寝入りしてたってこと。というより、いったいどこに泣き疲れていきなり地面に寝る子がいるのよ。」

「お前が思いっきりそれだと俺は思ってたんだけど・・、ってなに？　じゃあ、俺騙されたってこと！？」

「そうよ、子供のころに貴族様に難癖つけられたら、謝って、泣いて、狸寝入り。これ、平民の常識よ。さすがの貴族様も泣き疲れて寝てる子供に鞭打つことはしないのよ。」

逞しいな・・。

「ちなみに、あんたがあたしをベッドに寝かせてから、顔を覗き込んで来たり、キスしようか迷ってたのも全部知ってるわ。」

死にたい・・、穴があったら入りたい。俺の父上は井戸掘り、つまり穴を掘るのが半端なくうまいらしいが、何故俺に受け継がれなかったのだ！

「エリック。」

あぁ、ジェシカさん？　俺はただ今絶賛自己嫌悪中だから少しほっておいてくれないでしょうか？

「『聞こえないかもしれないし、わからないと思うけど、謝っておくよ。　ごめん。　いざとなったら俺一人でやるから。』」

「・・それも聞こえたのか？」

「うん、あたしはあんたが何をしようとしてるのかは分からないわ。でも、一緒に背負ってあげるわ、あたしの力が必要なんでしょ。」

「うん、正直力を貸してほしい。」

「いいよ。あたし、あんたに貰ってばっかでなんにも返して無いもん。初めての友達でもあるし、恩人でもある。ううん、違うわ。あたしが恋した人なんだもん、頼られたいし、頼りたい、あんたの隣に立ってたいのよ。」

「ジェシカ・・お前、いい女だな。」

「ふふ、でしょ。正直あんたには勿体ないくらいよ。」

「全く持ってその通りだ。」

「そんないい女から一つ頼みがあるの。」

「いいよ、なんでも聞くさ。」

「・・・優しいキスがほしい。最初のは、やっぱりちょっと痛かった。」

「仰せのままに。」

そう言って、俺達2人は唇を重ねた。

魅惑の妖精亭とのことです　Ｐａｒｔ４（後書き）

遅くなりましたぁ。
そして、終わったぁ！　『魅惑の妖精亭』編完結！！

オリキャラ一発役をここまで盛大にしたり、魅惑の妖精亭をここまで盛り上げたゼロ魔ｓｓは無いに違いない！　と言ってみたりします。

今まで、初登場してから半分空気化していたジェシカも挽回してくれたし、使い魔のルーンも手に入ったのでこれからかなり動くことになると思います。
ジェシカが、凄いませてる感じがしますが、平民は１０代後半で結婚することを考えると、今の人基準で年齢×１．５くらいの精神年齢だと思います。それに魅惑の妖精亭出身者ですからませてるはずです。

最初は、
ヴァリエールの名前で召喚したが失敗、ジェシカ大泣きエリック大慌て
急いで名前をフォンティーヌにして、成功。よかったね。
という流れだったのだが、理由付けができなかったのと、なんだかくどいなぁということで却下しました。
召喚の呪文って意外と何でもいいっぽいのがネックだったんですｏｒｚ

そして結果は、ジェシカでガンダールヴ。
なんの捻りもありません。でも今までたくさん捻ってきた分、あれ？あっさり？ってなってくれたりしないかなぁと少しだけ期待・・・

いつも読んでくれてありがとうございます。

ラ・フォンティーヌとのことです　Ｐａｒｔ１（前書き）

なんだか抑揚のない回になりそう・・

ラ・フォンティーヌとのことです　Ｐａｒｔ１

ラ・フォンティーヌの日常はとても平和だ。

朝起きて、母上が作った訓練メニューを消化。

午前中にフォンティーヌの当主としての仕事を終わらせる。この時、なにか新しいことに手を出そうなどとは思うべからずだ。安易に手を出しても失敗するのは目に見えてる。ＮＡＩＳＥＩはそんな簡単ではない。それに、領民は今まで通りというのが一番ありがたいらしい。なので、父上から習ったように無難にこなす。

午後は、ジェシカの特訓に付き合う。ガンダールヴだと分かったので、午前中は筋トレさせてる。

「あたし、お父さんの娘だからムキムキになっちゃうかもよ～。」

とか言われたが、色々悩んだ末やらせることにした。命には代えられない。波乱万丈の日々になるのは目に見えてるのだ。でも、ムキムキなジェシカはなぁ・・ヒロイン補正とかに期待しよう。

そんでもって、午後の特訓は俺がジェシカに向かって『王の財宝（ゲートオブバビロン）』する。ようは、魔法の矢の雨だ。デルフリンガーがまだ見つかってないので、魔法を避ける特訓をしなくてはならない。

戦闘チートの母上がそうしなさいと手紙に書いてたのだ、決してやべぇ、これマジ快感とか思ってない。あぁ、思ってないとも。母上の愛の鞭の素晴らしさが少しわかった気がする。

それに、怪我しても、ダルシニの水魔法が完璧すぎるほど治してくれるので問題ない。治療中にジェシカは散々文句を言ってくるが、「お前が心配なんだよ。」と言ってやる。「気持ち悪い」とか言い返された、なんて記憶は俺にはない。どうやら『忘却（オブリビオン）』を知らずのうちに習得したようだ。

そして、夜。疲れ切ってるジェシカは寝ている頃、俺はカトレア姉さんの部屋へ向かう。
例の一日ひとつ物語を・・の約束だ。寝る前に聞くと、夢でも見れそうでいいんだと。日中彼女は、エレオノール姉さんから貰った魔法の羽ペンを使いながら、俺が話した物語を自分流にアレンジして執筆してる。ベッドの上で過ごしても、一日一日をしっかり過ごしてる姉さんを見ると話す甲斐があったもんだと少し嬉しい。毎日、物語を思い出さなきゃいけないのは結構大変だが。
物語のタイトルは『千夜一夜物語』。本来、殺されないために必死に物語を毎夜話す物語だが、それではトリステイン人には受けが悪いということで、『日が沈んでいる夜に眠ると一生目が覚めなくなる呪いをエルフにかけられた少女。彼女はエルフに千夜経てば呪いは解けるだろうと言われた。彼女を救うため、少年が毎日必死に物語を日が明けるまで話す。』となった。このハルケギニアで夜が明けるまでランタンや松明の火を灯すことなんてほとんどない。油や木材が勿体なさすぎるのだ。だから、夜ずっと寝ないのはかなり辛い。

「でも、これ子供に読み聞かせる寝物語になるんでしょ？　寝たら一生目覚めなくなる設定はブラックジョークにしても、かなり性質(たち)が悪いと思うんだけど？」

「ふふ、だから一話一話の終わりに『さあ、あなたは呪いなんてかかっていないのだから、少女の分まで大事に夜を眠るのよ』で終わるの。」

「なかなかユーモアがあふれるというかなんというか……」

カトレア姉さんにも母上の血が流れてるんだなぁと思った。

そんな、平和な日々を三か月ほど過ごした。

そして今日、そのかりそめの平和が破られる。ジェシカのルーンがわかった時、すぐにヴァリエール家に手紙を送っておいたのだ。つまり、戦闘指導やこれからのジェシカの戦闘スタイルを決めるために母上を呼んだ、彼女ほどの適任はいない。ヴァリエール家が４年ほどかけて集めた場違いな工芸品もすべてこちらに持ってくるようにも頼んだ。

「母上、お久しぶりです。」

「ええ、エリック、久しぶりですね。それで・・その子が？」

「はい、私の使い魔です。『神の左手（ガンダールヴ）』ありとあらゆる武器を使いこなすことができるとされてるルーンを持ってます。」

「エリック様の使い魔をさせて頂いてます、ジェシカです。よろしくお願いします、カリーヌ様。」

「一度会ったことがありますが、あの小さな娘がこんなに立派になるとは・・時間の流れを感じますね。」

そう言いながら、母上はなんだか感慨にふけっている。

「では、時間も惜しいです。さっそく始めましょう、ヴァリエールの私兵団から何人かを連れてきたので相手には問題ありません。」

それから、1時間ほどたったのだが…

「私が直々に鍛えているヴァリエールの私兵団が魔法なしとは言え、10に届くか届かないかの娘一人に負けるとは何事ですか！！　これは訓練をさらに厳しいものにする必要がありますね・・。」

母上の怒気（オーラ）がやばい。まぁ、つまりはジェシカのやつ、無双してくれちゃったわけですよ。

とりあえず、母上の矛先を逸らそう。私兵団の人達が気の毒すぎる。彼らのうるうるしてる目が全部こっちに向いてるし・・。ってか、泣きそうなおっさんたちのキラキラした目とかキモイからやめてくれ。ちなみにジェシカも疲れたのか、私兵団の方たちと一緒に休憩中だ。

「母上。結局どうすれば一番いいと思いますか？　色んな武器を使わせてたみたいですけど…」

「……理想は全ての武器を持ち歩くことです。全ての武器が使いこなせるのは、見てわかりました。なので、状況に応じて武器を使い

分ける、それがガンダールヴの理想です。」

まぁたしかに、それが理想っちゃ理想か。何も剣一つなんて効率の悪いことする必要なんてないもんな。

「エリック、ガンダールヴについて質問があります。」

「私にわかることでしたら、なんでもお答えしますよ。」

「ガンダールヴは武器の情報、現在どれだけ使いこまれてるか、刃こぼれはどこにあるかなども読み取り、その理想的な使い方を瞬時に導き出します。そのためフェイントなどの技術は使えない。違いますか？」

「多分合ってると思います。」

「やはりそうですか。となると、彼女は熟練者と戦闘になれば負けます。理想的とは、それだけ相手からも読みやすいのです。」

個人戦だと意外と弱いのかねガンダールヴ。デルフ無いと熟練メイジに手も足も出ないで負けるかも。

「母上、デルフリンガーはまだ見つからないんですよね？」

「デルフリンガー、魔法を吸い込むことができる魔剣でしたか。しかしエリック、無いものをいつまで待っててても仕方ありません。戦

場はいつ来るか分からないものですよ。」

「……それもそうですね。」

「…魔剣が無くても立派に戦える手段などいくらでもあります、それを授けるのが私の役目です。それで次の質問ですが、あのルーンには肉体強化の効果もありますね、それの出力と持続時間はどれほどですか？」

「ガンダールヴの力は心の震え、つまり感情によってかなり左右されます。そして、それと反比例するように持続時間が決まります。」

「…となると、武器は『あれ』以外あり得ませんね。」

「もう決まったんですか？」

「ええ。ところでエリック、メイジと戦うメイジ殺しが気にすることは何だと思いますか？」

「杖がどこに向いてるか、詠唱はどれだけ長いか、あとは、どれだけ離れてるか、ですか？」

「そう、不意をつくか、魔法を完成させる前に叩くかしないと勝てないのです。つまり、相手が複数のメイジの場合、その時点で勝ち目はないということです。」

なんてシビアだ。

「これを解決するのがデルフリンガーです。相手が魔法を完成させようが防げるものなど、本来魔法が使えないものには持ちえないも

のです。」

「じゃあ、デルフリンガーが無い場合はどうすればいいんですか？」

「そうですね…これは見せた方が早いかもしれませんね。エリックはここで待っていなさい。」

そう言って、母上は私兵団とジェシカが休憩してる方へと向かっていった。

母上に何か言われた私兵団員たちは、なぜか訓練場に案山子を立てはじめた。その間にジェシカは母上と一緒に、持ってきた様々な武器から何かを選び渡されていた。さて、なにがでることやら・・

「いいですか、エリック。あのジェシカが側にいる真ん中の案山子があなたです。そして、その周りを遠くから囲んでいる案山子たちが敵メイジ達です。これは最悪の状況を想定したパターンです。もちろん、ドラゴンなどは除きますよ。」

「たしかにそうですね。魔法が使えないものが相手なら、各個撃破すればいい。メイジ一人相手なら、避けながら接近して倒せばいい。複数のメイジが距離を保ちながら囲んでる、これが一番やりにくいかもしれませんね。」

「デルフリンガーがあれば、飛んでくる魔法を吸収して、詠唱時間を稼ぐ。それがあなたから受けた説明でしたね？」

「はい、基本的にデルフリンガーは楯です。虚無の詠唱は極端に長いですから、担い手を守り抜くのが神の楯と呼ばれるガンダールヴの仕事です。」

「ですが、デルフリンガーが無い状態では守れない。なので攻めることにしました。」

「？」

「ジェシカ、始めなさい！」

バババババババババン

快音が鳴り響き、ジェシカの両手には火を噴き終えた二挺拳銃。
そして、頭をぶっ飛ばされた案山子たちが多数。

「相手が魔法を完成させる前に倒し、力はあまり必要ないので持続時間が増し、ルーンの能力によって百発百中。銃にどこか異常があってもルーンの能力ですぐにわかります。これがデルフリンガーが無い状態では一番理想的だと判断しました。問題があるとしたら、銃弾ですね。場違いの工芸品の銃弾ですから、土のスクエアであるお父様に頼もうと思っています。どうですかエリック？」

……エグっ！　下手するとデルフリンガー用無しじゃね？
確かに、理に適いまくってはいるけど・・・

「これって・・守られてる虚無の担い手必要ないと思うんですけど？　虚無の魔法が完成する前に終わっちゃってますよ？」

「…失念してました。」

え、マジで？　俺も用無しかよ！？

でも結局、デルフが無い状態ではこれが一番理想的だと判断され、ジェシカの武器は二挺拳銃になりました。
最初は、両手にもの凄く射程の長いモーニングスターなんて案もあったらしいが、携帯性が不便なのと、場違いな工芸品の中に連射できる拳銃が見つかったので却下されたそうだ。
両手で血の付いたモーニングスターを振り回す幼女とか・・シュールすぎる。
それ言ったら、二挺拳銃もどっこいどっこいか。
でも、そうなると、やはり前から計画してた計画をやるべきだな。

「母上、銃弾は父上に頼むと言ってましたね？」

「えぇ、お父様も忙しいでしょうが、これを錬金でき、秘密を守れる人などいませんからね。」

「それについて、心当たりがあるのですが…いいですか？」

「……とりあえずは、話を聞いてからです。」

さて、では行くとしようかね……トリステイン魔法学院。

ラ・フォンティーヌとのことです　Ｐａｒｔ１（後書き）

はい、二挺拳銃です。
何が理想的かと考えたらこうなりました。弾の問題さえ解決すればこれが一番だと思います。
必要な力は腕にかかる反動だけですから、剣を使うよりましだと思います。

ってことで、ガソリンすら錬金できる研究チートコルベールと全スクエアチートのオスマンを仲間に引き込もうとしていた計画を前倒しでじっこうすることになったエリックです。
エリック自身はチートじゃないけど、彼の周りにはだんだんとチートが集まってきてます。

いつも読んでくれてありがとうございます。

ラ・フォンティーヌとのことです　Ｐａｒｔ２

前回、あれだけ意気揚々と学院に向かおうと思っていたのだが、問題が発生した。

俺が何故コルベールを知っていて、何故彼の趣味が機械系だと知っているのかの理由がつかない。

あのあと、とっさにオールド・オスマンの名前を出したから良かったものの、コルベールなんて言ったら、「誰ですか、それは？」と母上に言われただろう。

フォンティーヌに移ってからは、ヴァリエールにいた時より動きやすくなったものの、それでもなかなかうまくいかないものだ。

トリステイン魔法学院について考えてみたのだが、色々とヤバいところかもしれない。

トリステインにありながら、半分、治外法権に近い場所である。王宮に報告しなくてもばれなかったりと機密性も高い。

ここらへんは、王宮も認めてるとこらしい。貴族の息子や娘たちを集めているので、問題が起こっても学院内で処理してくれることを求めてる、だから王宮の方もこの歪な形の学院を認めてる。

ここまでは他の国の学院と同じなんだけど、考えれば考えるほど分からなくなるのが……オールド・オスマン。

あいつは何を考えてるんだ？　コルベールは思いっきり脛に傷のあるメイジだ。なにかしらのトップに立つ者なら本来雇うなんて絶対にしないであろう人種だ。
ミス・ロングビルもだ。貴族じゃないメイジってのは意外といるのはわかる。でも、それはラインクラスまでだ。トライアングルの貴族じゃないメイジなんてそうそういるもんじゃない、いてもかなり名を轟かす傭兵メイジぐらいだ。
トライアングルで、かつ秘書を任せられるくらいの教育を受けたことがあると思われる人……普通に没落貴族なのは予想がつく。そんな、金のやりくりに失敗してであろうと思われる没落貴族（貴族が没落するのはもっぱらそれが理由）を金を管理する秘書に置くとか……ダメだ、考えれば考えるほどわけわからん。
こんな風に考えるとギトーも怪しく見えてくる。なんであんなところにスクエアがいるんだよ。風のスクエアとか、対人戦最強なだけあって、王宮の近衛隊がめっちゃ欲しがるぞ。どこかの名家の二男坊で戦闘が嫌いとかならまだ理由がつくからいいけど、それでもなんだか納得いかない。
ミセス・シュヴルーズだけが、まともな教師に見えてきた。あの人は土系統魔法についての本の作者だから、箔がほしいとかまともな理由がある……はず。正直自信なくなってきた。

怪しく見ようと思うと全てが怪しく見える。

建物自体もそうだ。トリステイン魔法学院は外壁が綺麗すぎる円だ、そんでもって五芒星を描くように五つの塔が置かれてる。綺麗すぎる円ってのは、なんだかプンプン匂う。
『鋼の錬金術師』の国の形が円だった、それは地下に超巨大錬成陣

を設置するため。
『とある魔術の禁書目録』の学園都市の外壁も完全な円だ、それは超巨大な円を利用した粒子か何かの加速装置だったはずだ。
魔法学院も何か仕掛けていておかしくない。
他にも、下手するとスクエアでさえ壊せない宝物庫や捨てられない公文書を保管する地下極秘公文書館。
そんなのがてんこ盛りな魔法学院、地下図書館が１０００年前に造られたとされてるから、１０００年以上の歴史を誇るはずだ。

なんか行きたくなくなってきたなぁ…

とりあえず、表向きはオスマンに会いたいという事にして俺とジェシカで行くことになってる。アポは全て父上任せだ。トリスティン王の面会もなんとかしようと頑張ってくれてるらしい、本当に感謝だ。

それにしても、どうやってコルベールに接触しようかな…。ちなみに、コルベールに接触しないという選択肢はない。場違いの工芸品である銃弾なんてものを複製できるのはあの研究チートなハゲだけだと思う。一か月もないうちにガソリンを錬金したり、半年以内にツェルプストーの協力があったとはいえ、オストラント号や空飛ぶ蛇くんなんてミサイル作ったり……できないことないんじゃね？
そんな奴に６～７年後である原作開始時期までに間に合えばいいと言って頼むのだ、できないわけがない。

あと、個人的な見解だけど、多分複製することに関してはさらに天才的だと思う。オストラントはゼロ戦のエンジン、ガソリンはすぐに複製できた、ノーパソの充電なんかもゼロ戦に搭載された発電機から可能にした。
あいつは目の前にありさえすれば、多分どんなものでも複製できる。
第二のエミヤシロウの誕生か？　カッコ悪すぎるけど…ルックス的に……

そんなわけで今度の夏休みにトリステイン魔法学院に行くことになっている。まだまだ先だが、そこは急いでも仕方がない。他にも学院に行く前に準備したいものがあるし、期間があるのはかえってよかったかもしれない。

「…ってことで、タルブの村に行く。」
「突然すぎて、全く意味が分からないわよ。ちゃんと説明をお願い。」

メイド服姿のジェシカに簡潔に用件を伝えたが、伝わらなかった。ジェシカの服については、基本的に彼女は俺と共に行動しなくてはならないので、テンプレ装備とも呼ばれるメイド服を装備することになった。ジェシカは俺に奉仕（メイド）する気ゼロだが。奉仕ゼロの使い魔。タルブ村に行く目的は勿論ゼロ戦だ。要は手土産である。学院にそう何度も行くのはあまりよろしくないので、銃弾ついでにゼロ戦もお願いしたい。だから、この時期に行くことになった。

「『竜の羽衣』なんて呼ばれてるものがあるらしいんだ。その単語を聞いてピーンときた。」

「そこはあたしの伯父や叔母に会いたい、挨拶しに行こうとか言ってくれればいいのに。」

「嘘言っても何にも始まらないだろうが…。」

フォンティーヌ家に移動してからの特典として、トリステイン国内だったらあまり気にせず移動できるようになった。

ヴァリエールの名前は目立ちすぎるが、フォンティーヌ…何それ？

なので自分、自ら動ける。

さすがにテファ達を探すためにアルビオン！　までは無理だが…。

「でもさ、そんな勘みたいなものの為にわざわざタルブに行くの？」

「『虚無』に目覚めてから、勘は大事にすることにしてるんだ。基本的に何か為になるものがいつもある。」

そんなことは勿論ない。

「ってことで、一週間後に行くから準備しといて。」

「…まぁ、いいわ。あたしも家族に会えると思えば、それだけでも十分行く価値があるし。」

「そういうこと。無駄だったら無駄と割り切って、ワイン飲んで、

ヨシェナベ食べて、帰ってくればいいんだし。」

実は、ちょっと期待してる。

「…ハネムーン？」

「俺は、お前がどこでそんな言葉を知ったかを詳しく問い詰めたい。」

いつも思うが、この小娘マセ過ぎだ。彼女いわく、店の影響と同年代の友人で一番親しいのが俺だったせいらしい。

「いいのいいの、分かってるから。」

「いやいや、お前全然わかってないからな。」

バンバンと俺の背中を叩きながら言ってくるジェシカ。

「そんなエリックに見せたいものがあるのよ。」

「どんなエリックかは、このさい置いておこう。んで、見せたいものって？」

「とりあえず訓練場に向かうわよ。」

「あたしの武器が変わったのは言ったっけ？」
「聞いたよ。そりゃあ、手に入るかも分からない消耗品を使い続けるわけには、いかないからな。」
銃弾ができるまで別の物を使うしかない。
補給の事以外を考えれば、場違いな工芸品の銃を使うのは理にかなってる。メンテナンスは触るだけで分かり、ルーンの影響で文字通りの百発百中、力は剣を使うより少なくて済む。そして母上曰く、一番特筆すべきところは、フェイントがいらないことらしい。銃なんて使う人もあまりいないため、ハルケギニア人殺しでもある。エグすぎる…。
「んで、投げナイフだったっけ？」
「そうよ、距離の問題と携帯の問題からそれが一番だってカリーヌ様が言ってたわ。」
両手モーニングスターはなくなった。よかった、本当によかった。
あれから、母上は意外と多くの頻度でフォンティーヌに来るようになった。あの人の『飛翔（フライ）』なら余裕とのこと、ヴァリエールの副メイド長からメイド長にランクアップしたアミアスさんの苦労が目に浮かぶ。
母上は、娘（と同じくらいの年の女の子）を鍛えることができるとは！　と凄く意気込んでる。ヴァリエール家の娘たちは貴族らしく育てなくちゃいけなかったから、鍛えれなかったが、母上はもともと少女時代を訓練で過ごしてるためか、本当は娘も鍛えたかったら

しい。その反動がジェシカに向かった。
負けん気が強いジェシカの性格もあって、なんか凄い熱血して仲良くなってた。

「とりあえず見てなさい、カリーヌ様にも内緒で特訓したのよ。」
「良くわかんないけど、見てればいいんだね？」
「そうよ、しっかり見てて。」

そう言い残して、ジェシカは真ん中の案山子の所に向かった。
この前の二丁拳銃事件で無残に破壊された案山子たちだが、ちゃんと修復されて復活してる。周りを囲まれてる状況から始めるこの練習方はとても有効とのことで、訓練場のいたるところに案山子が突っ立ってる。その光景はまるで……

固有結界　『無限の案山子』

……とりあえず謝ります。ごめんなさい。

「始めるよ～。」

謝ってる間にジェシカの準備は終わったらしい。

そう言って、彼女はスカートの中に隠してあった投げナイフを周りを囲んでる案山子たちに投げ刺してゆく。

彼女はスカートを翻しながら、いくつあるか分からないほどの数のナイフを投げている。

そうすること数十秒、投げ終えたのかジェシカの動きが止まった。

「どう？」

「どう？　って聞かれてもスゲーとしか言えないよ。あれだけの数のナイフをよくあてられるというか……」

さすが母上に見事に魔改造されつつあるジェシカだ、真後ろにある案山子にも刺さってる。最近は案山子の手の部分を狙ってるのか、手に刺さってるナイフが多い。メイジ対策だろう、杖を落とすことを狙ってるようだ。

「そうじゃなくて……」

「？」

「ドキドキしなかった？　こう、翻るスカートがそこにある！　だが、見えそうで見えない！　そんな感じの…」

「帰れ。」

だから、母上に内緒でやってたのか。なんだか、期待して凄い損したぞ。

「それはさすがに酷くない？　あたし凄い頑張ったんだよ、スカートの内側にナイフがたくさんあるから翻すだけでも一苦労だし、それを見えそうで見えないってレベルにするためにもいろいろ…」

この子、凄いアホな子だ。

「別の事頑張れよ。それに見えそうってところで、スカートの内側でひしめき合ってるナイフが見えるから全然エロくねぇよ。」

「結局、見てんじゃない！　やっぱり、エリックはムッツリね。」

「やっぱりってなんだよ。」

ムッツリは否定できないけど、やっぱりの部分は否定するぞ。

「…この前、昔の手紙を読み返してみたのよ。」

「それで？」

「あんた、5歳とか6歳の時の手紙で、既にあたしの事口説くつもりだったでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その時は気付かなかったけど、今読み返してみるとそう感じるのよ。違う？」

ミスった…、俺の精神年齢的にはおかしくないが、普通に考えればすげぇエロガキの出来上がりだ。

「だから健気なあたしは、ムッツリなあんたの欲望を満たせてあげ

ようと…」
「ねぇ、ジェシカ？」
「ん？」

「知ってるかい、虚無の魔法には『忘却（オブリビオン）』っていうのがあってさ、それって虚無の担い手である俺だったら、頭に強い衝撃を与えるだけでできる気がするんだ……。

『魔法の矢（マジックアロー）』×１３１

だから、久しぶりに一発頭に喰らえジェシカ。」

「……本当に久しぶりね。カリーヌ様に鍛えてもらった回避力とナイフさばきで魅せてあげるわ。せいぜい惚れ直しなさいエリック。」

一瞬の硬直の後、　　訓練場にナイフと魔法の矢が飛び交った

「あらあら、ジェシカちゃんもエリックに構って貰えなくて寂しかったのかしら。　あなたはどう思う？」

「メェ～～」

「あら、やっぱりあなたもそう思うのね。今のあの二人、動き回ってとても楽しそう。」

「メェ～？」

「ふふ、慰めてくれるのね。でも大丈夫よ、いつかわたしも動き回れる日が来るわ。それに、今はこの物語を書かなきゃいけないの。だからもう食べちゃだめよ。」

「メェ…」

フォンティーヌは今日も平和である

ラ・フォンティーヌとのことです　Ｐａｒｔ２（後書き）

のんびりグダグダ拠点休憩ターンですかね。

そんな日常の一コマです。

いつも読んでくれてありがとうございます。

タルブ村とのことです　Ｐａｒｔ１

タルブ村

原作でも、かなり取り上げられるタルブ村だ。シエスタの実家であり、スカロンさんの地元でもある。まぁ、つまり、何が言いたいかというと……

「トレビア～ン！　まさか、エリックちゃんがわざわざ家族旅行を企画してくれるなんて、ワタシ感激だわぁ！！」

ということだ。

「…スカロンさん、お店の方は大丈夫なの？」
「あらぁ、心配してくれるの？　でも、もう大丈夫よ。３日だけだからうちの妖精さんたちだけでも、問題ないわ。そ・れ・と、ミ・マドモワゼルよ、エリックちゃん？」
「わかったから、手をワキワキさせながら近寄らないでくれ、ミ・マドモワゼル。」
「家族の愛情表現よ。」
「俺は、父上からそんな愛情表現貰ってない。」
「ワタシは義母よ。それに子供の頃はアナタの父上もしてたはずよ。」
否定できない。赤ん坊の頃は父上と母上は少しひどかった。
あと、俺の義母はサンドラさんだけだ。綺麗な思い出をあんたの筋

肉で汚さないでくれ。

「前から聞きたかったんだけど、ジェシカはコレについて何も思うとこないのか？」

「無いわけないじゃない。あんたが来る前にも散々言ったんだけど、曲げなかったからもう諦めたわ。」

「ご愁傷様…。」

凄いな、娘をも跳ね返す信念。

「でも、そんな恰好で地元に戻っても大丈夫なのか？」

露骨に目をそらすスカロン。

「…なるほど、大丈夫じゃないわけか。」

「一発伯母さんに殴られればいいわ。」

「そんな……エリックちゃん、ジェシカ。ここはワタシのためになにかしてくれるところじゃない？」

「……はぁ、しかたないわね。こんな親を持ってしまったあたしの不運を呪うしかないわ。んで、エリック…策は？」

「少しは自分で考えろ。」

「あたしはガンダールヴ、主の剣であり楯よ。だから、考えるのはご主人様？　の役割じゃないの？」

「ハートつけるな、キモイぞ。」

「この親から生まれたんだもん、これくらいで済んだことに感謝しなさい。」

「ジェシカ…ワタシ泣いちゃう！！」

「何故だろう…凄い感謝したくなってきた。ありがとう、ジェシカ。」

「どういたしまして。」

涙目でクネクネしないでくれ。馬車という密閉空間も相まって、空気がなんだか凄いことになってる気がする。御者席にいるトニーが羨ましい。
今回のタルブ村遠征は、俺、ジェシカ、スカロン、トニーの４人だ。カトレア姉さんはフォンティーヌでお留守番。メイド長ダルシニと彼女が率いるメイド軍団もいるので問題ないだろう。スカロンさんは、ジェシカが呼んでいいか聞いて来たので許可した。
ちなみに、今のジェシカの服装は若草色のワンピース、皆さんご存知の服装だ。知り合いの女の子がメイド服を着て、貴族の後ろを歩きながら訪ねてきた…とかは、絶対第一印象最悪だ。個人的にもこの格好のジェシカの方が好きだし。

「エリックちゃん……」
「わかったから、その潤んだキラキラした目でこっち見ないでくれ。」

隣でそんなスカロンさんの真似してるジェシカとのギャップのせいで、余計ひどく見える。相変わらずこの小娘は愉快犯だ。なにか考えればいいんだろう、考えれば。

「…で、最後にスカロンさんがタルブ村に行ったのは？」
「ミ・マドモワゼルよ。…そうねぇ、一昨年のワタシの母が亡くなった時ね。」

あんまりこういう考え方はしたくないが、やっぱり貴族と平民は平均寿命がかなり違うなぁ。俺の父上の年齢は平民だったらいつお陀仏してもおかしくない年齢だ。前の常識が抜けきってない俺には世知辛い世の中だな。

「ってことは、タルブ村の人たちは今のスカロンさんの事は全く知らないと。」
「そうよ。」
「…別に、ちゃんと理由説明すればいいんじゃね？」
恰好とか口調とかはあれだけど、理由自体は本物だ。問題ないと思うんだが。

「話す前に袋叩きにされちゃうわぁ。ワタシ痛いのイヤイヤ。」
「あたしは1回袋叩きにされればいいと思う。」
「ジェシカに同感だ。」

あのカッコいいスカロンさんはどこにいったのやら…
だけど、オカマでもやるときはやるやつなんだよなぁ……ん？

「そうだ、一ついい案があるぞ。」
「トレビア～ン、さすがエリックちゃ～ン☆」
「見た目や口調はあれだが、スカロンさんの決意自体は不本意ながら本物なんだ。だから、最初にそれをぶつける。うまくいけば話を聞いてくれるかもしれない。」
「でも、お父さんの決意を最初にぶつけるなんてそんな方法があるわけ？」

「ある、こういう時は偉大なる先輩と同じ方法をとる。まず、スカロンさんには……

作戦を全て伝え終わり、俺らが乗ってる馬車はタルブ村に着いた。

「トニー、まずこの村の人が集まりそうな広場らしきところにこの馬車を停めてくれ。そのあと、出来れば村の人全員が集まるように仕向けてくれないか？」

村の広場に停められた高級そうな御忍び馬車。これだけでも、村民にとっては注目の的だ。集めるのはそう難しくないだろう。

「……そろそろかな。ジェシカ、窓から相手に見えないようにスカロンさんの家族がいるか確認してくれ。」

御忍び馬車とは、その名の通り、お忍びするための馬車である。つまり、外側からは中を見ることなどできないのだ。だが、それはこちら側も同じ。なので、ジェシカに慎重に相手がちゃんといるか確認してもらう。

「……いるわ。伯母さん一家もしっかりきてる。」

「了解。では、スカロンさん…いや、ミ・マドモワゼル。健闘を祈る。」

「ありがとう、エリックちゃん。ジェシカ、ワタシ行ってくるわ。」

そう言って、馬車を降りるミ・マドモワゼル。

馬車を降りてきた人物を見て、村の人たちから動揺してる雰囲気を感じる。当たり前だ、自分たちが知ってる男が訳の分からない格好で突然高級そうな馬車に乗って帰ってきたのだ。混乱しないわけない。

だから、その混乱に付け込む！

混乱の中、ミ・マドモワゼルは落ち着いていた

おもむろに両足を広げ、中腰に構える。右腕を水平に横にののばし、左腕も水平に折り曲げ首元へ…

そんな、気迫に満ちた筋骨隆々の身体に気圧されたのか、静寂に包まれる村人たち

静寂の中、ミ・マドモワゼルは口を開く

『

男の道をそれるとも

女の道をそれるとも
踏み外せぬは人の道
散らば諸友
真の空に
咲かせてみせよう
オカマ道

『

「……スカロン…」

「久しぶりね、ネエさん。」
「……とりあえず、殴られなさい。」
「イヤァぁン！」

「やっぱり失敗したわね。」
「自分の父親に対して、その言いぐさはひどくないか？」
俺たち二人は、助けを呼ぶ声を無視しながら、村人の知り合いに袋叩きにされてるスカロンさんを馬車の中から観察していた。
「結構いい作戦だと思ったんだけどな。」
「あれって本気だったの！？　あたしはあんたがアレを嵌める為に口八丁してたと思ってたんだけど…」
「そう思いながら、止めないお前にツッコミを送りたい。」
しかし、何が敗因だ？　偉大なる先輩ボンちゃんなら、皆を涙する

ことg……あ！

「そうか、スカロンさんにはオカマレベルがまだ足りてなかったんだ。」

「そんな仕様もなさすぎる敗因をあたしの横で呟かないで…、あんなでも親なんだから。」

「よく考えたら、そうだ。スカロンさんはまだオカマ道（ウェイ）に入ってから1年も経っていない新参者だ。そんな奴がオカマ道（ウェイ）を語るのはまだ烏滸がましかったか。」

原作では生粋なオカマキャラ、ハルケギニアでも数少ないオカマの頂点に君臨してるような印象があったが、ここにいるのはただの未熟者だ。

サンドラさんから託された借り物の、しかし本物の理想…。そして、それを貫き通そうとしてる未だ未熟者のスカロン。

……なんでそれがオカマ道（ウェイ）なんだろう……

「ねぇ、エリック。あのセリフ教えたのあんたよね？」

「あぁ、そうだよ。俺の尊敬する人のセリフだ。」

「…もしかして、あんたもソッチ方面に…」

「それはないからな！　断じて否定するからな！　俺は女が好きだ、ジェシカの事を愛してます！！　これでいい？」

「いいわ、あたしの中で好感度が少し上がったわよ。」

「既にマックスだと思ってたんだが？」

「あたしはそんな安い女じゃないよ？」

「そりゃあ、そうだ。次期ヴァリエール公爵たる俺が安い女に惚れるわけないだろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

「よかった…いつものムッツリエリックだ。」
「それは…よかったのか？」
「馴れないこと言わせたわね、ごめん。でも、知り合いがどんどんオカマになっていく恐怖、あんたにわかる？」
「一生分かりたくないな。」

そんな軽口を叩きあっていると、スカロンさんお帰り歓迎会はいつのまにか終わってたらしい。

そのあとタルブ村の村長とスカロンさんの姉と話し、目的は『竜の羽衣』を見ることだということを伝えると、彼らはすぐに案内してあげると言ってくれたので、お言葉に甘えることにした。まぁ多分貴族様がわざわざやってきた、粗相のないようにせねば、とかあの村長は思ってるのだろう。

鳥居を潜り抜け、神社風の格納庫の前に置かれてる、前世で見慣れた墓石が目に入る。

「海軍少尉佐々木武雄異界ニ眠ル……ビンゴだな。」
「読めるの？」
「ああ、なぜかは知らないけど読める。ってことは、なにか俺たち

のためになる物があるってことだ。」

最近、自然に嘘吐けるようになってきた気がする。

「村長さん、この羽衣の伝承を教えてくれないか？」

……日食とともに現れ…か。

この世界、かなりあやふやだ。原作が書物のみならずアニメまで混ざってるな。下手すると、ゲーム系も混ざってる。それに微小ながらｆａｔｅ分もあるのか？　ややこしすぎる。

ま、それは後から考えよう。今はゼロ戦だ。

「とりあえず見せてもらおう。俺が読めたってことは、多分その『竜の羽衣』ってやつはジェシカに反応するだろう。」

「それもそうね。」

格納庫の扉が開かれ、現れるゼロ戦。原作では、デルフの次に活躍したと思われるガンダールヴ専用武器。

まぁ、コルベールとつながりが無いとあまり役に立たないのだが…。

「ジェシカ、頼んだ。」

「うん、了解。」

そう言って、ゼロ戦に近づいていくジェシカ。

「エリックちゃん、ジェシカはあれを使って空を飛べるようになるってことでいいのかしら？」
「まだ確証はないけど、俺が読めたんだ。その可能性は高いよ。」
「そう…」
「…なんかごめん。でも、どうしても彼女の手伝いが必要なんだ。」
「エリックちゃんがそこまで言うほどの手伝いをジェシカができるってのは、親としては心配なのよ。」
「大きな力にはそれ相応の責任が伴うってやつか。父上が良く言ってるよ。」
「そうよ。例え、貴族じゃなくて平民でもそれは同じ。ワタシもあの店のオーナーやってるからよく理解できるわ。」

大きな力には、大きな責任が伴う…か。

スカロンさんは、ジェシカに力を持ってほしくなかったんだろうな。はた目から見たら、俺だって『虚無』なんていう規格外を持ってるんだよな。どうしても偉大なる転生者（センパイ）達と比べちゃうせいか、パッとしないんだよな。
スカロンさんや俺の両親は反対するだろうけど、俺は、規格外の大きな力ってのが欲しかったなぁ。

「エリック！！」
「ん？　どうだった？」

「ダメよ、はずれみたい。左手に全然反応が無いわ。」

・・・・・・・・・・・・・・・はい？

タルブ村とのことです　Ｐａｒｔ１（後書き）

正直に告白します。

自分的に書いてて楽しい部分が、プロットを見る限り結構先です…

創作意欲が～…

タルブ村についても必死に考察したけど、面白みがなさすぎる…

佐々木さんという面白そうな要素があるのに、あの人なんにも残して無さすぎだ。

妄想力が響かないｏｒｚ

なぜ神社なのか、なぜヨシェナベなのかとかどっかに妄想をねじ込む隙間が無いかを探したのに、全然ない。

ついでにカミングアウトさせていただくと、自分原作一度も読んだことないんですよね。

ｗｉｋｉとかｙｏｕｔｕｂｅでアニメとかを頼りに書いてます。

もともと、二次創作のみの読専だったんです。

そんなこんなでタルブ村です。

創作意欲がほとんどわかなかったタルブ村です。

出来も個人的にはイマイチ。うぅ～～ｏｒｚ

そんなですけど、これからも書ききります。

いつも読んでくれてありがとうございます。

タルブ村とのことです　Ｐａｒｔ２

はい？

などと一瞬考えてしまったが、一応予想の範囲内ではあった。

武器として認識できてないので、反応が無い。

多分、そういうことだろう。武器として認識できるように、色々と試してはみたが、成果は無かった。挙句には、

「エリックの勘がこれはあたしたちに必要な物って言ってるのは分かるわ。これの伝説が真実だとしたら、空を飛ぶんでしょ？　だからこれは、ミョズニトニルンだっけ？　そいつの専用マジックアイテムじゃないの？　もっと冷静に考えなさいよ、らしくないわよ。」

……うん、たしかにこれの正体を知らなければ、『空を飛ぶ』ということを冷静に考えればマジックアイテムだ。

ジェシカが完全にこれはガラクタ、もしくはマジックアイテムだと思い込んでるところを見る限り、これを使うことはもう不可能なんじゃないだろうか…、ガソリンが手に入って、空を飛ばすことができても武器とは認識しないだろう。

前途多難だなぁ……今に始まったことじゃないけど。

「はぁ…。」

ゼロ戦が手に入らないことで起こる不都合をつらつらと考えながら、沈んでいく夕日を見ていた。
タルブと言えば、ゼロ戦、ワイン、シエスタ、そしてこの平原だ。
夕日が沈んでいき、橙色に染まっていく平原は確かに綺麗だ。紅月、蒼月、夕日に平原。ここで、サイトと2人きりになったシエスタはなんか色々狙っていたに違いない。

……俺も狙いたかった…

ゼロ戦は墓が読めたこと、ある程度の金銭、そしてヴァリエール家の後ろ盾権力のおかげで、問題なくフォンティーヌに移されることとなった。
そのあと、ジェシカと2人でぶらぶらするつもりだったのだが、件のシエスタと彼女の母親に連れて行かれた。ジェシカにも女だけで話すからついてこないでと見事に釘を刺され、俺はこれからの事を考えるという有意義な行動という名のもと一人寂しく黄昏ることとなった。
余談だが、スカロンさんは女扱いらしい…。

そんな感じで一人黄昏てるはずだったんだが…

「はぁ…」

…なんかいる。隠れてるつもりなのか、とある家の影から俺の事を

覗き見ているやつがいる。
身長的に自分と同じくらいの年齢、９～１０歳くらいの男だ。黒髪だし、この村の住民だろう。タルブ村は、他ではあまり見ることができない黒髪をちらほら見かける。佐々木武雄の血を引く人たちがたくさんいるってことなのかねぇ。

「……そこの少年、何か俺に用か？」

とりあえず、なにもしないで様子を見ていたが、何も反応が無いようなので、こちらからアクションを起こす。
俺の言葉が聞こえたのか、影が反応して動いた。しばらく悩んだのか、１分ほど経ってから、その少年は現れた。
黒髪黒目、日本人を知ってる俺には既視感を感じさせるような顔立ちの少年だ。似てもいないのはずなのに、かつて鑑で見た自分を思い起こされた。

「お、お前、なんなんだよ？」

いや、お前が何なんだよ。そう思ってしまった俺は、多分悪くない。

「俺としては、お前が何なんだよ？　って言いたい。」

だから、つい口に出てしまった俺は悪くない。

「お、おれはジュリアン。」
「そうか。俺はエリック、よろしく。」
「ああ。」

そう言って、俺の差し出した手を握り、握手するジュリアンと名乗った少年。

突然だが、ハルケギニアには握手がある。改めて考えてみると、土下座もあったりして、いろいろ混ざりに混ざってかなり変な文化だ。『乾杯』が毒物混入疑惑を晴らすためだったと思うが、『握手』は武装してませんとアピールするためってのが起源だった気がする。杖持ってませんよ～、握手できる至近距離まで武装しないでやってきましたよ～、信用して～。はっちゃけると、こんな感じだが、握手するその手に指輪杖をつけてる俺って凄い失礼だな。端的に、この指輪杖がどれだけ非常識かを表してるともいえる。母上、えげつないな…。

握手した瞬間にその右手を『風刃（エア・カッター）』で切断。うん、やっぱりこんなの思いつく母上ってハルケギニアでは、結構異端かも…。

悲しいことは、俺の場合それをやると、自分諸共自爆する。文字通りに『俺のこの手が真っ赤に燃える』……あんま、面白くないな、閑話休題。

「…って違う！！」

「どうした、ジュリアン。突然、至近距離で叫ばれると色々響くから止めてくれ。」

初めて同世代の男友達、それもかつての自分の友人や自分を彷彿させる少年の友人ができそうな俺は、少し舞い上がってたみたいだ。色々と考えてたら、隣にいるジュリアンは何かに気づいたらしく、突然叫び声をあげた。

「お、お前なんなんだよ？」

「その質問は的を射てないぞ？」

「おまえ……ジェシカのなんなんだよ！！？」

……あぁ、そういうことか。

「な、なんだよ、その顔。なに、ニヤニヤしてんだよ。」

どうやら、自分はにやにやしてたらしい。ニヤニヤしてる英雄王、たとえ子供Ｖｅｒ．でも大人Ｖｅｒ．でも悪趣味だな。我ながらいつのまにこんな嫌な性格になったのか…、絶対ジェシカとかジョゼフとかの影響だ。間違いない。

「…お前、ジェシカのこと好きなんだろ？」
「ば、ばか言ってんじゃねぇよ！」
「大丈夫大丈夫、お兄さんはわかってるから。」
「意味わかんねぇよ！」

そう言って、彼の肩に置いた俺の手を振り払うジュリアン。

「おまえはジェシカのことどう思ってんだよ？」
「好きだよ。」
「は？」
「だから、好きだよ。この世で一番愛してる。」

彼の目をしっかり見ながら答えてやった。少しショタい腐臭がする…、そういう冗談は置いておこう。

この質問には真剣に答える必要があった。ジェシカに好意を持ってる彼からすれば、俺は無理やり彼女を手籠めにした貴族と思われても仕方がない。だから、たとえ相手がガキだからってこの誤解に関しては真面目に返答させてもらった。
それに、ハルケギニアのガキ共は大人びてる…、経験済みだ。

「…あ……く…、ぅ、うるせぇよ！！」

前言撤回、大人びてるガキは俺の周りにいる奴らだけだったらしい。子供らしい逆切れってのを初めて見た気がする。

「おれがお前がジェシカにふさわしい奴か、見極めてやる！　ついてこいよ！」

そう言って、彼はどこかへ向かって歩き始めた。ここで、馬鹿馬鹿しいと切り捨ててもいいがそれはそれで負けな気がする。それにガキっぽいことに付き合うのも結構楽しそうだ。

「んで、ここはどこだ？」

ジュリアンの後を付いて行くと、そこは森の中だった。一瞬、罠かと考えてみたが気配を察するにジュリアン以外には誰もいない。考え過ぎだったみたいだ。

「この木は、この森の中で一番高い木なんだ！」

「……登れってことか。」

「わかってんじゃん。俺より高く登れたら認めてやる！」

やばい、凄いガキだ。

「いいだろう、その勝負受けて立とうじゃないか。」

「魔法使うのは無しだかんな。」

「分かってる、マントと杖はお前に預けてやるよ。」

マントを外し、長さ３０サント程のワンドを彼に渡してやる。

「いいのかよ？」

「問題ない、それくらいやらないとダメだろ？」

「……少しだけ認めてやるよ…」

「まだ認めるのは早いだろ。勝つのは俺だ。」

そう言って、俺は木を登り始める。

「あっ、ちょっ、待てよ！」

「だが断る！」

昔から言ってみたかったセリフを言い残し、俺は上へ上へと登り続けた。

……そろそろキツイ、木の枝が自重に耐えきれないな。

２５メイルに届くか届かない高さまで登り、そんなことを考えていた。下の物音が近くなってきた、ジュリアンが追いついたんだろう。

「はぁ…はぁ…、おまえ本当に貴族かよ。俺だって、こんな高いとこまで上ったことないぞ。」

伊達にカリン式訓練を毎日こなしてるわけじゃない。これくらいは朝飯前だ。

「貴族だと分かってるんなら、言葉遣いを直すべきだと思うぞ？」
「あ！　え、えっと…、お、おれ、じゃなくて、ぼく…」
「キモい、やめろ。それに今更だ、今のままでいい。」
「…おれ、やっぱりお前の事が嫌いだ。」

身体を動かして、冷静になったのか、言葉遣いを直そうとするジュリアン。やっぱガキだな。こういうのが本来あるべき姿だと思う。ジェシカとかイザベラとか、なにあれ？　って感じだし。

「…もう登んないのか？」
「これ以上は枝が折れる。」
「おれは行くよ。」
「冗談抜きでこれ以上はやめておけ。」

普通なら、これで止まってくれるはずだった。

俺の失念はただ一つ、コイツは俺の周りに今までいなかったガキ（・・）なのだ。

ボキッ

「「あっ」」

理に聡いものなら、登らなかっただろう。例え、登ったとしても、わざわざ俺がいる枝に登って来なかっただろう。一人分の重さですでに限界の悲鳴を上げていた枝に二人分の重さをのせればどうなるかは、火を見るより明らかだ。

「ジュリアン！　掴まれ！！」

落ちてる中、ジュリアンに向かって手を伸ばす。伸ばした手に重さを感じ、すぐに呪文を唱えた。

「『念力（フォース）』！！」

「なぁ、貴族様。」
「どうした？」
「本当は感謝するべきところなんだろうけどさ…、お前、おれに杖渡してなかったっけ？」
「……あれは偽物だ。」
「ズルッ！」
「貴族とはそういうものだ。それに、木登りの時は一切使ってない。

俺の貴族の誇りに誓おう。」
正確には俺が用心深すぎるだけなんだが…。
「今更、貴族の誇りって…、説得力無さすぎだ。」
「それもそうだな。」
「分かって言ってるだろ？」
もちろん、そうだとも。
「貴族とはそういうものだ。」
「……おれが知ってるアストン伯爵様はそんなことしない。」
アストン伯爵、たしかこのタルブの村を治めてる貴族だったな。
アストン伯爵領の特産品であるタルブ産ワイン。その事実を考えると、未だ見ぬアストン伯爵がタルブの村の人にだけ優しいという可能性がある。実際、そんなことをしてる貴族はたくさんいる。自分の懐を温かくしてくれる相手に甘いのは、貴族でも商人でも同じだ。
トリステインもゲルマニアを馬鹿にできないよな。
まぁ、原作を見る限り、アルビオンが攻めてきたとき、文字通りに命散らしながら孤軍奮闘してたところを考えればいい人なのだろう。
「とりあえず、降りるぞ。」
「…ちょっとだけ、もうちょっとだけこのままじゃダメか？」
……へ？
今の状況を端的に説明すると、俺がジュリアンをお約束のお姫様抱っこしながら浮いている。ショタい腐臭がする……このネタはさっきもやったな。

本来『念力（フォース）』は複数の小物を動かすことができる魔法だ。だが、前も説明したとおり、俺はこれを風系統魔法『飛翔（フライ）』の代わりに使っている。そのため、小物じゃない大物である自分自身（うまいこと言ったかも）を動かすためにはかなりの精神力が必要で…要約すると、人間2人を別々に動かすのはかなり大変なので、一つに纏めた。それが今のお姫様抱っこの正体だ。

「あんま聞きたくないけどさ…、お前、俺に惚れたとかないよな？」
「ぶっ！！？　っんなわけねぇだろ！　なに考えてるんだよ、お前！！」
「この状況のまま、もうちょっとだけいたいなんて言うやつが何考えてるのかの方が俺は興味がある。」
「…誰にもいうなよ？」
「やっぱ告白か？」
「違えぇよ！？」

からかい慨のある奴だ。

「メイジのお前にはわかんねぇかもしれないけど、おれの夢は空を飛ぶことなんだ。」
「なるほどな、その気持ちはよくわかる。」
「メイジのくせに変な奴だな。」

これでも、前世は魔法を使えなかったからその気持ちはよくわかる。それに今世でも、『念力（フォース）』なんていう人とは違うやり方で飛ばなきゃいけないせいか、他の人より苦労したという自負がある。

「だからさ、もうちょっとだけ高く飛んでくれねぇか？」
「貴族にする頼みごとじゃないな。」
「わかってる、アストン伯爵様には頼まなかった。」

「俺にはいいのかよ。」
「・・・・・・・・・・」
目を逸らすな、クソガキ。
「まあ、いいだろう。俺も平原を高いところから見下ろしたかったし。」
「流石、貴族様。よくわかっていらっしゃる。」
「前も言ったが、気持ち悪いから止めろ。とりあえず、森を抜けるぞ。」
森を抜け、急上昇する。『飛翔(フライ)』じゃないせいか、風を直に浴びるが、これはこれでありだと自分は思ってる。風系統のせいか、『飛翔(ライ)』は高速で移動するとき、風の影響を受けない安全設計だ。つまり、『念力(フォース)』で飛ぶ自分はハルケギニアで唯一風を感じながら飛ぶことができる。高速移動できないことを考えると、デメリットのはずだが、他の人はこの風を感じることができないのかと思うと顔が自然とほころぶ。
「す、　すげぇ……」
ジュリアンの言うとおり、確かに凄い景色だった。地上から見ても綺麗だったが、上空から見ると、建物や森なども一望で見渡すことができ、それがコントラストになって、双月や夕日に彩られた平原を更に際立てていた。
「やっぱ、メイジってずりぃよ。」

「それはそうかもな。」

ふと出てしまったという感じでジュリアンが呟いた言葉を聞いて、少し思うところがあった。
根本的なところでは、ハルケギニアの身分制度は貴族と平民じゃなくて、メイジとその他という分け方が正しいかもしれない。平民でも、魔法を使えるってのは明らかなアドバンテージだ。色んなところで引っ張りだこになる、仕事も楽になる、頑張れば成り上がれるし、成り上がれば爵位だって夢じゃない。

「でも、魔法が使えなくても空を飛ぶ方法もあるらしいんだ。」
「『竜の羽衣』か？」
「それもあるぞ。」
「？　お前は信じるんだな。村の人たちは、あれは嘘っぱちだって言ってたのに…」
「おれのじいちゃんが言ってたんだ、じいちゃんの父ちゃんが嘘をつくわけがないって。だから、『竜の羽衣』は絶対に飛べるはずなんだ。」
「……なぁ、ジュリアン、お前の家族にシエスタって名前の子、いたりする？」
「なんで知ってんだよ！？」

あぁ、理解した。この馴れ馴れしい態度もそういうところから起因してるのかも…。

「ん？　ってことは、ジェシカに相応しいか試してやるってのは…」
「家族を預ける奴が貴族だからって相応しいかはわかんねぇだろ？」
「…はぁ、それで結果は？」
「まぁ、ギリギリ合格ってところだな。」
「ここまでしてやってるってのに判定はそれかい。」

前言撤回撤回だ。こいつも結構大人びてやがる。

「話を戻すけど、魔法を使わずに空を飛ぶ方法ってのは？」

「ラ・ロシェールって知ってるか？」

「なるほど、『フネ』か。」

「話す前に答えを言うのは卑怯だ。」

「俺は貴族だからな。」

「……ま、いっか。そうだよ、平民の俺はグリフォンとかには乗れないし、『フネ』しかない。家族には反対されてるけど、いつかラ・ロシェールのフネで働くのがおれの夢だ。」

「…分かってると思うけど、たいした役職にはつけないぞ？」

後ろ盾無しにラ・ロシェールに行ったところで、ジュリアンが働ける場所は限られてる。スカロンさんの『魅惑の妖精亭』の後ろ盾なら、少し融通が利くかもしれないが、あの店はどっちかと言うと首都トリスタニア限定の力だ。それに公平を期すべき『魅惑の妖精亭』だ、スカロンさんは動かないだろう。

「…たまにさ、言われるんだよ。『空、飛べるんだろ？　飛んでみろよ。』って。あの『竜の羽衣』が空を飛べるって信じてるのって俺とじいちゃんだけでさ、そのじいちゃんは4年前に亡くなってる。家族も誰も空を飛べるなんて信じないんだ。」

「だからって、フネで空を飛んでも、ちょっと違うんじゃないか？」

「わかってるさ、でも、どんな形でもおれは空を飛んでるんだって見返してやりたいんだ。」

そんな風に夢を語るジュリアンはとてもカッコよかった。

ふと、思いうかんだが、俺に夢はあるだろうか？

『目標』ならある。大隆起を解決して、家族やヴァリエール領を守る。でも、それは『夢』なんだろうか？

……ま、『夢』はそんな簡単に見つかるもんでもないか、ゆっくり探してゆけばいいだろう。

…だから、人の『夢』を応援するぐらいならやってみてもいいか。

上空から、夕日で真っ赤に染まった平原に降り立ち、俺は口を開く。

「ジュリアン。」

「あ、ありがとう。最高に楽しかった。」

「ん、どういたしまして。それでな、ジュリアン、話があるんだ。」

「話？」

「あぁ、お前にだ。

その前に、改めて名乗らせてもらうよ、

エリック・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエールだ。

今は、訳あってフォンティーヌ子爵をやってるけど、本来の家名はヴァリエールだ。

今回、タルブ村に来たのは『竜の羽衣』の入手が目的。そして、その『竜の羽衣』を飛ばそうと思ってる。」

ジュリアンの顔が驚いた表情に変わる。流石天下轟くヴァリエール、こういうときに便利だ。

「ヴァリエール！？　それに『竜の羽衣』を飛ばそうとしてるなんて…」

「その言葉通りの意味だ。そこで本題に入るけど…、俺と一緒に来ないか？　これも訳あって、『竜の羽衣』に詳しい、もしくはこれから詳しくなる人、それでいながら秘密を守れる人が欲しいんだ。」

「…そ、それは『竜の羽衣』で、そ、『空』を飛べるってことか？」

「そうなるかもな。」

「やる！！　いえ、やらせてください！　お願いします！！」

突然、土下座して叫ぶジュリアン。例え、土下座であっても『夢』に一途な奴は気迫がある。

「了解した。だから、さっさと立ち上がれ、そして言葉遣いもさっきのままでいい。」

「うん、本当にありがとう…え、えっと…ミスタ・ヴァ」

「エリックでいい。それに俺は同年代の男友達ってのがいなくてさ、友人が欲しいんだよ。」

「…さびしい奴だな。」

「契約破棄するぞ？」

「ああ！　おれが悪かった！！」

「それでいいんだよ。」

二人で一頻り笑いあった後、真面目な表情で向かい合う。

「これからよろしく頼むぞ、ジュリアン。」

「あぁ、頑張って期待に応えるよ、エリック。」

茜色の平原の上で、固い握手が行われた。

その頃、ジュリアンの家でもある、シエスタの家では、キャッキャ、ウフフ等の擬音語が似合うガールズトークが行われていた。たまに聞こえてくるトレビア〜ン！　はいいアクセントになっている…と考えないと脳が腐る。ご注意を。

「それでジェシカ、あの貴族だと思われる坊ちゃんとはどんな関係？」

口火を切ったのは、シエスタ母。

「あたしの将来の旦那様よ。いい男でしょ？」

「えぇ！　旦那様って、ジェシカ、貴族様に手籠めにされちゃったの？」

「ジェシカは手籠めにされちゃったのよ～。でもね、シエスタちゃん、エリックちゃんはホンット～にイィ子だから問題ないわよ？」

「は、はひ！」

「スカロン、あなたは少し黙ってなさい。わたしの子供たちの目の毒だわ。」

「そんなぁ、ネエさんまでヒドイわぁ～。ワタシ泣いちゃうぅ。」

「「（泣けばいいのに）」」

ジェシカとシエスタ母の心がシンクロした瞬間だ。

そのあと、あれこれとエリックとの馴れ初めを召喚の儀式等は誤魔化しながら話すジェシカ、たまに顔を紅くするシエスタ、話を聞くたびに色々考えてるように思われるシエスタ母とトレビア～ン！と突然叫びだすスカロン。

カオスである……、主に一人のせいで。

「話聞く限りじゃ、必要なかったかもねぇ。」

「ん？　ネエさん、なにかしたの？」

「ジュリアンをその貴族の下に向かわせたのよ、どんな人か見極めてきなさいって言って。」

「それ、エリックだったからいいけど、普通、貴族にやることじゃ

ないわよ。」
「突然乱暴するような貴族には見えなかったらね。大丈夫だと思ったのよ。」
なかなか大胆なことをするシエスタ母だ、その血は確実にシエスタに受け継がれている。
「ジェシカ、二つ忠告があるわ。」
「……何？」
「5歳の頃に知り合ったって言ってたわね？」
「えぇ、そうよ。」
「私の持論なんだけどね、必要以上に若い子が好きな男は、将来やらかすから気を付けるのよ？」
「大丈夫よ。エリックってばかなり一途よ。それにあたしが離さないわ。」
「流石ワタシの娘、男は絶対に離しちゃダメよぉ～。」
「そうかもしれないけど、周りが放っておかない可能性も高いわよ。」
見事なスルーだ。
「それに、これが二つ目なんだけど、その貴族の坊ちゃんの地位を考えるとあなたは良くて妾、地位が高すぎることを考えると妾さえもできないかもしれないわよ。」
「もちろん知ってるわ。でも、いいのよ。」
「平民が貴族に関わってもどちらも幸せになれない。持論の一つよ。」
「分かってる。」
「「・・・・・・・・」」

一瞬の沈黙の後、口を開いたのはシエスタだった。

「ねぇ、お母さん。ジェシカは大丈夫だよ。」

「……はぁ、それもそうかしらね。まったく…、あなたはやっぱりスカロンの娘ね。」

「それ、褒め言葉じゃないわよね？」

自然と顔が引きつるジェシカ。

「褒め言葉よ。この愚弟も周りや家族の反対を押し切って結婚しちゃうのよ。困ったものよね。」

「ト、トレビア～ン…」

ムリして使おうとするから変な奴になるのだ。

「でもね、やっぱり、忠告は覚えておくのよ。あなたの道は険しいわ。」

「分かってる。」

「うん、ならもう言うことはないわ。」

そのあとは、ジュリアンとエリックがシエスタ宅に現れるまで、暖かな家族の団欒が続いた。

ジュリアンがエリックに付いて行く旨を家族に伝え、大喧嘩になり、シエスタ母の中でエリック株が大暴落するのはまた別の話である。

タルブ村とのことです　Ｐａｒｔ２（後書き）

難産。遅れました、あとでちょっと言い訳します。

本来のエリックは初対面の奴にこんなにフレンドリーじゃありません。

ですが、相手が望郷の相手に似ている同世代の少年ということで、警戒が緩み、絡みました。

ジュリアン君の説明

オリキャラじゃないっす、半オリキャラなのは否めないですけど…。長女シエスタの弟で、彼女より1～3歳年下の弟。つまり、長男か次男だと思われる。基本農家の長男、もしくは次男は家の畑を手伝うべきなのに、原作では、彼はフネの少年兵をやっていました。そこから妄想を膨らませてみました。

まぁ、真実は徴兵令で少年兵やってたとかかもしれませんが自分の妄想力はそれでは面白くない！　と否決しました。それに、徴兵令で集めたものを専門職に近いと思われるフネの少年兵をやらせるかな？　と疑問に思い、この形に落ち着きました。

貴族に対してフレンドリーすぎるだろ！　というところもシエスタの弟だし、シエスタ母の差し金だし、原作でもマリコルヌにシエスタの近況を尋ねてるし、家族思いっぽいし、などの理由づけをしました。（言い訳ともいう）苦笑。

木登りも地味に空への憧れなんていう伏線になってない伏線です。

『飛翔（フライ）』について

風を感じないは独自解釈、捏造設定です。ゼロ魔に数多く登場する女性キャラ、それの多くはスカートです。フライしたら、ぱっさぱっさ、なんてのは想像しにくい。速く動かなきゃいいと言えばそれまでですが、フライって風系統だし、風ガード機能ついててもおかしくないよな？　ということで、こうなりました。
エリック君の数少ない優越感です。ちっさい男ですね、小物だから念力が効くのかも…苦笑。

言い訳について

言い訳します。

この話はプロット第２案です。

最初は、ジュリアン君の代わりに３０代後半くらいの黒髪黒目キャラを登場させるつもりでした。
エリックは、彼を佐々木武雄の血縁者と勘違いをしますが、彼の正体は、現実世界の日本から迷い込んだ漂流者（ドリッパー）。虚無により漂流させられた不幸な人。
ゼロ魔世界だと気づき、何とかしようと思い、苦難の末タルブ村までくる。ここなら同じ境遇の人が現れるかも、そんな思いで彼はタルブ村にたどり着いた。そこで、他の転生者か漂流者を待つ間、タルブ村での生活も何とか馴れ、彼もこの世界で暮らし始めた。
そんな時に現れたのがエリック。英雄王の容姿を持ち、秘密だがヴァリエール家嫡男らしい、という噂を聞いた男は怒り狂います。何故？　あんな奴は何も苦労もしないで力を手に入れているのに俺は…、彼は虚無に巻き込まれる原因となった現代武器を手にエリック

と戦うことになる！
エリックは、現代兵器を使うやつ＝転生者と思い込んでしまい、佐々木武雄の縁者だと思う人が犯人だとは思いつかない！
そして、最終決着で、男の憎悪に当てられたり、初めての人殺しをしてしまったり、それも自分の世界の人間を殺してしまった、苦悩するエリック…
そんな感じにするつもりでした。

自分で言うのもあれですけど、面白そうじゃないっすか？

そんな感じで書いてるうちに問題点が出るわ出るわで断念して、この第２案を思いつくまでや、書くのに凄い時間がかかってしまいました。
問題点は、仮にもタルブ村で暮らしていた人を殺すのはなぁ…、シエスタ一家たちと超険悪ムードです。そして、メインの理由が、一人出したら何人出してもいいんじゃね？　ムードになることです。
超多重トリップものは自分の力量では書けません。断念しました。

そして、言い訳２

読者様から頂いてる感想から、自分の未熟さが露呈しました。
前話で言いましたが、自分、原作読んだことがありません。二次創作の読専でした。そのせいで、思いっきり勘違いしてたりする部分があったりして、知らずに捏造してたりして……ｏｒｚ
別に、捏造設定や独自解釈嫌いじゃないです。どっちかというと大好物です。
でも、知らずに捏造してたとは…と色々自分自身で思うところがあったので、

原作買いました。今、急いで読んでます。

ということで、少し（？）更新遅れてます。
これからは、独自解釈、捏造設定を後書きでちゃんと書こうと思います。
ガンダのルーンは捏造設定になってしまいました…ｏｒｚ。
エリックの名前も自分の勉強不足のせいで、変なのになってしまいました…
感想で指摘してくださった方には感謝です。
これからも指摘下さる方どんどんください！　めげません！（多分）

後書きも本文も長くなりました。遅れました、ごめんなさい。

今回も読んでくれてありがとうございます。

メイド長とのことです

スカロンさんを魅惑の妖精亭まで送り、一つ二つ頼みごとを託してから、俺、ジェシカ、ジュリアンの三人はフォンティーヌ領に帰ってきた。

「あたしは、ちょっと訓練場に向かうわ。三日も訓練してなくて体が鈍ってそうなのよ。」

「家について、言う第一声がそれかい…。女子が言う言葉じゃねぇよ。」

「カリーヌ様なら言うかもよ？」

「……否定できないな。」

というより、あの母上は絶対言う。

「なぁ、エリック？」

「ん？　どうした、ジュリアン？」

「姉ちゃんとお前の会話ってツッコむべきとこだったか？」

「いや、冗談抜きだ。コイツ（ジェシカ）は下手すると、うちの軍を一人で壊滅できる。」

嘘は言ってない。俺の言った言葉のせいか、ジュリアンの顔が面白いことになっている。

「それは流石に言い過ぎよ。」

「だ、だよな。姉ちゃんが昔からケンカ強かったからってさすがにそれは…」

「流石のあたしも銃とかの武器がちゃんとそろってないとムリよ？」

コイツ(ジェシカ)狙ったな…、顔がにやけてやがる。それと反比例するようにジュリアンの顔はさらに面白いことになってるな。ってか、ジェシカ、昔からケンカ強かったのか。

「安心しろ、ジュリアン。お前にはそんなこと求めてない。」
「当たり前だ、そんなこと求められても困る。」
「さて、じゃあ、お前にやって貰うことの説明もあるし、ちょっとついてこい。」
「あたしは必要？」
「いや、問題ない。ジェシカは訓練頑張れ。」
「うん、了解。」

そう言うなり、ジェシカは訓練場に向かっていった。心なしかスキップしてるようにさえ見える…なんて現実は俺は認めたくない。神様…、この場合はブリミル様…、あなたが授けたルーンのせいでうちの未来の嫁さんがバイオレンスに進化してしまってます。ケンカしたら勝てる気がしません、尻に敷かれる光景が目に浮かびます…。

「おれ、二度と姉ちゃんとケンカしねぇ…。」
「そうしとけ。今度うちの母上が来たとき、訓練覗いてみろよ、男のプライドとか粉々になるから。」
あれは、真剣(マジ)でヤヴァイ。やばいがヤヴァイに進化してるくらい、ヤヴァイ。

「ま、とりあえずに俺たちも行くぞ。」
「わかった、けど、どこへ行くんだ？」

「メイド長の部屋だ。」

「失礼するよ。」

メイド長の部屋。メイド長の枕詞がついているが、この部屋は彼女一人の部屋ではなく、フォンティーヌ家にいるメイド全員の部屋だ。わりと大きめな部屋の真ん中には、縦に長い机が置かれ、四方の壁は、屋敷を綺麗に整えるためのありとあらゆる道具が入っているタンスが置かれている。

日が昇り始める頃、メイドたちはここに集まり、メイド長の指示を仰ぐ。何か問題があれば、すぐにここに駆け込み、常時ここで待機してるメイド長に問題を報告する。メイド達の指揮本部といったところだ。

「あら？　坊ちゃま、どうかなされましたか？　何か用事があるのなら、お呼びしていただければ、直ぐに参りましたのに。」

そんな、ヴァリエール家から連れてきた精鋭メイド達の頂点に立つのが、このダルシニ。俺の中で、二つ名は『ひきこもり』。本当にこの部屋から動かない。そりゃあ、司令官が動いちゃいけないのは分かるが、なんか納得いかない。

「メイド長に用事があるのもあるんだけど、この部屋に用事があるって理由もあったからね、直接来たよ。あと、坊ちゃまはもう止め

てくれ。」
「坊ちゃまが産まれた時、取り上げたのは私ですよ。私にとって、何歳になっても坊ちゃまはいつまでも坊ちゃまですから。」
そういえばその通りだ。産まれた時に最初に見た顔は彼女なんだよな。ヴァリエール家でもかなりの治癒メイジだと思われるメイド長。まぁ、それくらいの特技が無いと精鋭メイドの長にはなれないんだろう。
それと余談だが、最初見た時とあまり顔が変わってない。うちの母上もそうだが、美人は年とっても美人なまんまっていうラノベ補正が世界にかかってるんかねぇ。

「はぁ、そうかい。本題に移るけど、今、俺の後ろにいるやつを教育して欲しいんだ。ほら、自己紹介しろよ。」
「え、えっと…ジュリアンといいます。よろしくお願いします。」
「はい、よろしくお願いします。ヴァリエール家、いえ、今はフォンティーヌ家のメイド長をしておりますダルシニです。どうぞお見知り置きくださいませ。」
「お、おみしり・・おき・・」
聞きなれない敬語に狼狽えるジュリアン。

「見ての通り、マナーとかそういうのに弱いんだ。教育頼む。ずっとここにいるんだし片手間でもできるでしょ、ひきこもりメイド長？」
「それはもちろんできますけど…、正直私は坊ちゃまが何を企んでるのか理解できません。もう少し学と品のある方を雇うべきです。あと、優秀な長は自らはあまり動かないんですよ。公爵様もあまり執務室からお出にならないのと同じです。」

あっ、後ろの方で心にグサッと何かが刺さったような音が聞こえた。しかし、俺もジュリアンに品があるとは思えないので、フォローは出来ない。
そういえば、父上も基本的に執務室からあまり動かないな。自分もそれが理想なんだけど、『むっ！　ピーンときた。これは多分虚無関係イベントだな。見れば確実にわかる。』の演技のためにも自ら動かなきゃいけないことが多い。安楽椅子探偵みたいなことをしてみたいものだ。

「確かにそうなんだけどね…、品や学があるやつだと横に繋がりがある奴が多いからね。秘密を守れるように一から教え込んだ忠臣が欲しいんだ。」
「それなら、ヴァリエール家の執事見習いを誰か一人よこす方がよろしいかと。」
「まぁ、そっちの言う通りなんだけどさ…。」

今回の雇用は理論的に考えればなにも得が無いのは目に見えてる。俺の独断だし、メイド長という立場から見れば、あまりよくない行動なのだろう。

「あ、あの……」
「はい、なんでしょうか？」
「お、おれ！　なんでもします！　『羽衣』飛ばすためならなんでもします！　あと、友人（ダチ）の迷惑にならないようにも頑張ります！　お願いします！！」

黙り込み、分が悪い俺を見てか、ジュリアンが口を挟んでくれた。本来は褒められることではないのだが、今回に限っては、ファインプレーだ。

「……なるほど、そういうことですか。」
「そういうことなんだ。」
「え、えっと…どういうこと？」
納得してる俺ら二人を見て、戸惑いを見せるジュリアン。
「俺の家、ヴァリエール家はトリステインでも有数の貴族家だ。要は、優秀な人材が集まるんだよ。」
「あ、ああ。だから、おれはだめだめってことだろ？」
「ええ、本来なら絶対に雇われないでしょう。」
もう少しオブラートに包んであげようよ…って、この世界にはオブラート無いか。
「そこで、さっきの話の続きになるんだけど、『品』も『学』もあるやつはうちにはいくらでもいるんだ。だけど、そいつらはヴァリエールの名前につられてくる奴ばっかだから、『忠誠』はまだいいけど、『情熱』みたいなものを持ってるやつが少なくてさ。物事を無難にこなすことに関しては天才的なんだけど、自らなにか行動しようとするやつがほとんどいないんだよ。」
ま、ある意味、それは仕方がない。命令にないことをして、貴族様を、しかも天下のヴァリエールを敵に回すことになる可能性のあることをする奴なんて、『品』や『学』のある奴には絶対いない。
ある意味、ジュリアンは熱血主人公タイプのバカだけど真っ直ぐだから雇われたといってもいい。
「要は、お前の『飛ぶ』ことへの『情熱』を買ったんだよ。『品』や『学』はその誰にも負けない『情熱』でさっさと覚えろ。『忠誠』については俺を見て判断しろ、絶対後悔させないこと受け売りだ。

お前は、俺の初めて直々に臣下にした奴だ。期待を裏切るなよ、ジュリアン。」

「そういうことだったんですか……」

俺のセリフの後に生まれた空白の時間に、間髪入れずに、このメイド長は台詞を突っ込んできやがりました。
心の中でガクッという擬音が聞こえるようなこけ方をする俺だが、現実ではなんとか理性と体制を保つ。伊達に貴族やっていないのだ。

「今、自分でも言うのもなんだけど、かっこいいこと言ったつもりなんだけど…」
「え、あれかっこいいか？」
「……ジュリアン、お前やっぱ解雇（くび）。さっさとタルブでもロシェールでもどっかに行っちまえ。それか、今すぐ俺の矢で極楽（そら）に送ってやるよ。」
「そんな！　いけませんよ、坊ちゃま！　坊ちゃまの…その、矢で極楽へ誘うなんて…、それに男の子同士なんて……、いえ、それはそれでなかなk…」
……下ネタかよ。隣のジュリアンは何のことかさっぱりわかってな

いようだが、精神年齢が色々あれな俺は理解できる。女三人で姦しいのに、その姦しいのを三乗したようなメイド集団の長だけあって、そっち方面でもかなりあれなんだろう。それにしても、最近はさらに姦しさがアップしたように感じるのは俺の気のせいか？　だけど、とりあえず…

「本題に戻りたいから、そんな妄想は俺のいないとこでやってくれ。」

「！！　あの…坊ちゃま、僭越ながら質問してもよろしいですか？」

「？　別にいいけど？」

「…先ほどの私（わたくし）の呟き…、意味を理解されてましたよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

妄想と言ったことでばれたか、久々に墓穴（ぼけつ）った気がする。やっぱ、事前準備がないとポロっといっちゃうな。今度の魔法学院へ行く時も準備は怠らないようにせねば…。

「今までの坊ちゃまの教育にはそのようなものに関しては一切入ってないはずなのですが……、もしや坊ちゃまは最初からそういう性癖に…、いえ、それは無いはずです、坊ちゃまはジェシカに愛を捧げてると……　！！　なるほど、わかりました。」

あまりわかりたくない結論がこの妄想メイド長の頭の中で可決されたみたいだ。少し思ったのだが、コイツ、俺の事絶対敬ってない気がする。途中で俺の性癖とか言ってるし。ま、それ言うならヴァリエール家のベテラン執事やメイド達はみんなそんな感じか。執事長ジェロームなんて父上相手にも結構茶目っ気あるし、母上にだけは、みんなしっかりやってるけどね。さすが、『鋼鉄の規律』。でも、あの人もたまに寂しそうにしてる。それに気づいてるのは、メイド長と副メイド長くらいかもなぁ。動けない赤ちゃん時代の趣味が人

間観察だったせいで、ヴァリエール家内部関係について俺より詳しいのはそういないと思う。カトレア姉さんくらいかな。閑話休題。

「坊ちゃまにそのような知識を授けた犯人は、『伝道師』ジェシカですね。間違いありませんか、坊ちゃま？」

間違いだらけですよ、メイド長。それに、なにそのドヤ顔、ウザイ。ちょっと自分に酔ってる感じが更にウザさをレベルアップさせてやがる。それにしても、メイドがサスペンス好きなのってどの世界でも共通なんかね。

「申し訳ありません、不躾な質問でした。坊ちゃまにも隠したい秘密がありますもんね。」

俺がだんまりしてたのを見て、なんか凄い勘違いをおこしてやがる。それに目が『大丈夫ですよ、私はわかってますから』って語ってる。コイツ、見た目綺麗だけど、やっぱおばさんだ。

「それにしても『伝道師』ジェシカ…、私たちメイドだけならいざ知らず、坊ちゃまにまで伝道するとは…、少し釘をさしておくべきですね。」

独り言ダダ漏れですよ…。意図的に聞き流してた単語を独り言で思い出させるとは…、その独り言に悪意を感じる。

それにしても、最近メイド達が少しフランクになったり、姦しさがアップしてた原因はアイツか。ジェシカの家を考えれば、アイツがそっち方面の知識がすごくあるのは分かるけどさ…、１０歳の女の子にそういうの教わるメイド達ってどうよ。しかも、『伝道師』なんて二つ名が付いちゃってるし。

後で、メイド長は釘をさすらしいが、俺は矢を刺しに行こう。今なら、訓練場にいるはずだし。……下ネタじゃないぞ、気をつけろ。

「なぁ、エリック。話はよくわかんないけど、おれはジェシカに『学』も『品』もあるようには思えないぞ。」

「あいつは色々特別な事情があるんだよ。それに、こっち来てから少しずつ成長してる…はず。」

というより、『品』に関してのみはかなりのレベルだと思う。ちゃんとした服着せれば『似非』貴族令嬢の出来上がりだ。なんとか『似非』がとれる方法を模索しなきゃなぁ。

「申し訳ありません、少々取り乱してしまいました。」

「俺的には、少々じゃすまなかったと思うんだけど。それより、俺の理由じゃないとすると、そっちが考えてた理由ってどんなの？」

「…坊ちゃまの事を友人と呼ぶ同世代の少年なんて初めてでしょう？　例え相手が平民であっても、坊ちゃまにもとうとう御友人が、と思いまして…」

「…一応、ジャンがいるぞ。」

「ワルド子爵様のご嫡男…いえ、今はワルド子爵様ですね。彼は、坊ちゃまと同世代じゃないでしょう？」

「それはそうだけど…」

「お前、やっぱ友達少ねぇんだな。」

「うるせえ。」

余計のお世話だ。

「しかし、それは表向きの理由でございます。」

「……そこまで考えてたのか。言っとくけど、コイツは問題ないぞ。」

「？」

隣で、首をかしげるジュリアン。そんなんじゃ、これから先の貴族や商人が出入りする世界じゃ生きていけないぞ。

「はい、問題ないと判断しましたので、お話しているのでございます。」

「それもそうか。」

「あの…、おれ全然わかんないんだけど…」

一人会話に置いてけぼりにされるジュリアン。うん、やっぱり教育の必要があるな。

「それは、後で説明してあげます。それより坊ちゃま、その件（くだん）のワルド子爵様が御出でになっております。」

「それ、早く言うべきだよ。」

「申し訳ありません。しかし、今はカトレア様のお部屋で会話されてるようなので、問題ないかと思いまして。」

「うん、了解。直ぐに姉さんとこに向かうよ。じゃあ、ジュリアンの教育については任せるよ。強いて言うなら計算を重点的に教え込んでおいて。」

「わかりました、お任せください。」

そう言って、お辞儀するメイド長。様になるね。

「ジュリアン。」

「大丈夫、しっかり躾けてもらうさ。」

「それは当たり前だ。それとは別で、一つ朗報を教えてやるよ。」

「なんだ？」

「あの『竜の羽衣』は『探知（ディテクト・マジック）』で調べてみたら、マジックアイテム

じゃないことが判明した。これがどういうことかわかるか？」
嘘です。『探知（ディテクト・マジック）』はコモン・マジックだけど、俺は、まだ上手く使えない。

「……わりぃ、よくわかんねぇ。やっぱ、おれ、勉強しなきゃな。」
「そりゃそうだ。要は何が言いたいかって言うと、あれはメイジの手じゃなくても作れるってことだ。お前の曽祖父が操ってたことも考えると、メイジじゃなくても飛ばせる。」
「！　そうか…、確かにそうだな。」
「下手すると、そのお前の曽祖父の血を引いてる者じゃないと飛ばせないなんて可能性もある。ジュリアン、お前にメイジの血は無い。だけど、それに匹敵するだけの血を引いてると俺は思うよ。なんせ、あんなもん作っちまう一族の血だからな。」

日本人の血。この身体には流れてないけど、魂なんてものがあるなら、その魂には流れてると思いたい。俺もそうだと言えたらどんなに気楽なことか。

「慰めか？　おれのメイジに対しての嫉妬にたいしての。」
「それもなくはないけど、純粋な想いだよ。その血が少し羨ましい。」

メイド長が苦い顔をしてるが、無視だ無視。

「エリック。」
「ん？」
「本当にありがとう、おれ頑張るよ。」

「当たり前だ。んじゃ、俺は姉さんとこ行ってくる。」

姉さんの部屋に向かう途中、徒然なるままに考え事をする。
日本人の血…、今になって少し恋しく思う。
何にもない平和な日常を送っていたことが、今になってどれだけ楽しかったのか理解する。

今の家族に不満はない。それどころか今の家族の方が好きかもしれない。
でも、俺の血にはいろんな重責が伴う。ヴァリエール領を継ぐのもそうだし、何より『虚無』の担い手ってのは重すぎる。全く…現実は非情だなぁ。

さっきのメイド長もそうだ。
大貴族の嫡男が平民の子を屋敷に雇うように言う。その平民の子は嫡男を友人という。
構図だけ見れば、その平民の子は怪しすぎる。貴族の位が低ければまだ有り得ただろうが、俺の家は大貴族。どこかのスパイとかと思われても仕方がない。恐らく、俺の言った教育を監視の隠れ蓑と誤解したのかもな。
治療魔法が得意なだけあって、人間の身体にかんしてはかなり詳しいメイド長。身体状況で嘘を見抜くのも、身体を拷問で痛めつけるのも、逆に治すことも、彼女なら思いのままなはずだ。

１０年生きてるけど
やっぱりこの世界は
俺には少し
生きにくい

さて、姉さんの部屋の前にたどり着いたが、こんな顔じゃ、ただでさえ感がいい姉さんには一瞬でばれる。

少し心を落ち着かせ、深呼吸。

心を落ち着かせた後に、深呼吸しても意味ないんじゃね、なんて思いついてしまった。

うん、そんなことを思いつくってことはいつも通りだ。

よし、行くか。

扉をノックして、開ける。
開けたら着替えシーン、なんていうエロゲ主人公属性は俺には備わってたことはないと、俺の１０年間の経験が証明済みだ。

「姉さん、入るよ。ジャンが来てるって聞いて……

頭が一瞬真っ白になった。

やっぱ、俺は準備期間が無いと本当に弱いらしい。

しかし、今見てる光景は、準備期間がいくらあってもパニックにならないことは不可能だったかもしれない。

そこにいたのは、ベッドに腰掛け抱きしめあう二人。

エロゲ属性は無かったけど、俺にもしっかり主人公属性は備わってそうだ。

ぼんやりとした頭で、そんなことを考えていた。

メイド長とのことです（後書き）

さて、気づく人は気づくと思います。
でも、言わないで欲しいなぁとか言ってみたりしておきます。

ジュリアンは、ジェシカを姉ちゃんと呼んでいます。独自設定です。
会話してる時に、識別しやすいなんて理由も隠れ潜んでます。エリックとジュリアンの口調が似てるので、エリックは『俺』、ジュリアンは『おれ』だったりします。他にもジュリアンの方がひらがなを使うことが多かったり、小文字『ぇ』などを使う頻度が多いなんていう、ちょっとした違いがあります。
基本的にすべてのキャラの一人称や二人称を見れば、わかるように努力はしてます。もうそろそろ飽和状態だけど…。

マジックアイテムを作るのには、もしくは、使うにはメイジである必要があるか？
色々考えた結果、どっちもあるんじゃないだろうか、に落ち着きました。
余のミューズさんが、マジックアイテムガンガン作ってそうなので、メイジじゃなくても作れると設定しました。でも、やっぱりメイジしか作れないマジックアイテムもあると思います。
使うの場合は、もっとメイジである必要が無いと思います。ルイズの魔法のランプ、魅惑の妖精のビスチェ、ｅｔｃｅｔｃ　。
でも、破壊の杖なんて、杖の名前を冠するものもあることを考えると、メイジ専用のマジックアイテムもあると結論しました。アンリエッタの杖なんてその典型に見えるし。
そういう設定で行きたいと思います。

エリック、せっかく転生しても色々苦労してるせいで、少し懐かしがります。そんなお話です。

ヴァリエール家のメイドや執事たちって意外とフランクなのかもしれない。原作を見て思った感想です。老執事ジェロームとか公爵に厄介ごと任されそうになったら逃げてる場面があったし…、トゥルーカスとかもそのうち出したいなぁ。

次回、どうなることやら。
次回は、いろいろ賛否両論飛び出すかもしれない回になりそうです。

では、いつも読んでくれてありがとうございます。

戦闘とのことです

『念力(フォース)』

状況はよくわからないが、これ以上この光景を見るのは、目に毒だ。数少ない自分が人に誇れる魔法を使い、ジャンを姉さんから引き離し、窓ガラスを割りながら、外へ放り投げる。姉さんの部屋は多数の動植物がいるだけに大きな窓ガラスがある半ビニールハウスのような部屋だ。

よくよく考えてみると、とっさの行動で窓ガラスを割ってしまった。これについては少し後悔だ。

ここで少し自分の主武装の一つである『念力(フォース)』について説明しよう。本来、『飛翔(フライ)』の代わりとして習得したこの魔法は、デメリットもたくさんあるが、メリットもある。そのうちの一つとして、普通なら不可能な、重い物、たとえば他人等を『念力(フォース)』で動かすなんて荒業が俺ならできる。燃費が著しく悪いが、虚無持ちの自分ならなんとかできる。多用は禁物だが。

「！　エリック、きっとあなたは誤解しているわ。」

「誤解だと思いたいよ。多分、真実は誤解な気がするけど、この状況で姉さんの言うことは……正直信用できない。」

カトレア姉さん…、恐ろしいほどの勘と誰にでも慈愛を向ける綺麗な人だ。

逆を言えば、彼女ほど頭の中で何を考えてるか分からない人間はいない。家族だから、信用も信頼ももちろんできる。普段の日常なら、何を考えてるかは分からないけど、親愛を向けてくれるのが感じ取

れる。
けど、今回のこの状況はダメだ。姉さんが本気でジャンを庇ったり、姉さん自身の本心を演技で隠してきたりしたら、…自分では絶対に見抜くことができない。
過大評価かもしれないが、ジョゼフでさえ、姉さんが演技したら見抜けないと思う。
それと、家族に対して原作を参考に持ち出したくないが、原作でもサイトを庇ってたりするシーンがあるし、今回も庇う可能性がある。

「だから、ちょっとジャンに聞いてくるよ。それに、例え誤解であったとしても、姉さんを抱きしめる、もしくは抱きしめられるってのは一発二発殴らるべき大罪だ。」
「エリック、お願い！　それだけはやめてあげて！」

もちろんそんなのは却下だ。アイツは姉さんの母性の塊ともいえる慈愛の双丘に顔をうずめていやがった。マザコンめ。

それにしても……エクスクラーメーションか…、あの姉さんがそんな声を出すなんて…誤解じゃない、なんていう最悪の可能性もあるのか？

そんなことを思いながら、俺は窓から飛び出した。

「言い訳を聞いてやるよ、マザコン。」

なぜか地面に大の字で倒れたままの状態でいるジャンに問いかける。姉さんを抱きしめてた件もあるが、もし、これを見たのがルイズだったらと考えると怒りがふつふつと湧いてくる。今のルイズは下手すると原作時より追いつめられてる可能性さえあるのだ。

ちいねえさまが屋敷にいない、私はワルド様と釣り合わない、魔法が上手く使えない、兄様みたいにヴァリエールじゃなくなるかもしれない……

本当は、ジャンに責任はない。それは理解してる。ルイズが追いつめられてる理由のほとんどの原因は俺だ。

でも、そんな追いつめられてる時に、さっきの光景を見たらどうなるか…。俺より高い主人公属性を持ってる可能性があるのだ、見てしまう可能性は十分ある。だから、例え事故とかであっても、二度と起こらないように。俺の自己満足(エゴ)のために、今ここで釘を刺させてもらう。

俺はルイズの兄なのだから。

「……エリック。君は今、僕になんて言ったんだい？」

いつものジャンらしくない雰囲気だ。これは…怒気か？

「言い訳をきいてやるよ、マザコン。　って言ったんだ。」
「そうか…。」
そう言うや、彼はまるで幽鬼のように、ゆっくりと立ち上がった。

「ユビキタス・デル・ウィンデ」

「んなっ！？」

呪文を唱えるや否や、現れる4体の偏在（ユビキタス）。一体一体がそれぞれ独立の思考を持つ、風系統を最強たらしめる呪文だ。
…マズイ。今更だが、対応を間違えた。自分も少し怒りが湧いてたようで、冷静な判断を怠った。ジャンの偏在を見てから、冷静になるとか…遅すぎるだろ、俺。
よくよく考えなくても、否は完全に自分にある。魔法で外にポイ捨て、いくら自分のエゴのためでも、少しやりすぎたか…。
いや、それももちろんあるだろうが、これは異常だ。ジャンもうちに来るたびに、母上に訓練を授けられていた。それはある意味、俺が突然飛ばしたように、突然何かされたりしても、なんだかんだで笑いあっていられる…、いつもの彼なら「何するんだい、エリック？」とか言いながら、にこやかなイケメンスマイルを向けてくるはずだった。
……彼に何があった？

だが、今はとりあえず…

「『魔法の矢（マジック・アロー）』×１９」

迎撃の用意だ。

迎撃しながら、ジャンに語りかける。俺が完全に悪いし、この怒気を見る限り、ルイズからカトレア姉さんに乗り換えた、とかそんなアホな理由じゃないはずだ。それをなんとしても聞きだすしかなさそうだ。

ただ…戦力差が厳しい。『閃光』の二つ名をもつジャンと俺との相性は最悪だ。

自分矢の威力はどう底上げしても、系統ラインスペルの威力までしかない。それをスペルの短さと速射によって、相手が魔法を完成させる前に、絨毯爆撃するってのが本来の自分の基本スタイルだ。それに『楯』の手段を持たない自分は攻撃を避けるしかない。

偏在を完成させ、多方向から『閃光』の二つ名に恥じない、避けにくく速度の速い魔法を撃つジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。この状況はすでに半分詰んでいると言ってもいい。

それに加えて、相手を傷つけないように、相手の事を聞き出しながら戦うのは、心が全く奮えない。つまり、『虚無』と相性が悪すぎる。同時に使える矢は多くて３０前後だろう。

冷静になってしまった弊害か……考えれば考えるほど厳しい。

作戦が必要だ。

実を言うと、ワルドが敵に回った時用に、昔から色々考えていたので、成功確率は高くはないが、作戦自体はいくつかある。大切な友人だとは思っているが、原作での裏切り一犯に加え、ルイズのため！　などと言いながら切りかかってくる可能性は否定できなかった。

友人だと思ってるやつにさえ、対抗策を用意してる自分は、いつか裏切られるのかもな…

…さて、やるか。自嘲タイムは終了だ。

前髪をオールバックにするように掻き上げる。戦闘や訓練前の癖だ。最近、ようやく子ギルから大人ギルへと見た目がシフトしてる時期なので、自画自賛だが様になってきてると思う。

「ジャン、お前は何故そんなに怒ってるんだ？」

返答は５人のジャンからの『風刃（エア・カッター）』。

烈風直伝の風を感じる訓練が生きてくる。俺と５人との間が１５メ

イルほどあるという理由もあるが、やはり、毎日の地道な訓練が生きてるのだろう。初見でこの不可視の刃は避けれない。

さて…、話を聞いてくれる余地は無し。

作戦変更だ。とりあえず一旦、硬直状態に持っていく。そのあと話をする。

状況確認

敵との距離、１５メイル。１０歳の身体で全速力で走れば、４、５秒程度でたどりつく距離。

敵人数、５人の風スクエア。だが、『偏在（ユビキタス）』を使った後なので、スクエアスペルは無いと仮定。俺の魔法の特性も理解してるだろうから、トライアングルスペルも撃ってこないと仮定。

近接戦闘兼巻き添え覚悟の前衛が一人
ラインスペル並みの遠距離魔法を撃ってくるだろう中衛が三人
指揮官兼広域殲滅魔法を予備で貯めておくであろう後衛が一人、トライアングルスペルを撃ってくるとしたらこいつだけと仮定

本体は、後衛の一人。服に地面に大の字になってきたときの土埃がついてる。魔法はイメージなだけあって、偏在は綺麗なままだ。土埃に汚れた偏在なんて、誰もわざわざイメージしない。

前衛、中衛、後衛とセオリー通りの偏在の配置を確認。ジャンがどれだけ優秀な風スクエアかの証でもある。何も考えないでも、偏在

はそれだけで優秀な魔法だが、がむしゃらにやるより、隊列を組んだ時の方が圧倒的に強い。

こちらは、発射準備完了してる矢は１９本。今の自分の状況から今日一度に出せる矢の最大数３０本と仮定。

……作戦プラン決定。

訓練の賜物か、状況確認からプラン決定まで、わずかな時間で纏めれた。

ぐずぐずしてる時間はない……決行する。

「Ｉ～ＶＩＩ　発射（ファイア）！！！」

７本の矢がジャン達の前方の地面に突き刺さる。

「爆破（ブラスト）！！！」

７本の矢が爆発し、盛大に土煙を巻き起こす。残り１２矢。

「（ＶＩＩＩ～ＸＩＸ　発射）」

残りの１２矢を土煙で見えないが、５人のいるであろう方向へ撃ち出す。

それと同時に、この身体で出せる最高スピードで敵に向かって走り出す。

作戦は至ってシンプル。偏在をすべて無視し、本体を拘束、もしくは気絶させ、偏在を解かせる。
偏在を相手にする時の定石だ。ジャンもそれがわかってるから後衛にいるのだ。

土煙で、姿を隠しているので、声を上げるなんてことはしない。
本当は、すでに発動済みの『魔法の矢（マジックアロー）』に発射（ファイア）や爆破（ブラスト）などの掛け声などなくても発射できるし、失敗魔法の爆破を発動することもできる。

欠点としては、魔法とイメージ、それに心の奮えが影響する虚無持ちのせいか、かなり威力が下がる。

だが、今回の目的は威力じゃない。最初に盛大に中二成分満載に叫んで発動させたので、十分印象付けたはずだ。第二波が、掛け声が無いのに飛んで来るのを感じて、少しでも動揺してくれれば儲けもん。

「（ＶＩＩＩ～ＸＩＸ　連鎖爆破（チェーン・ブラスト））」

本当の目的はこの連鎖爆破。一斉に爆破させるのではなく順番に少しだけ時間をずらしながら爆破させる。威力はドットスペルにも及ばないだろう。

通常、風スクエアに不意打ちで攻撃をするのは不可能だと言われている。
なぜなら、風を感じとることにより、敵がどこにいるかを事前に察知することができるためだ。

ならば、風が感じ取れない、空間と時間を作る！

視界がなく、すぐ近くで爆風がひっきりなしに発生する空間。例え、風のスクエアメイジだろうと俺を探すのは不可能。

そして、１２本の連鎖爆破がもつ時間は３秒から４秒。

全速力で走り、前衛の一人にたどり着くには十分な時間だ。

「『魔法の矢（マジックアロー）』×１２　発射（ファイア）！！」

俺の必要のない掛け声を聞いて、前衛の一人が反射的にに『風楯（エア・シールド）』を張る。
流石、優秀なジャンだ。うちの母上の教えをよく守ってる。

だが、それが仇となる。

前衛の楯ではなく、周りの地面に突き刺さる１２本の矢。
さきほど、矢が爆発するのを一番近くで見てるはずの前衛だ。

『風楯（エア・シールド）』を解けるわけがない。

これで、前衛一人の足止めは終了。
スピードを落とさずに、彼の横を走って、素通りする。

前衛突破

その時、一陣の風が吹いた。

後衛の本体であり、指揮官役のジャンが放った『風（ウィンド）』、風系統の基礎中の基礎であり、最も早く唱えられる風系統魔法だ。

土煙を吹き飛ばし、視界がクリアになる。

俺の次の相手が近接戦闘ではなく、魔法攻撃をしかけてくる中衛三人のため、指揮官である後衛が視界をクリアにしたのだろう。
これで、中衛三人は俺の位置を確認し、詠唱に入った。距離を逆算するに、放ってくるのはラインスペルと推測。

後衛と中衛、合わせて４人は、俺との距離が思ったより近いのを確認し、バックステップしながら詠唱する。
バックステップしながらの詠唱。簡単そうに聞こえるが、戦闘中に

これをやるのは相当訓練されてる証拠だ。

ジャン…、お前は優秀だよ。基本に忠実で、母上から習ったものをしっかり実戦で使いこなしてくる。

優秀すぎるほど優秀だ。

まるで、オルレアン公みたいだ。ジョゼフの気持ちがよくわかる。

だが…

……だからこそ、読みやすい！！

次に突破しなくてはならないのは、三人の中衛。

この間で、俺の後ろの方で足止めを食らってる前衛の矢を解除する。

今更、楯を解除して、ルーンを唱えたところでもう遅い。

その頃には、俺の手が本体に届いてるはずだ。

中衛三人は、爆破で少しでもテンパってくれればよかったが、そんなそぶりは無い。

詠唱を聞くに、放ってくるのは『風槌（エア・ハンマー）』。

殺傷能力が高すぎる、『風刃（エア・カッター）』を放ってこないところから考えると、少し落ち着いてきたか？

……いや、線ではなく、面の攻撃にシフトしてきた。そういうことだろう。

偏在（ユビキタス）である中衛三人で俺の正面と左右を完全に封鎖している。

「「「『『『風槌（エア・ハンマー）』』』！！！」」」

正面左右から迫ってくる不可視の槌。

俺が楯の手段を持たないことを知っているジャンなら、これで詰みだと確信しているのだろう。

だが、そうは問屋がおろさない。

「『念力(フォース)』」

ただでさえ、全速力で走っているのだ、息を荒げたくない。
それに、本体である後衛を動揺させておきたい。小さな声で「フォース」と唱えた。

正面左右がダメなら、上しかない。
バトル漫画の王道だ。

だが、この世界では、これほど邪道なものは無い。
人が飛ぶ、それはすなわち『飛翔(フライ)』を使っているということと同義だ。
そして、『飛翔(フライ)』の詠唱ルーンは『イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ』、ドットスペルにしては異常に長い。
すなわち本当の緊急時、『剣(ブレイド)』等を使う距離で、『飛翔(フライ)』で逃げるということはメイジ同士の戦いでは見られない。

戦闘で『飛翔（フライ）』が使われるのは、距離があり、相手が『烈刃旋風（カッター・トルネード）』等の広域殲滅魔法を使ったときに逃げる時ぐらいなのだ。

だから、一言何かを唱え、一瞬で飛び上がり

１８４サントもある中衛三人の頭を抜き去った俺が信じられないのだろう。

飛び越えられた三人はもちろん、本体である後衛のジャンも目を丸くしてる。

コモン・マジックはルーンではなく、口語で魔法を行使できる。

極論すれば、イメージや心の奮えのせいで恐ろしいほど威力が落ちるが、「矢」と一言唱えれば、『魔法の矢（マジックアロー）』を出現させることもできる。

今回は、それを利用した。

「フォース」と一言だけ唱え、自分の身体を上へ浮かせた。効果はほんの一瞬だが、たった三人の中衛の頭を超えるだけでいいのだ。

空中で前転をするように三人の頭上を超え終えたら、すぐに地面に着地し、スピードを落とさず走り出す。問題ない。

それに、既に15メイルほど助走もつけているので、横方向へのスピードも申し分ない。

ただ、断っておくが、『飛翔（フライ）』と比べればお粗末極まりない。ジャンの『飛翔（フライ）』が最高時速100リーグを出せるのに対して、俺の今のスピードは、子供の全力疾走並みだ。

俺の飛び方は、アホウドリが助走をつけて飛ぶのと原理は全く同じなのだ。

だが結果として、俺は確実に本体であるジャンにたどり着いた。

普通ならば、たどり着いたところで、相手は風のスクエア。敵いっこない。

しかし俺は、自分がまき起こした土煙で、指揮官である本体に魔法を使わせている。

すなわち、詠唱の長いスクエアはおろか、トライアングルスペルでさえ唱えられないはずだ。

そして、今さっき一瞬驚かせたことにより、ラインスペルも封じたも同然だ。

接近戦の間合い…

紡げるスペルはドット並みに短いもののみ…

ならば、俺ら二人が唱えられるスペルは一つしかない！！！

「「『『剣（ブレイド）』』！！」」

俺の右腕とジャンのレイピア状の鉄杖が交差する

流石だよ、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド

ここで『剣（ブレイド）』を展開できるなんて、やはり優秀だ。

だが、お前は今の状況を忘れている。

普通なら、力押しで俺が負けるだろう。今の俺たちには１０も年の差があるのだから

けど、お前は詠唱の時間稼ぎにバックステップしたのだ。

それに比べて、俺は１５メイルもの助走をし、ほんの微量だが、『念力（フォース）』の位置エネルギーまで加わっている。

負ける道理はない！！！

最初で最後の剣戟が交差したのは一瞬、鉄杖と共にジャンは弾き飛ばされた。

地面に倒れた杖を持っていないジャンの上に乗り、マウントポジションを確保する。

「『魔法の矢（マジックアロー）』×３０　全方位展開（ラウンド・オープン）！！」

今の状態で、発現できる矢の最大数を自分とジャンの周りに、３６０度全方向に展開する。

計画通り、硬直状態の完成だ。

作戦成功（ミッション・コンプリート）

今回の作戦…、振り返って考えてみれば、ラグドリアン湖の時より綱渡りだった。

偏在のうちの誰かが、トライアングルスペル以上の魔法を放ってきたら、どんなに底上げしてもラインスペルの威力しかない自分の矢では太刀打ちできなかった。

魔力の消耗を抑えることを考えずに、土煙の中にがむしゃらに魔法を撃たれてきても、俺の負けだ。

俺の勝因は、二つ。

烈風カリンという超効率的な戦闘を重視した偏在集団との戦闘に慣れてたということ。

そして、その烈風の偏在運用を模倣してる閃光が俺の相手だったということだ。

これが、ジャンではなく、たとえばギトーの偏在相手だったら俺は多分勝てなかっただろう。

烈風に憧れ、烈風に師事し、その教えをしっかり実戦で生かせることが可能な『閃光』だからこそ、俺は相手の手が未来予測なみの精度で予測することができた。

綱渡りだったな……

だが、成功した。　結果がすべてだ。

「ジャン、周りを爆弾にもなる矢で囲んでいる。『偏在（ユビキタス）』を消してくれ。」

作戦が全て上手くいき、テンションがアゲアゲだった。

……それがいけなかったのだろう、油断した。

「断る！　今の君の言うことなんて絶対に聞くものか！！」

そう言うや否や、俺たち二人を囲んでいる矢の周りから杖を向けてくる四体の偏在（ユビキタス）

ルーンを唱えたきやがった！！

しかもあれは、トライアングルスペルの『稲妻（ライトニング）』！！

本体ごとやるつもりか！！？

クソ！　迷ってる時間は無い、やるしかない！！

「一斉爆破（フルブラスト）！！」

周りを囲んでいた矢が一斉に爆破した。

「はぁ、はぁ…はぁ、うまく…いったか…」

服がかなり破けてるが問題ない。俺の下で横たわっているジャンはしっかり気絶している。

一斉爆破(フルブラスト)……、要はただの自爆だ。

だが、風メイジが風を感じ取れるようになるように、虚無…正確には『爆発(エクスプロージョン)』を使う俺は、他の人より圧倒的なまでに爆発に耐性がある。原作のルイズもそれらしきものを持っていた気がする。

けど、できるなら二度と使いたくない……

あぁ…くそ……ねむくな…ってきや……が…った…

かて…ね…ぇ……な…

すくえ……あ…

戦闘とのことです（後書き）

難産。戦闘シーンって書くの難しい。

引き分け、気絶落ちです。エリック頑張ったのに…

まぁ、先に引き金を引いてしまったのは、エリックです。気が付いたらガチ戦闘に発展してしまいました、そんな感じです。

この作品の戦闘シーンはこんな感じです。一応虚無の、エセ虚無だけど、全然チートじゃないです。

いや、多分半分チートあるかもしれませんが、相手が弱いやつなんてことはほとんどないので、いつも頭を捻ることになります。

ここまでこの作品を読んで下さった皆様なら、オリ主チート蹂躙を求めてるとは思えませんが、色々思うところはあるかもしれません。ですが、自分の作品の戦闘はこんな感じです。よろしくお願いします。

ほとんど、本文で解説しましたが、少し補足です。

時速１００リーグ　＝　時速１００キロ　です

エリックの主武装の一つである『念力』のメリット、デメリットです。（フライと比べて）

メリット：フライと違い、自分以外の自分と同じくらいの重さの物や人を動かせる。詠唱が短い。

デメリット：フライより格段に遅い、風の影響を受ける、効果時間が短い（というより燃費がひどい）

なんだかんだでパッと見では、デメリットの方が若干上回る。本文にあるように、使い方次第ですけどね。それはどの魔法でも言えると思いますが…

風系統である『浮遊（レビテーション）』との違いは、浮遊の方が風系統だけあって、圧倒的に燃費がいい。念力で重い物を動かすのはエリックの特権だが、他の人は浮遊で重い物を動かす。浮遊は文字通り浮かすだけで、念力のように動かすのはムリ。

こんなところです。

戦闘シーンは、独自解釈などが、かなり多いです。

捏造はしてないと思いますが、強いて言うなら一つだけ…

スクエアやトライアングルスペルの詠唱の方が長いとは原作には書いてませんでした。

でも、スクエアスペルが短かったりしたら、エリックは「それ、なんてムリゲ」状態になってしまうので、スペルレベルが上がれば基本的に詠唱が長くなると設定しました。実際、そうじゃないとおかしいと思いますし…

エリック、ジャン（風スクエア）に勝つとこまで行きましたが、いろいろ偶然が重なってます。

もし、ジャンが母上から偏在の使い方を教わってなかったら…

もし、ジャンが力押しするタイプだったら…

もし、後衛がライトニングを最初から使っていたら…（速すぎて避けれません）

偶然や誘導、事前情報と事前計画。ありとあらゆるものを使って初めて対等です。

なんだか、自分で書いてて、少し哀れになってきました…
もちろん、このままじゃいつか軽く負けます。
なので、話が進めば少しずつですがエリックもレベルアップします。
分かりやすいとこでは始祖の祈祷書です。

では、少々、初めて戦闘シーンを書いた感想です。

正直、恐ろしいほど難しかったです。
頭を使う戦闘を書きたかったのですが、力不足です。
あんなに長々と書いてますが、実際あったことは、

走った、避けた、押し倒した、自爆したw

だけなんです。現実時間では１０秒あるかないかだけの戦闘なんですよ（泣）
もう少し、テンポよく書けたらなぁと思いました。

さて、では次回です。
本当は、次回のカトレア、ジャンのネタ晴らし（？）も含めて１話のつもりだったのですが、長すぎて、切りました。
次回、カトレア乗り換えはありません。心配された方、ごめんなさい。
期待した方も、ごめんなさい。

さて、こんな戦闘で賛否両論かもしれません。
ジャンがめちゃめちゃ切れてる理由も賛否両論かもしれません。
そんな感じのこの小説ですが、いつも読んでくれてありがとうございます。

ワルド子爵家とのことです

「ジャンの母さまが殺されたらしいの。」

訓練場に近くにある医務室で、起きると同時にカトレア姉さんから強烈なビンタを貰った直後に言われた言葉だ。

最初は、ビンタの後、柔らかく抱きしめてきた姉さんの感触もあり、「はい？　あぁ、これは夢か…、まだ寝ぼけてるんだな」、なんていう現実逃避をしたが、結局現実だった。

現実は現実のまま、何も変わらず非情だった

俺の周りを囲む現実は、未だに非情らしい

いつになったら、俺の時代が来るんだろう…

ワルド子爵家

階級はかなり違えど、古くからヴァリエール家と縁がある旧家だ。ツェルプストー家との歴史が敵対であるのに対して、ワルド家との歴史は共闘の歴史だ。
ヴァリエール領の隣に領を持つワルド領、それはつまり、我が領と同じくツェルプストーやゲルマニア貴族との戦いを長年してきたということである。
そして、そんな両家は、いつしか階級の差を乗り越え、手を取り合った。

今の両家の関係は、遥か昔のような、手を取り合った対等な関係とは言えない。
お互いを重んじる主従、妾のエルフでさえ匿うことを承諾したサウスゴータ家とモード大公家との関係に近い。

そんなワルド家は、俺のバタフライ効果をもろに受けた一家といえる。
４年前、ゲルマニアとの国境沿いで小さないざこざが起きた。ワルド領で起きたこと、本当に小さないざこざで、ヴァリエールが出てくると余計めんどくさいことになるとの理由で、援軍は送れなかったが、気をつけろと厳しく忠告してくれと父上に頼んだ。
たったそれだけだが、そのおかげでジャンの父、ワルド子爵は命を落とさなかった。結局、二か月ほど前に病と老衰が重なり、亡くなったが、原作より４年も寿命が延びた。

この４年間・・本当に楽しかったわ、ありがとう・・・わたし

の大事なむすこ・・

ワルド子爵は俺のバタフライ効果で寿命が４年延びたことを知らない。だから、お礼なんて言われてないが、それでもよかったと思ってる。

人はいつか死ぬ、それがちょっと延びるだけでも十分に俺が転生した意味がある。今亡きサンドラさんの残してくれた言葉が俺の誇りだった。

そう……誇りだった…

「負のバタフライ効果かもしれないなぁ…」

寿命を延ばしたり、原作キャラを正しく導くことが『正』のバタフライ効果だとしたら、今回のは『負』のバタフライ効果だとでも言うべきものなのかもしれない。

ハルケギニアの危機を独りで見つけ、他人に理解してもらえずに発狂し、最後は息子の手が引き起こした事故により、命を落とした原作のワルド夫人。

時期的に考えると、彼女の寿命はむしろ、かなり延びたと言える。

でも、そんなことは、原作知識を持っている自分しかわからない。

なにより…

「『殺された』…かよ……、わけわかんねぇ…」

『殺された』、この事実を紐解いていくと、一つの現実が見えてくる。

ワルド子爵家は、子爵ながら国の防衛を担う貴族だ。だが、爵位は言うほど高くない。
そして宮廷で、少しだが幅を利かせられる子爵位を持つジャンではなく、未亡人であるワルド夫人が殺された。
アカデミーでは、ブリミルについての研究を第一に考える傾向があるため、ワルド夫人が研究していた風石採掘については、その有用性に関係なく、誰からも注目も喝采も浴びなかった。

パッと見では、殺される理由が全くないのだ。

だが、推測だけど、この殺された理由は多分、俺だろう。
極論すれば、原作キャラの原作と違う死に方の全ての原因はバタフライ効果の源である自分に還ってくるんじゃないんだろうか。

…やめよう、それはいくらなんでも驕りすぎだ。
自分はそんなに大きな人間じゃない、この世の全てを背負えるような奴じゃないんだ。

この前の、タルブ村遠征の時に買った最高級タルブ産ワインを持って、客間に向かう。
そこにジャンがいるらしい。ダルシニの治癒魔法は半分チートなんじゃないかというくらい完璧だ。お客様優先ということで、ジャンを先に治療し、どちらも傷一つ無いというとこまで治した言っていた。

その半チート治癒魔法でも治せないカトレア姉さんの病気…治せるだろうか？
改めて考えてみると、ムリなんじゃないかと思えてきた。鬱状態だと鬱なことしか考えられなくなるな…、閑話休題。

客間の扉の前で、佇むこと二分。

どうしたものか…

今回は、完全にこちらが悪い。
ジャンはマザコンだった、理由までは知らないが、これは事実だ。
いつもの軽口として言ったつもりだったが、時期が最悪すぎた。
姉さんが抱きしめてたのも、姉さんお得意の慰め術の一つだったはずだし…

やっちまったなぁ…

「入らないのかい？」

ガチャっという音と共に、扉を開いて佇むジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。

１８４サントの高身長、灰色の長髪を持つイケメンだ。１０歳で１４５サントの身長を持つ俺は、同世代と比べるとかなり高めだが、さすがに彼と目をあわせるときは、かなり見上げる状態になる。成長しきったとしても、大人ギルの身長は１８２サントだから、負ける可能性が高い。悔しい。

「ドアの前で悩み過ぎだ。こっちもいまかいまかと待たされてる気分になる。早く入りなよ。」

それは、お前がスクエアの風メイジだからだ。普通のメイジなら母上レベルの訓練しないと、気配を消した人が扉の前に立ってるかなんて、気づかないと思う。俺だって、烈風式を半年以上やって、集中して初めて、あやふやに感じることができるんだ。

……それより…、思ったより怒ってないのか？

「…ふ、カトレアの言うことは本当だな。いつも僕に対して、遠慮なく言い放つ君が、今、珍しく、『怒ってないのだろうか？』と考えただろう？」

「…さすがに、今回のは俺が悪かったと反省してるんだ。……ジャ

ン、悪かった。」

素直に謝罪する自分たいして、目を丸くするジャン。いや、俺の事をどう思ってるんだよ。

人が亡くなってるのに平然としていられるほど、自分は壊れてないし、もしくは、しっかりした人間じゃないんだ。

「エリック、君はもしかして…自分のせいだと思っているのか？」

「…逆に聞くけど、俺のせい以外に理由があると思うか？」

…ってか、マザコンのお前が何故、そんなに飄々としてるんだよ。

……おおかた、カトレア姉さんの手回しなんだろうけどさ…。

本来、風スクエアは『風』は読めるが、経験則的に言えば、『場の空気』は読めないと思う。母上しかり、ジャンしかり、ギトーしかり。なんだか、コイツに気を使われるのは色々…歯がゆい。閑話休題。

それは別として、思考を続ける。

パッと見では、殺される理由が無い。

それは逆説的に、パッと見ではない理由が、殺された理由になる可能性が高い。

そして、その理由となる物は、ただ一つ。

俺が頼んだ、『大隆起』に対しての調査

これしかないんだ。
平然としていられるほど人間出来ていないとか頭の中で思いながらも、俺の頭は結論を導き出す。

もし、風石採掘を隠れ蓑にして、調べていた『大隆起』が原因なら…
理由も場所も特定できないが、『黒幕』がいる。
『大隆起』について調べられると困る『黒幕』が…

「…なるほど、よく忘れるけど、君はまだ１０歳だったな。」
突然、思い出したかのように言うジャン。たしかに、肉体的にはそうだが、精神年齢は、お前より上だぞ？　あまり、子供扱いされるのは好きじゃない。

「単刀直入に言うけれど…、虚無のことを考えたり、悩んだりするせいで、君は『頭』は良くなったかもしれない。けれど、…君には芯が無い。『心』の強さとでも言えばいいだろうか…。」
平常時なら、「クサッ、『心の強さ』とか、中二すぎだろ！」とでも、つっこむのだろうが、今の俺に、そんな気力は無い。というより、

「たとえ、『心』が強かったって、人の死を悲しむことはおかしなことかよ…。それも、俺が原因になってる人の死を…」
「……、とりあえず座ろう、部屋の入口で長話するものじゃないさ。

それに、その手に持っているワインはなかなかおいしそうだ。」
少しキザったらしいセリフを吐く、目の前の男。
なんで、こいつはこんなに飄々としていられるんだ…
わけわかんねぇ…

客間の中央に並べられた机と椅子。そこへと向かい、お互いが向かい合う形で、座る。
何を話せばいいのか分からなかった俺を見てか、話を切り出す、ジャン。

「僕がここに来たのは、母の遺書を届けに来た。」
「!?　遺書だと!!」

遺書!?　ってことは…

「……気付くか。やはり、君は頭がいいな。そう、母は殺されることを予測していた。」
「…なら…なぜ、むざむざ殺された…、予測できたなら…対策とかできただろ……!!」

自分が転生してから得た教訓の一つだ。

魔法でも、戦闘でも、頭でも、内政でも、心でも、ありとあらゆるもので一番になることができない自分が唯一もっているアドバンテージ。
原作が起きるまでの準備期間。つまり、『時間』。これだけが俺の持ってるアドバンテージ。

なぜ、それを利用しなかったんだよ…
アカデミーを辞めるとか、別の研究をするとか、多分色々方法はあっただろうに…

「それも、全部遺書に書いてある…と言いたいが、懐にしまってあったのに、誰かの爆発のせいで見事に吹き飛んでしまったよ。」
「…ぐっ」

あの時は、どっちも頭に血が上ってたんだ、俺だけのせいにしないでほしい。たしかに、結果的に見れば俺が全面的に悪いんだけど。

「…だから、口頭で伝えるよ。内容は覚えてるから。」

俺は静かにうなずいた。

「まず、母からの伝言を伝える前に、僕の両親について少し話しておこう。」

そう言いながら、テーブルの上に置かれたタルブ産ワインを開けるジャン。
少し、長い話になるってことか。このタイミングで無駄話をするような奴でもないので、俺は黙って、彼の話を聞くことにした。

「僕の両親は、とても仲が悪かったんだ。」

初っ端から、　初めて知る事実だ。

「悪『かった』？」

「そう、悪『かった』、過去形だよ。もともと、僕の両親は、年が離れていてね。政略結婚さ。ちょうど時代も、英雄王フィリップ三世が没した時期で、誰もわざわざゲルマニアとの国境に面した子爵家に嫁ごうとしなかったのさ。」

英雄王フィリップ三世。

自分の身体と同じ異名を持つので、少し調べてみたことがある。

アンリエッタ姫の祖父にあたる先代の王。彼が若い頃に起こった、ゲルマニアとの戦争で、圧倒的な戦力差がありながらも、退け続け、『英雄王』の異名を獲得。誓約書などは無いが、ゲルマニアとの事実上の不可侵を成功させた、紛れもないトリステインの英雄。戦争と武の天才。

逆にそれ以外の才能は無いのか、大公エスターシュに謀殺されそうになったり、活きがいいって理由だけで、うちの母上が特例で、すぐに騎士になったりしちゃったんだが…

「割に合わない、娘を死地に向かわせられないってところか。」

「そういうことさ。」

それでも紛れもなく戦争の天才だったフィリップ三世。彼が没したとなれば、ゲルマニア国境沿いの諸侯は慌ただしくなったはずだ。うちの父上もそれを理由に宮勤めを辞めて、ヴァリエール領に引きこもったとか言ってた気がする。

「そんな時世に結婚したうちの母は、アカデミーで研究を続けたんだ。僕はまだ生まれてなかったから、憶測になるが、避難の一種だろう。」

そりゃあ、そうだ。うちの母上みたいじゃない限り、女性、それも貴族の淑女たれなトリステイン女性が戦場に出てくることは無い。効率を重視するゲルマニアはガンガン出してくるけど…、キュルケとか地味に強い。ホーミング効果付きの『炎球（フレイム・ボール）』撃たれたら、それだけで俺は負ける可能性さえある。トライアングルスペル以上は防ぐ手段が無いんだよな…。

「父は、命を落とす可能性もあった。だから、早急に跡取りが必要だった。」

「そのための政略結婚だろ？」

「ああ、その通りだ。」

必ず跡取りになる子供が欲しかった。だから、若い女性が結婚候補だったのだろう。スカロンさんとサンドラさんと違って、愛のない年の差結婚、それも必ず子供を産まなきゃいけないとなると…、そりゃあ、仲は良くならないわ。

「そして、僕が生まれた。男だったこともあって、それ以上は必要なかったんだと思う。君と違って、兄弟姉妹には恵まれなかった。」

貴族の家で一人っ子は、多分辛い。多分というのは、あくまで予測

の域をでないからだ。逆を言えば、予測する限りは辛いと思う。
同じ貴族の友人と気軽に毎日遊べるわけでもなく、平民の使用人達とは、最終的な身分の差という線を踏み越えられるかはわからない。実際、俺は家族以外の同世代の友人が壊滅的に少ないし…。

そして、国境沿いに位置するワルド家は幼少時からの訓練を義務づけている家系だ。ヴァリエール家もそうだし、グラモン家やツェルプストー家もそうだ。
少しでも、軍事に関わる可能性のある家系はおおよそ義務付けていると言っていい。

幼少時から、戦闘者である父の厳しい訓練を受けてたジャン。
彼が、母に傾倒したのはここら辺が原因なのかもな…

あくまで、推測の域を出ないが…

「少し話を脱線したね。いざこざも終わり、父は母をアカデミーから連れ戻そうとした。ワルド子爵夫人である母が、アカデミーにいることを、父はあまり快く思わなかったんだ。」
「？　なんでだ？」
「夫人には夫人の仕事がある、そういうことだよ。それに父は命がけで国を守る貴族であることを誇りとしていたからね、父から見てアカデミーでぬくぬくとしていた母に少し思うところがあったんだと思う。」

…よくわからない。多分、どの家も夫人の仕事というのがあるんだろうけど…、うちにいる夫人は私軍の訓練指導をしている。あれが、平均的な夫人の仕事とは思えないし…、情報が足りないな。

「でも、母はアカデミーに残った。父の意見を押しのけてだ。研究しなくてはいけないとがあると鬼気迫る勢いで言ってたよ。」
「…何年前だ？」
「１３か１４年程前だ。」

まだ俺が生まれる前から、大隆起の痕跡にでも気づいたのか…。他に気づいた人がいないことを考えると、改めて、ワルド夫人も俺の周りにいる天才（チート）の一人だったことがわかる。

「だが、それから3年ほどたってから、突然母はアカデミーを辞めて戻ってきたんだ。」
「？　そんなことは、初めて聞いたぞ。しかも、『辞めた』？」
「そうさ、あれだけの啖呵を切っておきながら母は戻ってきたんだ。両親の仲はさらに険悪になった、母はいろいろ言い訳をしていたが、荒唐無稽な話ばかりで父は耳を貸さなかったのさ。」

いつの間にか、ジャンの話に引き込まれてる自分がいた。
話を聞く前までは、あれだけ落ち込んでたのに、今は既に頭を回転させ始めてる。
…真相が欲しい。多分、そういうこなんだろうと自己分析を終える。できれば、自分が原因ではないという真相が欲しい…

「…もしかして、その頃から？」
「多分ね。その頃から母は殺される可能性があることを感じたんだと、今は思うよ。」

やはり…
ってことは、やっぱり『黒幕』てきな奴がいる。

だが、今はそれより…

「なら、なぜワルド夫人はアカデミーに戻ったんだ？　いくら、俺（ヴァリエール）からの頼みだからって、うまく断ることができただろう？」
「そこで話が戻るんだよ、仲が悪『かった』って話にね。」

……わけがわからん。

「…わからないのか、少し意外だね。君は全て御見通しかと思っていたよ。」

どこのチートキャラだよ。ある程度できるのは認めるけど、ジョゼフじゃあるまいし、すべては無理だ。

「父はヴァリエール家から言われて、初めて母の言っていたことが真実だと知ったのさ。」
「そこは分かる。だけど、それはアカデミーに復帰する理由にならないだろ。」
「…ここまで言っても分からないのか。」

少し落胆気味に言うジャン。

「おそらく、ジャンの両親の仲が良くなった、そういうことだろ？」
「そうだよ。君のおかげで僕の両親はとても仲良くなった。」
「でも、やっぱりそれはもう一度アカデミーに行く理由にはならないだろ。」

そう言うと、なぜか頭を抱えるジャン。

「そこまでわかってるのに、その次がわからないのか。

……なぁ、エリック、僕達『貴族』はどんな状況だったら『死』ねると思うかい？」

……！！

「おい、もしかして…お前とワルド子爵は、ワルド夫人が死ぬ可能性があると分かっていながら後押ししたって言うのかよ。」
「……その通りだよ。」
「ふざけるな！！　家族を、母を、お前達は死地に送ったって言うのか！！」

座っていた椅子から勢いよく立ち上がり叫ぶ。
姉さんに抱きしめられたのは、多分姉さんが曝け出させたんだろうけど、たしかにこれなら今コイツがこんなに飄々としてる理由になる。すでに覚悟していたってことかよ。

「そうさ。僕達、ワルド家は君の言うとおり母を死地に送った。そして、そんな母に僕は憧れたのさ。」
「憧れただと…？」
「ああ。父もそうだ、国のため、民のために命を張って戦場を駆け回ってた父は母への認識を改めた。彼女も命を懸けてた、決してぬくぬくと研究していたわけじゃないとね。これが両親の仲をよくした、夫婦というよりも戦友に近い関係だったけれどね。もう少し時間があれば、もう少し気づくのが早ければ、君の両親であるヴァリエール公爵たちみたいになっていたかもね。そして、僕にも弟か妹がいて、君たちのような家族だったかもしれないな。」

少し哀愁を漂わせ、言うジャンは、全然飄々としてなかった。
やっぱり、なんだかんだで堪えてるんじゃねぇかよ…

「話を戻そう。僕達『貴族』だって、犬死はごめんさ。でも、後押ししてくれる人がいれば、それだけで前へ進める。違うかい？　これはそういう話だよ。」

正直全然理解できない。
いや、俺だって貴族を１０年やったるから理解ぐらいはできる。
けど、納得はできない。

「そして母は亡くなった。遺書を通して僕らに、いや、君に想いを託してね。」
「俺に？　お前じゃないのか？」
「たしかに僕もそうさ。けど、悔しいことに本当の想いを託したのは君さ。」
「？　俺、お前の母上とそんなに会話したことないぞ？」

大隆起について頼んだ時ぐらいしか、長く話して無いはずだぞ？

「母にとって、国よりも、民よりも、そして王よりも、君が彼女の主君だったんだよ。誰にも信じてもらえず、犬死の恐怖から解き放ち、大隆起の事を全て託してくれた君が、母の全てだったんだよ。母は君のためだったら、『死』さえ厭わなかった。それがこの結果、僕の母の『名誉の死』の真実だ。」

「『名誉の死』…」

貴族にとっても、犬死は御免。それは、『名誉の死』なら構わないということだ。

怒りで立ち上がった自分の身体が、椅子の上にストンと落ち、

自然と涙があふれた。

…重い……

俺は、そんな覚悟なんてしなかった。

ただ、効率を考えて、ワルド夫人に頼むのが一番いいと思っただけだ。

彼女の『想い』が重い…

『想い』という字が『重い』と同じ発音なのに、

神とか、全ての人間の心の奥底とか、運命とか、

そういう自分ひとりじゃ太刀打ちできないものの意思を感じる

なんか、アホみたいな回想だな…

「…なぁ、ジャン。」
「なんだい。」
「…俺はどうすればいいんだろうな？」
「やっぱり、まだ君のせいだと思ってるのかい？」
「お前の説明で、それ以外どう受け取れというんだよ。」
「『君のせい』じゃないさ。『君のおかげ』だよ。
母の生は最後まで輝いていた。僕からも礼を言う。ありがとう、エリック。」

座りながら、頭を下げたジャンの気持ちを…完璧には、これからも永遠に理解できないだろう。
悔しくないわけない。家族が亡くなって、貴族だからっていう理由で『名誉の死』だからといって、憧れた人が亡くなった元凶にお礼を言う。
そんな、どちらも悔しくなるお礼だった。

「だから、いや、だかろこそ、君には立ち止まらないでほしい。頭は良くても、心が未だなってない１０歳の君に言うことではないのは分かってるけれど、君はこれからも敵味方関係なく屍を築くと思う。だが、立ち止まらないでくれ、僕らは喜んで屍となって、道を作る。」

「…なんで、そんなにしてくれるんだよ…。お前の言うとおり、俺は弱いヘタレだぞ。なんで、そこまでしてくれるんだよ…」

「…なんでだろうね。実を言うと、最初は、父からワルド家はヴァリエール家に仕える家だと聞いてやってたんだけどね。いつの間にか……ってね。悪いね、うまく説明できなくて。」

そう言って、はにかむ優男。

カッコ良すぎだろ…

「遺書の内容を頼む。」

俺も、そんなふうになれるだろうか。

わからないけど、これから考えることだけど

彼女の意思は受け継ごう。

「最初の大隆起は１０年以内に起こる。そのあと、雪崩のように一気に連鎖的に起こるであろう。そしてアカデミーで調べられる限り、過去に大隆起に関する資料が揉み消されてる痕跡がある。揉み消しだけでなく、改竄されてる痕跡もあり。そして、この『遺書』を見ているということは、『トリステイン魔法学院』に重要な手がかりがあるということだ。」

「『魔法学院』！？」

「そう、母は新しいことを調べるたびに『遺書』を書き直していた

んだ。そして、今度、君が魔法学院に協力を取り付けると公爵から聞いて、調べてみたのさ。」
「なんて無茶苦茶な…」

ワルド夫人が実行していた無茶苦茶すぎる方法

それは、自分の『命』をチップにした調査だ。

たしかに有効なやり方だ。風石大鉱脈を調べてる時点で、もしくは調べてたのに発表しなかったおかげか、彼女は謎の『黒幕』にチェックはされていたが殺されてなかった。だが、それでも確実にブラック予備リストには入ってただろう。いわゆる詰み手前の王手状態。そこに、新たな物を調べ、もしそれが『黒幕』にとって不都合なものだった場合、彼女は見事にブラックリストに入り、殺される。

まさに、命を使って、手に入れた情報。

「悔しいな。」
「何がだい？」
「いや、なんで夫人がそこまでやってたことを知らなかったんだろうってね。」
「まだ君には早いって思われてたんだろう。それに正直、母やヴァリエール公爵も魔法学院が引っかかるとは思わなかったらしいしね。あそこは政治の世界では陸の孤島のようなところだからね。」
「もっと危ない気配がしてきたら教えるつもりだったってことか。」
「だろうね。」

自分のために命を懸けてくれた人…か。
また一人、忘れられない人ができたな。

「遺書の内容はそれだけか？」
「あとは、さっき僕が言った、君への感謝とワルド家との今後をよろしく、と。」
「了解。」
ワルド家にはルイズも嫁入りするはずだし、一生仲良くさせてもらう。
「あと、最後に……」
「どうした？　今ならなんて言われても受けきれるよ。」

「『ハルケギニアを、私達が住んでるこの地を、救ってくれ』と書いてあった。」
「…そうか。」
重いな…想いが…、
だけど
「任せてください、と伝えといてくれ。今から魔法学院のために対

策するから夫人の墓参りは当分先になるだろうから。」

「わかった。母にはそう伝えておこう。」

もう迷うわけにはいかなくなったな。

正であろうと負であろうと、バタフライ効果も大歓迎だ。だけど、必ずやり遂げてやろう、この命に代えても。

「遺書の内容はおわりだけど、もうひとつ僕から伝えることがある。」

「ん、なんだ？」

「君が前頼んできたことをやろうと思う。」

前頼んだこと？　いろんな人にいろんなことを頼んでるから、すぐには思い浮かばなかった。

けれど、あくまで『すぐには』だ。

「！！　お前…」

「悪いね、前までは決心がつかなかったけれど、母の死を無駄にしたくないのは君だけじゃないんだ。むしろ、母の意思は僕にもしっ

かり受け継いでるよ。」
「だからって、この時期に行かなくても…」
「いや、今すぐやるしかない。母の影響で命がけだと知って、悩んでる時間が長すぎた。でも、もう迷わない。…だから、エリック。」
「ん？」
「僕に『頼む』んじゃなくて、『命じ』てくれないか？」

…全く、嫌な奴だ。

その嫌な奴本人は、ニヒルな笑みをイケメンフェイスで再現してやがる。
トリステイン貴族は、いや、ジョゼフのことも考えると、貴族王族は一般的に劇的でロマンチストだと思う。
まぁ、だけど、奴が何をしたいか理解してる時点でおれも同類か。

俺たち二人は自然と立ち上がった。

そして、ジャンは跪き、俺は引き抜いた杖をジャンの肩に当てた。

「ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド」

「はっ」

「エリック・ド・ラ・ヴァリエールが命ずる。トリステイン魔法衛士隊に入隊し、隊長となれ。俺ら(ヴァリエール)も裏からサポートしてやろう。」

「はっ、必ずや期待にお応え致しましょう。」

「「・・・・・・・・・・」」

「「…はは、ははははははは」」

誰からともなく俺ら二人は笑いあった。
多分、それは、これからの起こることがさらに危険が伴うことを知ってたから、その不安を消し飛ばすためでもあったんだと思う。

ジャンの魔法衛士隊入隊。彼の両親の寿命が延びたバタフライ効果で、ジャンは入隊する必要もなく、領地経営の勉強に取り組んでいた。
けれど、うちのヴァリエール家は王宮トリスタニアとは意外とパイプが狭い。正確には、狭いのではなく、内密にできる繋がりが驚く

ほど少ない。軍に関することなら元帥でもあるグラモン伯に連絡を取ればいいが、王宮で鎬を削りあってる貴族たちから感づかれないようには不可能だ。
だから、パイプが欲しい。アカデミーからのパイプでは少し力不足だ。だから、軍からのパイプを作ろうと昔から、ジャンに魔法衛士隊の入隊を頼んでいた。
風のスクエア、それも戦闘訓練をしっかりつんでいるから、すぐに承諾してくれると思っていたんだが、いままで断られてきた。その理由が、ワルド夫人だったとは…。

「ほら、エリック。君が持ってきてくれたワインはなかなか絶品だぞ。」

そう言って、俺にワインを注いでくる優男。
酔った男の反応ってみんな似たようなもんだな、と少し感慨にふける。

「ジャン、無茶な事はするなよ。風石について、調べるとか。」
「分かってる。僕は君の兄弟になる予定だからね。それまでは、死ねないよ。」

それは死亡フラグだ、バカヤロー。

「…兄弟か。俺が兄だろ？」
「たしかに、そういうことになるけれど…。なんだか納得いかないな。」

まぁ、今見事にＳＥＫＫＹＯＵされたもんな。
あれ？　俺、オリ主のはずなのにＳＥＫＫＹＯＵしたことないかも…。あまつさえ、されてばっかだ。

「んじゃ、兄弟でいいんじゃね？　兄とか弟とか決めずに。」
「それはいい考えだ。僕もやっと兄弟を持てたってことだね。」

コイツの皮肉って結構エグイ。十分うちの家族の一員になれるよ。
烈風と血のつながりもあるわけだし…、流血のつながりだけど。

「では…」

そう言って、ワイングラスを掲げてくるジャン。やっぱ酔ってんな。

「「兄弟に」」

ま、自分もだけど。
掲げたワインを一気に飲む。まだこの身体では少しキツイな。

「折角、ここまで腹を割って話したんだ。兄として、僕が『貴族の恋』について語ってあげよう。」
「え？　今、兄とか弟とか決めないって言ったばかりだろ？」

完璧に酔ってやがるな、コイツ。

「実を言うとね、僕の初恋はカトレアなんだ。」

そう言った奴の目は、俺の予想と反して、全く酔ってる気配が無かった。

ワルド子爵家とのことです（後書き）

やっと、夏休みに入りました。
まぁ、夏休み前だったので、アレがあったのです。テで始まってトで終わるやつです。
遅れました、御免なさい。クオリティーも久しぶりなので少し低いです。

そんな感じで、３０話です。
もう、久しぶりなのに、ワルドを書かなくてはいけない自分のテンションを察してください（泣）

楽しくない！！
男分がへぁんぱなぁい！　次ももう一話コイツ（ワルド）のために
　使わなきゃいけないし…
次の次は絶対にフォンティーヌの日常を入れます。主に自分のために。入れないと、ジュリアン→ジャン→オスマン&コルベールの三連コンボが決まる。下手すると、四連に進化するかもですし…
あぁあ、ルイズが書きたい、カトレアが書きたい、このさい母上でもいいので女性を書きたい…
物語的にここさえ超えれば、男分は急激に減るんだ、頑張れ自分、頑張ってくだせぇ読者様。

あと、エリック回復けっこう早いですが、正直に暴露しますが、ツッコまないでください（泣）。
いや、本当はもっとうなされてもいいんですが（というより、本当はうなされます。）、
長々とうなされてるの見てるの楽しいですか？
自分は書いてて楽しくないです。という諸事情でカットです。これ

以上は勘弁……

そんな感じのお話でした。

では、久しぶりなのに、読んで下さる読者様に感謝を。
いつも読んでいただきありがとうございます。

貴族の恋とのことです

「実を言うとね、僕の初恋はカトレアなんだ。」

突然そう言った奴の目は、予想に反して全く酔っていなかった。

「突然どうした？」
「何がだい？」
「…いくら腹を割って話すといったって、話の持っていきかたが強引すぎだ。」
「はぁ、やっぱり気づくか。」

そりゃあ、そうだ。

「まぁ、聞いてくれ。僕の初恋はカトレアだった、これは事実だ。」
「…本当に？」
「ああ。」
「この後あるであろう、本来の話への布石とか、ブラフとか、そういうのじゃなく？」
「そうだ。」

マジかよ。
ちょっと落ち着くためにも、ワインを煽る。地元民ジュリアンのお墨付きなだけあって美味い。

「んで、予想はつくけど…、何が言いたいんだ？」
「…『貴族の初恋は叶わない』、そういうジンクスを知っているかい？」
まだ少し遠回りする気かよ。…つきあうしかないか。
それにしても、初恋は叶わない、か。
世界の仕組みや時代が違っても、意外と変わらないところはあるんだな。
「当たり前だろ？　基本的には誰だって初恋は叶わない。」
「それは違う。初恋が叶わないのは、僕達、貴族だけだよ。」
…確かに、よく考えてみればそうだ。平民は村や町と言った小さな活動範囲内でしか生活しない人が多いから、幼少時の時からみんな知り合い、つまり、みんな幼馴染だ。初恋も叶いやすいんだろう。
「でも、それなら魔法学院はどうなんだ？」
魔法学院の意味。教育ももちろんあるが、主な設立理由は次世代の貴族達の社交場だ。魔法学院に入れるレベル同士なら誰とでも恋愛していい、という側面が含まれてるはずだ。
「もちろん貴族だって、恋はする。そのための魔法学院だしね。だけど、さっきの貴族に付け足すと、正確には、領地持ちの貴族は恋ができないってことさ。僕や君のようなね。」
「跡継ぎがってことか？」
「そうだ。」
…なるほど。領地持ちは国益の事もあるから政略結婚するしかない

が、それ以外は割かしフランク、そんなところか。

「でも、僕は運が良かった。」

「？　どういう意味だ。」

「君の家と僕の家の関係があったからさ。君の家に姉妹いたから、幼少のころから、君の家の誰かと結婚するだろうと言われてきた。そして君が生まれて、それが確実になった。結婚相手が三姉妹の誰であっても、僕は幸せだろ？」

俺とルイズが生まれるまでは、ワルド家唯一のの当主だったジャンは間違ってもヴァリエール家に婿入りするわけにはいかなかったから、まだ確実じゃなかったってことか。

「もしかして、婚約者の話、最初はカトレア姉さんだったのか？」

「僕はそう父から聞いてたよ。そして、そう聞いてた幼い頃の僕は、まぁ、意識してしまっててね。君の家にはよく来たから、自然とカトレアと過ごすことも長くてね…」

それで、初恋か。一緒に過ごしたってところは、正確にはカトレア姉さんだけじゃなくて、エレオノール姉さんも含まれてるはずなんだけどな…、サラリと省いてるなコイツ。

「姉さんの病気か。」

「そうだよ。僕も跡取りが必要だからね。」

「予想はつくけど…、なんでエレオノール姉さんじゃないんだ？　年ならルイズより近いだろ？　爵位が足りないとか言ってたけど、俺らの家の関係がそこまで近いなら、そんなの気にする必要ないはずだろ？」

原作では、エレオノール姉さんの相手がヴァリエールを継ぐことに

なるから、姉さんはおいそれと結婚できなかったけど、ここでは俺がいるから問題ないと思うんだが。

「それについての解答も含めた話を持ってきたんだ。僕はここに来る前に、ヴァリエール公爵家にいたんだ。母について、ヴァリエール公爵に報告しなくちゃいけなかったからね。」

「…そうか。」

「気を落とすなよ、もう過ぎたことだ。」

「そうだな。…そういえば、ルイズは元気だったか？」

「ふふ、泣くこともあるけど、彼女はいつも元気だよ。今は『施錠（ロック）』を必死に練習してる。」

「そうか…元気か。」

……よかった。

「まだ話さないのかい？　話した方がコモン・マジックが上手くなるはずだろう？」

「確かに、そうなんだけどね。ルイズに虚無の事を伝えるのは止めてくれ。いつか話すけど、まだ今じゃない。」

「…それは必要なことなんだね？」

「ああ、絶対に必要なことだ。」

「そうかい、なら何も言わないさ。僕は僕のやり方で彼女を支えるだけだ。」

「…悪いな。」

酷いことをしてるのは自覚してるけど、絶対に必要なんだ。

「…話を戻してくれ。父上から何か伝えることがあるんだろ？」
「そうだ。君の父からの言伝だけど、なんでも王宮で君の婚約者の話が出てきたらしい。」
「…なるほどね。それで『初恋』なんて回りくどく言ってきたわけか。」
「たしか、ジェシカだったね。諦めるよう説得してくれと言われたよ。」

それ言ったらおしまいだろ。

「相手は？」
「え？」
「いや、だから、俺の婚約者だよ。」
「…諦めたのか？」

「勘違いしてるみたいだから言うけど、この『婚約者』騒動も計画のうちだぞ？」

「なにッ！？」
「もともとフォンティーヌへの雲隠れなんて結局のところは、『本物達』にはばれるからね。」

虚無について一番豊富な知識を持つロマリア、ヴィットーリオなんかは王家の血を引くやつ全てマークしてるだろうから、本気で調べてきたらばれるだろう。

「アルビオンが騒がしくなってきてる、こんな状況でトリステインは出し惜しみできないだろ？　他国と何とか仲良くしたいはずだ。そして、どういうわけか、この時代の王家、もしくは王家の血を引

くものはどこの国も女ばかりだ。例え魔法が苦手でも、ガリアの『無能』とまで言われてる奴と比べれば、コモン・マジックと『飛翔（フライ）』と『浮遊（レビテーション）』は完璧に使えるんだ。そりゃあ、引っ張り出されるだろよ。」

『飛翔（フライ）』と『浮遊（レビテーション）』は『念力（フォース）』で偽装した奴だ。つまり、対外的には、自分は風の落ちこぼれドットということになってる。風魔法でも使えるのが2つだけという落ちこぼれだ。

国の上層部になればなるほど、俺の母上がかの『烈風』だと知ってるやつが多くなるから、この魔法が苦手ってだけで、フォンティーヌに飛ばされたことを不思議に思わなくなる。

上手く騙されてくれればいいが…

「いや、それなら、なんでわざわざフォンティーヌ領なんかを作ったんだい？」

「まず、第一に自分自身が動きやすいため。」

ヴァリエール家嫡男より新興子爵家フォンティーヌの方が目立たない。

「そして、2つ目のメインの理由だけど、まぁ、いわゆる秘密基地だ。」

「…秘密基地？」

「呆れるのは分かるけど、事実だ。これからここにヤバいものがどんどん集まるはずだ。今回手に入れた『竜の羽衣』も下手すると異端物だし。ヴァリエール家にあった場違いの工芸品は全部こっちに移されたし。」

「…そんな危ない物に君は手を出してるのかい。」

「『虚無』の秘密基地だぞ？　まだまだ序の口だ。」

というより、誰にも語ってないが、メインはティファニアだ。彼女を匿うために作ったと言っても過言じゃない。それでも、俺にとっては未だ見ぬティファニアより、家族の方が大事だ。だから、このフォンティーヌ家は、いざとなったら切り離すためだけに作った家だ。

ヴァリエール家でも隠せるけど、あらぬ疑いをかけられては困る。自分の国の大貴族が秘密裏に…ってのはそれだけで弱小国トリステインとしては恐怖だ。

「それで、俺の婚約者は誰になったんだ？」

「はぁ、僕は少し頭を整理したいから、手紙渡すよ。あとは、自分で読んでくれ。」

「……なんでこっちはあって、遺書は吹き飛んでるんだよ？」

「遺書は一番大事な物だったからね、懐にしまっておいたんだ。」

んで、こっちはお前にとっての重要度は低いから鞄かなんかに入れてたってことかよ…マザコンめが。流石に今日は言わないけど。

そんなことを思いながら、ジャンから手渡された手紙を読む。

相変わらず、綺麗な字だ。父上は字だけでも威厳があるように見える、憧れだ。

手紙を読み終え、思考を回転させる。

ジャンも、俺の前に座りながら、色々考えてるみたいだ。恐らくさっきのフォンティーヌ領についてのことか、それともこれから王宮

に行くことについてかだろう。

手紙の内容によると、具体的には誰とは未だに決まっていないようだ。というより、弱小国であるトリステインの言い分だけで決めれるわけがない。ただ可能性候補だけは書かれてた。

アルビオンは絶対にないと書かれてたので、アルビオン内戦エンドはなさそうだ。助かった。

トリステインでは、アンリエッタ姫、クルデンホルフ大公国のベアトリス姫。
アンリエッタよりはベアトリスの方が確率的には高いだろうな。アンリエッタは他の国に婿入りする方が外交的には有益だし。

ガリアでは、次期王になった人の娘がトリステイン側の希望だそうだ。つまり、シャルロット姫かイザベラ姫。
原作知識で、次の王がジョゼフになることを知ってるから、希望としてはイザベラ姫か。
まぁ、あくまでトリステイン側の希望だ。大国ガリアなら簡単に突っぱねることができる要望だ。
もしかしたら、シャルロットならいいよってことで、タバサが嫁入りしてくる可能性もあるか。

そして、ゲルマニア。
『皇帝』アルブレヒト三世が幽閉してる血縁女性の誰かって可能性もあるが、トリステインはこれを希望していない。
幽閉なんてされてた影響力が弱すぎる奴と繋がりを作ったって、こちら側にあまり得が無い。
なので、ゲルマニアと繋がりを作るなら一番可能性が高いのは…

うわぁ、字書くとき力籠め過ぎだろ父上…

キュルケ・フォン・ツェルプストー、後方の憂いを絶つってことか。これは、あくまで国の希望だな。うちとツェルプストーが手を結ぶことは…、いや、国のためならありえるのか？

なんにせよ…、希望候補で出てる人たち原作キャラばっかりだ。たしかに、原作に出てる時点で、強い影響力がある人たちってことの証明でもある。国としても、手を組みたいんだろう。

「やっぱり、エレオノール姉さんを残すのは、俺が婿入りする可能性があったからか。」

「そういうことだろうね。」

思考を終えた俺たち二人は会話を続行する。

「いつぐらいになりそうだい？」

「そこまでは知らされてないのか？」

「ああ。」

「…手紙には2、3年後に決まるだろうって書いてある。自分が予測していたより早い。」

原作で、最後の最後にゲルマニアと手を組んでたから、もっと遅くなると思ったんだが…。

準備だけ早くて、ゲルマニアとの交渉が難航したってことなのか？

「となると、次のラグドリアン湖の園遊会に間に合わせてくるんじゃないか？」
「多分、そうだと思う。園遊会で見せつけて、繋がりを強調したいんだろうな。次のには、行くつもり無かったんだけどなぁ。」
ヴァリエール家に戻るのは次のラグドリアン園遊会と原作開始の間の時期かと思ってたけど、思ったより早くなりそうだ。
となると、フォンティーヌにいる期間も短くなるわけで…、ティファニアを早く見つけなきゃいけないな。

「君がそこまで言うってことは、僕の説得は必要なさそうだね。」
そう言って、今度こそ酔おうと安心した表情でグラスを傾けるジャン。

「ジャンは、姉さんをどうやって諦めたんだ？」
「…いいよ、話しておこうか。まぁ、僕自身が若かったってこともあった。それに、どうもカトレアは僕に気があるようには見えなくてね。」
ジャンは姉さんより2歳年上だ。たしかに、病弱じゃなかったら結ばれてたんだと思う。だから…
「姉さんが本気で本心隠したら誰も見抜けない。昔から、俺はそう思ってる。」
「…本当は僕に気があったと？」
「可能性はなくはないと思う。」

というより低くないと思う。病弱なことは自分自身が一番わかるはずだ。
もし、姉さんがそれを察して、結ばれないことを自覚して、自分の気持ちを隠したら…

「そうなんだろうか？」
「わかんね。もともと俺ら男に女の気持ちを理解しろというのは土台無理だと思う。それに、あの姉さんだからね。一生分かんないと思う。」
「そうだな。」

短い沈黙が客間を包む。

「…それだけじゃないんだ。」
「ん？」
「一番の理由はさ、僕はルイズに憧れたんだ。どうも、僕は芯の強い女性に弱いらしくてね。」
「…なるほどな。」

「結局、僕達貴族の恋は、どれだけ婚約者を愛せるかなんじゃないかと思うんだ。僕の両親も最初からそうしてれば、気づけたはずだしね。」

そのあとは、たわいもない会話で、静かに夜は更けていった。

だけどね、ジャン。

俺は一言もジェシカを諦めるなんて言ってないんだ…

この気持ちはルーンの影響かもしれないけど、それでも

諦めてないんだよ

「ねぇ、カトレアさん。」

ジャンとエリックが去った後の医務室でのこと、二人の女性が向き合って会話していた。
治癒を担当したダルシニはすでに退室している。

「あら、どうしたのかしらジェシカちゃん？」

「……好きなんでしょう？」

「何の事かしら？」

迷いなく、いつもの口調で返答するカトレア。

「あたしね、これでもかなりそういうことには敏感なのよ？」

「…そう。今まで隠し通してきたのに、気づかれちゃったわね。」

「うん、ずっと騙されてた。カトレアさんとそういう、恋の話とかもたくさんしてきたけど、今まで一度も気づかなかった。」

「…言っちゃだめよ？　お互い辛いだけだから。」

「・・・・・・・・・・・」

ジェシカは、そう言い切ったカトレアの微笑に見とれていた。

儚く、淡く、脆く、繊細な…、それでいて星のような輝く微笑み。

「ねぇ、カトレアさん。」

「なに？」

「あたしが言うべきじゃないんだろうけど…、伝えるくらいはしてみたら、どう？」

「……ふふ。ジェシカちゃんがそういうなら、ちょっとだけ考えてみようかしらね。」

そんな、別のお話。

貴族の恋とのことです（後書き）

幼馴染にカトレアが、しかも婚約者になるであろうと言われたら惚れてもおかしくないんじゃないだろうか
あと、ヴァリエールに復帰フラグです。

ワルドって原作で悪役だけど、悪役じゃないワルドはカッコいいと思う。
死んだ母のために、立場とか、国とか裏切れるってのはそれだけ芯が強いと思う。

カトレアさんだって人間なんです。いつまでも仙人ポジションじゃありません！

そんな回でした。
いつも読んでいただきありがとうございます。

エレオノール姉さんとのことです

ブンっ！！

軽快な風切り音と共に少年の手から、竹とんぼが弾けるように飛ぶ。

この情景描写だけを読めば、至って平和な、どこかの下町の少年の遊んでる姿を思い浮かべるところなのだろうが……

「もう一度飛ばしなさい。今の方が、さっき飛ばしたものより高く飛んだわ」

「はい、エレオノール様」

そう言いながら、必死の形相で竹とんぼを飛ばすジュリアン。

そして、その飛んだ竹とんぼをただでさえ吊り上った目をさらに吊り上げ観察するエレオノール姉さん。

一週間前に運ばれてきたゼロ戦が鎮座されている庭では、そんなシュールな光景が見られた。

そこには下町の少年の、いかにも夕焼けが似合いそうな雰囲気などは無く、戦場や締切寸前の出版社の様な戦いの雰囲気だけがあった。

やや狙いとは違う形になったが、それでも結果オーライではある。

……ではあるのだが、やはり見ていると変な気分になる光景だ。

ジャンが訪問に来てから約一週間と少しほどの時が過ぎた。

交渉や運搬時間の都合で、タルブ村からゼロ戦がこのフォンティーヌ領にたどり着いたのが3日前。その間に、ひきこもりメイド長ダルシニは見事にジュリアンの教育をしてくれた。彼女と一緒にひき

こもりをしたジュリアンは、心なしか少し白くなってた気がした。

『竜の羽衣』、正式名称はゼロ戦。
厳密に言えば、多分ゼロ戦も正式名称ではなく略称か何かなのだろうが、あいにく自分はそんな知識は持ち合わせていない。本来の予定では、ジェシカにルーンを使って、手伝いを頼むつもりだったのだが、ジェシカがこのゼロ戦に関しては役立たずなので、自分自身でジュリアンの手助けをすることにした。

ハルケギニアは魔法であふれている。

当たり前だろ、と今生きてる世界では言われてしまうことなのだが、自分の元の世界では有り得なかった現象なだけに、魔法一つとっても、いろいろと物思いにふけることが少なくない。そんな１０年を生きていたせいか、ハルケギニアの魔法は意外とファンタジーではないという考えに至っている。
たしかに、魔力やら精神力やら、今のところ説明できないところも多々あるが、それでもある程度筋の通ってる理屈に出くわすことも同じように多々ある。
アカデミーで研究している姉さんなんかは俺よりもっと詳しいはずだ。

要するに、魔法もわりかし理屈が通っているということである。それは前の世界では考えられないような、魔力や精霊などを根幹としているから、科学的理屈は吹っ飛ぶものも多いが、魔力や精霊を根幹とした魔法的理屈は通っているのだ。
だから、アカデミーや魔法学院がしっかりやれているのである。イ

メージで全て済むのなら、その二つは用無しの機関に成り下がってしまうわけだし。

だが、魔法的理屈が通っていると言われても、魔法が使えないものにとっては、結局魔法はただのファンタジーだ。
ジュリアンもそうだった。何故、もしくはどうやって『竜の羽衣』は空を飛ぶと思う？　と聞いてみたが、魔法的な何か、と答えてきやがった。
いくら貴族が魔法を使えるからって、数の暴力を抑えるのは不可能だ。こういう向上心の無さというか、考えることを放棄するところにもハルケギニア６０００年の貴族社会の歴史の理由があるのかもな……。ゲルマニアで工業が発展していると言っても、その計画のメインを担っているのは『錬鉄』シュペー卿達みたいなメイジなわけだし……。

そんなわけで、何とかメイジではないジュリアンにこいつが飛ぶにはどうするかを説明しなくてはいけなかったのだが、あいにく自分にもそんな詳しい知識があるわけではない。内政に手を出そうとして見事に沈没した経験もあるので、専門分野じゃないことに手を出すのはどれだけ愚かなことかは身に染みている。
揚力などの単語は知っているが、どういう理屈はさっぱりわからないのだ。

結局、試行錯誤した結果、凧と竹とんぼをあげた。後は、丸投げだ。どうも、物事は自分が考えていたよりはるかに前途多難であったらしい。プロペラが回れば、風が起こるということ自体を理解してなかったっぽいのだ。
そんなこんなで、この3日間ジュリアンはひたすら様々な凧と竹とんぼを作っていた。あの真剣過ぎる表情さえなければ、年相応な正月前の少年なのだったんだけど……。

とまぁ、比較するためにたくさんの凧や竹とんぼを自作しはじめて3日経った昨日の夜、エレオノール姉さんが突然フォンティーヌ領に訪問してきた。
久しぶりに再会した姉さんの顔はぐったりしたようにやつれて見えた。だから昨日は、エレオノール姉さんのことはカトレア姉さんに任せることにした。人を慰めるには俺よりカトレア姉さんの方が適任だ。
考えてみると、これは自分が、というものを自分はあまり持ってない気がする。人に任せる事だけうまくなってきてる……なんだか少しやるせなくない。
そして今日、エレオノール姉さんを見た時、まだ少し元気がなさそうだったので、少しでも気晴らしになればと、ジュリアンを手伝ってやってくれないかと頼んだ。
結果は冒頭の通り、なんだか無駄に燃えてるというか、まぁ結果オーライである。

「エリック」

ん、物思いに耽りすぎたみたいだ。いつのまにかエレオノール姉さんが窓際の近くにいた俺の隣にいた。ジュリアンの方を見ると、庭の芝生でぐったりしてる。たかが竹とんぼといえど、全力で4時間ほど飛ばし続けたのだ、よく頑張ったもんだ。

「ん、お帰り。元気出た？」
「……昨日のカトレアといい、あなたも相変わらず弟らしくないわね。私の長女としての威厳がぼろぼろだわ」

「姉さんはいろいろ考え過ぎだと思うよ。ここにいる時ぐらいはそういうの抜きにした方がいいって」
「エリック、あなたにだけは考え過ぎだと言われたくないわ」
――そうかい。
「魔法学院に行くんだったかしら？」
「そうだよ、まだまだ先だけどね」
「ここに来る前に父様達に挨拶に行ったのよ」
「なんか言ってた？」
「……『魔法学院にルイズも付いて行く』って言ってたわ。」
マジか。父上も、この前のワルド夫人の一件があったのを知っているはずだ。ってことは……
「全く、父様も何を考えてるのかしら。いくらルイズがオールド・オスマンに会いたいと駄々をこねたからといって……。この前、何が起こったかも耳に入っているはずなのに」
「いや、多分それを認めたってことは、俺の考えと同じってことだ」
って、ルイズの目的はオールド・オスマンかよ。うわぁ、会わせたくねぇ……
「どういうことよ？」
「簡潔に言うと、ワルド夫人を殺した『黒幕』さんとやらは魔法学院と繋がってないってこと」
「どういうことよ！？」
同じ言葉なのに、とてもわかりやすい、表現豊かな姉さんである。

「魔法学院と王宮の性質上、両者はほとんど繋がりが無いのはわかる？」
「それは流石にわかるわ」
魔法学院は王宮からの影響をなるべく受けないように半独立国のような関係になってる。これは他国の学生を留学させたりしてるため、学生間の問題が国の問題の発展しないためだ。問題はなるべく学院内で処理しろってことだ。
「んで、両者を繋いでる特使の役割を担ってるのが『波濤』のモット伯」
この場合の特使は、ある意味さらし者の役割である。王宮から魔法学院に特使を送りましたと全てのトリステイン貴族にアピールする役割だ。魔法学院はああ見えて、いろいろとデリケートな場所だ。原作ではベアトリスが軍隊連れてきてるが、本来はあんなことは不可能だ。うちでもあそこに御つきのメイド一人でさえをねじ込むこと不可能だ。父上が親バカを炸裂して、エレオノール姉さんに内緒でねじ込もうとした経験談だ、信憑性は高い。
まぁ恐らく、原作では、クルデンホルフ大公国から貸された借りが高すぎたんだろう。……相変わらず、トリステインの未来が心配される。
「言っちゃ悪いけど、あのモット伯爵にトリステイン貴族全員を騙せるほどの演技力があるとは思えない」
「もともとそんな表だって動く必要はないはずよ。秘密裏の特使がいる可能性だってあるわ」
「もちろんその可能性もあるけど、わざわざそこまでして、魔法学院で何をするのさ？　たしかに魔法学院はある意味要塞に近いよ。内側にいる未熟な学生達にさえ気づかれなければ、あそこから情報

が漏れることはほとんどない、他国はもちろんのことトリスティン貴族たちにも内緒で何かをすることは可能だ。」
「なら、もしかしたらあそこがすべての『黒幕』のアジトだって……」
「だから、メリットがなさすぎるんだ。学園は確かに秘匿性はたかいけど、事が起こってるのは王宮だよ。学園の秘匿性の高さは陸の孤島のような他の場所との連絡がつきにくいのが理由だよ、何かアクシデントが起こっても迅速な対応ができない。」
この一週間と少し、ワルド夫人が遺(のこ)してくれた魔法学院という手がかりを徹底的に考えてみたんだ。おかげでいろいろと推測できるようになった。どこかに黒幕がいるだろうってことも――

「……もしかして、あなたと父様は黒幕の正体に見当がついてるのかしら？」

――そして、黒幕の正体も。

「当たってるだろうって推測はできてるよ。そして今回、父上がルイズをつれていけって言ったってことは、多分俺と同じ考えなんだと思う。……考えてみると、もしかしたらそれを暗に示すメッセージなのかもしれない」
「考えすぎじゃないかしら？」
「ん、そうだね。よくよく考えたら、フォンティーヌとヴァリエールのパイプ間で隠しごとするわけないね。今回は、ただたんに父上

がルイズの駄々に負けただけだね」

エレオのール姉さんも父上たちが親バカだって事はさすがにもう気付いてる。すでに二十歳越えてるわけだし……

「で、その『黒幕』さんってのは誰なのかしら？」

「教えない」

隣の姉さんの雰囲気が一瞬で変わった。さすが『烈風』の娘っていうか……、なかなかの迫力だ。だけど、それが夫ができない理由だという事に気付いてほしい。

「姉さん、そんなに怒らないで、とりあえず理由を聞いてくれ」

「……いいわ。とりあえず、聞いてあげることにするわ」

高圧的な態度で言い放ってくるエレオノール姉さん。だから、それが夫ができない理由なんだって……。あと、カトレア姉さんから、これは長女として振舞おうとしてるエレオノール姉さんの努力らしい。それを聞いた俺としては、逆に少し可愛く見える。

鏡の前で高圧的な態度の練習をするエレオノール姉さん、目標は『烈風』の二つ名をもってる母上

うん、やっぱりなんだかかわいらしく見えてくる。

「単刀直入に言うけど、姉さんって演技下手でしょ？」

「そんなことないわよ。これでも殿方の相手をするために練習したわ」

「もしその『黒幕』が姉さんの目の前にいたとして、姉さんは普段通り振舞える？」

「……もしかして、私の近くにいるのかしら？」
「基本的に社交界にあんまり顔を出さない俺が推測できるんだよ？」
――それだけ、有名な人ってことなんだよ？
「わかったわ。たしかに私はあなたやカトレアのようにできないわね。知らない方がいいと思うわ」
「姉さんはルイズ似だもんね」
「勘違いしないで、あの子が私に似てるのよ」
「だから構ってあげたくなると。構うにしても、もう少し優しくしてあげればいいのに」
「あなたとカトレアが優しすぎるのよ。私ぐらいは厳しくしないとバランスが取れないわ」
そうかいそうかい。
「そういえば、ここに来る前にヴァリエールに寄ったんでしょ？ルイズはどうだった？」
そのあとは、ルイズが元気で、まだ『施錠（ロック）』の練習中、姉さんの滞在期間は2週間ほど、など、たわいもない会話を続けた。
ジュリアンが元気を取り戻し、今度は凧の準備を始めていた。フォンティーヌ家の風の中にかすかに料理の匂い感じた。訓練もなんだかんだで欠かさずやっているので、『風』に対しては敏感だ。そう

は言っても、風探知の精度はいまだ風のラインメイジぐらいらしいけど。
そろそろ、メイドの誰かが昼食の準備が整ったと連絡が来るんだろう。

「……私については何も聞かないのね。それとも、既に予想済みってことかしら？」

今日の昼食について思考していた空白のあと、姉さんがつぶやいた。

「姉さんは、聞いてほしいのかい？」
「多分、聞いてほしい……と思うわ」
「了解」

あまり得意ではないが、聞き手にまわろう。
そして、姉さんは少しうつむきながら、ぽつりぽつりと語り始めなかった。

――――――ん？

「姉さん、いくら俺でも黙られちゃわからないんだけど？」
出ばなからくじかれた。思いっきり語るムードだったから、こっちも聞くモードに入ったのに……
「……いざとなると、なかなか話しにくいものね。エリック、質問しなさい」

「横暴だなぁ」

質問しなさいって命令形で言ってくる人初めて見た。

「姉さんが帰ってきたのは、ワルド夫人が原因？」

「いきなり確信をつくのね」

「じゃあ、やっぱり当たりか。多分ジャンか父上、どちらかに忠告でもされたんでしょ？　とりあえず一度避難しなさい～って」

「いや…その、実は少し違うのよ……」

「――？？」

「誰からも忠告なんてもらってないわ。……怖くなっちゃったのよ！　悪いかしら！！」

さいですか。

「別に悪いとは言ってないよ。正直当たり前だと思う、姉さんにはまだ夫がいるわけじゃないし」

自分が殺される可能性のある敵地で一人孤独というのは怖すぎる。あらためて、その敵地に一人で向かったジャンには感謝だ。

そんなことを考えていたら、横から高速で手がのび、頬を戸惑いなくつねられた。

全く避けれる気がしなかった。

「ふぁにうぉするぅ？」

「ふふふふふふ、『何をする？』ですって。ねぇエリック、私に夫の話をする口なんていらないと思うんだけれど、あなたの意見も聞いておこうかしら。ねぇ、どう思う？」

どうやら、禁忌にふれてしまったらしい。全くそんな気はなかったのだが……。

「ねぇしぁん」

「そうね、たしかにその口では質問に答えられないわね」

そう言って、頬をつねっていた手を離してくれた。でも、目は全く笑ってない。

カトレア姉さん、今の姉さんを見ても、あなたはエレオノール姉さんが可愛いといえますか？

……多分言えるんだろうなぁ、しかも微笑を浮かべながら。我ながらアホなことを考えた。

「ワルド夫人が殺されたタイミングが良すぎると思うんだ」

「どういうことかしら？」

「あくまで推測だよ。ワルド夫人が殺される前に、ワルド子爵が亡くなったのは知ってるね。俺の所に来た情報だとさ、ワルド子爵が亡くなったってのが来てから、ジャンがすぐ来て夫人が殺されたって教えてくれたんだ。」

「それで？」

「後から確認もしたんだけど、子爵が亡くなってから、ほんの少しの日数を置いて夫人が殺されたんだ。」

ジャンは相当辛かっただろうな。

「タイミングが良すぎる。だから別の可能性も考えられた、妻を殺すよりは未亡人を殺す方が騒ぎが起きないだろうって」

「そ、そんな……！」

「だからもう一度言うけど、あくまで推測だよ。」

姉さんが何かを言おうとしたのを被せるようにさえぎる。
あくまで推測。これについては、信憑性も証拠も何もない。
妻を殺したら、他の貴族や王宮に少ないがパイプがある子爵が動くかもしれない。若輩者のジャンと違って、子爵ならそれができた。
もう他の貴族と結婚するなんて絶対にないだろう未亡人。ジャンも立派な後継者として育ち、いやな言い方だが、夫人の役割は既に終わっていた。こっちの方が騒ぎが少ないだろうとこのタイミングでやった可能性も……

と色々、思考してみたけど、やっぱりこの可能性は低い。殺すまでして隠してくる奴らだ。影響だの何だの、しかも子爵という低い地位の人間なんて封殺できるだろう。たまたま相手側が都合よくなっただけだろう。

「姉さんは風石じゃなくてブリミルを研究してるし、子煩悩で有名なヴァリエール公爵の後ろ盾があるからワルド夫人よりは断然安全だけど、それでもやっぱりいないよりはいた方がいいと思うよ」

まあ、安全ではあると思う。相手側も、姉さんに手を出したら、どうなるか分かるはずだと思う。
それに、この問題関係なしに姉さんはそろそろ結婚するべきだ。あと2，3年経ったら適齢期を越えた人扱いされる。
あ、だけど俺の婚約が誰になるか決まるまで、姉さんが嫁に出るか

婿を取るか決められないんだ。もしかしたら、姉さんと結婚オーケーな人が出てきても王宮が止めるなんてことになるかもしれないのか……

姉さん、ファイト。

「今の王宮に行くんだったら、なるべく備えをしていくべきだってことだよ」

「ねぇ、エリック」

「ん？」

「やっぱり私、もう少し長くここにいることにするわ」

「うん、了解」

トリステインの王宮や魔法学院、果てはアルビオン、ガリアにロマリアと、この時期のハルケギニアはいろいろと忙しい時期だった。

それでも、カトレア姉さんたちの動物たちは駆け回り、季節が変わったからか最近見かけるようになった蝶々も飛び回り、フォンティーヌは今日も平和だった。

エレオノール姉さんとのことです（後書き）

地の文が少し、一人称と三人称があやふやに混ざってしまったような感じを受ける…

もう少し頑張って書こう。そんな回でした。

久しぶりでしたが、読んでいただいてありがとうございます。

オールド・オスマンとのことです

「そして、その時最初に魔法を当てた瀕死のドラゴンがこちらに攻撃してきたのじゃ。だが、そんなことはわしも読んでおった。すぐに後ろに振り返り、既に詠唱しておいた『氷柱矢（ウィンディ・アイシクル）』を、その牙？く竜へと放ったのじゃ」

「わぁ――」

（うわぁ……）

自慢げに自分の武勇伝を語るオールド・オスマンとそれに聞き惚れるルイズ。だが、オールド・オスマンの本性を知ってる俺としては、そんなルイズを見て苦笑いを浮かべることしかできない。トリステイン魔法学院、学院長室での出来事である。

魔法学院へと向かう日を迎えるまで、エレオノール姉さんは結局フォンティーヌ領に居座った。正確には、ゼロ戦の研究をしてほしい大義名分のもと居座らせた。エレオノール姉さんはしょうがないわねと、口調は渋々と、だが表情はいきいきと同意してくれた。相変わらず、分かりやすい姉さんだ。

そして今日の早朝、俺とジェシカを乗せた馬車はフォンティーヌ家から出発し、途中のヴァリエール家でルイズをひろい、無事トリス

テイン魔法学院にたどり着いた。
道中では、ルイズが昔見せてくれたオールド・オスマンの伝記を片手に熱く語ってくれた。そして今回の訪問で、その伝記にサインしてもらうらしい。兄としては、即刻その伝記を処分したい、あの時なら本来使えない『発火（イグニッション）』だって使える気がした。

そして、魔法学院についてからもスムーズに事は運ばれた。秘書だと名乗る女性に学院長室に案内され、無事オールド・オスマンと面会を果たし、冒頭の状況へと至った。

「ルイズ、そろそろいいかい？」
「あっ……兄様ごめんなさい。あのオールド・オスマン、一つだけいいですか？」
「よいぞ。なんでも言ってみなされ」

オールド・オスマンに会うなり、握手を求め、武勇伝を聞かせてほしいとせがんだルイズ。だが、そろそろこちらの本題にも入りたい。ルイズにはあらかじめ、父上からの頼みで来たと言ってあるので、少し渋るような表情を見せたが、引き下がってくれた。

「あ、あの、サインお願いします！」

そうして、差し出される件の伝記。何度も読み返していたであろう事が、本の傷み具合で推察できる。

「ふぉ、これまた懐かしいものを。２０年前に発売されたはずじゃ

が、よく持っておったのう」
「母上に頼んで手に入れてもらいました。私の大事な宝物です」
「…なるほどのぅ……」

そう言って、手に持っていた水煙管(みずキセル)を置き、羽ペンを手に取り表紙にサインをするオールド・オスマン。

「……ミス・ヴァリエール」

「はい」

「どんな魔法が使えるか、どのランクのメイジなのかを余り気にしてはならんぞ。」

「へっ？」

「メイジとして修業し、そして使い得ることができるようになった魔法で何をするかが重要なんじゃ。『発光(ライト)』でさえ、メイジでないものにとっては希望の光、暗闇という不安から人を救い出すことができる立派な魔法じゃ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

オ　ールド・オスマンとルイズは机一つ挟んで会話している。ルイズの後ろに立ってる俺からは、真剣な表情でルイズに話しかけるオスマン学院長の顔しか見えない。

オスマンから手渡された本をしっかり胸に抱き、俯いているルイズ。
彼女は今どんな表情でオスマンの言葉を聞いているのだろう。

俺に、その気持ちは分からない――

魔法が当たり前ではない世界から来た自分は、虚無のせいで系統魔法が使えないけれど、『念力（フォース）』ひとつ、いや『発光（ライト）』ひとつに喜びを見いだせた。

魔法が当たり前の世界で生まれたルイズ

彼女の気持ちを理解できることは無いのかもしれない。いや、虚無でさえ彼女から奪った自分は理解しちゃいけないのかも しれない

彼女の兄だというのに――――

「ミス・ヴァリエールがこの魔法学院に入学し、立派なメイジに成長するのを、この老いぼれは今から楽しみにしておるぞ」

「…はぃ……はい、あり、が…とうございま、す」

優しい目で頬笑みながら諭すオスマンと、かすれる声でお礼を言いながら頭を下げるルイズ。

自然と俺も頭を下げていた。

泣いているルイズは俺の後ろに控えていたジェシカに任した。秘書の女性も子供二人だけでは学院内が分からないだろうとオールド・オスマンが彼女たちの面倒を見るようにと頼み、今、学院長室にいるのは俺達二人だけだ。

それにしてもさっきのオスマンの言葉h「身体の方も立派な成長を期待しておるぞ」――殺す

杖を抜き、オスマンに向ける。だが、向けられてるオスマンはそんなことはどこ吹く風と飄々としてる。

「若いうちから、そうかっかするもんじゃないぞ？」

「誰のせいでそうなったとおもってるんですか？」

「もちろん、わしじゃ」

なにこのオスマン、うざい。

「ほれほれ杖を収めんか。まったく、老いぼれの配慮を無碍にするんじゃないわい。あのままの空気で話を再開するわけにはいかんじゃろ？」

そう言われるとぐうの音も出ない。たしかにあの状態のまま、話を続けるのは得策ではなかったかが……なんか納得いかない。

いつか仕返しすることを心に誓い、とりあえず杖を収める。

「ミス・ヴァリエールが、伝説の系統『虚無』の持ち主であっとるかの？」
「『虚無』？　何のことでしょうか？」
「……ミスタ・ヴァリエール、わしは化かし合いをする気はないんじゃよ」

さっきの空気から、一気に切り込んできた。油断ならな過ぎる、原作のエロボケ爺の枠で収まっておけよ。

「私はフォンティーヌ家の者ですが？」
「ヴァリエール公爵の手によって、この面会は準備されたものじゃ。わしはヴァリエール家の嫡男と話をすると思ってここに臨んでいるという事じゃよ。フォンティーヌに一時的にいるのも何かしかの理由があるんじゃろ？」

そこまでばれてるか。

「おそらく、わし等の目的は同じじゃ。ここは一つ、腹を割って話さんかね？　既にワルド夫人という犠牲も出ておる、わし等は手を結ぶべきじゃよ。なんならわし等の知ってることをすべて話してからでもよいぞ？　ちなみに、今回の訪問は表向きにはわしのファンであるミス・ヴァリエールが魔法学院に訪れたということになっておる。何らかの理由で、身元を隠しておるおぬしの名前は出してお

らんぞ」

……ワルド夫人の事も知ってるか。それよりも三つ目のわし等、オールド・オスマン個人ではなく、複数が関与ってことか……、聞くべきだな。俺の事情を理解してるみたいだし、もともと敵対するつもりはない（今回の俺に対しての気遣いもありがたい）。それに、父上もルイズを連れてくるのを了承してくれるくらいだし、敵の可能性は無い……はず。

「……わかりました、先にそちらの話を聞かせてください」

「よいじゃろう」

小さく微笑を浮かべるオスマン

そして、彼の回想録が語られた

「事の起こりは、わしが若いころに行った使い魔召喚（サモン・サーヴァント）からじゃ」

「使い魔召喚（サモン・サーヴァント）ですか？」

「そうじゃよ。先のミス・ヴァリエールから、わしの使い魔がなんなのか聞いておったりしないかね？」

「ええ、聞きました。モートソグニルという名のハツカネズミだとか」

「もし、わしの使い魔がただのハツカネズミならとっくに寿命で死んでおるわい」

……話がきな臭くなってきた。

「ほれ、こやつがわしの大事な使い魔、『疲れてため息をつく者（モートソグニル）』じゃ」

そう言い、オスマンは手に乗せた白いネズミを見せてくれた。

「モートソグニルと契約した時、彼から語られたのじゃよ。『このままだと、世界が滅び行く運命にある』との」

――！！　オスマンは、『大隆起』をずっと前から知っていたのか！？

「その顔を見る限り、ミスタ・ヴァリエールも知っておるようだの。やはり、わし等の目的は同じと見てよいのぉ」

「そのようですね。ですが『大隆起（それ）』を知っていながら、邪魔をする輩が王宮にはいるようですがね」

「そこまで気づいておるとはのう……、若いながら末恐ろしいわい」

「ワルド夫人の事件で気づきました。遅すぎるくらいです」

もっとうまくやってれば、気づけたかもしれなかったのに……

「……話を戻すとしようかの、時が流れたとおりに話した方がわかりやすいというものじゃ。」

そのあとの話は、自分が何度もルイズから聞かされたことのある話

だった。

『学生の頃は落ちこぼれで、全てが中途半端。使い魔召喚でも何も力のないネズミしか召喚できなかった』

――だが、そのネズミが彼の全てを変えた

『だが、軍に入ってからはめきめきと魔法が上達し、最終的には全系統スクエアになる』

――だが、それはネズミが彼に与えた力

『そして、その頃大量に発生した亜人や害獣退治に精を出し、国に貢献した』

――だが、それは彼が国での発言力を強めるため、強めなければ誰も彼の言葉に耳を傾けてくれない

『その後、軍を引退してトリステイン魔法学院の教師になる』

――だが、当時の王は話を信じてくれなかった。そもそも彼は何故滅びるのかを知らない、彼は原因を追及することにした

『教師時代、とあるドラゴン大量発生事件で国の騎士団達が動けないのを見て憤慨し、単身でドラゴンの群れを殲滅する。その時、『破壊の杖』を始祖様から授かったとのこと。』

――だが、それはただの誇張。原因追究の一環で出会ったドラゴン

打倒しただけのこと。彼はいつしか、『伝説』のひとりになっていた

『そして今、トリステイン魔法学院の校長を務めている。』

「本来ならわしは、ミス・ヴァリエールに教えを説くようなことができる人間ではないのじゃよ、わしの力は全て使い魔から与えられたもの、だから使い魔に『疲れてため息をつく者（モートソグニル）』と名付けたんじゃ。それに、わしは教師としても失格の男じゃ。もともと、原因を探すためだけに教師になっておったのからのぅ。アカデミーならば、何を研究しておるのか報告しなくてはならんからのう、世界の滅亡の原因を探っておるなんて言ったらすぐに追い出されるわい。その点、ここなら蔵書も十分そろっておる、授業さえやっておれば、後の時間を研究に費やすこともできる。そうして原因が探してながら過ごしておったら、いつしかこの学院の長になっておった。」

最後にそう自虐するようにつぶやくオスマンだった。

だけど、ルイズに言ってくれたことには感謝している。彼女の憧れであるオールド・オスマンに言われれば彼女もこれから頑張っていける。例え、どんなに立派な教師、たとえばコルベールなんかよりもオスマンから言われた方がルイズには効果があるだろうと思った。

「今は原因は分かっているのですか？」

「知っておるよ。地下に眠る風石大鉱脈じゃろう？　と言っても、わしもそれを知ったのは5年程前じゃよ」

一体それを知るのに、何年かかったんだろう…、心は折れなかったのか……

いや、折れない訳が無いか。今は、軽く語ってたけれど、多分それはとても険しい道だったに違いない。

「使い魔は知らなかっのですか？」

「ネズミとは死の危険に限りなく敏感な生き物じゃ。だが、それは死の危険であって、死の原因までは分からんらしいわい」

「使い魔が嘘を言っておるとは思わなかったのですか？」

「『念話』のルーンは頭の中で思ったことが相手に伝わるんじゃ。嘘はつけんよ」

「……使い魔を恨んだことはないのですか？」

「無いとは言わんわい。だが、こやつがわしを救い出してくれたのも事実なんじゃよ。落ちこぼれのわしに力をくれた、世界が変わった、わしはモートソグニルに報いたいと思ったんじゃ。そのためなら、女遊びをしなくとも、何年かかろうともやりとげようと若いころから必死だったんじゃよ」

「それがルーンの影響で使い魔に好意を抱くようにされてるとしてもですか？」

「……ミスタ・ヴァリエール。それがおぬしの聞きたかったことじゃろ？　そして、おぬしが『虚無』だったとはのう。情報を集めて、先ほどのミス・ヴァリエールかミスタ・ヴァリエールが虚無だと判断したのじゃが、最後で間違えてしまったみたいじゃのう。」

ルイズか俺。

虚無が王家の血筋に現れること、もしくはヴァリエール家にいることを知っていれば、ここまでは簡単に辿り着く。

だが、そこからは誰も分からない。

ヴァリエールの名前を持つ落ちこぼれか、ヴァリエールの名前を失った落ちこぼれ

どちらかと言うと、ルイズの方がまだ可能性が高いように見える。俺の方は『風』メイジの落ちこぼれだから。でも、頭のいい人なら今回のオスマンのように、この二択でおおいに悩んでくれるはずだ。俺のフォンティーヌ左遷には何か意味があるのではないか、だけどヴァリエールに残っているのはルイズ、フォンティーヌに移動することは何か意味があるのか、などなど。

ただでさえ情報の少ない虚無、それのさらに隠された秘密である受け継ぎ（スペア）制。今の自分は虚無は使えないし、今のフォンティーヌ自体には何もやましいこともないので、これ（スペア）を知らない限り、誰も真相には近づけないだろう。

「人間である使い魔に恋でもしたのかのう？」

……見透かされてる。

使い魔について、つい深く聞きすぎた。本来自分の年齢で使い魔召喚（サモン・サーヴァント）をやるメイジは少ない、というより皆無だ。使い魔を持っていて

も、魔法学院の儀式だから、という理由以外で使い魔を召喚するメイジは少ない。それだけ使い魔というのは役立たずになる可能性が高いのだ。騎乗できるような幻獣でもない限り、食費だけがかさむ金食い虫に陥りやすい。原作でも、タバサの風韻竜以外はあまりスポットを当てられていないように……

それに、魔法学院の儀式と言っても、トリステイン魔法学院のように格式の高い、つまり金持ちの家が集まっている学院以外では廃れてきているらしい。ゲルマニアの学院を一度　中退しているキュルケがトリステインで召喚したことを考えると、ゲルマニアなんかはでは完全に廃れているとも推測できる。

「ふぉっふぉっふぉ、ルーンの影響のぅ。そのことはすでに色々考えておるのじゃろ？　それに、それはこれからもついて回る問題じゃ。わしからは悩め若人、とだけ言っておくわい。ふぉっふぉっふぉ」

オスマンが雰囲気を入れ替える為か、澄ました顔で笑い飛ばしてきた。

――やりにくい

シリアスならそのままシリアスで突っ走ってもらいたい。

「さて、ここまでがわしが学院長になるまでの道のりじゃ。だが、風石大鉱脈について知ったのは5年程前、つまりわしが学院長になってからなんじゃよ。それについてをこれから話したいのじゃが、

それを話すために今、人を呼んでおるんじゃ」
「人、ですか？」
「その通り、わしに風石大鉱脈に気づかせてくれた人じゃよ。だからそうじゃのう……、来るまでの間に質問で聞いておこうかの」

その後１０分ほどの間、様々な質問をした。疑問をつぶすのは大事だ、だから不躾だと思ったがあなたはエルフですかとも質問した。オスマンエルフ説、一概にＮＯと言えない説なのだ。ルイズが宝物にしているオスマンの伝記、あれはうちの権力があっても手に入れるのに苦労したそれなりに貴重でそれなりに古い本なのだ。そんな時期から『オールド』と呼ばれていたオスマン、いくらなんでも人間の寿命を超えている。
それに、もしエルフなら食堂にいる意志ある人形達（アルヴィーズ）はオスマンの手作りの意思剣の可能性もある、と色々考えていたのだが、彼はエルフではないらしい。

ならなぜそんなに長生きなのかと聞いたら、彼が手に持っていた水煙管を渡され、『探知（ディテクト・マジック）』を使ってみなさいと言われた。

結果は……馬鹿げてるの一言だ。

水煙管は、葉を燃やし煙を吸って吐く、と普通の煙草と大まかな構造は変わりない。大きな違いは、フィルターの代わりに水を使うというところだけ。

だが、オスマン特製の水煙管は馬鹿げてた。

燃やす葉は最高級の薬草であり、　フィルターの水は、葉　と同じく最高級の水の秘薬だった。いったい、一回吸うのにいくらかかる

のだろう……。頭を悩ますような水煙管だ。

それに加えて、彼は常に自分の身体に『治癒（ヒーリング）』を施していた。精神力の回復量が『治癒（ヒーリング）』の行使量をほんのわずかに上回るらしい。彼が普段ほとんど魔法を使わないのは、常に魔法を使い続けてるためであり、精神力がほとんど溜まらないから大魔法はもう死ぬまで使えんだろうと言っていた。そこまでして、寿命を延ばして解決したかったんだろうな。

オスマンは、ある意味俺の末路、一つの未来の可能性なのかもしれない。『虚無（ちから）』を貰い、何とかしようとしてる自分の……。だけど、年寄りになるまでに解決できなければこの大陸ごと終わるからそれは無いかと自虐的なポジティブシンキングに無理矢理切り替えた。

ちなみにセクハラは、精神力回復の手段らしい。原作でも、嫉妬などの大きな感情をが働いていた時に精神力が一気に回復していた、あながち間違いではない……なんて言うかボケ。絶対にただの言い訳だ。とりあえずジト目でで睨んでやることにした。

ルイズにセクハラをさせるわけにはいかないと意気込んでみたが、よく考えたら彼女はオスマンの思惑を大いに外れた身体的成長をするはずだ。

……なんかルイズごめん。

「ふぉ、来たようじゃの」

ついに来たみたいだ。流石全系統スクエアと言えばいいのか、気配を察知するのが早い。

――コンコン、コンコン

丁寧なノックが計４回

「ドアは開いておるぞ、ギトー君」

オールド・オスマンとのことです（後書き）

はい、ギトー君です。脇役ばっか集めてますから、予想はされてただろうなと思っています（ちょっと悔しい）
ミセス・シュヴルーズ設定も用意してあって、参戦させるつもりでしたが、あの人原作開始の時に赴任したことになってるので断念。設定も破たんしました……

余談ですが、ちょっとだけ、ギトオォォオオくうぅぅん！！　とか思い浮かべました。ギトーのイラスト見たことないので、自分の脳内では木原君（刺青なし）みたいな見た目です。
ギトーの絵ってあるんでしょうか？

それと、凄いのはオスマンではなく、モートソグニル。
モートソグニル、ゼロ魔の中で変わった名前の使い魔だなと思って検索してみると、これまたなんか思ったより大層な奴でした。小人（ドワーフ）達の王であり、すべての小人たちを作った奴らしいです。
原典だけを見れば、ガンダやヴィンダ、ミョズにリーヴスも虚無の使い魔の生みの親でもあるわけです。
折角そんな凄い名前貰ってるんだから…ってことでまたもや独自設定でした。
全ての小人の生みの親、なら力を与えるような存在でいいかなと思ってそんな能力です。ただの人間が全系統スクエアになるほど甘い世界では無いです、幻獣の力を借りて得た力です。ある意味、使い魔に踊らされてるとも取れる。世界を救うためにその力を貰うという悪魔の契約とも取れる。もしかしたらモートソグニル、今流行のQBなみに黒いのかもしれません。

とまぁ、言い訳になりますが、いつも通りに無理矢理解釈付けをしています。
モートソグニルがそんだけすごいなら、ヴェルダンテはもっとすごくなきゃいけないだろ！？　ってことになるわけですから（汗）
ヴェルダンテは運命の女神です。まぁギーシュらしいネーミングセンスだなと思います。

補足ですが、『オールド・オスマン　～オールドと呼ばれるまで～』をこの話は引用しております（笑）

ジェシカが後ろに控えていたのに空気だったりと相変わらず女性キャラが不憫。なんだかハーレムものが書きやすいゼロ魔なのに、どんどん道を踏み外している気がします。

そんな作品ですが、いつも読んでいただきありがとうございます。

ギトーと黒幕とのことです

『疾風』のギトー

トリステイン魔法学院に勤める風のスクエアメイジ
原作では言っては何だが、『学園』それも外の情報が入りにくく、かつ出にくい魔法学院で本来貴族たちに嫉妬されるべきサイトを嫉妬するため、そして自分より立場が上の貴族を演じる記号（キャラクター）の印象を受けるやつだ。

この世界に来てから嫌になるほど、この世界は生きていることを実感してきたつもりだ
どんなやつも、それぞれの人生（ストーリー）があって、それを背負ってて生きていた

まぁ、つまり、何が言いたいかというと……今回も予想外ということだ

ギトーが語り始めてから３０分後――

――そこで、私は確信した。そう、私は『天才』なのだと！　このままいけば、かの『烈風』を越える風メイジになるかもしれない可能性が私には秘められているという事に、私はとうとう気がついたのだ。……聞いているかね、ミスタ・ヴァリエール？」

「……ぇぇ…もちろんきいていますとも……」

――悪い意味で、予想外だよ……

ギトーとの自己紹介も終わり、オスマンから今の話の進行具合を聞いたギトーはなるほどと一度うなず　き、話し始めた。

なぜか彼の生い立ちを話し始めた。

最初は前回のオスマンの件や今までの経験もあったから、すごく真剣に聞いてた。ギトーにも隠された過去があるに違いないと――

３０分前の自分に言ってやりたい、ギトーはしょせんギトーなのだと……

ギトーが話し始めてから３０分が経過した。たかが３０分だが、あのナルシストな口調で自慢話され続けるのはなかなか堪えるものがある。
ギトーの後ろに位置する所にいるオスマンなんかは既に夢の中だ。肩に乗っかってるモートソグニルが起きてるところを見ると、話が重要な場面になったら起こしてもらおうなんていう算段でも建てているのだろう、仲いいなお前ら　。

ちなみにギトーの話は今、杖契約をした2年後、彼が１０歳になった時に風のラインメイジになったところだ。彼がもっと誠実そうな人物なら自分も間違いなく諸手を挙げて彼は天才だと後押ししただろう成績だ。ある意味、性格だけで全てを台無しにできるも稀有な才能だなぁとギトーの話を聞き流しながらぼんやりと思考していた。

４５分後――

――そして、私が１２歳を迎えたとき、私は風のトライアングルメイジへと昇華したのだ！　私は恐ろしくなった、自分は一体どれほどの才能を持っているのか……と。その頃から、私は『烈風』を輩出したマイヤール家の近くに　我が家もあったこともあり、周りから『疾風』と呼ばれ始めた。これが私、『疾風』のギトーの始まりだ」

……あぁ、うん、よかったね

1時間後――

――さらに2年がたち、私はスクエアメイジになると思っていた！
しかし、いくら『風』に愛されていた私といえどもスクエアメイジになるのは容易くないことを悟った。これは『風』が私に託した試練だと思い、私はさらに精進したのだ」

……あぁ、うん、ギトーくん…がんばったよ
ぼくも…がんばってる…よ……

1時間15分後――

――15になる頃、私は突然両親に魔法学院に行きなさいと告げられた。貧乏貴族、それも爵位も男爵と低い、そんな家の三男である私にだ。兄上たちは軍に仕官していたため、私も軍に仕官するつもりでいたのにだ。両親は言った

『お前はギトー家の歴史を振り返っても類を見ないほどの才能を持っている、その才能をギトー家の中で腐らせるのは惜しい。……トリステイン魔法学院に行きなさい。金の心配などせずともよい、わしのマントを売ってでもお前をトリステイン魔法学院に通わせてやろう』

それを聞いた時、私の胸は熱くなった。ここまで思って貰えるとは……、ここまで期待してもらえるとは……と　。そしてその想いが私を後押しし、私はとうとう念願の風のスクエアメイジとなったのだ。スクエアメイジとなった私はギトー家の期待を背負い、トリステイン魔法学院に入学した。」

……なんか、少しいい話だ。

「そこで私は世界は広いことを覚え、友ができた。

友の名はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド」

――！！

「私と同じ年でありながら、風のスクエアである人を見るのは初めてだった。それどころかスクエアとは言わずとも、トライアングルクラスの風メイジをたくさん私は知ることができた。貧乏男爵家の三男である私は他の家の舞踏会などにも参加することはなかったため、知らなかったのだ。私は井の中の蛙だったということを」

――空気が変わった。

漠然とだがそんな気がした。今までは、言っては何だが原作通りのギトー、風は最強であり、自分はその風に愛されてると自慢話を嘯いてるだけのやつだったけど、今は違う。その証拠とでも言えばいいのか、オスマンの方を見るとしっかり目を見開いてた。

ここからが本番――

ギトーでさえも一筋縄ではいってくれないか……、なんとも世知辛いとでも言うところだろうか。

「私ほどではないにしろ、ワルドもトリステイン魔法学院では爵位が低い奴だった。そのためか、自然と私たちは友人となった。そして、いかに『風』という系統が最強か語りあったものだ。彼から『烈風』がいかに強力であるかも聞いた、偏在(ユビキタス)をどう使うか議論し合った」

「さて……では、本題に入ろう。

――最強の系統とは何か？

はるか昔から問われ続けた議題の一つだ。そして、私は自分の人生を振り返り確信した。

『風』こそが最強の系統魔法であると」

「そして、私は更なる高みへと登っていく過程で気づいてしまったのだ

『風』系統は強すぎる……と、そしてその理由を」

「ミスタ・ヴァリエール、君は疑問に思ったことは無いかね？
風以外のドットメイジでも、ほとんどが『飛翔（フライ）』や『浮遊（レビテーション）』を使えることを」

――言われてみればそうだ。魔法学院の2年の時でも授業では、土のドットスペルの『錬金（ストラクト）』をやっていた。ドットメイジは自分の系統以外は使うのに本来かなり苦労するはずだ。

「スクエアメイジといえども『烈風』の強すぎることを」

――たしかにその通りだ。公式チートってところで考えを止めていた、あれはスクエアなんてものじゃない。

「『偏在（ユビキタス）』というスクエアスペルが他のどの系統のスクエアスペルより強力なことを」

――それも公式チートの一つだ。でも言われてみれば、それもそうなのかもしれない。俺の知ってる他のスクエアスペルで、偏在と並んでチートになり得るのは『制約（ギアス）』くらいだ。それでも『制約（ギアス）』はかけるためにいろんな条件がある、『偏在（ユビキタス）』にはそれがない。

「私やワルドのように血統が高くなくともスクエアメイジになるや

つがいることを」

――どういうことだ？

「そこまではわからんようじゃのぅ」

ギトーの話を引き継ぐようにして、俺に話しかけてきたオスマン。引く継ぐようにして話しかけてきたが、こいつは最初のほうはずっと寝ていたことは俺は忘れない。

「メイジのランクはほとんど血統で決まるのじゃ。教育者があまり言うべきことではないが、長年教育者をやってきたからこそ経験則で言えるのじゃよ。メイジのランクは血で、家柄で、才能で決まるのじゃ。」

――たしかに本来、教育者が言うべきことじゃないな。けど、もの凄く的を射てる。王族が魔法を使えないせいであれだけ迫害されるのは、王族はほとんどスクエアに達するからだ。王家の血が混じってるヴァリエール家だって、両親とエレオノール姉さんはスクエアだ。魔法を使うと身体の調子が悪くなる体質のせいで、ほとんど魔法訓練をしなかったカトレア姉さんだって世間から見たらエリートのトライアングルだ。

「だからこそ可笑しいんじゃよ。ワルド君やギトー君だけではない。最近はガリアで多いんじゃが、最年少の騎士隊長となったカステル

モール、豪傑と鳴らしてるも西百合花壇騎士のソワッソン男爵、他にも低い爵位だというのに、スクエアに達するものが増えておる。それも、全て『風』のスクエアじゃ。」

――それは…異常事態じゃないか……

「突然じゃが、ミスタ・ヴァリエール。おぬしは魔法はどのようにして発動されるかご存知かの？」

――？

「精神力を杖という媒体を通して、発動させるのでは？」

俺の答えを聞いて、なぜかギトーとオスマンは少しだけニヤリと口に笑みを見せた。

「正確には、精神力を杖という媒体を通して精霊に働きかけ魔法を発動させるのじゃよ。」

「そのことから私は推論を立てた。

今、『ハルケギニアは風の精霊で飽和している』と」

――『系統魔法は個人の力で『理』を変化させ、先住魔法は『理』に沿う』

なるほど、確かにそれなら血に依存してるであろう精神力を外で補えるか

地下を見ずに、地上で異常を察知したってことかよ……

「そのあとはワルドから彼の母親の狂言が真実ではないかと疑いを持ち、探ったまでだ」

「ギトー君が探っておる時にわしが見つけての、このことについては他言無用だと口止めをしておいたのじゃよ。わしもその時やっと真実に辿り着いたのじゃ」

ワルド夫人、彼女の知らないところで彼女の意思を継いでる人たちがいる。

今度ジャンに知らせよう、きっと喜ぶだろう。

だけど……

「なぜワルド夫人に接触しなかったのですか？」

もし、彼らがワルド夫人に接触していたら、彼女は死ななかったのかもしれない……。

そう思わずにはいられなかった。

「わかっておるのじゃろ？」

「アカデミーには細工の跡があった。私達まで一緒に共倒れるわけにはいかなかった」

「……ちなみにそう提案したのはわしじゃ。ギトー君は接触しようと…、彼女を学院に連れてこようとしておった。ここなら安全だと」

「学院長！」

やはり……保険か。

間違ってはいない、問題の大きさを考えれば間違ってはいない……か…

「そちらはアカデミーに細工をしている、私は『黒幕』と呼んでま

すが、その正体はご存知ですか？」

気を取り直して話を進める。

後悔はいつでもできる。だが、今はそれをする時じゃない。

「知っておるよ。学院は動くにはなかなか苦労するが、わし等とて昔から気づいておったのじゃ。年単位の時間をかけて調べた結果、すでに正体もわかっておるよ」

自然と俺の視線とオスマンの視線が重なり合った

「トリステイン王立魔法研究所（アカデミー）評議会議長『ゴンドラン』じゃろ？」

――！？

『ゴンドラン』、原作では『灰色卿』の偽名を使って、北花壇騎士（シュヴァリエ・ド・ノールパルテル）という裏の世界でもかなり奥深くに位置するであろう『元素の兄弟』を雇い、サイトの暗殺を依頼した人物だ。

「何年もかけて調べたから間違いないぞ。アカデミーのデータを改竄しておるのは奴じゃ、アカデミーのトップが改竄するだけあってほとんど誰も気づいておらぬがのぅ……」

たしかにその通りだ。ゴンドランはアカデミーのトップ、エレオノール姉さんの上司だ。

暗殺依頼をするために、サイトを妬む貴族を（特にアンリエッタにばれないように）集め、依頼金を全員から集め、裏の実力者である『元素の兄弟』に依頼した。

印象が薄い男らしいが、秘密裏に貴族と金を集めたことや裏の奥深くに通ずるところを考えるとかなりできるやつだ。

「だが、いまだにその目的が分からんのじゃよ……。ミスタ・ヴァリエールは知っておらんか？」

「知ってますよ」

「ふぉ！？　知っておるのか？」

何故か驚かれた。

まぁ、確かにオスマンは彼の持っているあらゆる伝手を使って、『ゴンドラン』について年単位で調べたらしいから、驚く気持ちは分

からなくない。
だからこそ読めなかったのかもな、オスマンは意外にも結構頭の固い奴みたいだ。
なぜなら、『前提条件』から違う。

「まず最初に、ゴンドランは『黒幕』じゃありません」
「だ！　だが、わしはゴンドランがアカデミーのデータを改竄した証拠も持っておるぞ！？」
「オールド・オスマン……、どこの『黒幕』がわざわざ自分の手でそんな危険なことをしますか？」
「そ、それはのぅ……」

原作でのサイトの件を考えると、確かにゴンドランは『黒幕』たる手腕はあるかもしれない。
だけど手腕だけだ。サイトの暗殺なんていかにも小物のやるようなことをやるやつがこんな大きな問題の『黒幕』になれるわけがない。
だから……

「ゴンドランは『黒幕』の手足、ひょっとすると指程度の扱いです」

「し、しかしのぅ……、ゴンドランとてかなりの地位の持ち主じゃぞ？　それを手足扱いするとなると、国王か国王に近い地位の者が『黒幕』ということになってしまうのじゃぞ？」

何をそんなに驚いているんだ。すでにトリステインの国王の近くはほとんど真っ暗だろうに……

『黒幕』は原作、いやトリステイン貴族の社交場、ひいては国を跨いで行われるような社交場でも名を聞くような奴なんだが誰も気づかない

「それに風石大鉱脈というハルケギニアが滅亡してしまうようなレベルの問題じゃ。一体誰がそんなものを隠して得するというのじゃ！？」

「そのオールド・オスマンが言った条件を全て満たしてる人が一人いますよ？」

「ふぉっ！？　なんじゃと！！？」

『黒幕』は本当にうまい、オスマンもここまで推理できてるのに気づけないことを見て、さらに奴がどれだけしたたかを理解する。

ハルケギニア全土でみても風石大鉱脈の事を隠して得する奴なんて本当に一握りだ。

風石商人が唯一得しそうだが、彼らだって世界が滅びるようなことを隠すほど馬鹿じゃない。風石なんて扱いの難しい物を商売してるならなおさら馬鹿なわけがない。

いや、やっぱり気づくのは普通は無理かもしれないな。
俺は風石大鉱脈を隠して誰が得するかを原作知識を使って推理したんだから。やっぱり他の人には無理なのかもなぁ……

――風石大鉱脈の事を隠して得する者……

――そんなのロマリアしかいないじゃないか

「『黒幕』の正体は『マザリーニ枢機卿』ですよ、オールド・オス

「マン

ギトーと黒幕とのことです（後書き）

ギトーと黒幕、一緒にさせてもらいました。

黒幕、長く引っ張ったなぁと思ってます。
なので、黒幕の正体で『えっ！？』と言ってくれると作者冥利に尽きます……
感想を読んでるとゴンドランあたりまでは見当つかれてるみたいだったのでかなりドキドキしました。感想を何回か書いてくださってるかたなどはかなり予想が近くてドキドキしてます。
誤解されるかもしれないの弁明も入れます。これは、遠回しに予想書かないでぇ～！　と言ってるわけではありません。どちらかと言うとどんどん来い！！　って意味です。その予想を裏切るのが自分の喜びですから！！
パソコンの前で「ふっふっふ、残念だったな（ニタリ」とかしてますからw！！

……あれですね、何日か後に後悔しそうなことを言ってしまった気がします苦笑
適度にお願いします（なんだかもう弱気です）

そして、黒幕についての詳しい説明は次回になります。

今回、本当に筆の進まない回でした。
最初は、ギトー君は原作のまんまの『カッコイイ奴だけではなく、原作のまんままんまなやつもいるんだなぁ』キャラを作るつもりだったので、最初の方を書くのがかなり大変だった……。

しかも、なぜか書いてる途中で違う人物になった。
なので、ギトーのキャラが読んでみるとかなり迷走してるなぁと我ながら思った次第です。

風の精霊で飽和してる説

風石は精霊の塊らしいですから、あってはおかしくないかな…と。
精神力と精霊の関係はオドとマナに凄く似てると思います。

ハルケギニアは風のみに対して恐ろしいほどマナが濃い状況ってことです。

そして、この回で自分的にはとりあえず一区切りです。
世界観構築、下準備、伏線張り、いろんな言い方がありますが、とりあえずそういうのは一旦終わりです。ストーリー的には三分の一くらい終わったかもしれません。
今までが政治謀略（？）に重きを置いてたとすれば、次からは恋愛謀略（？）に重きをおくことに！！
やっとゼロ魔っぽいのを書けるかもしれません。

個人的に一人称に限界を感じてるとかいろいろあるので、そのうち突然三人称になるなんてこともあるかもしれません。何故、自分は一人称で書き始めたのでしょう……（処女作だったので、一人称の方が簡単に見えたからなんですけどね…自業自得）

『～しれません。』ばかりです苦笑

そんなこんなでいつも手探りで書いてますが、いつも読んでいただきありがとうございます。

『黒幕』とのことです　Ｐａｒｔ１

トリステイン魔法学院からフォンティーヌ領までの道中で、ルイズをヴァリエール家まで送り届け、俺とジェシカはフォンティーヌ領へと無事帰還した。

とりあえずひと段落と思い、いつもフォンティーヌ領の様々なごたごたを片付けるための執務室へと足を運ぶ。

父上の執務室には及ばないが、それでもなかなかこってる作りだと思う。

そんな部屋のいつも腰かける椅子へと腰掛け……

思考する……

頭の回転スピードを上げる……

上げる…上げる……上げる……

『鳥の骨』　マザリーニ枢機卿

今回、ワルド夫人を死に追いやり、アカデミーのデータ改竄を命令した『黒幕』と推理している人物。
現トリステイン王の体調が芳しくない今、現在完了形、そして原作知識を持ってる俺から見れば未来完了形でトリステインの全実権を持っている人物だ。
『枢機卿』という『教皇』の次に高い地位を持ち、次期教皇と噂されながらも、ロマリアから特使としてトリステインに派遣された。
原作通りにいけば、次の教皇選抜の時の招集命令を蹴る筈だ。トリステイン貴族からしたら厄介この上ない。特に、優秀だという点が。

原作通りにいけば……か…

考える時間が山ほどあった幼少時代、やることが無く、思考に明け暮れていた時に思いついてしまった考察――……

原作、原作…、原作……

俺がジョゼフやヴィットーリオ、その他もろもろの原作の登場人物（チート）に対抗する唯一の手段である『原作知識』

そもそも『原作』ってのはなんなのか？

正確には、俺がいるこの世界において『原作』とはなんなのか？

それは『未来知識』、これから起こるであろう『英雄譚』、

そして、『都合が良すぎるおとぎ話』だ

『幾千幾万と、数多ある同じような世界の中でただ一度、奇跡としか思えないよう可能性で成功に至った世界の物語』

もし、それが『原作』の正体　なら本当に打つ手がない。足掻けるだけ足掻くが、成功に至るにはかなり厳しい道になる。

だけど、『もう一つの可能性』がある。

原作においてのトリステインの動きを国単位で振り返ってみると、

ゲルマニアとの婚姻による同盟
アルビオンは事実上滅亡
その後、ロマリアとも同盟
そしてガリア王をハルケギニア大王というロマリアを除いたハルケギニア全土の王より上の地位に置くことによって事実上の同盟

もし、最後の提案をガリア王が飲んだら、ハルケギニアは、下準備はトリステインの手によって、トップをガリア王と　して一　つに纏まる　ことになる。

そしてそれが終わった時、一番初めの『大隆起』、火竜山脈の空中浮遊が起こる

都合がよすぎる――……

――ロマリアのみに、都合が良すぎる……

ロマリア教皇はブリミル教が広まっているハルケギニアでは、誰よりも地位が高い。
それは例え一国の王であっても、逆らう事は出来ない。
それはたとえ、ガリア王がハルケギニア大王となっても変わらない事実だ。

アンリエッタの私心を無視し、国の事を考えれば、ゲルマニアとの婚姻同盟は、たとえアルビオンで騒ぎが無くても、男がいないトリステイン王家と国力が下　がり続けているトリステインを考えると成立していただろう。

そうなると、ブリミル教関係では、本来拘束力が一番弱い帝政ゲルマニアにも始祖の血が入る。
アルブレヒト3世は未だ不安　定なゲルマニアを始祖の血を受け継ぐことによって、皇帝の権威を高めようとした。それはブリミル教をバックに置くという事だ。

間違っていない。というより、本来なら大正解な解答だ。
ガリアは次期王が誰になるかで混乱し、アルビオンはきな臭くなり、トリステインは国力が下がっているこの時期に『聖戦』なんて馬鹿げたものを始めると予測できるわけがない。というより、そんなことをやる教皇なんて本来ならキチガイ以外の何物でもない。
次期教皇は、マザリーニかヴィットーリオという稀代の頭脳の持ち主だと予測していたであろうアルブレヒト3世にとって、『聖戦』

が起こるなんて予測できない。

そしてアルビオンは、陸からの物資をほとんどト　リステイン経由で得ている。

現トリステイン王がアルビオン王家出身という事もあり、トリステインとアルビオンの仲が悪くなるのはほとんどあり得ないことなのだ。

トリステインは、ロマリアの目的である『聖戦』を達するために都合よく動きすぎている

『原作』のあのあらすじは、ロマリアが仕組んだものではないのか？

正確には『黒幕』の一人である、マザリーニ枢機卿が仕組んだ流れなのではないのか？

これが、『もう一つの可能性』

生憎、ルイズの初めての虚無魔法、超巨大『爆発（エクスプロージョン）』でゲルマニアと

の同盟は婚姻をしない形になったり、ガリア王ジョゼフが、誰も予測することができないような『狂人』だったりしたせいで、少し思惑通りにはいかなかったようだが、大筋は変わらない。

というより、マザリーニが必死に修正していたような気がする。

『聖戦』のためにはトリステインの国力はなるべく高い方がいい賛否両論のハルケギニア大王の件も賛成していたのは彼だけだ。その他にも、彼はいろいろと行動していた。ただ、その全てがトリステインのためになっているという事実が本当に厄介だ。

――かなり厄介だが、救いようがある

もしこの可能性が正解なら、『黒幕』の正体はロマリア上層部、教皇と枢機卿団であり、そのトップはヴィットーリオかマザリーニだ。この計画において、トリステインの動きはものすごく重要だ。実質、ハルケギニアをまとめ上げたのはトリステインだとわかる。

国力的にはガリアかゲルマニアの方が纏めやすかっただろうが、ゲルマニアはブリミル教の力がそこまで強いわけではない。全体でみれば、ブリミル教の力が強いハルケギニアをまとめ上げるのは不可能だ。それにゲルマニアに潜り込んでも、アルブレヒトに潰されただろう。

それに比べてガリアの方はブリミル教の力もあり、ゲルマニアよりは良かっただろうが、現ガリア王がいる。何十年もの間、『無能王』と周りに罵られ続けたジョゼフの王としての器を見抜いた眼力を持ってる。凡才な奴がガリアに入り込んでも潰されてただろう。ロマリアとしても、一番厄介な相手はガリアのはずだ。だから、王でもないのに一人で国を回せるだけの能力を持つマザリーニをガリアに送る方が効率的だ……本来なら。

だけどロマリアは、ガリアに対してのみならジョーカーを持ってる。

『禁忌の双子』　ジョゼット

可能性は低いと思われていたジョゼフが王になるなら、彼女を神輿にしてクーデターを起こせばいい。
順当に行けば王になると思われていたシャルルが即位すれば、脅せばいい。

『北花壇騎士団』何てものがある、ハルケギニアでロマリアの次に裏があるガリア。下手な事はしないで、ただ一つの切り札で勝負をかける。それが理想だろう。

それにシャルルが王になれば、危険も少なく簡単に屈させることができたはずだ。
双子の件で王家のしきたりを破っているのだ。マザリーニやヴィットーリオなら簡単に従わせることができたはずだ。

歴史があり、貴族たちのプライドが高いトリステインは、ロマリア以外の全ての国と接していることもあり、扱いが難しい国だ。
だからこそ、一番優秀、つまり臨機応変に対応できるマザリーニがトリステインに来たと考えるべきだろう。

よって、この『もう一つの可能性』の結論は

『黒幕』はロマリア上層部『枢機卿団』
マザリーニはそのトップ、もしくはそれに限りなく近い立ち位置の人物

さすがの利権大好きなロマリアも世界滅亡レベルの問題にはしっかり対処してくるか……
いや、原作で最初の火竜山脈の『大隆起』を切り札と言ってたくらいだから、これにかこつけてブリミル教の権威を底上げしたり、利権を貰いまくっていく算段だろう。

そして、ここまで読めれば、その次も読める

ヴィットーリオはその『黒幕』達の情報提供者、かつ傀儡だ

これなら彼があの若さで教皇になれる理由にもなる。
カリスマと美貌だけで、トップに立てるほどロマリアは甘くない。
だけど、逆にカリスマと美貌があるからこそ、教皇という傀儡にふさわしいんだろう……

だが、これにも問題がある。

ヴィットーリオは絶対、傀儡になり続けるような奴じゃない

原作の独白で、彼は聖地にブリミルが遺した『大隆起』をどうにかする魔法装置は無いと語っている。
おそらく、この情報だけは隠蔽して『黒幕』達に語ってるに違いない。

――つまり『黒幕』達は、聖地に行けば全て解決すると思っている。

幼少時代、年単位で思考するしかなかった頃、逆を言えば年単位で思考したからこそ、ここまで考えついた。

だが、考えてはいたが、これはあくまで『もう一つの可能性』だった。

――可能性だった……

ワルド夫人が亡くなったことは恐ろしく意味のあることだった。
いるかどうかわからなかった『黒幕』がいることが分かった。
認めたくはないが、彼女が死んだことに対して感謝さえしている。

それに、それが誰かというおおよその特定まで出来た。
そして、連鎖的にロマリアが裏でかなり暗躍してることも推測できた。

亡くなってるのに、借りがどんどん大きくなっていっている気がする……

全てが終わったら、しっかり墓参りに行こう。

ただ、推測できたとしてもたいして自分のやることは変わりない。
というより、自分から大きなアクションは取らない方がいい。
マザリーニと接触を取るなどは論外だ。

もし仮に、証拠云々が無くてもマザリーニが俺の事を信頼してくれたとしよう。
そして、ヴィットーリオが言ってる聖地に世界を救うものがあるというのは嘘だと伝える。
――『聖戦』が発動する確立が急激に下がるだろう

だが、これは良くない。

俺は『原作』の最後がどうなるかは知らない。けれど、身も蓋もない言い方で言うと、どんな方法かは予想がつかないが高い確率でハッピーエンド、もしくはリーヴスラシルであるサイトが犠牲になって世界（ハルケギニア）とルイズを救う感動エンドだろう。

『聖戦』が始まり、ロマリアに乗せられて行動する水精霊騎士団とルイズ、サイト。だが、最後にヴィットーリオの思惑を外れ、サイトとルイズは予想外の行動を起こし、ハッピーもしくは感動エンド。

詳細は分からないが、『原作』という『ストーリーがあるべきもの』ならおそらくそんな感じになるはずだ。

だからこそ、この『もうひとつの可能性』は厄介だが救いようがある。

ロマリアの暗躍を無視すれば、紆余曲折はするが、おそらく最終的には俺が知ってる『原作』通りに進み、そして最後に俺の知らない『原作』で選択をミスさえしなければ――

――世界（ハルケギニア）は救える……

やはり、マザリーニとロマリア　は泳がせておくべきかな……

いや、泳がせておくなんて上から目線な言い方はやめよう。自分は原作謀略キャラ達とは違い、頭がいいわけではない。

俺は、ただ石橋を叩きまくる一般人なんだ。

だからこそ、空いた時間は全て思考に回す。全てを疑いながら行動する。

そして、だからこそ、あることに気付いた。

もし、マザリーニが正真正銘の謀略(チート)化け物なら、ワルド夫人の死はもっと深い意味を持つことになる。

俺にとって、ワルド夫人の死はとてつもなく重い物だった。

だからか、その事について他の何よりも考える時間を割いた。

そして、オールド・オスマンでさえ気づけなかった『黒幕』の正体まで辿り着いた。

自惚れかもしれないが、俺は謀略関係において少し成長してると思う。

『黒幕』の正体に辿り着いたときは、一般人である俺がよくここまで思いついたと自画自賛したものだ。

だけど、思考を続けることで気づいた、

否、気づいてしまった

――所詮、俺は一般人なんだと……

ワルド夫人は『殺された』

その『殺された』という事実が、『黒幕』がいるという決定的な証拠だった。

そのことから、『黒幕』は風石大鉱脈を世間に知られると困る人物、団体だと推測した。

そして、『黒幕』の正体を看破した。

だが、おかしいのだ

前提条件がおかしいのだ

ずっと盲点だった

いや、調子に乗って盲目的になっていたのだ

――何故、『殺した』？

何故『殺人』なんていう、あからさまに『黒幕』がいるということを推測される手段をとった？

アカデミーの実験による事故死、魔物に襲い掛かられた、ｅｔｃｅｔｃ……

隠蔽工作なんて簡単に出来る様なやつらが、何故わざわざ殺した？……

――気づかない方が幸せということが世の中には多々あるということを学んだ

殺された人がいるなら、殺した人がいるのは道理だ

殺された人に何かしらの理由、たとえば殺された人が隠蔽したいことを知っている、などの理由を持っているから殺されると考えるのが道理だ

殺した人が理由を持っていないなら、その背後に誰かがいるのでは？　と疑ってしまうのも道理だ

――道理とは、正論、筋が通ってることを表し……

『一般人の俺でも考え付くこと』なのだ

…泳がされていたのは……

…掌の上で弄ばれていたのは……

…『俺』だったのだ……

『黒幕』とのことです　Ｐａｒｔ１（後書き）

完全敗北！！

遅くなりました。
矛盾点ないよなぁ…って感じで書いていたので時間かかりました。
前回あれだけ、女の子成分とか言っていたのに、全然書けませんでした（泣）
しかも、長かったので、区切ってしまって、次も……
なんか、自分はもう女の子成分書けない気がしてきました…

今回は、好き嫌いが分かれる回になったと思います。
回想、思考、推理回です。
なんだか順調にゼロ魔二次の道を踏み外してる…

そんな感じで、この作品ではジョゼフと並ぶであろう頭脳チートキャラ『マザリーニ』の登場です。
エリックの謀略レベルも上がってはいるんだけど、勝てません。
全く持って歯が立たない相手です。

久しぶりに使う言葉ですが、『現実は非情』です。
最近はワルドの戦闘など、わりかしうまく言ってた感じがありましたが、ベテランには歯が立ちません。

エリックの中で、サンドラさんとワルド夫人、死んでいるのにもの凄く多用されてます

次も、また補足になりそうです。なるべく早く完成したいと思います。

最近、感想での誤字報告で変な隙間が空いてると書かれます。
自分は、ヤフーメールの下書きで書いて保存してを繰り返して、完成したらここにコピペをしています。
何故かその過程で変な隙間が空くのです。
一応最後に見直しをしているのですが、いかんせん隙間って見にくくて見落としがちです。
なので、報告してくれる人に感謝を。そして、見つけた人は生暖かい目で誤字報告してくださるとありがたいです。
よろしくお願いします。

そして、いつも読んでいただきありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5708t/

ルイズの双子の兄に転生とのことです・・・

2011年9月10日18時26分発行